

山陰地方における弥生墳丘墓の研究

1992年

島根大学法文学部考古学研究室

I部 山陰地方における弥生墳丘墓の研究

序 文

1970年代の後半から「地方の時代」ということが盛んに喧伝されるようになったが、残念ながらこのような声は「中央」より発せられたものであって、「地方」が自己主張の時と場を求める、それまでの中央集中的な政治や経済のありかたに問題を投げ掛けようとしたものではなかった。しかし、このような転換の主張に対して「地方」の側にも一定の呼応態勢が醸成されていたことは認めねばならないであろう。その中身に「中央直結」を一段と強調する立場もあれば「地方より中央へ」と立脚点を替えた発想のような違いがあるにせよだ。いずれにしても「地方」ないし「地域」が包有する独自の価値体系を認識し直して、そこに息づく歴史的な「内発力」を掘り起こし、それに依拠した活力ある「地方」や「地域」の創造が期待される時代が到来してきていることは確かである。

われわれが直接研究の対象とする山陰地方にあっても、いま、まさしく「地方の時代」を迎えている。問題はどのような「地方」をいかなる観点と仕方で作り出すかにあるが、その際地域特性の歴史的な考察が一つの有力な視座を提供するであろうことは多くの識者が説くところである。

こうした現代の社会的要請に応えた地域史の点検と再構築はさまざまなレベルと分野で進行している。原始・古代史の分野にあっても事情はまったく同様であるが、かの松江市岡田山古墳出土の鉄刀より「額田部臣」なる銘字が発見されたこと、簸川郡斐川町荒神谷遺跡における弥生青銅器群の大量出土といった考古学上の破天荒な出来事によって課題の厳密な選定と組織的・総合的な研究の実施が、広汎な層と地域よりいっそう強く求められるところとなってきた。折から、関係者各位の絶大な御努力により、1982年に島根大学法文学部考古学研究室が発足する運びとなり、考古学的地域研究推進の主体的条件の一部が整えられることは幸甚であった。

われわれは、こうした研究環境のもとで解明が急がれる重要な考古学的地域研究課題の選定を行った。そこではいくつかの課題が取り出されたが、地域研究の成果を西日本一帯のそれに整合させ、そのうえであらためて歴史的地域的な意義の評価が必要とみられた「四隅突出型墳丘墓」の問題を取り上げることに決した。本書はその成果の梗概を収録したものである。

地域研究に携わる諸氏の立場、思考方法はさまざまであるが、その違いを越えてここに一書をなすことができたのは各氏のこの課題に対する思い入れと、地域研究者としての貢献な探求姿勢ならびに協力・共同の精神の賜物といえる。ここにその研鑽を讀み、労を多として謝意を表するものである。また本研究に物心両面の援助と指導をいただいた文部省当局をはじめ島根大学各部局、島根県教育委員会、出雲市教育委員会等の機関にも文頭を借りて厚く感謝を申し上げる次第である。

1990年12月末日

文部省科学研究費助成金総合研究（A）

「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」

研究代表者　田中義昭

I 部 山陰地方における弥生墳丘墓の研究

目 次

例 言

第1章 山陰地方における弥生墳丘墓研究の経緯	1
第1節 問題の所在について	1
第2節 「四隅突出型」墳丘の発見とその理解	2
第3節 古式土師器論の展開	4
第4節 70年代後半の動向	8
第5節 1980年代に向けて	15
第2章 島根県における弥生墳丘墓	18
第1節 因幡地域における弥生墳墓・墳丘墓	18
第2節 東伯耆地域における弥生墳墓・墳丘墓	24
第3節 西伯耆地域の弥生墳丘墓の問題点について	40
第4節 徳安方墳出土の土器について	42
第3章 島根県における弥生墳丘墓	69
第1節 出雲地域における弥生墳墓・墳丘墓	69
第2節 石見地域における弥生墳墓・墳丘墓	96
第4章 山陰地方における弥生墳丘墓の展開と地域的特性	109
第5章 80年代の研究動向とわれわれの到達点 一研究の総括にかえて一	123
付 章 島根県鍵尾遺跡出土の上器について	136
英 文 概 要	149

例　　言

- 本書は、文部省科学研究費補助金・総合研究（A）「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」において実施した研究のうちの主として山陰地方に関する研究成果の報告書である。山陽地方については本研究の一環として岡山市津寺・新庄下所在の雲山鳥打遺跡が調査されている。その概要是、近藤義郎により「雲山鳥打弥生墳丘墓群」（『岡山県史』第18巻、1986年）その他に報告があるので参照されたい。
- 本書は、これを2部構成として、I部には研究の概要と山陰地方における弥生時代の墳丘墓研究を収載し、II部に本研究の中心的課題として取り組んだ出雲市西谷丘陵遺跡の調査、とくに第3号墓の発掘報告を収めた。
- 「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」における調査・研究組織は次の通りである。

研究代表者	田中義昭	島根大学法文学部教授
研究分担者	渡辺貞幸	島根大学法文学部助教授
〃	近藤義郎	岡山大学文学部教授
〃	宇垣匡雅	岡山大学文学部助手
〃	池田満雄	島根県立松江農林高校教諭
〃	門脇俊彦	松江市立津田小学校教諭
〃	東森市良	島根県立安来高校教諭
〃	山本　清	島根大学名譽教授
〃	名越　勉	倉吉市文化財審議会委員
〃	大村俊夫	山陰考古学研究所所長
研究協力者	蓮岡法暉	島根県教育委員会文化課課長補佐
〃	松本岩雄	島根県教育委員会文化課文化財主事
〃	西尾克己	〃　　〃

- 「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」に対して交付された文部省科学研究費補助金の総額と年度別交付研究費の額は下記の如くである。

総額	1 0 6 0 万円
1983（昭和58）年度	6 0 0 万円
1984（昭和59）年度	3 0 0 万円
1985（昭和60）年度	1 6 0 万円

- 本書の編集は、I部を田中義昭が、II部を渡辺貞幸が各々担当し、若干の全体的調整を田中が行った。I部では、多くの図版と表の作成、原稿の校訂について島根大学考古学専攻生勝瀬利光さんの協力をえた。また埴生典子、松本美和子、森脇幸子3氏には校正等で

援助を受けた。記して謝意を表する。

6. 本書の執筆は、山陰地方における弥生時代墳丘墓の調査研究の分担にしたがって各担当者がこれを行った。その際、墳丘墓をどのようなものとして認識するかといった研究の基本的な問題については十分な検討と見解の統一はこれをなしえなかつた。よって個々の報文の文責は各担当者がこれを負わざるをえない。とくに対象とした遺跡の年代決定にかかわっては土器單式により、その名跡で所属時期を記している。各型式に対する理解の仕方は執筆者によって微妙な差異があるので、ここではタイム・スケールの凡そとの対応として次のような表示を掲げておきたい。(異論のある型式を使用する場合は「」を付している)

*弥生時代後期中葉=九重遺跡第3号墓土器の時期(几重式期)=藤田二期

*弥生時代後期後葉=的場遺跡上器の時期(的場式期)=阿弥大寺三期=藤田三期

*弥生時代後期末葉=平所1号住居址、長曾遺跡19号上壙出土上器等の時期=藤田IV期

*古墳時代前期=小谷土壙墓、松本1号墳出土土器等の時期=藤田V期

(藤田II~V期は、藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64-4、1979年による)

なお、I部第3章第2節の執筆については門脇俊彦氏が担当されることになっていたが、準備中途において逝去(1988年3月)されたため、急拠川原和人氏に執筆していただくことになった。ここに門脇氏の御冥福をお祈りするとともに川原氏の御快諾に感謝したい。

7. 本書の記述においては、「弥生時代墳丘墓」は弥生墳丘墓と略して用いることとしたが、一部には「古墳時代に所属する可能性が考えられている墳墓」(厳密にいえば古墳の一形態とすべきか)もこれまでの研究史の経過状況に鑑み、あえて弥生墳丘墓の項に含めて取り扱ったものもある。個々のケースについては各担当者がそれぞれの執筆項において適切に処理することで対応したことを記しておく。

なお、上記の事情とも関連して早くから出土土器の特徴や性格が問題視されてきた鳥取県東伯郡大山町所在の徳楽方墳の上器についてはとくに一項を設けて解説することとした。この件については京都大学考古学教室の小林行雄博士より土器調査の快諾をいただき、併せて御指導を賜ったことを付記して感謝を申し述べる。

8. 「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」にかかる英文の研究概要については島根人学法文学部森田勝治教授に作成をお願いした。

9. 本書の刊行に際しては、当該科学研究費の交付をいただいた文部省当局をはじめとして、島根大学の各部局、島根県教育委員会、川雲市教育委員会等の諸機関ならびに多数の個人から援助と協力をえた。記してその負うところを明らかにし、感謝を申し上げる。

また本書の印刷については、島根県農協印刷の湯浅春雄氏に多大な助力をいただいたことも明記して感謝する次第である。

第1章 山陰地方における弥生墳丘墓研究の経緯

第1節 問題の所在について

《弥生墓制研究と四隅突出型の墳墓》 1964年に東京都八王子市の宇津木向原遺跡で浅い溝を方形に巡らした遺構が発見され、調査を担当した大場磐雄博士がこれに「方形周溝墓」の名称を与えた。由来この種の墓制に関する知見は、折からの日本列島を席捲した開発とともに考古学的な調査によって急速に増大し、それまで北部九州を中心に行なっていた弥生時代の墓地のありようを相対化して、全国的な視野で当該時代の墓制問題を論じる素材が提供されることとなった。

山陰地方にあっては、1960年代中頃までは島根県八束郡鹿島町古浦砂丘遺跡で発見された弥生前期の共同墓地や若干の豪棺等の存在が注意され、それらを通じて当地方における弥生墓制の一端が伺われるに過ぎなかった。しかし60年代末から70年代の前半にかけていわゆる「四隅突出型」の墳墓が相次いで検出されるに至り、これが弥生時代末期から古墳時代初期にかけての所産とみられたことから、山陰地方、とりわけ古代に特色ある地方文化の展開がみられた出雲地域においては、政治的な地域社会構成変遷の具体的な表れをそこに求めようとする見解がにわかに活況を呈することとなつた。

1970年代におけるこのきわめて特異な墳墓・「四隅突出型」の研究の推移にあっては、その年代的な位置の問題や被葬者の性格、特徴的な墳丘形態の変遷と系譜の解明及び歴史的な意義づけ等々について地域レベルでの検討が積み重ねられ、当面の認識としてこれを「四隅突出型方墳」＝「発生期の古墳」として捉えることが大方の了解点として一応の定着をみたのである。

《問題状況と研究課題》 一方、山陽側の古墳地方ではいうところの「方形周溝墓」の発達はみられず、替わって平野に面した丘陵上等に築かれた「方形台状墓」や「墳丘墓」と呼称される弥生墳墓の存在が知られてきた。後者については弥生後期中葉以降に岡山県南部地域で顕著な発達が認められ、また後期中葉段階ではそれらに特殊器台形土器及び特殊臺形土器の共伴する事実が注目されてきている。同類の土器は、実は島根県出雲市西谷丘陵遺跡において大型の四隅突出型の墳墓である第4号墓からも採集されていて、この時期に古墳と出雲の両地域間に、ある種の政治的な交通の存在を想定せざるをえない状況が生まれてきた。

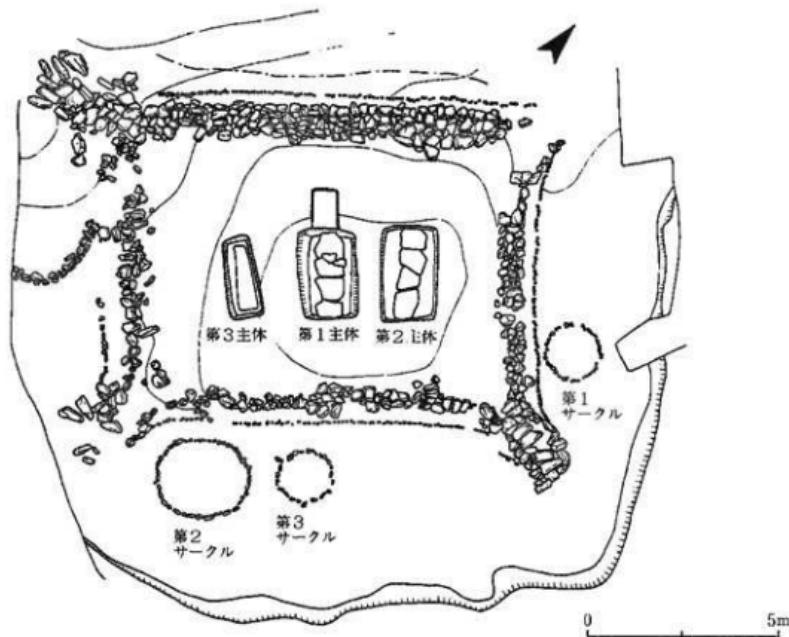
かくして、一つには「四隅突出型」で特徴づけられる山陰地方の一群の墳墓群の年代的位置やその歴史的性格等に関わる諸問題の検討、二つには陰陽両地方における弥生時代の墳墓の発達の問題を整合的に捉えて、西日本における弥生後期段階の政治的動向を、古墳出現をも視野に取める形で解明する必要が提起されてきたのである。「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」とする研究課題は、概略以上のような問題状況を踏まえて設定さ

れたものである。

第2節 「四隅突出型」墳墓の発見とその理解

《「順庵原1号墳」の発見》 「四隅突出型」墳墓の理解をめぐる経緯においては、墳丘形態の変遷と意義や系譜ならびにそこに葬られた主体の地域的歴史的性格をどのようなものとして捉えてきたのかということと、それが考古学的な時代区分上のどこに、どのような仕方で位置づけられたのかということが研究史の焦点になろう。後段の年代的位置の確定については、当然時代区分のありかたとも関連する問題としてその展開状況をみる必要があろうと思われる。以下この2点を中心に研究史的検討を試みる。すべては1968年～69年に島根県邑智郡瑞穂町において墳丘の四隅に突出部を付設した「順庵原1号墳」が発見されたことから始まる。

1968年、島根県邑智郡瑞穂町大字下龜谷字順庵原の低丘陵上において「それまでの知見では到底考えられないほどの特異な構造」をもつ「方形墳」が発見された。この「特異な構造」は翌年の調査によって低い長方形墳丘(10.75m×8.25m)の四隅に突出部を設け、墳丘斜



第1図 順庵原1号墳平面図(吉川正原図、一部改変)

面に貼石し、墳端には円礫を用いて列石とするものであると判明した。また「周溝」内で検出された「ストンサークル」の中とその周辺から出土した土器が出雲地方で「最古の土師器」とされた「鍵尾I式」や的場式に相当するとして、「順庵原1号墳」を安来市造山1号墳や三刀屋町松本1号墳等、從来山陰地方最古の古墳と考えられている諸古墳に先行する「古墳」と認定されたのであった（門脇俊彦、1971年）。

この「順庵原1号墳」の発掘に続いて1970年1月に出雲地域の中枢部において「米留美古墳群」（松江市矢出町所在）が調査され（山本清、1989年）、同年7月には「仲仙寺古墳群」（安来市西赤江町所在）が発見、調査されることとなる。こうした「四隅突出型」の墳墓の相次ぐ検出から「この種の古墳が単に邑智郡奥部のみに存在するものではなく、広い範囲に分布していく、一つの類型として把えられることが明らかとなってきたのである」（門脇俊彦、1971年）。そしてこれら特異な形態の墳墓を「とりあえず『四隅突出型方墳』の名で取り扱うこと」が提唱されたのであった（山本清、1989年）。このように「四隅突出型」の命名は、これを「とりあえず」「方墳」と仮定することより出発しているので、墳丘形態の呼称のみを切り離して採用することは、命名者の意図に必ずしも忠実ではないが、「四隅突出」とする表現の適切さと使用がかなり慣例化している現状に鑑みて以下では「四隅突出型」の括弧を外し、普通名詞的に用いることとする。

《「発生期古墳」として》さて、出雲東部の安来平野西縁の西赤江町では70年代の初期に仲仙寺墳墓群で4基（宮山1号支群の1基=宮山4号墓を含む）、安養寺墳墓群で2基の四隅突出型墳墓が発見されて、この一帯は四隅突出型の墳墓が集中する地区として注目されるようになる。このことは隣接する荒島丘陵上に大成、造山1号、同3号等の前期古墳が造営されていることとの関わりでも重要視されたのであった。早くから安来平野周辺の丘陵上に展開する弥生後期から古墳時代にかけての上墳墓の調査を手掛け、仲仙寺墳墓群の発掘を主導した近藤正は、安来平野域の弥生墓制の変遷から古墳の成立にいたる動向を次のように展望している。

「弥生時代後期には周辺の丘陵にいちじるしい数の集落が営まれるようになり、低い山丘上には、それぞれの墓地が造られるようになった。この墓地は上墳墓と呼ぶ丘陵の平坦部に長方形の墓塚を埋り込んで遺骸を埋葬したごく簡単なものであった。

ところが、西暦4世紀代になるとそれまではほとんど加工しなかった丘陵を、上墳墓を中心として方形ないし長方形に削り、なかには石列を設けたものが現われるようになった。仲仙寺古墳群は、まさにこのような弥生時代の上墳墓が完成された姿を示すとともに、次の世代に著しい発展を示す古墳の形をも備えているのである。——中略（田中）——この古墳群に続くものは、宮山古墳や西北方の荒島造山丘陵の諸古墳などの前期古墳である」と（近藤正他、1972年）。また、別の機会に近藤正は安来市九重土墳墓群の考察から弥生後期後半に墓制の変革があったことを想定し、さらに「型式創いた後に現われる古墳時代初期の墓制とし

て的場、鍵尾、仲仙寺、来留美の諸墳墓をあげ、これらは、仲仙寺墳墓群で明らかにされたように、方形ないし長方形に区画された墳丘の四隅に突出部を設け、貼石、列石をしつらえ、二段掘りの長方形墓壇を備える点に顕著な特徴が存在することを認めて、そこに「山陰における方墳の完成」された姿を見て取ろうとしている。同時にこれら一連の四隅突出型の墳墓を、折から行われていた「在地型古墳」の概念で把握し、荒島丘陵上の前期古墳群を「畿内型古墳」として捉える見解を明らかにしている（近藤正、1971年）。

以上のような近藤正の四隅突出型墳墓に関する整理と特徴づけないし概括は、70年代を通じて地域の研究者間に共有されていくことになる。1973年に東森市良は、「山陰における発生期古墳の諸相」と題する研究発表において、山陰地方では古墳時代前期前半に「無墳丘墓」（土壙墓、竪棺墓、石棺墓を含む）、「発生期古墳」、「畿内型古墳」の三者が併存している。当該期の複雑な墳墓の様相の整理としては正確さを欠くが、その構想の基本は上記の近藤正の見解に沿うものである（東森市良、1973年）。

第3節 古式土師器論の展開

《「鍵尾式土器」の提唱》 四隅突出型の墳墓をもって「古墳」と認識した事情の一つは、これら墳墓が四隅に突出部をもつという特異な形態ながらも、低い墳丘を有するという点を感性的に捉えてのことであったと思われる。しかし「発生期の古墳」と呼称して、從来前期古墳として扱われてきた諸古墳に先行する位置を与えることになったのは、この段階における山陰地方の「古式土師器」の研究状況によるところが大きい。以下においてはこの「古式土師器」に関する研究の経緯を編年研究を焦点として概観しておこう。

周知のように、山陰地方における土師器研究は山本清によって先駆が着けられた。山本は、1960年代の中ごろから全国に先駆けて須恵器の編年大綱を樹立した経験を発展させる形で土師器編年についての論考を相次いでおおやけにし、その大枠を提示している。山陰地方の古墳分布の悉皆的調査を起点としてその歴史的変遷を明らかにするために、いち早く須恵器・土師器の編年研究にはとんど独力で取り組み、当地方の古墳時代土器研究の基礎を築きあげた山本の先見性と着想および実績は特筆に値するものであろう。（山本清、1963年、1964年、1965年、1969年、1970年）。

山本の「古式土師器」研究の起点は1963年～64年にかけて行われた安来市沢町の鍵尾遺跡の調査からと理解する。この経験にたち、1964年に発表された「小規模古墳について」では、怪もしくは一辺が20mに満たない「小規模古墳」の分布と展開相について論じ、その際に口縁断面が「5の字形」を呈する「壺形上器」を、プロポーション、底部形態（平底、丸底の2種）、文様のありかたに着目してこれを3類に分かち、それらが①→③の順に変遷することと①類上器が鍵尾遺跡から大量に出土していることから、この類を「鍵尾式」と呼称することを明示したのであった（山本清、1964年）。同時に「鍵尾式」の土器群中には「山陽の

上東式および酒津式と共通要素を交えるものがあるが、両者の時期的関係について示唆するものである」との指摘を行っている。当然とはいへ瀬戸内地方との併行関係に当初から配慮している点に注目しておく必要があろう。

次いで1965年には三刀屋町松本1号墳の調査で検出した土師器の年代的位置づけに関連して、「初期の須恵器」出現以前の「古式土師器」を3期に区分し、鍵尾遺跡出土の土器群がその第1期に当たるとの認識を示している。またこの「鍵尾式」土器群は将来細分の可能性があることも示唆し、そのことを考慮して「汎鍵尾式」と呼称することを提示したうえで、松本1号墳出土土器はこの型式に含めるうることを述べている（山本清他、1965年）。上記のような考察を踏まえ山陰地方の土師器の変遷の大要を正面から論じたのが1965年の論文「山陰の土師器」である。この論文で述べられたいわゆる「古式土師器」群の設定に関する基本的な視点は、以下の諸言に見い出すことができるであろう。

- ①「ここで土師器として取り扱うのは、古墳時代のものに限り、それ以後のものには振れないこととする。また弥生式土器と土師器との区分については、問題のあることであるが、ここでは、ほぼ山陰において高塚の造営が始まったころの土器と考えられるものから土師器として取り扱う」。
- ②「弥生式土器の直後から、須恵器が普及期に入る以前までのものを便宜上古式土師器と呼ぶ」。
- ③「山陰の古式土師器では、壺形土器で口縁の断面が5の字形をなすもの（このごろよく『二重口縁』『複合口縁』などと呼ばれているものと大体同じ）が圧倒的に盛行しているので、この種の土器を目安として、あるいは三に型式を分けることが出来る」。
- ④「鍵尾の土器群は以上のように、一つの器種に関しても若干の変化を含むけれども、九重の土器に比し、器台・壺ともにかなり明瞭に区別されるから、『鍵尾式』として取り扱うことが便利と思う」。
- ⑤「このように、松本の壺が鍵尾式に属すると考える場合、鍵尾式土器の時期には、少なくとも松本1号墳という高塚が造られており、鍵尾式土器は明らかに古墳時代土器であるということになる。——中略（田中）——、これに対し、九重式土器のところには山陰に高塚のあったことは、まだ判明していない。はじめに述べた主旨から、鍵尾式以後を土師器としてここで取扱う所以である」（以上山本清、1965年）。

以上の諸言から伺われる基本点は凡そ次のように整理できるであろう。第一に、土師器の上限を「高塚」造営開始時に求めること。第二に、古式土師器群の様式的な標徴を「壺形土器」の「5の字形」口縁に求め、その細分案を示すこと。第三には、九重式、「鍵尾式」の両型式設定の有効性を確認したうえで、改めて前者を弥生最終末の土器型式とし、後者を最古の上師器として位置づけること。

そして第二に示した細分の具体案としては、底部の形状による平底、丸底の2類を先ず措

定し、平底を有する土器群の実例に鍵尾遺跡と松木1号墳出土の土器群をあげ、これらを「古式土師器前期」として一括している。さらに補注の形ではあるが、鍵尾遺跡出土土器そのものの細分に触れて、凹線文をもつ土器群を「鍵尾I式」とし、このI式に含まれる鼓形器台と5号墓壇上で検出された一括土器群中の鼓形器台との間には時間差が存在するとみて、これを「鍵尾II式」とする考え方も明らかにしている。

こうした古式土師器群の編年的序列の編成にあたって山本が躊躇していることは、鍵尾遺跡出土土器群と松木1号墳出土土器群の編年上の位置関係である。後者は、その墳形、内部構造、副葬品から推して前期古墳の範疇に含められるものであるが、前者の場合土器以外に川七品ではなく、墓壇の形状のみでは詳細な時期判定は困難であるから勢い出土土器の対比が問題となる。そこで山本は鍵尾遺跡川土七器群について、それに先行する型式である九重式との比較において、これを「鍵尾式」として再度確認し、松木1号墳出土の大形の壺形土器の底部のつくり（平底）と頸部の文様が「鍵尾式」のそれに共通することを重視して「松木の壺が鍵尾式に属すると考える場合、鍵尾式土器の時期には、少なくとも松木1号墳という高塚が造られていたのであり、鍵尾式土器は明らかな古墳時代土器であるということになる」との推論を導いたわけである。

以上やや長蛇の引用の嫌い無きにしも非ずであるが、これら60年代中ごろの諸論に示された山本の見解が、山陰地方の土師器の編年的研究の礎をなすものであることは多言を要しない。と同時に注目されるのは、山本が乏しい資料のもつ証拠能力の可及性と限界に十分配慮しながら、土器型式の人別と細別を慎重に進めて、確定的な事項と爾後の検討にゆだねるべき問題とをきちんと峻別するという姿勢を終始示していることである。このことは研究史上において正當に評価すべきであろう。

《知井宮III式・IV式と九重式・的場式》 ところで九重式を最終末の弥生土器とし、「鍵尾式」をもって最古の土師器と認定する背景として、1960年代によく盛んになってきた古墳時代土器の研究、とりわけ古式土師器研究の全国的な趨勢を度外視するわけにはいかないであろう。このことに関して取り上げなければならないのは1958年の明治大学考古学研究室による山陰市知井宮多聞院遺跡の発掘である。知井宮貝塚とも呼ばれたこの遺跡の調査は、山陰地方の弥生終末期から古墳時代前半期の土器研究と全国的な古式土師器研究とを直接リンクする契機となるものであって、ヤマトシジミを主体とする貝塚の層序に準拠して設定された知井宮I～IV式は、弥生中期後半から古墳時代前期にいたる縦起的な諸型式と理解されたのであった。

すなわちI式が弥生中期後半、II式が同後期、IV式は「あきらかに古式土師器」としている。ここで差し当たり問題となるのはIII式の位置づけである。この型式についてはとりわけ丹念なそして注意深い考察が加えられた後に「知井宮III式土器を山陰地方のもっとも古い土師器と規定する」との結論が示され、あわせて瀬戸内地方の酒津式との併行関係が示唆

されたのであった。しかしながらⅢ式と並ぶ土器群に九重式をあげ、Ⅳ式と「鍵尾式」を同列におくという記述もみられて、地域レベルでの研究成果との交流がなお未成熟状況にあつたことが指摘されるであろう（大塚初重、1963年）。近藤正が「九重第三土壤墓」出土土器をもって知井宮Ⅲ式に該当させ、「『山本清氏の『九重式』そのものである』としていることでも明らかなように（近藤正他、1966年）、大塚の見解には、「鍵尾式」と九重式の間に型式的差異を認め、前者をもって「古式土師器」とする山本らの認識との間に重大なずれがみられるのである。

因に、ここで酒津式土器の性格と年代上の位置づけの問題に触れると、1950年代末にこれを初期土師器と捉える見解が出され（間壁忠彦、1958年）、60年代には山陽東部地方の上師器と認識する研究者も多く（潮見浩・藤田等、1966年）、あるいは畿内とその周辺の古墳時代初期の土器の成立に影響を与えた土器群と理解する立場もある（森浩一・伊達宗泰、1966年）。さらには瀬戸内地方の土師器編年の中Ⅰ型式と明確に位置づけるものもみられた（矢口時雄・岩崎卓也、1966年）。先の知井宮Ⅲ式土器の比定に関する大塚初重の考証が、古式土師器についての以上のような研究動向を踏まえてのものであることは説明を要しないであろう。

1969年になって山本は、山陰地方弥生土器の編年を論じた際に後期を2分して、前半を圓線文、「それだけが主役を演ずる」時期、後半は「より簡単な沈線文や櫛描並行線で間にあわせる」時期としている。そして後半期を代表する土器として九重式つまり九重遺跡第3号土壙墓の一括出土品を標識とする土器群をあげ（山本清、1969年）、さらに翌年には松江市八幡町「的場土壙墓」上面から出土した土器群に「的場式」の型式名を与え、鍵尾遺跡では十分捉え切れなかった「鍵尾I式」の型式内容をより完備したものとして新たにこれに最古の土師器の位置を与えた。さらに「鍵尾II式」の時期に松本1号墳、造山1号墳、同3号墳、島根県善段寺占墳等の前期占墳を位置づけ、安来市小谷土壙墓出土の土器群もこの型式に含めることで弥生後期から古式土師器への土器型式の変遷を総括したのであった（山本清、1970年）。

的場式土器の内容とその位置づけに関しては、調査を担当した近藤正・前島巳基が1972年に報告の中で取り上げ、東森市良も九重式土器について論じた際にそれとの関連で言及した（東森市良、1971年）。いずれも山本の見解をうけて、的場式を最古型式の土師器としている。こうして山陰地方の弥生土器の終末型式と最古の土師器型式の分離と固定化が一応完了したとみるのであるが、四隅突出型の墳墓の発見とその性格づけは、土器研究における上記の動向とともに相即関係をなしているのである。なお東森は、1971年の論文において「山陰においては九重式以降、的場（鍵尾I式）、鍵尾II式、小谷（大東）式の序列をたてている」と述べて、上記の山本の「鍵尾II式」の理解とは異なる型式変遷序列を明らかにしている点が注意される。

上記のことと関わって問題視されるのは、山本が早くからが唆し、絶えず考慮を払ってきた山陽・瀬戸内地方の弥生後期から古式土師器にかけての諸型式との併行関係をどう扱うのかということである。就中、的場遺跡や鍵尾遺跡出土土器群中に含まれていた山陽系の壺形土器・器台形土器の理解が問題となってくる。この点について東森は、「この特徴ある土器は、西谷丘陵遺跡→的場土墳墓→鍵尾A区第五号土墳墓の系列があり、的場式→鍵尾II式の土器編年に対応している」とか、「西谷丘陵遺跡の土器及び的場、鍵尾II式において異質とした一連の器台、壺は山陽の弥生式土器末期とされている芋岡山式そのものと考えられる」と述べながらも「器制の上では九重式・的場式と酒津式の間には、かなり異質的なものがある」として自ら確認した併行関係の明確な評価を避けが如き発言を残している（東森市良、1971年）。

また近藤正らは、これら山陽系土器を「胴部に突唇ある特殊壺形土器と上台と脚台に鋸歯文を入れた特殊器台形土器のセットである」と認識し、「この種の土器は若干型式を変えながらも鍵尾十箇墓にも認められ、さらに西谷丘陵遺跡でも発見されていて」、類例が岡山県芋岡山遺跡、同県便木山遺跡の十箇墓にともなっていることを指摘した一方で、「それはあくまでも特殊な器形をもつ一群の土器についてのみいえることであって、両者の実年代とは別個のものと考えたい」とする見解を示している（近藤正他、1972年。このような捉え方に対しては藤田憲司による適切な批判があることは後に触れる）。

山陽・瀬戸内地方では、1967年にすでに近藤義郎によるいわゆる特殊土器の研究が発表されており（近藤義郎・春成秀爾、1967年）、近藤正らの山陽系土器に対する考察もその成果の一部を受け入れていることは、土器群の呼称などから明白である。にもかかわらず上記のように結論づけたのは、「仲仙寺占墳群」等「発生期」の「在地型古墳」から出土する的場式土器をもって最古の土師器とした認識に自ら縛られた結果と思われる。門脇俊彦が「順庵原1号墳」出土の土器をあえて「鍵尾I式や的場式に相当する」としたことでも事情は同様であろう（門脇俊彦、1971年）。こうして陰陽の場における弥生後期後半から古式土師器にかかる諸型式の併行関係の追及と事実の客観的な評価の道は、いわば自繩自縛的に閉ざされたというべきであろうか。

第4節 70年代後半の動向

《「鍵尾II式」と「小谷式」》 1970年代初頭までに、山陰地方における弥生後期から古墳時代前期にかけての土器型式の設定とその変遷に関しては、九重式をもって最新の弥生土器とし、的場式=「鍵尾I式」、「鍵尾II式」を最古式の「土師器」とすることが大方の認識として定着したようであった。このことは同時に相次いで発見された四隅突出型墳墓を最古の占墳とする見解と相乗関係をなして進展した点が特徴的である。こうした地方レベルでの古墳の発生論と土器論は、70年代中により細かく、そして体系化を求めて相即的な形を保つ

た状態で展開していったように思われる。本節ではそのような動向について最初に概観しておきたい。

まず土器の研究動向であるが、このことについては的場式=「鍵尾I式」以降に継起する諸型式の設定、もしくは「鍵尾II式」の細分を試みることが70年代後半の主流をなしているとしてよいであろう。このような土器研究に、少なくとも公式には初めて手を着けたのは前島巳基・松本岩雄であった。前島・松本は、1976年に大原郡加茂町神原神社古墳の年代づけにかかわって「終末期弥生式土器から初期の須恵器が普及するまでの古式土師器」の諸型式の再検討を行い、「山陰の古式土師器を鍵尾I式（的場式）→鍵尾II式→小谷式→大東式土器」という、一連の漸進的な型式変遷のなかで把えることに誤りがないとの結論に達している。そして当面の目的である神原神社古墳の年代的位置に関しては、これを「小谷式」に含めうることを明らかにしたのであった（前島巳基・松本岩雄、1976年）。

前島・松本がこのうような結論を導くに当って詳細に検討しているのは次の2点であろう。第1点は先行の編年研究の整理とそこでの問題の所在を明らかにすること。第2点としては自らの型式設定とその新古の序列を示すことである。第1点に関する記述は以下のように展開される。

そこで、踏まえるべきは山本清の「古式土師器」変遷観であるが、これについては山本が1964年に論文「小規模古墳について」で示した3分類とその編年觀を確認する。さらに「鍵尾式」の細分事情に触れて、山本の業績を次のように要約する。すなわち「その後、複合口縁壺形土器とともに山陰を風靡する、いわゆる鼓形容器台の器受部と器台の発達度、上下の間隔、筒部の太さなどの諸点に着目して①類土器をさらに新・古の二つに分けられ、山陰の古式土師器を鍵尾I式（的場式）→鍵尾II式→②類→③類という関係で説明された」と。この部分は山本が1970年に著した「山陰地方」（『新版考古学講座5 原史文化（下）』）によるとなっているが、当該の所論において山本は、先にも触れたように、小谷土墳出土土器を「鍵尾II式」に含める見解を展開しており、論者等の指摘するような編年觀を具体的に示してはいない。ただ、60年代に書かれた山本の「古式土師器」に関する諸論文を忖度して、須恵器出現以前の土師器編年觀について敢えて言及すれば、そのように表現することも不可能ではないが、ともあれ、そのことが1964年の該論文を出発点として論文を重ねつつ「古式土師器」の問題に慎重に対処してきている山本の本意を、必ずしも適確に代弁したとはいえないのではなかろうか。

それはとにかく、差し当って前島・松本が注目するのは、論題から当然ながら「小谷式」の扱いであるからそこで続けて次のような検証を行う。「東森市良氏は『九重式』土器の検討を通じて相似した見解を述べられ、その中で山本氏の②、③類を一括して『小谷式』（大東式）と呼ばれた。これらに従えば、神原神社古墳出土の土器は山本氏による『鍵尾II式』ないし②類土器、東森氏によれば『鍵尾II式』土器の範疇に含まれ、その所属する編年的位置

は微妙なニュアンスの違いもあって従来の編年観では十分説明しきれないうらみがある」との小結をえることになる。

さて、いわれるところの「小谷式」とは、おそらく安来市小谷土墳墓出土の土器群を基準として設けられた型式に違いないと思われるのだが、このことについては正式に論じた文献が不幸にして見当らない。「山本氏の②、③類を一括して小谷式（大東式）と呼ばれた」とする東森の「小谷式」に関する言及も管見の限りで以下のような発言においてのみ知ることができる。

その1としては、1970年に「仲仙寺古墳群の意義」なる論文において「安来平野においてはすでに多くの土墳墓群が発見されているが、その中にこの古墳群を位置づけることによって古墳発生の過程を究明することができる。安来平野においては、すでに九重・鍵尾・小谷等の土墳墓群が発掘調査され、これによって弥生時代末期から古墳時代前期にかけての土器の編年（九重式—鍵尾I式—的場式—鍵尾II式—小谷式）が確定している」とする下りが、型式内容等の具体的説明抜きで示されたことである（東森、1970年）。

その2としては、かの論文「九重式土器について」中で述べられた一項をあげることができよう。それは当該論文の「九重式土器の位置づけ」の項であるが、ここで東森が論述しているのは半として「九重式」にみられた型式的な諸特徴が後続の的場式、「鍵尾II式」にどう継承されているかについてであって、「小谷式」の型式内容等に関する説明はほとんど見受けられない。まことに判読が困難な文章ではあるが、強いて取り上げるならば複合口縁が「的場式において更に発展して行き、鍵尾II式から小谷式まで盛行する」とか「小谷式に近い松本1号墳検出の壺」とか、あるいは波形器台の消長について「鍵尾II式において無文となり、小谷式に統く」といった表現のなかにその「小谷式」觀を間接的に伺うことができるに過ぎない。まして「小谷（大東）式」といった型式が「古式土器」の序列の最後の段階にどのような意味内容において位置づけられたのかなどは皆目不明とする他はないのである。

いずれにしても「山本氏の②、③類を一括して小谷式（大東式）と呼ばれた」とする前島・松本の指摘は、その引用・参考文献においては見出し難く、むしろ「鍵尾II式」なり「小谷式」といった地域の土器編年の基準とされる型式について研究者間の共通認識が十分に熟していない状況を岡ららずも推察するという結果になってくる。このような一種の混迷状態を克服するためにも当該時期における土器型式設定とその序列に関する基本部分での交通整理があらためて必要になる。前島・松本による「編年試案」提示もこのような事情からは生まれてこざるをえないというふうに理解されるのであって、検討事項の第2番手に新たに型式の再設定とそれら諸型式の変遷序列が提起されたのも当然の成りゆきとみてよいであろう。

前島・松本による当該の「編年試案」は、「山陰の古式土器は土器の組成や形態、文様、調整技法の変化などから次のごとく古い順に4型式に分けて整理することができる」とする観点に立ち、〔I〕式から〔IV〕式を設け、それらは「一連の漸進的な型式変遷のなかで把

えることに誤りがない」という確信に満ちたものである。そして従来の「古式土師器」とされた諸型式との関係については、I式が「鍵尾I式（的場式）上器そのもの」、II式は「従来広く鍵尾II式上器として括されていたものは、新・古の二つに細分することができる」との理解から「これまで鍵尾II式のメルクマールとされていた鍵尾AⅣ第5号墓の出上上器をその純粹な指標とするものである」としている。そしてIII式は「細分化した鍵尾II式上器のうち〔II〕をのぞいた土器群で、横ね川本氏の②類がこれに当る」と述べ、小谷土墳墓出土上器がこの式に含まれることを示した。さらに「IVは山本氏の分類による③類とほぼ一致する」といい、「これには東森氏の小谷式土器の一部が含まれる」との見解も明らかにしたのであった。

前島・松本は、統く1977年にも各型式の土器実測図を示して同様の山陰地方「古式土師器」の変遷観を詳述している（前島・松本、1977年）。これは1976年に行われた松江市平所土作遺跡の調査に関わって、その出上上器の年代づけの一環として提示されたものであるが、論者等は、従来の「古式土師器」の編年が主として墓地遺跡出土の土器を手掛りとして行われてきたことの意義と問題点を確認しながら、それらの集落遺跡出土土器による編年との対比、もしくは対照による是正ないしは補正の必要性を説き、その実践の一例として平所遺跡の住居址、溝状遺構出土の土器を活用して、「鍵尾I式」「同II式」の編成が妥当であることを述べたのであった（前島・松本、1976年）。

このようにして少なくとも1970年代後半には、「汎鍵尾式」を「鍵尾I（的場式）」→「鍵尾II式」→「小谷式」→「大東式」とする細分が「古式土師器」の「誤りない」型式序列として確定されるに至ったと思われる。ただ周知のことながらも絞上の編年研究は、いずれも個別遺跡研究の一環として行われたものであって、1965年に山本清が論じたように、独自に個々の型式設定の手順を示し、その妥当性を検証したうえで型式序列の編成を、その根拠を提示して展開するということが簡略化なし省略されている。そのことが肝心の論点の理解を困難にさせることになってはいないであろうか。

一例をあげると、論者等は「鍵尾II式」の段階に小型丸底壺の出現を説くのだが、その根拠となる事実ないしは資料の説明等は具体的にはなされていない。全体の構成から推察すれば、松本1号墳出土上器をもって「鍵尾II式」に含めることが前提とされているのであろうか。だとすればそれが鍵尾遺跡AⅣ第5号墓壇上の一括上器を「純粹な指標」とする「鍵尾II式」の内容とどう関わって一型式を構成するとみるのかの説明等は欠かせないことのように思われる。あるいは「小谷式」と「大東式」の区分においても東森の理解とどこでどう異なるのか等についても資料をあげての解説が求められるところであろう。このように、えて述べるのは、そうした配慮なしには研究者が相互に共有しうるタイム・スケールの設定が困難となり、そのことが延いては地域史像の再構成に支障を來す恐れなしとしない懸念を抱くからである。なお前島・松本は、「鍵尾II式」とした松本1号墳出土の「小型丸底壺」を

手掛かりにして奈良県上ノ井手遺跡溝S D031出土土器群（小若江北式）等と「鍵尾II式」とが「対比」できることを明らかにし、同式を改めて「鍵尾式」と呼称することも提案している。

いずれにしても、前島・松本による「古式土師器」編年の提示は、米子市青木遺跡の調査による「青木編年」の提示とも時期的に重なり、また東森を中心とする弥生土器の集成と編年体系の提示（東森他、1977年）とも相俟って山陰地方における弥生土器・土師器研究の一到達点を形成することになったとしてよいであろう。

《「発生期古墳」論の整備》 ところで、「鍵尾II式」の細分問題を中心とする土器研究と並んで四隅突出型墳墓等の弥生後期後葉から古墳時代前半期にかけての墓制について中間的に総括し、新しい課題を確認するということも70年代にみられた一つの動向である。

1975年に山本清が四隅突出型の墳墓について、その形態的特徴を出雲地域における方形墳の伝統の強さと関連させて問題にし、この種の墳墓が弥生時代のそれの要素を一面では継承しながらもそれとは異なる特徴をもって「突如」として出現することに関心を寄せている。ことに、いわゆる貼石・列石構造に注目してこれを4型式に分けて検討を加えたうえで、この特異な墳形の起源が大陸にあることを想定している。しかし結論的には、多くは今後の調査研究にかかっているとし、同類の墳墓が山陽地方その他でも検出される可能性のあることを述べている（山本清、1975年）。

1975年の斯文は、山本自身が「抽象的で隨筆的な文章」と断っているように、十分な資料分析と比較検討の成果をものしたのではないが、相次いで発見されてきた四隅突出型の墳墓の諸問題を素早く適切に抽出して、今後の研究方向を示唆した点に、考古学的な地域研究を絶えずリードしてきた山本の面目が如何なく發揮されているとみてよいであろう。また、1977年には川原和人が「島根県における発生期古墳－四隅突出型方墳について－」をおおやけにしている。川原は、四隅突円型墳墓のあらたな類例が広島県側の中中国山地城で発見された事実等に目配りしながら、前島・松本の「古式土師器」編年に依拠して四隅突出型墳墓を中心とする墓制の展開状況を概観する。そしてこれが発達の順序を決定するうえでは突出部の形態変化に着目するのが有効であるとして、先に山本が試みたと同様にA、B、Cの3類を設け、この順で変遷することを説いた。

さらに、川原は四隅突出型墳墓の発生地域を中国山地に求めうるとしながら「広島県で四隅が出る弥生時代の墳墓が発見されたことから、四隅突出型方墳を古墳とするのか、墳墓とするのかは当然問題なってくる」といい、「山陽側では、墳丘墓という名称で古墳と区別し、島根県の四隅突出型方墳を墳丘墓の概念に入れる考え方方は、頗るに価するものである」とも述べている。四隅突出型の墳墓・「四隅突出型方墳」についての新たな検討課題を示した点が注目されるであろう。

《山陽側からの問題提起》 上記の川原が留意した「墳丘墓の概念」とは1977年の近藤義郎

による論文「古墳以前の墳丘墓—楯築遺跡をめぐって—」を指すことは説明するまでもないであろう（近藤義郎、1977年）。斯文は、弥生後期の墳墓に関して倉敷市楯築遺跡を中心検討を加え、それらの諸特徴を前期古墳のそれと対比し、両者間に介在する相違が原始段階末期における階級的・社会構成の上昇・転化、就中首長權威の質的転換の過程を反映するとした画期的な論文として注目を集めたものであり、ここにあらためての紹介等を要しない周知の論文である。

蛇足ながら山陰地方における四隅突出型の墳墓についての近藤の認識を示せば、「墳丘墓の発掘が活発な島根県においてはしばしば墳丘墓を古墳のうちに入れて考えているようであるため、一見岡山県とやや異なる動きをしているようにみえるが、やはりそこでの前方後円墳と、安来市仲仙寺九号・十号などの四隅突出型墳丘墓（あるいは台状墓）をわけてみた場合、土器型式は一般に後者のほうが先行するとみてよいようと思われる」とあり、四隅突出型墳墓が弥生時代の「墳丘墓」であることを明示している。さらに墳丘墓と古墳の墳形を対比する項では「たしかに奥日本の一帯では島根県を中心に四隅突出型という定式化を歩みはじめたが、それも地域的に限られて、しかも一時的なあらわれにすぎなかった」とみている。この指摘も四隅突出型の墳墓の歴史的位置づけにとって重要な論点を提示したものと考えられる。

さて近藤は、該論文において楯築遺跡の年代上の所属に関し「今まで本遺跡を弥生時代に所属するものとしてきたが、その根拠はいまでもなく土器である」として採集された土器の詳細な検討を行い、それらが「おもに竈形土器からみて、弥生時代後期上東式に所属し、なかでも上東遺跡についての最近の編年による鬼川市II式ないしIII式にあたる」とした。あるいは上記に引用したところでも四隅突出型墳墓が、初期の前方後円墳等の古墳に先行するとする判断に土器型式の新古が根拠として踏まえられている。これはきわめて当然のことではあるが、それ故にこそまた問題を孕んでいたことも山陰側の研究動向にみられたところであった。

こうして四隅突出型の墳墓を「弥生墳丘墓」の地域的表われの一群として捉える見解が提出されたことによって、陰陽両地方を含めた弥生後期から古墳時代前期にかかる土器の編年的研究の整理と併行関係の再検討が不可避な状況となってきたのであるが、それが藤田憲司によってなされたことはこれまで周知のところであろう。

1979年に発表された「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」と題した論文は、藤田が自ら経験した岡山県上東遺跡等の調査によってえた弥生後期から古式土器の編年図式に立って、「山陰『鍵尾式』」の設定の仕方と型式内容に批判的な検討を加え、さらに岡山県北部地域の資料を媒体として陰陽の当該期の併行関係をI期～V期に分けて詳細に描き出したものである（藤田憲司、1979年）。結果的には多くの四隅突出型墳墓=「発生期古墳」論を否定し、これを弥生後期の「墳丘墓」とする見解に動かし難い基礎を与えることとなった。

1980年代には若い研究者が四隅突出型の墳墓とそれを巡る諸問題に積極的にアプローチするが、それらの諸研究は、いずれも藤田の斯論文に触発され、その編年観に導かれて自論を展開していることにその説得的な業績の側面を認めることができよう。あるいは弥生後期から前期古墳の出現にいたる複雑で多様な各地域社会の動向を統一的に比較・検討するための確かな時間座標軸を設定したことは、考古学的地域研究史上画期的な意義をもつもので、60年代中葉に須恵器・土師器の編年研究に先鞭を着け、その基礎を築いた山本清の仕事と同様に高く評価することができるであろう。

ここで藤田論文について、本文の叙述の流れに関わって主要な論点を列記すれば以下のようなことが留意されよう。①藤田は、まず「鳥取県等における編年研究上の問題点」として「この地方を中心に分布する四隅突出型方形墳墓を古墳とみなし、九重式を弥生最終末期、的場式を最古式の土師器として理念的に固定して、これを直接山陽地方の酒津式期に対置させようとした」とことと「鍵尾式が拡大解釈されて、その整理の必要性が説かれながらも、松本1号墳出雲市知井宮遺跡の報告から、ほとんど変化をみせていない」ことを指摘する。②藤田の斯論の展開は、標題の如く後段の土器編年に向けられる訳だが、そのことは次のように具体的に示される。「山陰の編年研究の課題は、『汎鍵尾式』をいかに整理把握し、相対的位置付けるかであった」が、研究の初期の段階ともいべき60年代中葉頃に「松本1号墳期、知井宮IV式を、鍵尾遺跡資料と同一視しようとした事」や「山陽地方の土東式との共通要素を知井宮II式に見られる四線文の中で理解しようとしたしたこと」に問題の発端があったとしつつも、そこには当然研究上の時期的な制約がある以上「当時としてはやむを得ない理解」とみ、「問題は、むしろその後のこの種の資料を未整理のまま受けついできた姿勢^{〔山陰の〕}にあった」と手厳しく論評している。そして弥生後期から古式土師器にかかる山陰側の編年について型式内容にまで立ち入った批判的な検討を行っているが、この点は既知のこととして触れない。なお藤田は青木編年についても、評価すべき点と問題点について適切な指摘を行っていることを付記しておきたい。

③さて、藤田論文では陰陽両地方の併行関係は、概略次のように設定される。すなわち「I期=鬼川市I式=出雲市矢野貝塚資料・安来市九重五号墓」、「II期=鬼川市II式=九重式・青木III期・『波米浜B区3号墳』」。続いてのIII期以降の併行関係が論題と関わってとくに問題となるところであるが、これについては以下のように示される。まずIII期は、予め「鍵尾I——的場式を除く——IIの区分は、今のところあまり必要でないと考える」ので、以下「鍵尾式と総称することにしたい」としたうえで、III期=鬼川市III式・才の町I式の枠内に「的場式・『鍵尾式』を括して納める見解を明らかにする。この併行関係の設定においては」として「小型壺形土器」、「小型器台形土器」が手掛かりとされ、高环形土器、鼓形器台も傍証の資料として活用されている。

的場式と「鍵尾式」を括してIII期としたことに加えてIV期を設けて、これを「小谷式」

との間に介在させたことが藤田編年の大きな特徴であり、それらは山陰地方の四隅突出型の墳墓等を「定形化する占墳以前の墓制」として理解するための重要な提言でもあった。この期の併行図式は、IV期=才の町II式・下田所式（総称酒津式）=半所1号住居・青木AS104・福市Y53・仮称秋里I期として示されている。

最後のV期に入る例として松本1号墳資料・青木VII期をあげ、これらが「おおむね山陽地方の龜川上層式期に対応させられる」としている。そして「個々資料の一部の要素をとりあげてきたが、上記のような比較も、各時期の共通項をそれぞれに摘出できたという点で、その大まかな併行関係はまず、動かないところであろう」との小結を行っている。

第5節 1980年代に向けて

これまで相当のスペースにわたって山陰地方における60年代、70年代の四隅突出型墳墓等の墓制とそれに関連する土器研究の動向を子細に跡づけてきた。叙述がかなり煩瑣になったきらいがあるが、意図したところは、凡そ上記の研究史上に現われた主要な主張における論理の展開状況と諸事項の整合的理義の検証にあった。このことはわれわれが「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」を進めるに際して、その前提として踏まえるべき成果の主軸がそこにあると判断したからに他ならない。

すでに明らかなように、四隅突出型墳墓等を弥生時代の墳丘墓の一形態として捉え直して、その実相と歴史的位置づけについての新たな研究段階が近藤義郎、藤田憲司らの提言によって拓かれたのであるが、なお80年代の研究に向けて、その出発を準備した動向の2、3に触れておきたい。

その1は、土器編年問題である。青木編年に対しては先述のように、藤田が適切な評価を下したところであった。この青木遺跡出土土器の編年に当って報告者等が「島根側の編年案が広く山陰の土器編年として使われてきた。これらはいずれも土壤墓内の埋葬用土器の形態編年であり、日常使用の土器との相異点が大きく、きわめて不自然な編年であった」と発言したのは、出雲地域の九重、健尾、的場、小谷等の諸遺跡出土土器を基準にした編年案に対するおそらく最初の公然とした批判と受け取れる（青木遺跡調査團、1977年）。さらに『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ』でも同様な趣旨がやや詳しく展開されている（山陰考古学研究所、1978年）。確かに墳墓資料のみでの土器型式変遷の編成は、器種構成や技法に集落遺跡出土の土器には認められない特色があるので留意が必要であることは事実であろう。しかしそのことが土器編年そのものの適正を損なうとは思われない。問題は編年の手法ないしは型式の設定の方法にあると考えるのであるが、いずれにしても、このような批判が70年代後半に山陰側でも出されていたことに注目しておきたい。

その2として取り上げておきたいのは1977年に開かれた日本考古学協会松江大会である。この大会でのシンポジウムのテーマには「弥生時代から古墳時代への墓制の展開」が掲げら

れて報告と討論が行われている。論点は各地の弥生後期から古式土師器にかけての土器型式の併行・対応関係と弥生墳丘墓の終焉と古墳出現の問題に絞られた。いくつかの発言のなかで仲仙寺墳墓群を「古墳」とみなすことへの批判や「鍵尾I式」は弥生土器として理解すべきである等の指摘があった。これらに対して山陰の研究者からの確固とした反論は出されなかったように記憶するが、互いの主張点とそれへの批判が討論の場で交換されたことの意義は大きいと思う。けだし80年代の研究の地平を拓く機会になったことは確かであろう。

この大会で当該テーマの司会を筆者田中らとともに勤めた東森市良は次のような総括的報告を行った。『先ず時期をきめる鍵となる上器の形式について西日本の各地域の対比を試みた』^(註)が「しかし、各地域内でも意見が異っており、最大公約数的にまとめ得るが、問題となる時期については今後なお地域内で研究者間の見解の統一が行われる必要のあることが痛感された」とする。そして「定形化した古墳が各地に行きわたる前夜」の様相については「各氏各様で統一理解にいたるまでにはならなかった」と述べるに止めている（東森市良、1978年）。東森は、その後1979年に「出雲における古墳形成期の様相」なる論文を発表しているが、斯文では從来通りの編年観に立った弥生後期から前期古墳の出現に至る状況が説かれており、四隅突出型の墳墓をもって「発生期古墳」とみなす当地研究者の松江大会の論議に対する実質的な受け止め方が伺えるように思われる（東森市良、1979年）。

いずれにしても、近藤義郎、藤田憲司らによって突き付けられた四隅突出型の墳墓を弥生時代の墳丘墓として墳墓そのものありかたと、それに相即する弥生土器や「古式土師器」論の再検討は、山陰地方の考古学的研究が当面する焦眉の課題となってきたといえよう。

引用・参考文献

- 1958年 間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」「瀬戸内考古学』第2号。
- 1963年 大塚初重「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」「考古学雑刊』第2巻第1号。
- 1964年 山本 清「小規模古墳について」「島根大学論集（人文科学）』第13号。（山本清『山陰古墳文化の研究』1971年に収める）
- 1965年 山本清他『松本古墳調査報告』島根県教育委員会。（本報告書は、標題に昭和38年3月の刊行となっているが、奥付けの日付は、昭和40年12月とされているので、これが発行の年月とするべきであろう。実際の内容、つまり本文中でも山本清の1964年論文が引用されている）
- 〃 山本 清「山陰の土師器」「山陰文化研究紀要』第6号。（山本『山陰古墳文化の研究』1971年に収める）
- 1966年 近藤正他「安来平野における土壙墓」「上代文化』第36輯。（近藤正『山陰古代文化の研究』1978年に収める）
- 〃 潤見浩・藤田等「弥生文化の発展と地域性中国・四国」「日本の考古学Ⅳ・弥生時代』河出書房。
- 〃 森 浩一・伊達宗泰「土器」「日本の考古学V・古墳時代（下）』河出書房。

山陰地方における弥生墳丘墓の研究

- ✓ モロ時雄・堀崎卓也「土師器」『日本原始美術6・埴輪・鏡・玉・劍』講談社。
- 1967年 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第26巻第3号。
- 1969年 山本 清「弥生文化各説 山陰地方」『新版考古学講座4・原始文化（上）』雄山閣。
- 1970年 山本 清「古墳文化各説 山陰地方」『新版考古学講座5・原始文化（下）』雄山閣。
- 1971年 東森市良「仲仙寺古墳群の意義について」『季刊文化財』第14号。
- ✓ 門脇俊彦「順庵原一号墳について」『鳥取県文化財調査報告』第7号、鳥取県教育委員会。
- ✓ 東森市良「九重式土器について」『考古学雑誌』第57巻第1号。
- ✓ 近藤 正「山陰に於ける弥生時代墓制の展開」『日本考古学協会昭和46年度大会研究発表要旨』。
(この発表は、大会が中止になったため行われていないが、要旨により近藤正の見解を引用した)
- 1972年 近藤 正『仲仙寺古墳群』安来市教育委員会。
- ✓ 近藤正・前島巳基「鳥取県松江市河原町七塚墓」『考古学雑誌』第57巻第4号。
- 1973年 東森市良「山陰における発生期古墳の諸相」『日本考古学協会第40回大会 研究発表要旨』。
- 1975年 山本 清「出雲の四隅突出型方墳」『日本のなかの朝鮮文化』第28号。
- 1976年 勝部啓・松本岩雄「平所遺跡1」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』I、鳥取県教育委員会。
- 1977年 前島巳基・松本岩雄他「平所遺跡2」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』II、鳥取県教育委員会。
- ✓ 前島巳基・松本岩雄「鳥取縣神原社古墳出土の土器」『考古学雑誌』第62巻第3号。
- ✓ 東森市良・前島巳基・松本岩雄「弥生式土器集成」『八雲立つ風土記の丘研究紀要』I、八雲立つ風土記の丘資料館。
- ✓ 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓」『岡山大学法文学部学術紀要』第37号。
- ✓ 青木遺跡発掘調査班「鳥取県米子市青木遺跡発掘調査報告」II。
- 1978年 山陰考古学研究所『山陰の前期古墳文化の研究 I・山陰考古学研究所記録』2。
- ✓ 東森市良「弥生時代から古墳時代の墓制の展開」『季刊文化財』第32号。
- 1979年 藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64第4号。
- ✓ 東森市良「出雲における古墳形成期の様相」『山陰一地域の歴史的性格』雄山閣。

第2章 烏取県における弥生墳丘墓

第1節 因幡地域の弥生墳墓・墳丘墓

鳥取県は日本海に面して東西に細長く、地形的に東部・中部・西部に大別される。旧国名でいうと東部は因幡であり、中・西部は伯耆である。伯耆を2大別して、中部を東伯耆、西部を西伯耆と呼称する。

因幡は、東側の但馬とも西側の伯耆とも山によって隔てられており、山陰地方の中で地形的に孤立している。そして、平地が少ない中で千代川流域には沖積平野が発達し、その西側には古代に港湾として利用されたであろう湖山池がある。湖山池周辺には、多くの古代遺跡が遺されている。

因幡では今までに調査された弥生時代の埋葬施設は、万代寺・西桂見・桂見の3遺跡があり、関連するものとして糸谷1号墓がある。以下、報告書によって概略を紹介し、私見を付してみたい。

① 万代寺遺跡^①（八頭郡郡家町万代寺）

弥生中期中葉の土器を出土する22条の溝と、36基の土壙墓を検出している。全体的に共同墓地的なありかたであるが、その中に他と特別に区別された土壙墓群があった。

それは第50区にある、磁北より45度東へ振れた軸をもつ9m×1mのV字状の溝と、その北西側に溝と直交する長軸をもつ3基の土壙墓がセットになった施設である。いずれの土壙墓も木棺真跡を有する。第51区にも、第50区の溝とほぼ同一方向を示す11m×1mの溝と、これに直交する長軸をもつ3基の土壙墓がある。

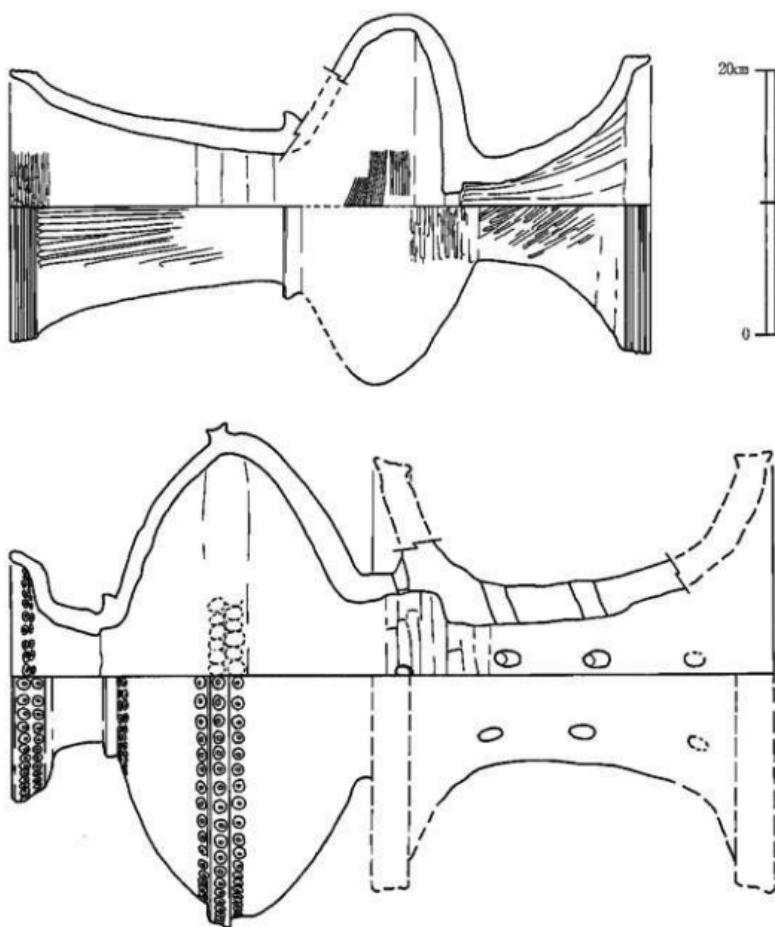
V字状の溝は、土壙墓の存在する墓域を示すと共に、祭祀の場であったと考えるのが妥当ではなかろうか。この溝から出土した土器は、並べられていたようであったという。

② 西桂見四隅突出型墳丘墓^②（鳥取市西桂見）

湖山池南東岸に南方からせまる低丘陵の、頂部最先端に立地する。墳丘は南辺および東辺の一部を残すのみで大部分を削り取られており、残存部も後世の改変を強く受けている、原状が判明しなかった。しかし、トレンチ調査ながら方形の墳丘は丘陵頂部と斜面中央部に盛土して、墳形を整えていたことを確認している。

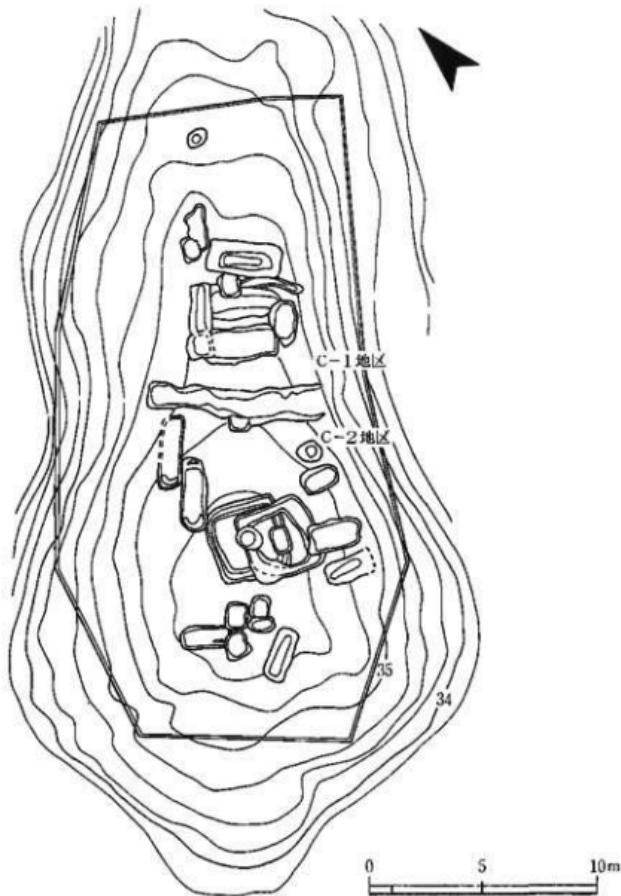
突出部とされる部分は「丘陵頂部から東南・西南方向に延びる尾根を利用して、これを削平して突出部をつくり出し」、さらに「東南部が、地形的に突出部の可能性が高い」、南西部は、「地山の高まりが突出部の名残と思われる」という。しかし、地山が尾根として突出している部分をそのまま「四隅」の突出部と想定するのはどうであろうか。少なくとも盛土か貼石・列石のいずれかを確認してから「四隅」の突出部とする位の慎重さが望ましいように思う。

一方、墳丘斜面の列石は「立石を伴い、今までに調査されている『四隅』の墳郭平坦面を



第2図 西柱見四隅突出型墳丘墓出土遺物

巡る列石とはばその構造と同じくするところから、貼石の存在とともに、本遺跡が「四隅」である事を証左するものである」とされているが、果たしてそうであろうか。立石列の外側に2列認められる「列石」は、現在のところこのような「列石」をともなう「四隅」の実例はない。また、この立石列は実測図によれば四凸があり、ほぼ直線上に並んでいるようにも見え、「南西突出部のつけ根付近のもの」といえるほど明らかな屈曲点を見出すことはできない。したがって、この「立石・列石」で突出部の存在を想定するのもいささか無理ではなか



第3図 西柱見遺跡C地区造構配置図

ろうか。

ややくどくなつたが、以上の諸点により、四隅突出型墳丘墓（報告者は四隅突出型方形墓としている）とする客観的な根拠は薄いように思われる。もちろん、「四隅」であった可能性は充分あると思われるが、致し方ない。その意味において、調査前にその大部分を破壊されてしまったことが惜しまれるのである。したがつて、今のところ類例のない大型方形の墳丘墓としておくのが妥当ではあるまいか。「四隅」と断定できないからといって、その価値をいさざかも減じるものではない。

なお、埋葬施設は、墳頂平坦部南東寄りで検出された墓壙1基である。墳丘中心部は既に失われているので、中心主体とも思えない。墓壙は大半を切り取られていて規模は不明であるが、二段掘りで木棺痕跡を検出した。遺物は検出されていない。

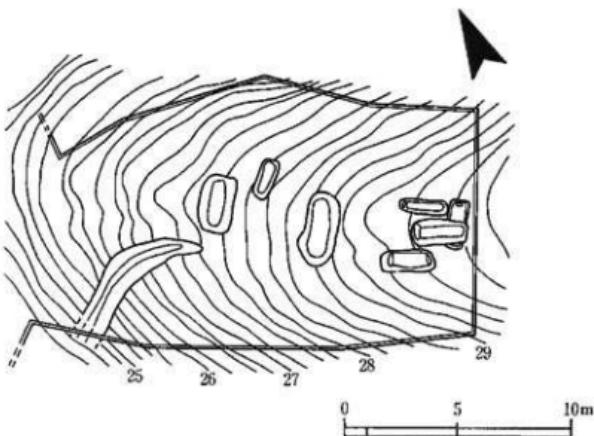
本遺跡にともなうとされる土器のうち、脚台付特殊盤¹と台付長頸瓶は大型品であり、あまり類例をみないものであるが、徳樂方墳（大山町）出土の上器^③の中に共通する特徴をもつものがある。時期は赤牛後期後半とされている。

③ 西桂見土壤墓群^④（鳥取市西桂見）

西桂見四隅突出型墳丘墓と同一丘陵の基部寄り100m余の尾根上に立地する。

C地区……幅10m内外の尾根に直交する溝を掘り、その両側に6基（C1群）と7基（C2群）の土壙墓を配置する。溝より、弥生後期後半の甕を出土している。両群共に刀子1を副葬する土壙墓が1基ずつある。

D地区……C地区の尾根から西方に延びる支脈上に立地する。幅10m未満の狭い尾根上に、



第4図 西桂見遺跡D地区造構配置図

7基の土壙墓が群在する。1基から供獻された甕2を検出している。弥生後期後半である。

本土壙墓群は、3支群の構成単位が6～7基である点や、刀子或いは甕を供獻する土壙墓が1基ずつしかない点などの共通点がある。それぞれの支群は家族墓としてのまとまりを見せている。家族墓群を形成し得る点と立地を考え合わせると、集団構成員の家族墓群ではあり得ず、首長を除く支配者層のものと思われる。

④ 桂見土壙墓群^⑤（鳥取市桂見）

西柱見上壙墓群の東方約500mの、標高35mの丘陵上に立地する。丘陵頂部に1辺約12mの不明瞭な方形区画がみられ、東辺の削り出し部に沿って拳大かやや大きめの石を5.2mにわたって並べている。墓域の北西部は3分の1程削除され、地表も重機によって搅乱をうけていたので、石列が墓域を全周していたか否か明らかでない。

土壙墓は墓域内に6基、周辺部に4基検出されており、他に削除された土壙墓の存在が推定される。墓域内の中央より少し南寄りの位置に、中心主体とみられる第1土壙墓（3.08m×1.90m）があり、東端底部より水銀朱とガラス製勾玉1・碧玉製管玉2を検出した。

墓域外の第7～10土壙墓に供獻されていた土器は、弥生後期中頃から後半にかけての時期であるという。墓域内の土壙墓の時期はこれを下限と考えてよいであろう。

報告書で墓域としているものは、墳丘墓としての可能性をあまり考えず、あくまで土壙墓群の墓域と考えているようである。しかし、第1～6土壙墓のあり方を見ると、第1土壙墓を中心とする墳丘墓であった可能性が強いと思われる。

⑤ 糸谷1号墓・四隅突出型墳丘墓^⑥（岩美郡岡町糸谷）

千代川の支流袋川流域の水田面に舌状に延びる、比高差20mほどの低丘陵先端部に立地する。これに続く丘陵尾根上には、他に11基の円墳及び方墳が連なっている。

本四隅突出型墳丘墓は、地山を加工した上に盛土して築造されている。規模は、突出部を含めて1辺17m、高さ2mである。墳裾には立石列があり、下部に転落した石が多数あるところから、丘陵斜面にも貼石があったことは間違いない。突出部の遺存状態は良くないが、墳裾の一端に立石列があり、四隅に突出部があったことが明らかになった。

埋葬施設は墳丘上にのみ土壙が11基あり、大型の2基で木棺痕跡を検出した。報告書でいう1号木棺は主軸を南北にとり、掘り方は2.2m×1.3m、深さ0.4mで底部に細かな砂利を敷いていた。2号木棺からは、土器類の甕1、鉄劍1、鏡1が出土している。

調査者は、本墳丘墓を「弥生時代の墓制を踏襲し」た四隅突出型方形墓とし、糸谷1号墓と名づけて2号墳以下と区別している。しかし結論的には「古墳時代の墓制であったと考え」る故に、糸谷古墳群に含めてしまっている。

筆者は本墳丘墓を、弥生時代墓制の遺制としての四隅突出型墳丘墓と考えている。そして、引き続いて築造されたと思われる2号墳以下がたとえ古墳であっても、本墳丘墓は古墳として造られたものではないと考えている。

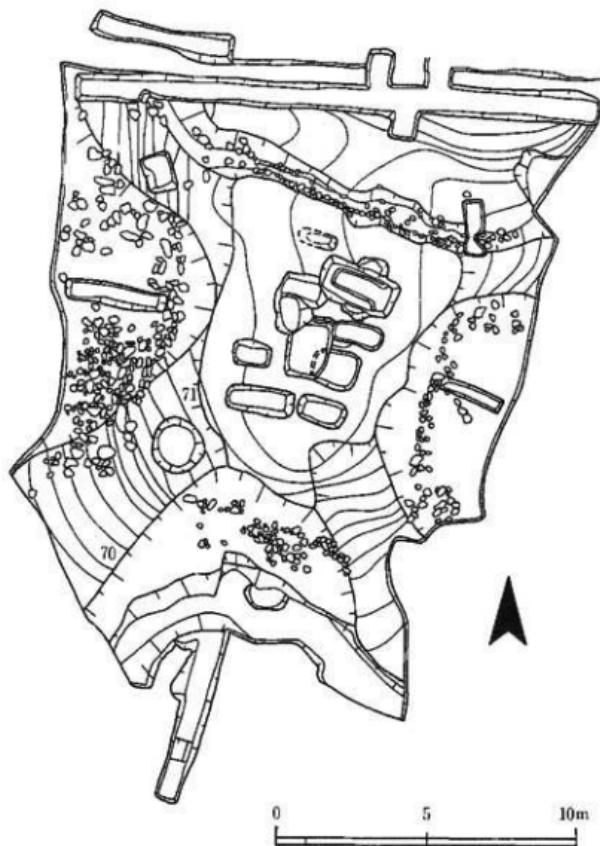
山陰地方における弥生墳丘墓の研究

墳丘頂部及び墳裾部より、土師器を出土している。時期は4世紀前半とされているが、もう少し降る時期とも思われる。

小 結

凶幡の上墳墓や墳丘墓の実例は、現在のところ万代川とその支流の流域及び湖山池畔に限られている。

万代寺遺跡の上墳墓群は、当地方唯一の弥生中期のものである。微高地に散在する土墳墓のありかたは共同墓地的であるが、中に溝をともなう3基の上墳墓群が2例あり、集団内部



第5図 条谷1号墓・四隅突出型墳丘墓平面図

での有力な一族の家族墓のありかたを示していた。

万代寺上塙墓群と、西桂見墳丘墓など弥生後期後半の遺跡との間を埋める資料は、現在のところない。当地方の墳丘墓の立地は、古墳のそれと同様であるが、弥生後期後半以降という時期的な要因によるものであろう。

西桂見墳丘墓を「四隅」とみるか「方墳」とみるかは、所詮水掛け論かも知れないが、墳丘と土器との並はずれた大きさは特筆される。

西桂見上塙墓群は、「四隅」と同一丘陵上のごく近いところに営まれていることから、首長側近者の家族墓とも考えられる。首長墓との格差が余りにも大き過ぎるようではあるが、同一集団内の首長と側近者との格差を示す好例ではなかろうか。

桂見土壤墓群は、遺構を実見していないのが遺憾であるが、方形の墳丘墓だった可能性が強いと思われる。

糸谷1号墓・四隅突出型墳丘墓は、糸谷2号墳の性格が明らかでないが、少なくとも3号墳以下が古墳であったために、調査者を困惑させたようである。しかし、同一丘陵上に両者が隣りあって築造された状態は、現在のところ他に類例がなく、当地方の当時の状況を如実に示すものと思われる。

以上、因幡の墳丘墓と土壤墓について、感じるままに書き連ねて来たが、資料不足が痛感された。今後、完好な資料の増加を待ちたい。尚、本稿は各遺跡毎に紹介したが、その標題は調査者の意志を尊重して報告書に記された遺跡名を使用した。しかし文中においては、私見にもとづく名称で記述を進めているので、了承されたい。

(名越 勉)

註

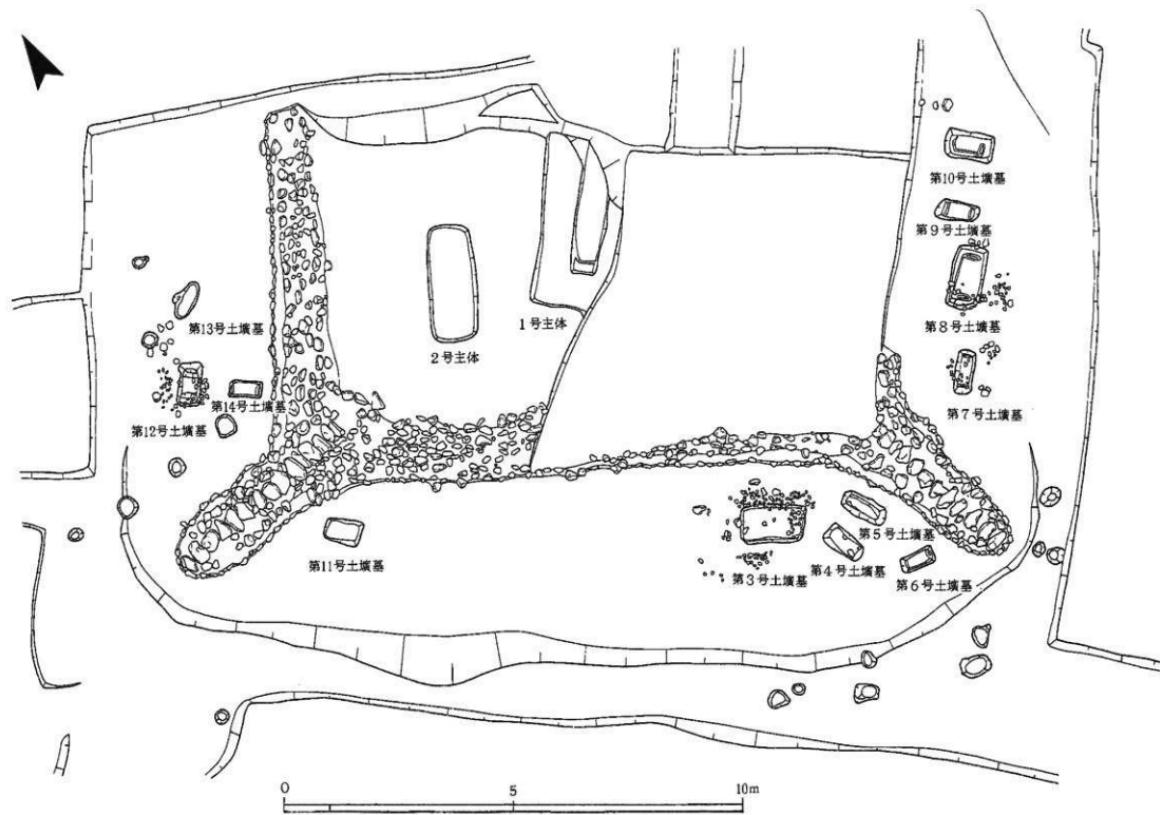
- ① 山形県立『万代寺遺跡発掘調査報告書』郡家町教育委員会、1983年。
- ② 平川 誠『西桂見遺跡』鳥取市教育委員会、1981年。
- 平川 誠「西桂見遺跡」『えとのす』第18号、1982年。
- 東森市良「徳東方墳出土の土器」『松江考古』第6号、1985年。
- 平川 誠『西桂見遺跡II』鳥取市教育委員会、1984年。
- 平川 誠『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会、1984年。
- 中野知照『糸谷古墳発掘調査報告』国府町教育委員会、1979年。
- 中野知照「糸谷古墳群」『えとのす』第18号、1982年。

第2節 東伯耆地域の弥生墳墓・墳丘墓

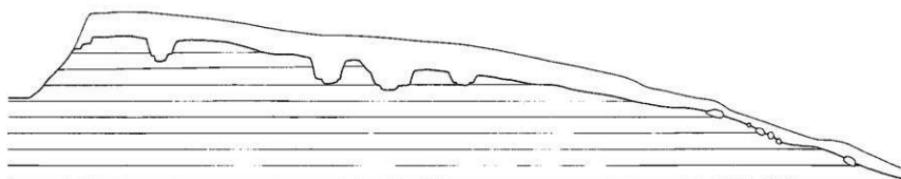
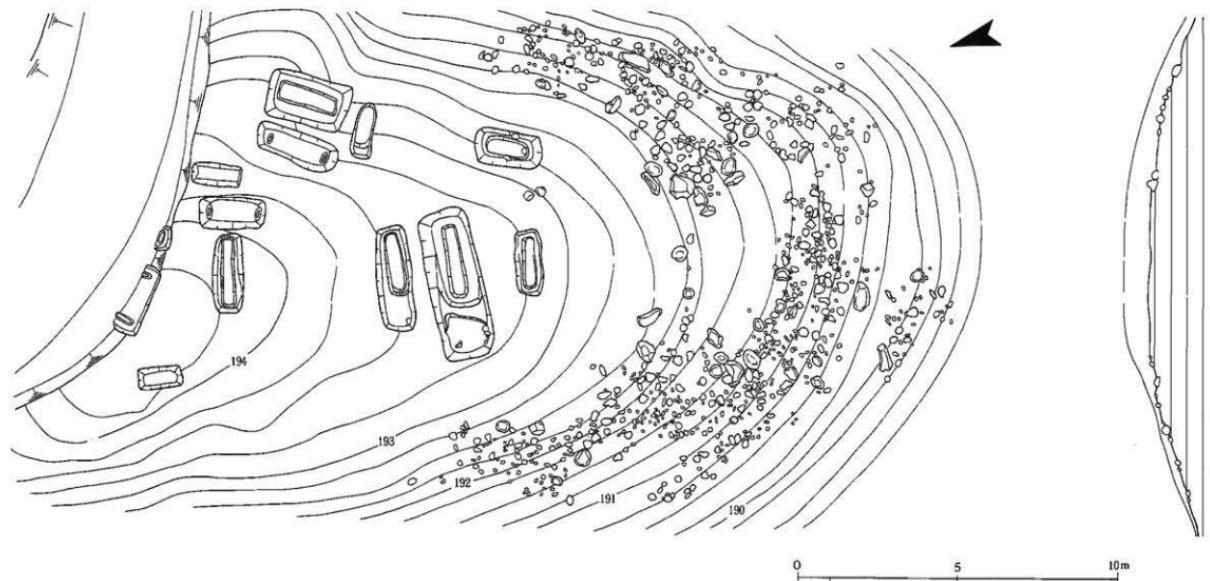
東伯耆は東側の因幡とは山によって隔てられているが、西側は大山山麓が直接日本海に落



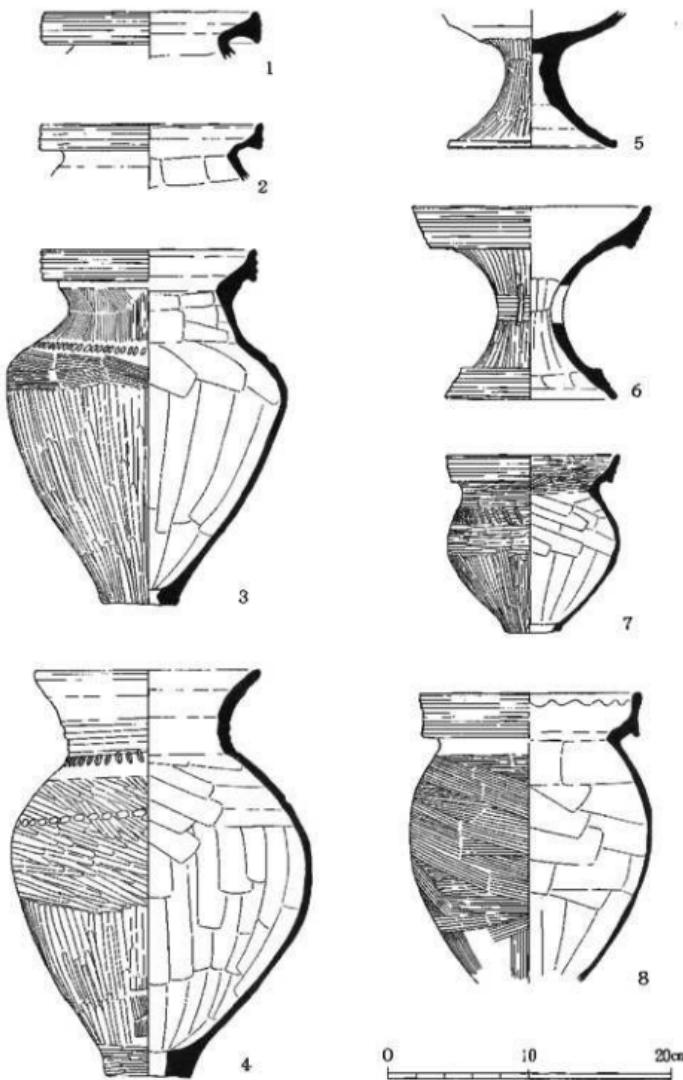
第6図 阿弥大寺四隅突出型墳丘墓群平面図



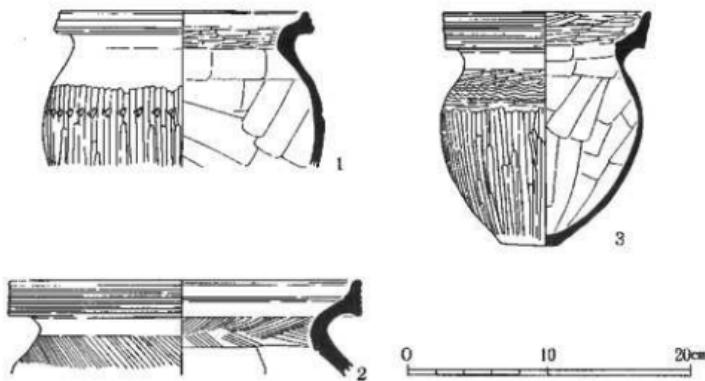
第7图 阿弥大寺1号墓·四隅突出型堆丘墓平面图



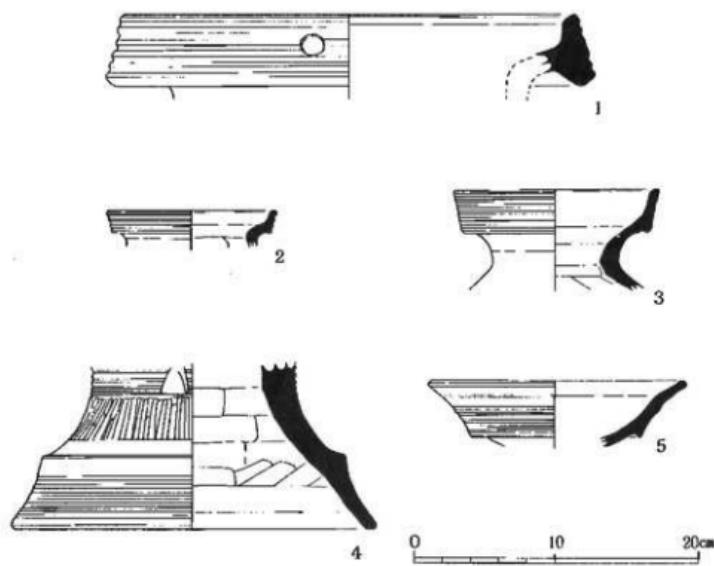
第14図 泰久寺土塚墓群平面・断面図



第8図 阿弥大寺1号墓・四隅突出型墳丘墓出土遺物



第9図 阿弥大寺3号墓・四隅突出型墳丘墓出土遺物



第10図 阿弥大寺2号墓・四隅突出型墳丘墓出土遺物

ちこむ、水田の少ない地域（赤崎町）までである。陸上の交通は因幡へは困難であるが、西伯耆へは容易である。

東伯耆は大山山麓の洪積世低丘陵が発達しているため畠地が多い。犬神川流域と、古代の良港であった東郷池周辺に多くの遺跡が遺されている。

その中で、今までに判明している墳丘墓や土壙墓の概略を紹介し、私見を付してみたい。

① 阿弥大寺1～3号墓・四隅突出型墳丘墓⁽¹⁾（倉吉市上米積字阿弥大寺）

天神川の支流国府川の河岸段丘上の緩傾斜地に、3基の四隅突出型墳丘墓が横並びに並列している。この立地は、順庵原1号墓・四隅突出型墳丘墓⁽²⁾のそれと同様であり、後出的な四隅突出型墳丘墓や前期古墳が丘陵頂部に立地することと相違する。

1号墓は、緩傾斜面をほぼ水平に切り取り、黒土を盛って墳丘を築成している。墳丘は傾斜面下方の北半分が削除されて失われており、南半分の2隅を残すのみである。墳丘規模は突出部を含めると東西17.8m、突出部の長さは3.5m、幅1m程である。突出部の遺存状況は完好である。突川部の稜線上に平石を並べて通路を形成している状態は、順庵原例と共に通する。

南突出部の先端部の溝が狭くなってしまっており、外から溝を跨いで突川部へ渡るのに好都合であるのに対し、西突出部へは渡りにくい。土器の出土は両突川部付近が多かった。これらを合わせ考えると、南突出部を主たる通路として用いるとともに祭祀も合わせて行い、西突出部は祭祀のみに用いたのではないかと思われる。2・3号墓においても、同じ傾向がうかがえる。

墳頂の立石列は1列で、貼石下端との間に10～20cmの間隔をあけている。墳頂部は約4分の1しか残っていないが、2基の土壙を検出した。遺物は出土していない。周溝内からは、12基の土壙墓を検出ししたが、上面に円礫を置き、土器を供獻するものがあった。出土した上器は3期に分類されている。これは弥生後期を4期に区分した場合、1～3期に相当する。

2号墓は、1号墓の西南約5mに隣接する。墳丘の大半を失っている。南側の2隅の突出部と南辺は貼石もよく残っているが、1号墓程整然とはしていない。突出部を含めた東西長は7.8mである。

3号墓は、2号墓の西2mに隣接する。墳丘の大半を失っている。南側の二隅の突出部と南辺は貼石もよく残っているが、1号墓程整然とはしていない。突出部を含めた東西長は8.8mである。

1号墓の南方15mのところに集団構成員の墳墓と思われる4基の土壙墓、東方の下小垣地区に11基の土壙墓⁽³⁾が存在する。墳丘墓との間に区画するような、溝などの施設はなかった。時期は、四隅突出型墳丘墓と同時期か、多少遅れるようである。

② 藤和四隅突出型墳丘墓（倉吉市山根字大平）

本墳丘墓は、山陰線倉吉駅東方の狭く短い谷の南側で、比高差40mの急峻な丘陵尾根先端

部に立地する。

墳丘は四隅をほぼ東西・南北に向ける。9.6m×8.5mの長方形で、北側は工事のため削除されていた。全体的に遺存状態はよくなかったが、南突出部の存在が確認され、南東辺及び南西辺の斜面貼石も一部残っていた。墳丘の南東側に溝を掘り、丘陵から切り離していた。墳丘上には、北西から南東方向の主軸をもつ、1基の土壙があった。約5.9m×約4.6m、深さ1.5mの二段掘りで、墓壙底に長さ約3.3m、幅約0.9mの丸底の木棺痕跡が検出され、割竹形木棺であったと推定された。墳丘内外から土器の小片が数片が出土しているが、時期の特定は困難である。阿弥大寺1～3号墓・四隅突出型墳丘墓より後出であろう。

③ 後口谷1・2号墳丘墓^⑤（倉吉市人谷字後口谷）

四工寺山の南西麓の比高40mの尾根上に立地する。尾根先端部は既に切断されており、何らかの遺構が存在した可能性がある。1・2号墓に続く尾根上には、低い墳丘状の高まりが數ヶ所認められる。

1号墓は、現在の丘陵先端部に立地する。四辺をほぼ東西南北方向に沿わせている。東西13.7m×南北11.5m、高さ1.5mの長方形で、0.4m～0.6mの盛土をしている。各辺の周辺を掘り下げて、幅2m～3m、深さ0.3m～0.5mの溝をつくっているが、墳丘の四隅は掘り残しており、平面形では四隅が突出した形態をとる。しかし、この部分に盛土もなく先端も全く不明瞭であって、四隅突出型の範疇には入らない。墳丘全般にわたって貼石は全く存在しない。

墳丘上に入小5基の土壙を、周囲に10基の土壙蓋を配置している。墳頂部より甕・壺・器台を検出したほか、周溝からも多数の土器が出土している。時期は阿弥大寺Ⅲ期である。中に山陽地方の鬼川市Ⅲ期併行の菱形土器が1点あり、器形、胎土ともに当地方のものではない。

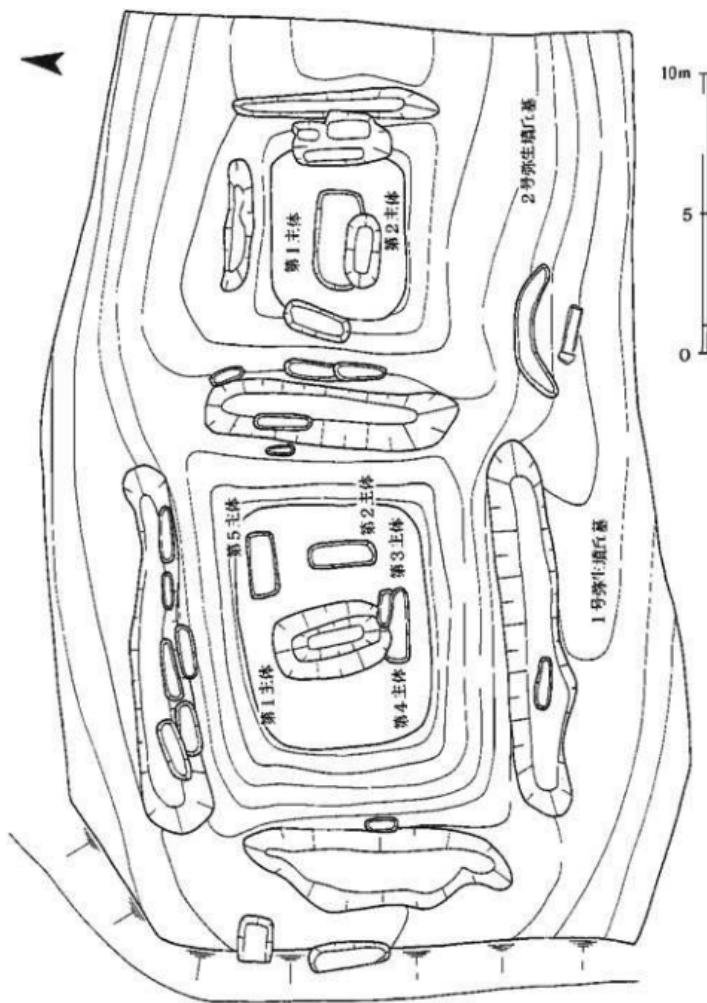
2号墓は、1号墓の東側に並列して設けられており、石を全く使用していない。東西9.5m×南北7.0m、高さ0.5mで、0.2m～0.4mの盛土をしている。周溝は三方にしかなく、南側には設けていない。

墳丘上に、東西に軸を有する主体部が2基あり、切り合っている。墳頂部には、甕・高杯・器台が供獻されていた。時期は阿弥大寺Ⅲ期で、1号墓と同時期であるが、共用する東側周溝埋土の状態から、1号墓より後出である。

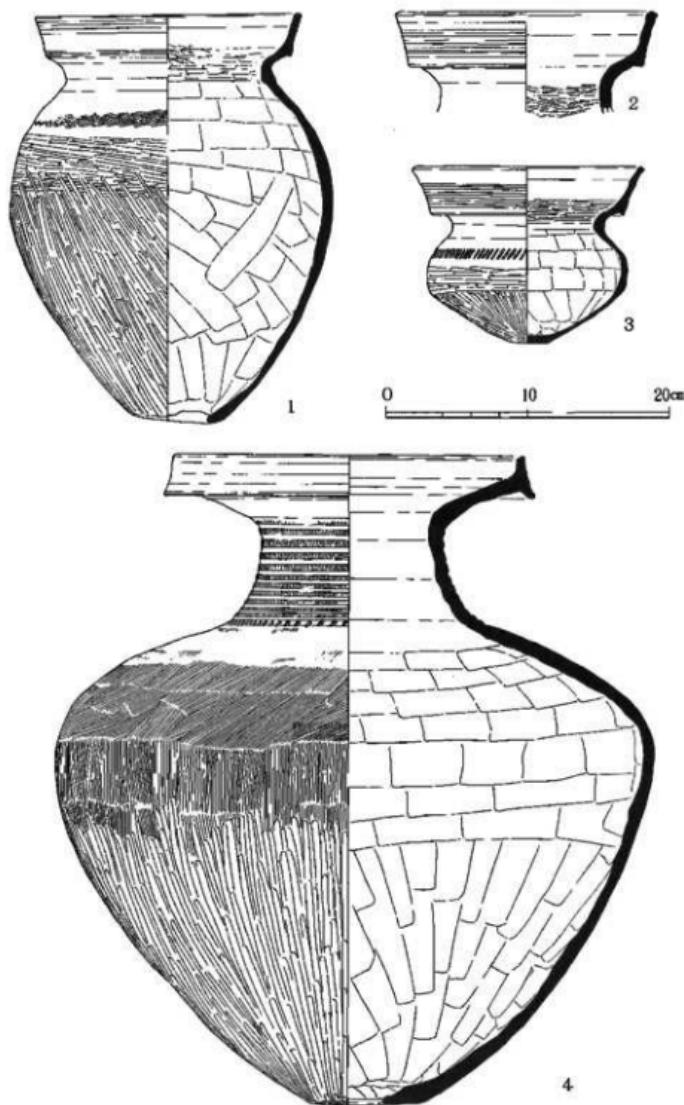
④ 泰久寺中峯土壙墓群^⑥（東伯郡閑金町泰久寺字中峯）

本遺跡は、天神川の支流である小鶴川左岸に拡がる、大山火山灰の厚く堆積した丘陵上に立地する。

本遺跡の存在する小丘陵頂上部が、道路で切断されており、断面に土壙墓の落ち込みが見られる。その部分から丘陵先端部までの南北12m、東西10mにわたって土壙墓が13基あり、最先端の急傾斜が始まろうとする辺りは貼石がU字状又は鋸先状に存在する。



第11図 後谷弥生墳丘墓平面図



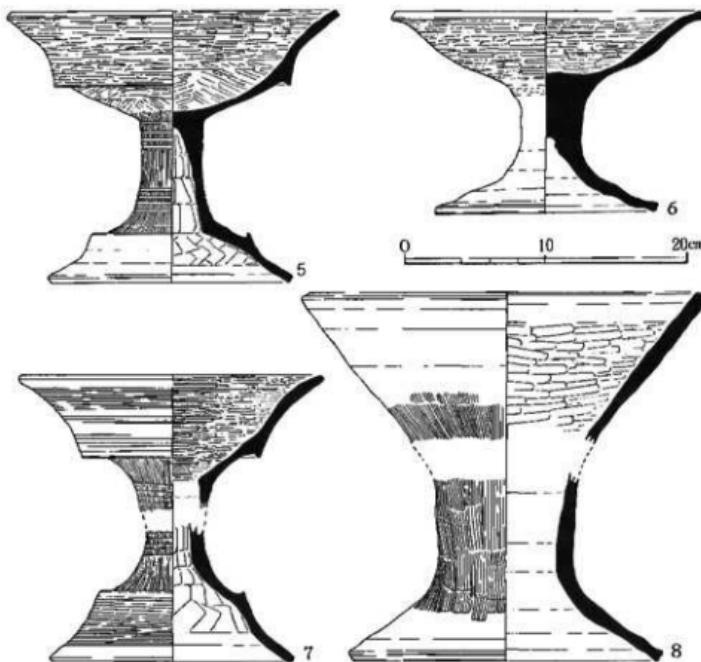
第12図 後口谷1号墳出土遺物

土墳墓は13基が狭い範囲につくられているが、道路で切断されたものが2基あることから、範囲はもっと北まであった可能性がある。現存する13基の土墳墓相互間に切り合いは全くない。第11号土墳蓋上面には、厚さ26cmの黒土の盛土があり、上に器台形土器1と数個の置石があった。この盛土が、墓壇の上だけを覆うのか、もっと広く墳丘的な拡がりを持つのか不明とされているが、可能性は強いと思われる。また13基の土墳墓の内、7基に土器が供獻されていたことは特筆すべきであろう。本遺跡群の土器は、阿弥大寺Ⅲ期、上種第5遺跡貯藏穴7号期、宮の下4・6号住居址期に併行する3時期にわたる。

⑤ 三度舞墳丘墓^⑦（倉吉市大谷字三度舞）

四土寺山東麓の、水田面との比高30mの緩やか低丘陵頂部に立地する。鳥取県下でも著名な方墳とされ、「三度舞大将塚古墳」として親しまれて来た。しかし今回検討の結果、墳丘墓とするのが妥当であると判断されるので、名称を三度舞墳丘墓と変更することにしたい。

墳丘は、近年になって東側を少し削除され、東西19m×南北20m、高さ2m余である。墳丘中央部にある主體部が、大正年間に発掘された。上面に約2.7m四方にわたって拳大の円



第13図 後口谷1号墳丘墓出土遺物

礫が2段にあり、上面の片隅に多量の土器があったが、主体部から副葬品は検出されなかつたようである。1.8m下に丹塗りの土器が1個あったというが、現存する土器^⑤は、丹塗りで胸部に小孔をもつ頸部の細い土器と、ほかに円礫上にあったと思われる手焼形土器がある。

墳丘裾部には、山石が並べられている個所があり、隣接する墓地にも石材が散乱する状態からみて、墳裾部に石を用いていることは確実である。

以上の諸点は、墳丘墓に普遍的にみられる状態であり、本遺跡が墳丘墓であることは動かし難いと思われる。

⑤ 若桐山遺跡^⑥（倉吉市下余戸）

倉吉市立西郷小学校の裏山から児童によって採集された土器を、東森市良が紹介している。阿弥大寺Ⅲ期の土器で、土壇墓群に供獻されたものと推定されている。

小 結

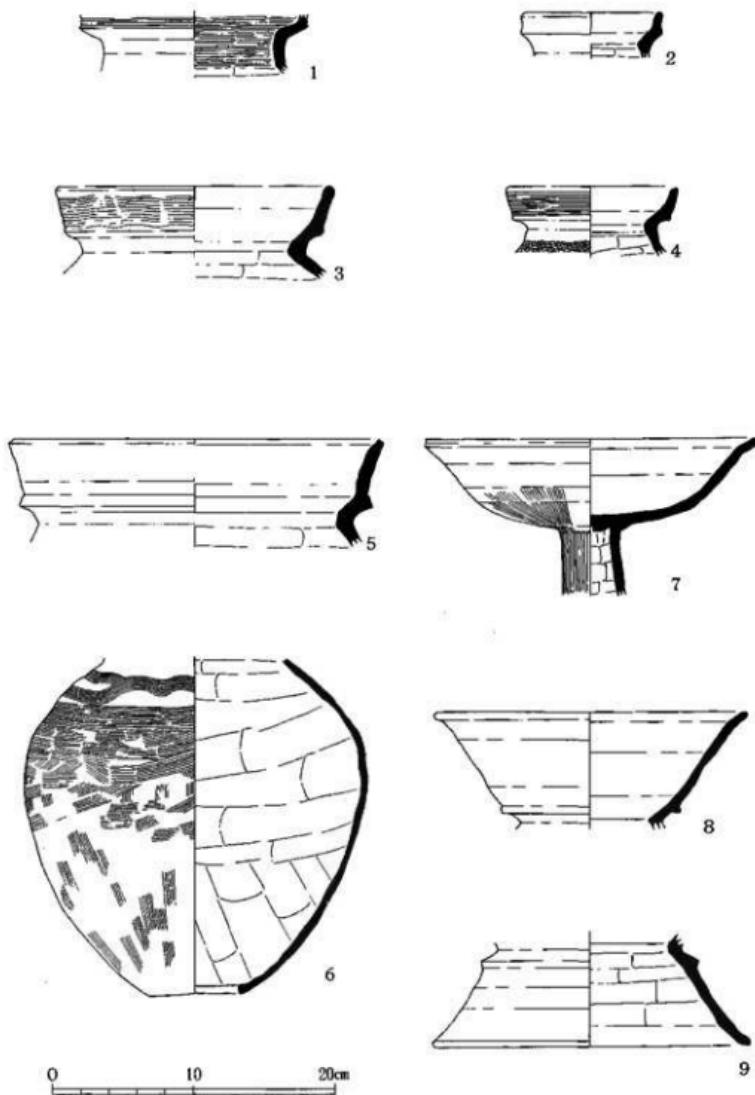
東伯耆地域の墳丘墓や土壇墓の実例は、現在のところ大神川とその支流の流域に限られている。当地方の墳丘墓の立地は、阿弥大寺1～3号墓・四隅突出型墳丘墓が河岸段丘上の緩傾斜地である他、後口谷1・2号墓と藤和四隅突出型墳丘墓は古墳のそれと同様である。これは弥生後期の早い時期には、四隅突出型などの墳丘墓は土壇墓群と同様の立地であったものが、後期も終り頃になると古墳と同様の立地をとるようになることを示すものである。

しかし、後口谷墳丘墓のように明らかに阿弥大寺墳丘墓群より後出であるにもかかわらず、四隅突出型を示さないものがある。藤和墳丘墓の正確な時期は不明ではあるが、後口谷墳丘墓と同時期か少し遅るものと思われる所以、当地方では墳丘墓を首長墓として採用してはいるものの、四隅突出型をとる場合ととらない場合があったことになる。

これは、①四隅突出型は点的なあり方であって、東伯耆全般に受け入れられずに終わったか、②四隅突出型を採用したくても許されず、方形の墳丘と四辺の溝だけを設けたものか、のいずれかであろう。現在の少數の資料ではいずれとも速断し難いが、後口谷墳丘墓群の立地を考えると、眼下に中峯・白山・遠藤谷峯などの弥生集落を見下ろす絶好の立地であることから、大きな集団を率いた首長の墳墓と考えてよいと思われる。したがって、上記①の四隅突出型を受け入れていない集団の首長墓であった可能性が強いと思われる。

三度舞墳丘墓は從米前期古墳とされてきたが、検討の結果、古墳ではないという結論に達した。墳丘墓のあり方は、東伯耆という狭い範囲においても多様性を示し、前方後円墳出現前後の状態をそのまま反映しているようである。しかし、現在のところ余りにも資料不足であって、当地方の特質など抽出することができない。今後の資料の増加に期待したい。

（名越 勉）



第15図 泰久寺土壤墓群出土遺物

註

- ① 真田廣幸・森下哲哉『上米積遺跡群発掘調査報告II—阿弥大寺地区—』倉吉市教育委員会、1981年。
- ② 門脇俊彦「頭廬原1号墳について」『鳥取県文化財調査報告』第7集 島根県教育委員会、1971年。
- ③ 森下哲哉『上米積遺跡群分布調査概報』倉吉市教育委員会、1980年。
- ④ 報告書未刊のため、調査者である堅川直氏にご無理をお願いして、摘要をお送り頂いた。記して深謝申し上げる。
- ⑤ 倉吉市教育委員会が、森下哲哉氏を担当者として1985年に調査した。報告書は未刊であるが、快く資料を提示された関係者各位に深謝申し上げる。
- ⑥ 日野原郎「泰久寺遺跡発掘調査報告—中郷地区—」關金町教育委員会、1984年。
- ⑦ 梅原末治「因伯二國に於ける古墳の調査」『鳥取県史跡勝跡調査報告』第2冊 鳥取県、1924年。
- ⑧ 鳥取県立博物館蔵。
- ⑨ 東森市長「九重式土器」『考古学雑誌』第57巻第1号、1971年（下余戸遺跡として紹介）。

第3節 西伯耆地域の弥生墳丘墓の問題について

鳥取県では、3大河川の流域に主要な平野がひらけ、因幡（千代川流域）、伯耆東部（天神川流域）、伯耆西部（口野川流域）に区分されており、文化（社会生活）の表れ方も異なる。西伯耆地域は、南を備中・備後、西を山陰と接し、日野川支流の汎勝川などのほか、阿弥陀川などの中小河川が日本海に注いでいる。

鳥取県における遺跡の分布調査は、かなり精密に行われた感があるが、墳丘墓の実態（形・内容）についての厳密な調査は実施されていない。とくに、墳丘の外形については、未発掘の故に断定が困難であり、なかでも刀形墳丘が長年の崩壊作用（雨・開墾・削平）によって円墳に見られがちなことは、青木遺跡^①の調査で明らかになった。

本研究の主な対象となる四隅突出型墳丘墓は、この10数年間に山陰各地～中国山地で発見されている。鳥取県内でも、緊急調査により、因幡で西桂見墳丘墓、糸谷1号墓、東伯耆で阿弥大寺墳丘墓群など類例が増加したが、西伯耆ではその例がいまだ確認されておらず、空白状態となっている。しかし、鳥取県仲仙寺墳墓群の例を見てもわかるように、この種の遺構は外面上突出部などを顯著に示すものではなく、糸谷墳墓群のように地元研究者の地道な踏査・研究の積みあげ方式が必要である。鳥取県内では、相次ぐ方墳などの発見によって、墳丘の見直しがされつつあるものの、前述の通りである。以下、人間生活の関係から推察した、弥生時代前期～古墳時代前期にかけての遺跡と墳墓を観察し、西伯耆における弥生墳丘墓の問題を検討をしてみたい。

弥生時代の代表的遺跡として、前期では目久美・諸木・上野・久古第6・塚田・明間出上地などが、低湿地や砂丘地の微高地、扇状地端や中低丘陵地端部の、初期水田農耕が可能な

低湿地を控えた場所へ拠点的に分布する。中期では日久美・上野など前期からの場所で引き続き営まれるものほか、青木・宮尾・藍野・石州府第1・尾高などが新たに丘陵地、高原地帯など谷水田や高原の耕作可能地を控えた場所に出現し、數的にも拡大していく。後期は陰田第1・茶畑・福市・池ノ内・青木などが、中期に出現した丘陵台地に引き続き営まれるほか、山陵上や斜面へ新たに出現し、古墳時代に引き続くものが多い。

弥生墳墓遺跡で実態が判明したものは、前期では別所新田遺跡、中期では青木・宮ノ前・久古第6・石州府第1等の諸遺跡、後期では青木遺跡等がある。いずれも、集落立地と同様の丘陵地にあり、群在するものと点在するものの2タイプがある。また現在のところ、墓域を区画したり、盛土をもつものはみられず、中期の墳墓に階層差を表すものはみられない。伴出遺物は、埴土内流入か供獻と考えられる土器だけで、供獻遺物に特筆するものはない。そこで、弥生墳墓の延長線上に、前期古墳を置いてみる。

西伯耆の前期古墳として知られるものは少ないが、法勝寺川中・下流域や所子扇状地域（阿弥陀川流域）に分布している。法勝寺川中・下流域では、青木遺跡のF・J・H地区、福市遺跡日焼山地区など丘陵上の集落の近隣に群として築かれ10m内外（以下、この節の大きさの表現は概数である）の小規模な方墳・円墳・木棺墓・方形周溝墓などがある。このうち、青木H方墳群では、木棺直葬・箱式石棺・土器棺と多様な内部主体に、鉄器等小量の副葬品と供獻土器を持ち、鏡の出土例もあった。日原6号墳は山陵上にある21mの方墳で、木棺直葬多郭・少量の副葬品と供獻土器をもつ。普段寺3号墳は23mの前方後円（方）墳、普段寺4号墳は21mの方墳で、ともに山陵上に築かれており、三角縁神獣鏡などが出土した。所子扇状地域では、徳楽方墳が有名であり山陵上に立地する21mの方墳（やや菱形に近い）。特殊円筒形土器のほか多数の供獻土器が発掘された。その形態からみた編年は、青木V・VIの時期^⑤に比定されている。また、源平山古墳群は山陵上に立地する方墳2基・円墳1基からなるとされているが、報告書未刊で、正確なことは不明である。いずれにしても古墳前期の段階で、上墳墓・方形周溝墓・小形の方墳や前方後円（方）墳など多様な墳墓形態からみられ、当時の階層（級）差の反映と考えられる。これは、弥生墳墓ではみられなかった確実な変化として捉えることができよう。

以上、西伯耆の弥生遺跡とその墳墓、さらに前期古墳の実態を概観した。当地方では、弥生後期の墳墓発見例が少ないため、弥生墳墓から古墳へのステップがよくわからず、四隅突出型墳丘墓も知られていない現状である。しかし、古墳時代前期には多様な墳墓形態がみられ、弥生時代以来の一般的共同体構成員の墓と考えられる上墳墓、木棺墓群のほかに、普段寺3号墳のような前方後円（方）墳が出現しており、地域の政治的共同体の首長も生まれたと考えられる。さらに、小地域の族長墓ともいいくべき小規模古墳も築造されていることがいえよう。

さて、四隅突出型墳丘墓が古墳時代前夜の首長墓として築造されていたとすれば、弥生遺

跡の展開が分布状況からみて、西伯善に成立していなかったとはいがたく、弥生前期以来形成されてきた小地域ないしそれらの政治的集団の長の墳墓として築造されたものと考えたい。また、土器供献、木棺直葬形態など前期古墳には弥生墓制の伝統が残ることも考え合わせて、丘陵上の墳丘の見直しから始める必要がある。これは、各小平野や流域単位の地域的研究の積み上げのなかから、その姿が判明するであろう。なかでも、前期古墳の知られる法勝寺川中流域や、徳楽方墳の所在する所子層状地は弥生前期以来、弥生遺跡の多いところであり、発見の可能性が高い地域として推定している。

なお本稿は、小原貴樹・大村雅夫・小原博樹氏に多大の教示・討議・資料提供を受け、その功績によるものであることを記して、厚く感謝の意を表する次第である。

(大村俊人)

註

①米子市青木・永江、(青木畠地内)

②「山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ(東伯善1・東郷池周辺)」山陰考古学研究所、1978年。

〔補 記〕

1990年10月7日、米子市日下、日下古墳群・堂平支群の北尾根部で、四隅突出型墳丘墓が確認・公表された。その後、その近くの西側縁辺部から、多数の弥生土器も検出されたので、詳細な調査報告書の発刊が待たれる。

日下1号墓・四隅突出型墳丘墓は、米子市域の東端・西伯郡岸本町との町境に近い、佐陀川右岸の標高87mの尾根頂部に、地山を加工してつくられた10m×8m、高さ0.7mのやや小形の四隅突出型墳丘墓である。突出部は未発達で、大きく張り出しておらず、数段の円礎・貼石をもっている。残念ながら、25号墳(4世紀中葉)により約半分を削平されていたが、墳丘内部から4基の木棺が検出された。副葬品は無かった。墳丘上や溝から、弥生後期に属する供献土器(器台・甕・台付甕の各種土器など)が発見された。この地域の弥生時代の小首長墓と考えてよく、鳥取県西部ではじめての発見例となった。

(1991年1月補記)

第4節 徳楽方墳 一出土土器を中心として-

1. はじめに

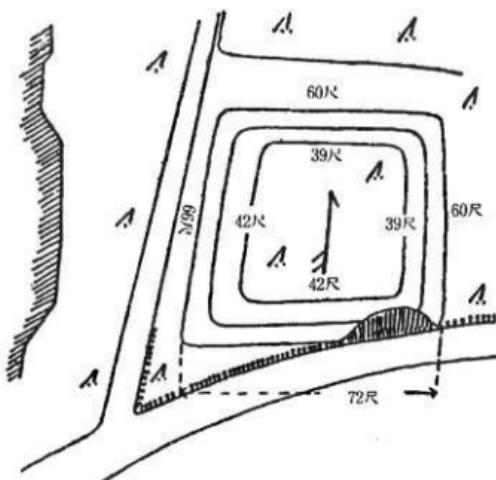
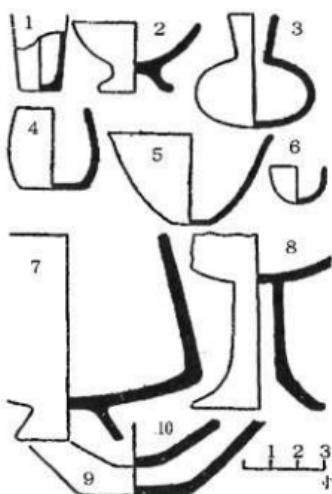
徳楽方墳は鳥取県西伯郡大山町長田字徳楽にあり、1923(大正12)年頃地元の入江清章他3氏と倉光清六氏によって発掘調査が行われ、雑誌『考古学』第3卷第4号及び第7号に倉光氏による報文^①がのっている。その折の出土遺物は土器のみであるが、入江清章氏3氏が

保管していると記されている。それに当ると思われる遺物が何等かの事情で付近の川に放棄され、それを知った同地出身で大山口在住の同町文化財審議委員入江甲氏（彫刻家）がバイクで積んで持ち帰られ、それらの遺物を実見する機会を得、同氏の御好意のもとに資料報告として発表した^②。なお同氏と清水真一氏によって後に触れる鳥取県立博物館藏品をまとめた概報が大山町教育委員会から刊行されている。

これらの他に同古墳出土品として大量の遺物が残されているのは京都大学考古学教室^③である。これは1935年代初頭、元京都大学教授小林行雄先生らによって試みられた墳頂の調査の結果出土したものである。短時間、わずかな範囲の調査であったというが、多量の土器が出上している。この遺物について今回小林行雄先生の御好意で花谷が実測し、報告をまとめ



第16図 德楽方墳の位置(■)と周辺の古墳群

第17図 德楽方墳の略測図
(倉光氏論文による)第18図 德楽方墳出土の土器
(倉光氏論文による)

た。また本古墳出土土器は鳥取県立博物館にも所蔵されており、そのうちの一部は倉光清六氏旧藏品であり、他は「鳥取図書館蔵、弥生式土器片西伯高麗德楽方墳、寄贈者木山竹治、昭和8年4月15日」というラベルの貼られたものである。

以上の他に絶縁は不明であるが、もと鳥取大学蔵品2点が人村雅夫氏によって筆者に示され、また関西大学考古学研究室にも数点本古墳出土品のあることが大学院生米田文孝氏によって示された。この関西大学蔵品はのち小林行雄先生の御教示で、先生の手になる『本山考古室日録』のNo41に別段のごとく「埴輪凹筒破片、約五個、伯耆国西伯郡高麗村 長田古墳 竹管文、絶縁條線文を線刻」としてかねて登載されていることが明らかになった。

本古墳の川土器は以上のように各地に分散所有されているが、京都大学蔵品、入江甲子藏品を中心として各種各様で、量的にもこれまでの山陰地方の初現期古墳では類例をみないほど多く、竹管文、斜行条線文を多用するという特徴をもっている。

今回は墳丘と土器出土状況については倉光報文^⑤によって概略を記すに留めるが、弥生墳丘墓と深い関わりをもって出現したこの古墳の特色ある土器を集成できうるかぎりで保管者ごとにまとめて発表することとした。

(東森市良)

2. 墳丘と土器出土状況

本古墳は方墳で、1辺約18m～21m（60尺～72尺）、上面平坦部は約12m～13m（39尺～42尺）を測る。ただし図のことく北辺及び東辺のやや狭い不整形である。南側は明らかでないが、北側には尾根をカットして周濠をつくっている。古墳の頂部には葺石様の石が並び、採集された上器はこの下部に存在した。発掘当時はすでに搅乱を受けていたが、まだ搅乱されていない部分では「多くの上器を並置して埋めたものが破壊して折り重なったといった風な状態において発見せられた。器の側部や口縁部が底部の上に崩れ重なったり、大形土器の破壊した側面に他の上器が横倒しになっていた」という。これら土器が出土した深さは約30～60cmぐらいである。土器のほかに遺物はなく、ボーリング棒で探したが、石組みや石棺の様子がなかったという状況からみると木棺直葬と考えてもよいようである。

そして倉光氏は本古墳のありさまを倉吉市三度舞大将塚と比較して「同軌といって可いやそうである」とし、「伯耆としては特色ある古墳の一つと思ふ^⑥」と結んでいる。鳥取県では数少ない方墳で、木棺直葬というのは米子市日原1号墳に通ずるものといえよう。

(東森市良)

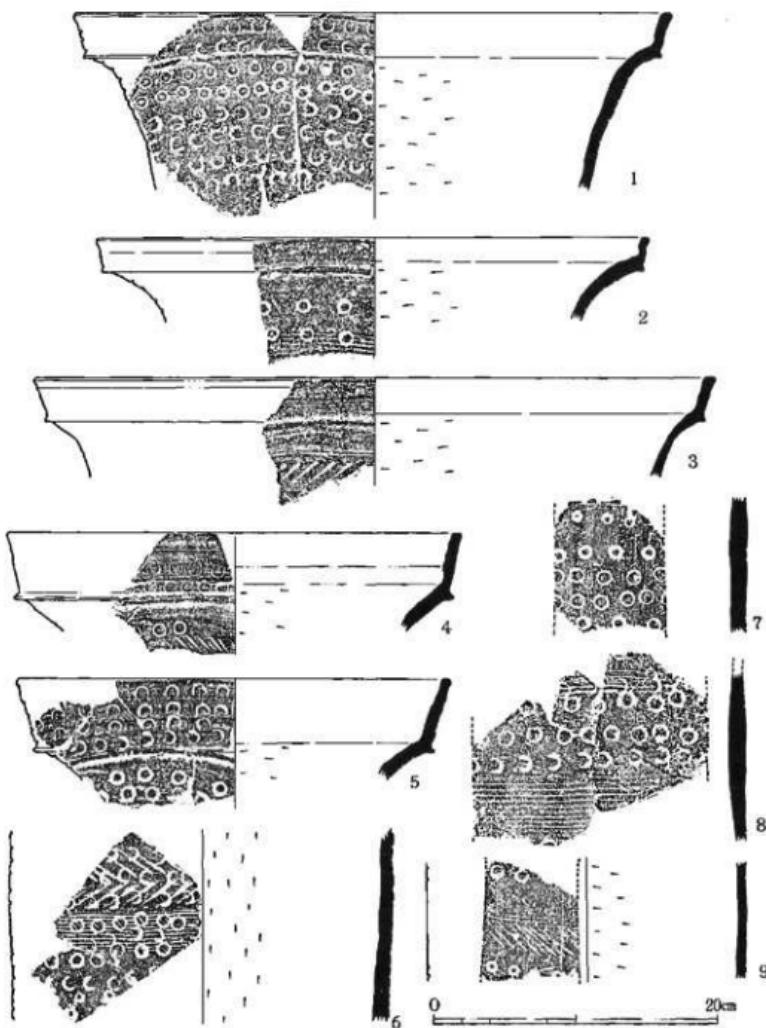
3. 京都大学蔵品

京都大学には、徳楽方墳出土土器が整理箱8箱分寄託されている。今回、小林行雄先生の御好意により、これらを実見する機会を得、その内約100点について実測した。ただ残念なことは、小破片が多く、また胎土もよく似ているため個体識別が難しく、完全に器形を復原できたものがなかった。

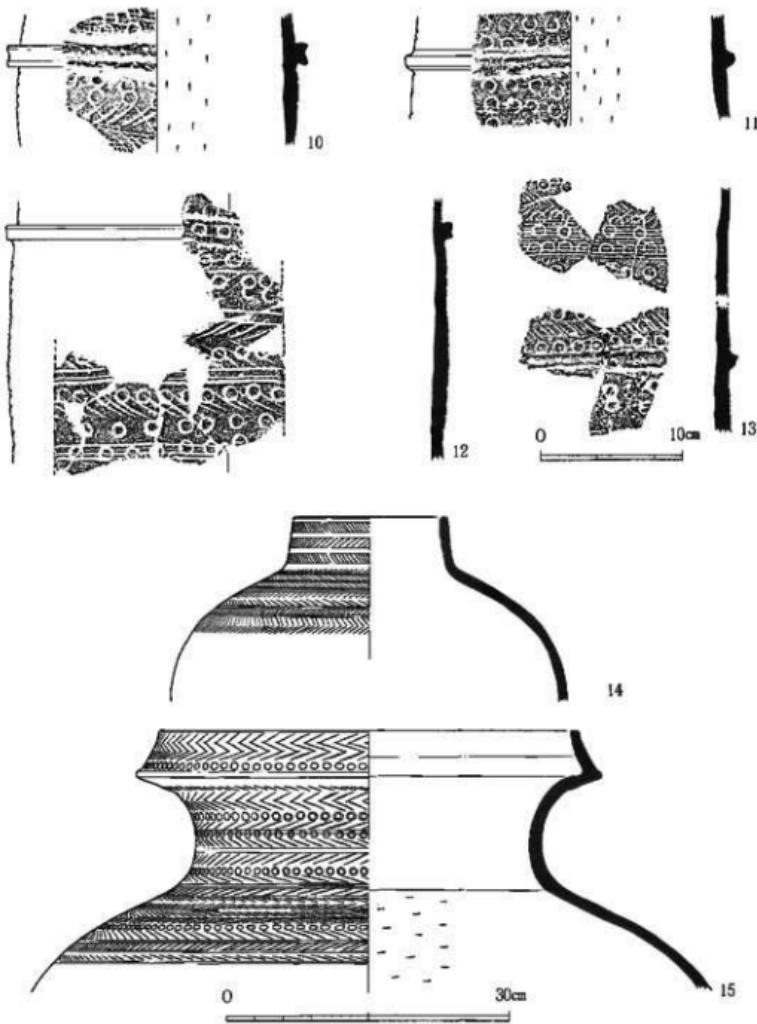
上器は大きく二つに分類できる。一方は竹管文、波紋文等で装飾される大型の土器であり、もう一方は甕、波形器台など通常みられる上器である。両者とも石英、長石を主とした細砂を含む黄褐色の胎土で、肉眼では大きな差を認め難い。前者は、さらに胴部が円筒形を呈し、突帯、透しを持つ円筒形土器と、壺形土器とに分かれる。以下、各々の土器について解説する。

① 円筒形土器

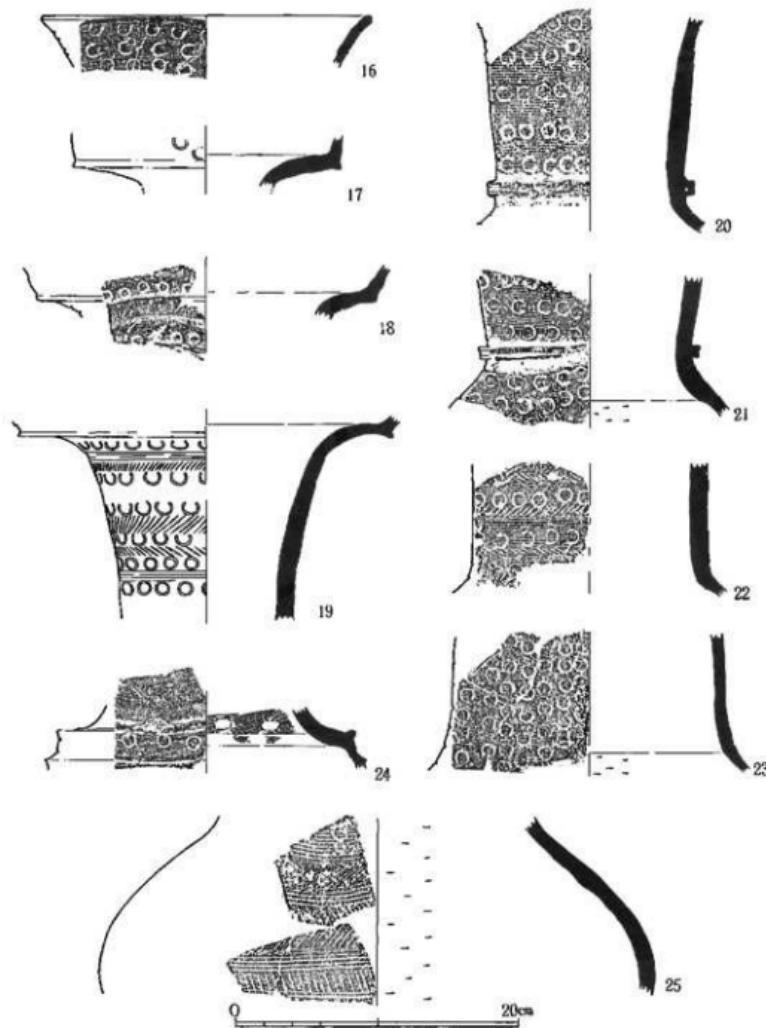
1～3は、円筒形土器の口縁部と考えられる。立ち上がりの短い複合口縁で、外反する甕



第19図 京都大学藏品(1) (花谷製)



第20図 京都大学藏品(2)(花谷製図)



第21図 京都大学叢品(3)(花谷製図)

部を持つ。いずれも口縁部をヨコナデ、外面をタテハケ調整した後施文する。内面調整はヨコケズリである。1は、口縁部に半截竹管文を2段、頭部に竹管文2段、半截竹管文4段を飾る。半截竹管文は1段づつ向きを異にしている。2は、口頭部に櫛描文を巡らした後、竹管文を2段加える。3は、口縁部外面、頭部外面にそれぞれ貝殻腹縁による櫛描文を巡らし、頭部にはさらに綾杉文を加える。

4、5は、口径が1～3に比べて小さく、あるいは壺形土器の口縁部になる可能性もある。形態及び調整は1～3と同じである。4は、口縁部外面に半截竹管文及び竹管文を2段、頭部には竹管文と板状工具による刺突文を施す。5は、口縁部外面に半截竹管文を4段、頭部外面は櫛描文施文後竹管文で装飾する。

6～13は円筒形土器の胸部である。胸径が30cm前後のものと、20cm前後のものと大小2種が認められる。6～9は突帯を持たない破片であるが、上下に突帯の巡る可能性がある。一部を除きいずれも外面はハケ調整、内面はケズリである。6は櫛描文、綾杉文を巡らせた後半截竹管文で装飾する。ただし、櫛描文あるいはタテハケの上から押された竹管文を注目するに、竹管の内側に残った平行沈線及びタテハケが45度近く崩れている。これは、施文に際して、半截竹管を押しつけてからこれを回転させて円形の文様にするため、内側に残る先行して施された櫛描文、ハケメが斜めになるのである。同様の施文方法は、5、7にもみられる。7の破片は両側に透しがあり、透し間の長さは、8cmである。復元胸径が約25cmであるため、透しは6ないし7方向と考えられる。櫛描文と大中小三つの竹管文で飾る。このうち径の一番大きい竹管文以外は半截竹管を回転させて施文したものである。内面はナデ調整、8も両側に透しを持ち、透し間の長さは16cmである。復元胸径は約30cmなので四方透しであったと考える。櫛描文で上下を区画した中を、半截竹管、竹管文で飾る。9も両側に透しがあり、透し間の長さは6.5cm。透しは6ないし7方向であったと考えられる。外面は、櫛描文と櫛状工具によた刺突文を施した上に大小二種の竹管文で飾る。

10～13は突帯を持つ円筒形土器の胸部である。10は突帯の上下端に刺突文を巡らす。突帯より上には、櫛描文を巡らした後竹管文を押し、突帯より下には櫛描文施文後、貝殻腹縁を使った綾杉文と竹管文で飾る。11は突帯の上下に半截竹管文を飾る。12の突帯の上には竹管文が巡らされている。櫛描文を数段巡らした後、その間をヘラ状工具による刺突文、竹管・半截竹管文で飾る。両側には透し孔がある。透し間の長さは約16cmで、透しは4ないし5方向と考えられる。13と4の破片は同一個体と考えられる。図の上半の破片では、櫛描分と綾杉文を施した後竹管、半截竹管文で飾られる。下半の破片では、刺突分と竹管文で飾る。復原胸径は約30cmである。

② 壺形土器

壺形土器は、14、15、16～25の3種類に分けられる。14は球形の胸部にはば直立する口縁をもつ直口の壺である。口縁部から肩部に貝殻腹縁による綾杉文と櫛描文を飾る。口縁部に

は施文後磨きが施されている。竹管文、半截竹管文を装飾に使わないことから、円筒形土器にともなうものとは考え難い。同様の上器は、島根県仲仙寺10号墓^⑩からも出土している。15は口径45cmをはかる大型の複合口縁壺形土器である。器壁は厚く、焼成もしっかりしている。口縁部から肩部を、貝殻腹縁による縞衫文や竹管文、凹線で交互に装飾する。内面調整は口縁部をヨコナデ、頸部ヨコハケ、胴部はヨコケズリである。腹径は1m近くにもなり、この大きさのものには壺棺として使用されたものが多い。本例も壺棺である可能性が高い。

16～25は、胎土、装飾方法など円筒形土器と類似しており、円筒形土器とセットとなるべきものである。16は、壺形土器の口縁部の破片である。複合口縁になるか、直口の口縁になるか明らかでない。外面を半截竹管文と竹管文で飾る。

17～19は口縁部下半から頸部にかけての破片でいずれも複合口縁である。17は表面の風化が著しく調整は不明、一部半截竹管文を留める。18は口縁部、頸部にそれぞれ竹管文を1段巡らせる。19は頸部がよく残っている。半截竹管文・櫛描文、刺突文を1段ずつ交互に巡らせている。刺突文は、貝殻腹縁を使ったものと、長い櫛状工具を使ったものの2種がみられる。

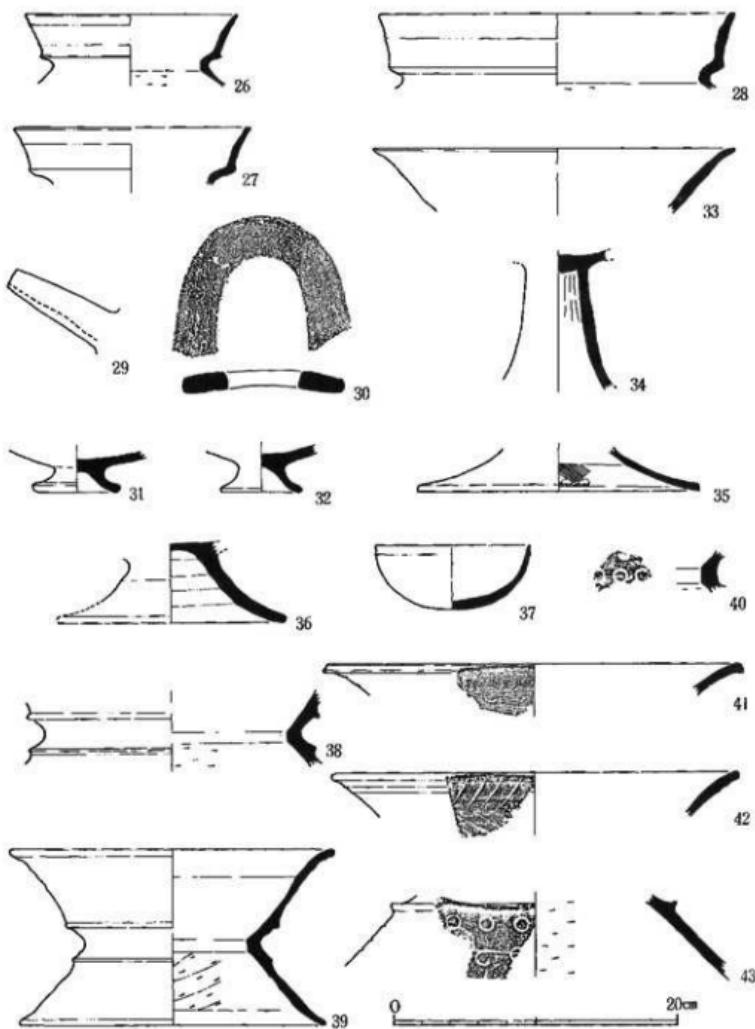
20～23は頸部から肩部にかけての破片である。20、21は頸部と肩部の境に突帯を巡らせ、22、23は巡らせない。20～22はいずれもよく似た装飾方法で、櫛描文や貝殻腹縁による刺突文を巡らした上から、竹管文・半截竹管文を1段ずつ向きを変えて飾る。23は半截竹管文を縦に1列ずつ向きをかえて施文する。いずれも内面の調整は頸部がナデ、肩部から下はヨコケズリである。

壺形土器の胴部の形態には2種類ある。24では、肩部に細い突帯が、胴部には稜線が巡る。突帯と稜の間には、竹管文が巡らされる。同様の破片が、徳楽方墳出土土器の内、入江甲氏蔵品^⑪の中に認められ、これを参考に器形を復元すれば、胴部は扁平な玉懸形を呈し、胴部に数段の稜線が巡ると考えられる。25は突帯や稜を持たないやや偏平な球形の胴部を持つ。外面にタテハケを施した後、櫛描文と縞描文で飾られる。さらにその上に、竹管文が施文される。

③ その他の土器

26～28はいずれも壺形土器の口縁部である。外反複合口縁で、口縁外面はヨコナデで仕上げる。頸部内面より下はヨコケズリである。26は口縁部を薄く外反させるもので、口縁下反に巡る稜は鋭い。島根県鍵尾遺跡A区-5号墓^⑫出土土器、平所遺跡1号住居跡出土土器^⑬に、口縁に類似する。27は、26と異なり口縁端部を平たくナデるもので、口縁下半に巡る稜は鈍い。島根県大木原現川1号墓出土土器に類似する。28は口径が25cmと大きく、器壁も厚い。口縁部は端部を丸くおさめる。

29は注口土器の注口部、30はその把手である。注口部外面はハケメで調整してある。把手の片面は沈線で弧状に区画された後、貝殻腹縁による刺突文で飾られる。



第22図 京都大学叢品(4)(花谷製図)

31、32は低脚杯の脚部である。31は脚の高さに比べて脚の広がりが大きく、一方32は脚の高さが高い。31は脚の内外面をヨコナデ調整する。

33～35は高杯の杯部、脚柱部、脚端部である。33は、口縁端部がやや外反する塊形の杯部である。調整は不明。脚柱は、裾に向かうにつれ徐々に広がっており、この先に据の大きく開く35のような破片がつくと考えられる。34の脚部内面の杯部との接合部には、中央に小さなくぼみがある。35は端部を平らにナデるもので、外面は細かいタテミガキ、内面は上半がケズリ、下半がハケメを施す。

36は、大型の脚部の破片であるが、どのような器形の脚部にあたるのかは不明である。内面はヨコナデで調整する。

37は口径11cmを測る小型の塊である。胎土は他と異なり、砂粒をほとんど含まない緻密なものである。口縁部を1段ヨコナデし、内面はミガキを施す。

38～43はいずれも鼓形器台である。鼓形器台には受部の口径33cm前後と、23cm前後のものの中2種類ある。38は大型のもののくびれ部である。くびれ部の上下に巡る突帯はしっかりしている。39は小型で、完形に復元できた。口径に比べて器高が低い。いずれも受部内面はミガキ、脚部内面はケズリである。39と類似のものは大木樺現山1号墓にみられる。40～43はいずれも外面に美飾を持つ。41～43はいずれも大型の鼓形器台に復元できる。40は外面に竹管文の残るくびれ部の小破片である。41、42は受部の破片である。41は櫛描文と半截竹管文で、42は貝殻腹縁による織杉文で飾る。43は脚部の破片である。外面を竹管文、半截竹管文で飾る。内面はケズリ。

(花谷めぐむ)

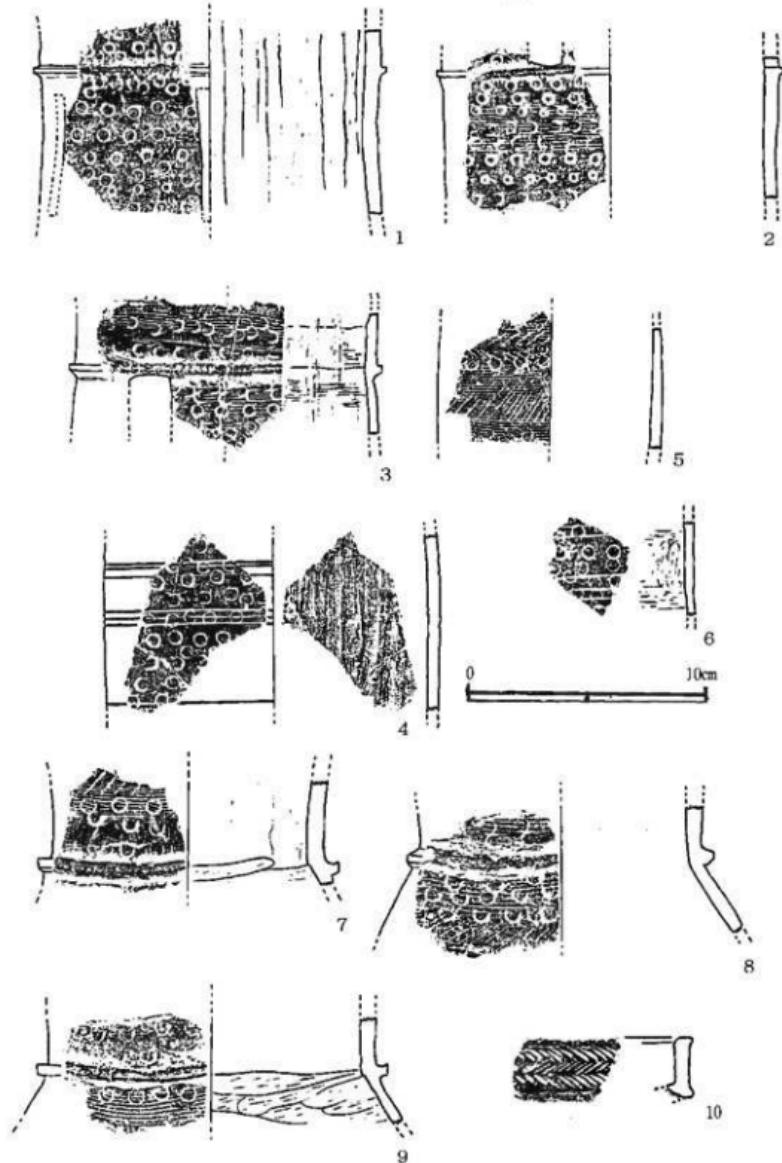
4. 入江甲氏所藏品

土器は大きく二つに分類される。そのうち①は大形の円筒形土器である。②は複合口縁で肩部に凸帯を持つ壺形土器である。この①、②とも赤褐色の胎土の粗いもので、大型であり、多用な竹管文を使用しており、日常の土器と異なる特殊な土器であることがわかる。その他土器は通常の土器で壺形、低脚杯形、コップ形、高杯形、器台形土器からなる。

① 円筒形土器

1は円筒形土器の胴部で、高さ5mmの突帯を持ち、ハケメ調整の上に竹管文を不規則に配している。おそらく突帯の間になるのであろうが、長さ約10cmの長方形の透しが入る。焼成は良好で内面は縱方向のヘラケズリの痕が残る。

2は1と同様の胴部で突帯上部に幅2.5cmの透しが入る。外面は縱方向のハケメ調整の上突帯下に3列の竹管文を入れ、その下に2列の半截竹管文、その下に2列の竹管文、ついで半截竹管文が入る。なお中央の半截竹管文の下には横方向の12条の平行沈線が巡らされている。内面は指頭による縱方向のナデが認められる。



第23図 入江甲氏藏品(東森製図)

3は円筒形土器の胸部で、突帯を挟んで幅3cmの透しが認められ、ハケメ調整の上には7条程度の平行沈線を巡らした上に左方向の半截竹管文と右方向の半截竹管文、突帯下は左方向と右方向の2段の半截竹管文の下に竹管文、その下に左方向の半截竹管文を巡らしている。内面は突帯より上部に二ヶ所の継ぎ目が見られ、縦方向のナデが認められる。

4は斜のハケメ調整のうち1～3条の平行沈線を入れ、その上に右方向と左方向の半截竹管文、竹管文、そして2列の左右の半截竹管文を入れている。内面は縦方向のヘラケズリである。なお、この土器は突帯も透しもみられない。

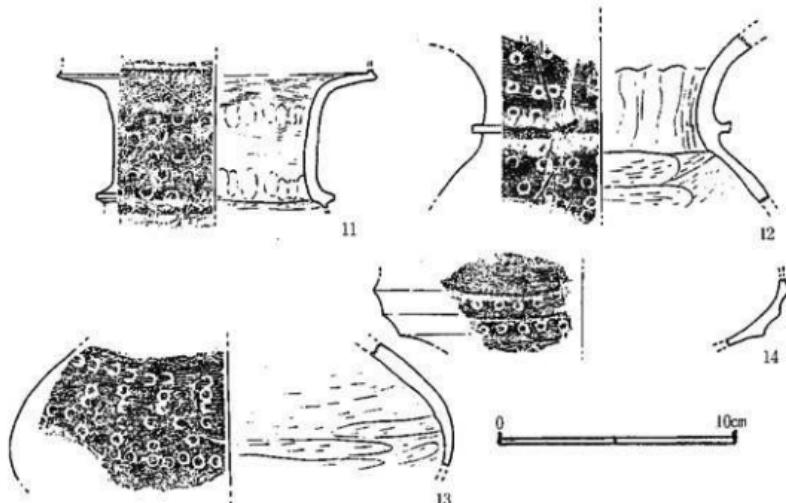
5は4と同様、突帯は透しもないもので10条の平行沈線を不整に巡らした後、ヘラ状工具による羽状文を巡らし、中央部に上方向の竹管文を巡らしている。比較的薄手の土器である。

6は薄手の土器で小片のため径は不明であるが、外面は縦方向のハケメ調整の上にやや間隔のある3条の沈線を巡らし、全面に竹管文を入れている。内面は横方向のヘラケズリである。黄褐色を呈し、胎土はやや粗いが焼成は良好である。

② 壺形土器

いずれも壺形土器の頸から肩部である。そして肩に突帯を持つ特徴があり、竹管文を巡らす点では共通している。

7は頸部を縦方向の細かいハケメで調整した後10本の平行沈線を入れ、その上にヘラ状工具による斜行文、竹管文を入れ、突帯近くに上方向の半截竹管文を2列に配している。



第24図 入江甲氏藏品(東森製図)

内面は頸部にシボリがみられ、突帯内面の部分より横方向のヘラケズリが認められる。胎土中に砂粒を含み、茶色を呈し、焼成は良好である。

8は、頸から肩部の破片で突帯は7とやや異なる。全面を縦方向のハケメで調整した後上ド6条の沈線を入れ、突帯上部では左方向と右方向の半截竹管文を2列に入れ、一見S状を呈する。突帯下は上方向の半截竹管文を3列に入れた後右から左の斜行文を配している。

9は突帯上面を縦方向、下を横方向のハケメで調整した後、上部に上方向の2列の半截竹管文、下は7条の平行沈線を入れ、上部突帯下に竹管文を1列巡らしている。内面は突帯より上はナデ仕上げ、下は横方向のケズリである。

10は口縁破片で複合口縁をなし、口縁端と屈接部を突出させており、外面に3段の左から右、右から左、左から右の斜行文が認められる。なお部分的に黒斑がある。

11は口縁の構造のわかるもので、複合口縁の下端から頸部、肩部、突帯部までの破片である。全面に横方向のハケ調整を行い、その上に上方向と下方向の半截竹管文を交互に入れたものを5列巡らしている。内面は頸部に指頭によるナデが見られ、肩部以下はヘラケズリである。内外面とも黒灰色を呈し、胎土中に砂粒を含み、焼成は良好である。

12は頸部から口縁部にかけてのカーブが急なもので全体を横方向の粗いハケメ調整の後突帯の上部に3列、下に4列の竹管文を配している。内面は肩部以上にシボリが残り、下は横方向のヘラケズリである。黄色を呈し、胎土は密で焼成も良好。

13は肩部から胴部にかけての破片で、肩部は横方向、胴部は左右のハケメを留め、その上に左方向の半截竹管文、竹管文、右方向の2列の半截竹管文、2列の竹管文を配している。内面は横方向の粗いヘラケズリである。胎土中に砂粒を含み、黄土色で焼成は良好である。

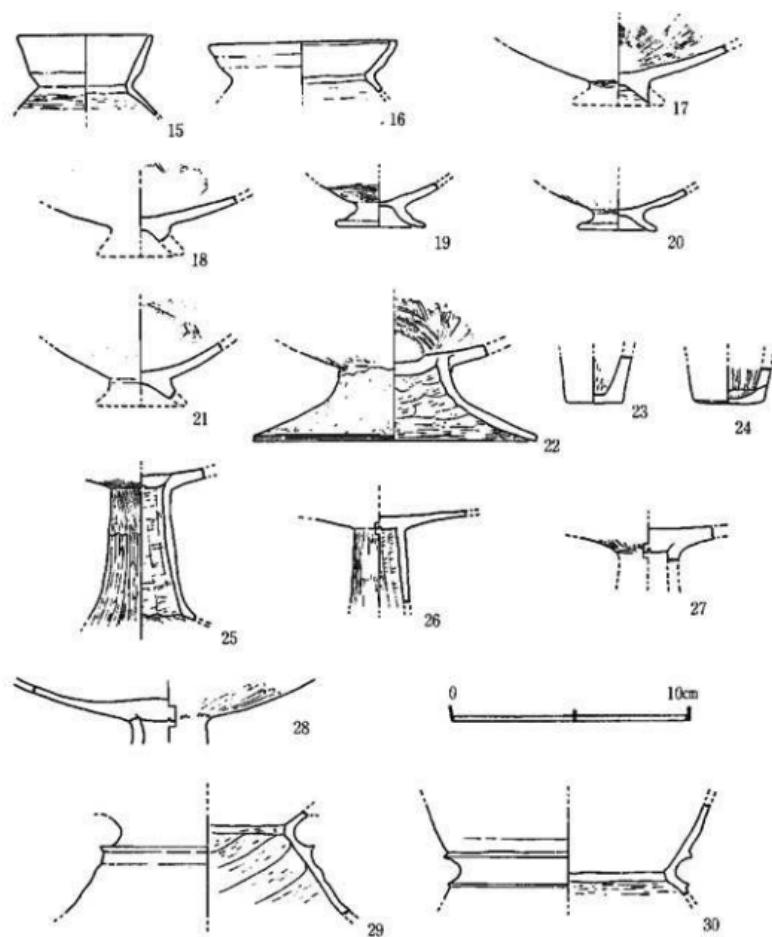
14はたまねぎ形の壺の胴下半部で三つの突出部があり、その間を竹管文で埋める。胎土中に砂粒を含み、赤黄色を呈し、焼成はやや軟質である。

③ その他の土器

これらの土器は通常の土器で、この時期、古墳や生活遺跡から一般に出土するものである。

15、16は變形土器の口縁部である。15は複合口縁の名残りを留め、やや頸部から上のところで膨みをもっている。外面肩部に数条のハケメをみる。内面は頸部でアクセントがつき、上部はヨコナデで仕上げている。頸部以下は横方向のヘラケズリである。胎土は密で白茶色を呈し、焼成は良好である。16は「く」の字状に屈接するが、やはりわずかながら口縁部に膨みがみられ、頸部内面にアクセントがあることは15と同様である。内面の調整も口縁内面ナデ仕上げ、頸部以下ヘラケズリである。ただ15と異なる大きな特徴は口縁端部を内側に摘み出していることである。胎土はやや粗く、淡茶色を呈し、焼成はやや軟弱である。

17~21は低脚壺の底部である。カーブは多少違いがあるが、いずれも大きく、広がる壺部と小形の脚部を持つ。壺内面はハケメ調整の痕跡が残るもの(17、18、21)、ヘラミガキのあるもの(20)などがあるが、いずれも丁寧な仕上げである。底部内面はナデ仕上げで色調



第25図 入江甲氏藏品(東森製図)

は赤黄色（17、18、19）、白色（20）、淡茶色（21）と多様である。胎土には、いずれも砂粒を含み、焼成の良いもの（17、20、21）とやや軟弱なもの（18、19）がある。

22はかなり大形の脚付壺形上器の底部で、これが倉光氏のいきょうき形上器に当たるのかもしれない。脚部外面はハケメ調整の上、入念なヘラナデを行っている。上面内部は放射状のヘラミガキで仕上げ、底部内面は指頭ナデの下をヘラケズリとし、脚端部はヨコナデで仕上げている。なお脚端部は稜のある幅を持つもので、その中央は1条の凹線状のつくりになっている。全体に丁寧なつくりで、内外面は黄白色を呈し、焼成は良好で砂粒は余り認められない。

23、24はコップ形の土器、23はしっかりした平底で、24はシボリメがみられる。23は焼成はやや軟弱で肌色を呈し砂粒は余り含まない。24は内面は灰色、外面は淡黄白色で胎土は密で、焼成は良好である。

25～28は高杯であるが、25～27は杯部と脚部の接合部、28は杯部である。これは推定すると高杯は稜をもたない丸いカーブを描く杯部を持ち、ゆるやかに外反しながら脚端部で広がる器形を持つものようである。25は脚部がもっとも良く残しているもので、外面杯部から脚部との接合部はハケメ仕上げ、脚部は縱方向のヘラミガキで丁寧に残している。内面は杯底部に円板状の底部を貼りつけ、その中央に焼成の際に明けたと考えられる窪みがある。脚内面は縦方向のヘラケズリで、端部には稜がつき、その下は粗いハケメ仕上げである。焼成は良好で黄白色を呈する。26、27も25と同じつくりであるが、27の色調は淡茶色を呈する。

28は杯部である。内外面とも入念に磨いており、底部と脚部の接合部のつくりは25と同じである。外面のミガキは放射状をなしている。胎土は密で内外面とも肌色を呈し、焼成は比較的良好である。

29、30は器台形土器である。29は鼓形器台の筒部から下半であるが、それが短く内面で0.5cm幅の稜を持ち、上半部でヘラミガキ、下半は右から左下へのヘラケズリである。外面の稜は先が尖ったつくりで、やや波打っている。黄白色を呈し焼成は良好で胎土砂粒を含む。30も同じつくりのものであるが、筒部から上台部の破片で、外面はやや内弯気味である。内面は上半はミガキ0.5cm幅の稜の下は横方向のヘラケズリである。胎土は密で焼成は良好、肌色を呈している。

（東森市良）

5. 鳥取県立博物館藏品 (1) (倉光清六氏旧藏品)

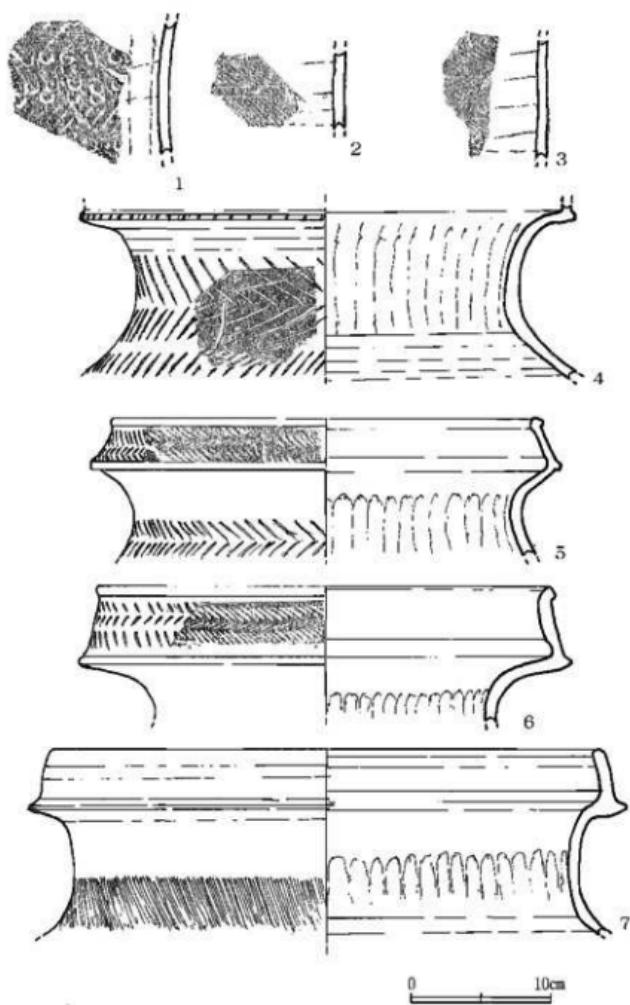
鳥取県立博物館には先に触れたごとく、倉光清六氏が採集所蔵されていたものと、木山竹治氏が県立図書館に寄贈されていたものがある。以下これを鳥取県立博物館藏品(1) (2)として紹介する。

① 円筒形土器

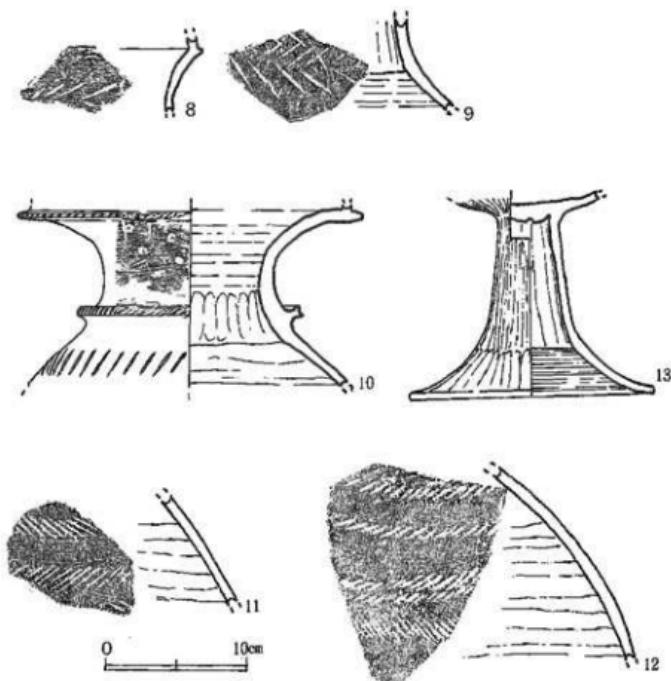
1～3はいずれも円筒形土器の胴部で突帯および透かしはみられない。1は赤褐色を呈し、胎土は密で焼成良好である。内面は輪積みの痕跡があり、縦方向のケズリがみられる。外面の文様は横方向のハケメによる仕上げの後、かなり雑なつけ方で上に聞く半截竹管文を3段につけ、下方に1段の竹管文を見る。竹管文の間には左下りの櫛描文を巡らし、その間に横方向の浅い櫛目が通る。器壁の厚さは0.8cmである。2、3は平法及び器壁の厚さは1と似るが、2は黄褐色、3は褐色とやや色調が異なる。施文方法は2、3とも鋭い金属工具（または細かなヘラ先）による平行及び右ドリの斜行文(2)と、右下り、左下り、そして右下りの組合せの3段の斜行文(3)を巡らしている。2、3は場合によっては同一個体となる可能性もある。

② 壺形土器

4～7は大形の壺形土器の口縁部から肩部までの個体で、口径30cm～39cmある。器壁は0.8cm～1cmと厚く、やや内傾気味の複合口縁で、いくらかずつ個体差がある。7を除いていずれも粗い太目の櫛描文を巡らし、壺棺として山陰地方に類例の多い土器と同質かつ同様の施文方法である。4は口縁部を欠くが、複合口縁下端の突出部に刻み目を入れ、頸部から肩部に太めの櫛描きによる斜行文を右下り、左下り、左ドリの順でつけている。内面頸部はナデ仕上げ、肩部以上は横方向のケズリが見られる。黄褐色で胎土密、焼成良く、堅緻である。5、6は、ともによく似た手法であるが、口径、口縁の立ち上り、頸部の文様の有無で多少異なる。どちらにも口縁立上り部分にも右ドリ、左下りの合わせて羽状になる櫛描文を巡らしている。黄褐色を呈するが、焼成はやや雫で、胎土中に砂粒を含む。同一個体が3個ある。6は黄褐色で焼成良く胎土に砂粒を含む。口縁端を太目につくるところ、口縁内面立ち上り部分に穂をくっきりとつけて繰り込むところなど5と異なる。7はこの種の壺形土器のうちで最大径のもので立ち上がり部分の外面端を突出させており、他の土器のように櫛描文がなく、黒褐色及び茶褐色を呈するなど類品とは異なる特徴をもっており、本古墳の大形壺形土器の中では例外的存在である。外面はかすかに右下りのハケメを留め、口縁内外は横方向のナデ痕が残る。頸部内面は縦方向の指ナデ痕が残る。8は口縁4に類似する壺の口縁下端から頸部であるが、4と異なり、櫛描羽状文が左下り、右下りと逆方向である。9はやはり同様の頸部から肩部であるが、頸部文様は4に似るもの、組合せが右下り、左下り斜行文その直下に櫛描き平行弦線を入れる点が異なる。黄褐色を呈し、胎土は密、焼成良好で、



第26図 鳥取県立博物館藏品(1) (東森製図)



第27図 鳥取県立博物館蔵品(2)(東森製図)

肩部内面はナデ、肩部以下は横方向のケズリである。

10は肩部に突帯を持つ特殊壺形土器で、口縁の立ち上り部分より上を欠くが、もっともよくこの種の土器の形状を知ることの出来るものである。口径約23cm、突出部径約16cmで、胴部最大径は約25cm、推定器高30cmである。黄褐色を呈し、焼成良好堅緻、胎土は密である。口縁下端を突出させ、ヘラによる刻みを入れ、頸に2段の小竹管文、その下に太目の半截竹管文を巡らし、突帯に刻み、その下は平行のハケメ、さらに下に左下りの間隔不整のヘラによる斜行文を入れる。頸部上面は回転ナデ痕、下部のちょうど突帯部分は縦方向の指ナデ、肩部以下は横方向のケズリが見られる。

11、12は大形壺形土器の肩部片である。両者とも黄褐色を呈し、胎土は密で焼成良好である。いずれも内面は横方向のケズリの後ナデて仕上げている。外面は11は右下り、左下り、右下りの3段の櫛描斜行文の間をやや粗いが、調ったハケメで調整している。12は推定最大径40cm程度のもの・全面を細かなハケメで仕上げた後、左下り、左下り、左下り、右下りの

4段の櫛描斜行文を巡らした後、その間を横方向の細かなハケメ、最下端の脚最大径近くに竹管文を巡らす装飾性の強い土器片である。

③ その他の土器

13は高杯の杯下部から脚端までのものである。脚上面の径4cm、底径約17cm、脚の高さ6.5cmを測る。脚内面は細かなハケメを留め、杯部と脚部の接合部に円板状の粘土を埋め込んで仕上げている。杯部内面中央に小孔がある。脚内部は縦方向のヘラケズリで仕上げ、裾に広がる分より脚端までは横方向の細かいハケメを留める。本遺跡の他の類品よりすると、杯部ははゆるやかに丸味を帯びて立ち上り、杯端部でやや外反する器形が考えられる。

(東森市良)

6. 鳥取県立博物館蔵品 (2) (木山竹治氏寄贈品)

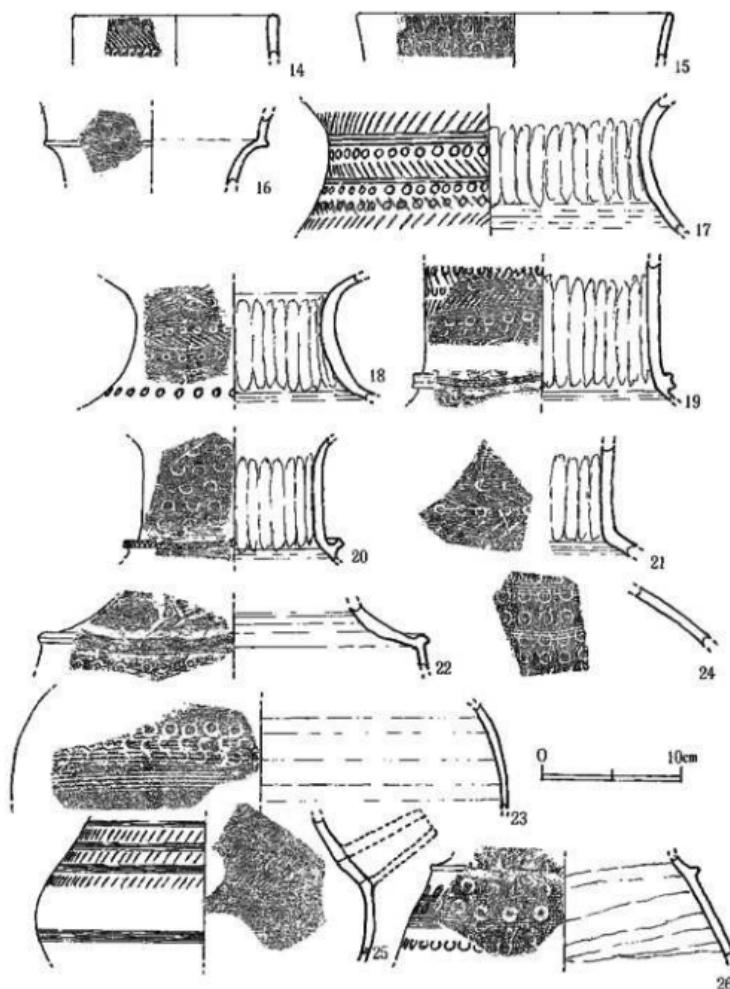
① 円筒形土器

14、15、16は円筒形土器の口縁部である。口径14.5cm～22cmの小形品で、14は淡褐色で焼成よく、外面には右下りの櫛描文の下に右方向に聞く半截竹管文を爪形状に並べる。内面は横方向のナデ仕上げである。15は褐色を呈し、焼成はやや脆い。外面には上下交互の半截竹管文を2段に巡らし、内面は横方向のナデ仕上げである。16は明茶褐色を呈し、焼成良好く胎土に砂粒を含む。複合口縁状に頸から立ち上る部分であり、口縁部外面は横方向のハケメ仕上げの上に2段の竹管文を巡らす。これは壺形土器の口縁となる可能性もある。

② 壺形土器

17、18は壺形土器の頸部で突帯を持たないタイプのものである。両者とも手法はよく似ており、外面は櫛による斜行文と竹管文をにぎにぎしく巡らしている。17は黄褐色を呈し、胎土もよく、左下り、3条の沈線・竹管、右下り、1条の沈線、2段の竹管、右下り、左下りの櫛描き斜行文を巡らしている。内面は頸部に縦方向の指ナデの跡がみられる。肩部以下は横方向のヘラケズリである。頸部の径23cmを測る。18は外面は左下り、2条の沈線、竹管、右下り、2条の竹管、右下りの斜行文を巡らしている。内面は口縁部はヨコナデ、頸部は縦方向の指ナデ、肩部以下は横方向のヘラケズリである。頸部は14cmである。

19、20も頸部であるが、肩に突帯を有するものである。19は径17cmあり、外面は、上方向の半截竹管、右下り、上方向の半截竹管、右下り、竹管、上方向の2段の半截竹管文を巡らし、突帯の下にも上方向の半截竹管文を配する。赤褐色を呈し、焼成は良好である。突帯は円筒埴輪のタガを思わせるつくりである。内面は頸部は縦方向の指ナデ、突帯以下は横方向のケズリによる仕上げである。20はこの種の土器の中でとくに丁寧につくられており、明褐色を呈し、焼成も良好である。頸部の径13cmあり、外面は細かい縦方向のハケメ仕上げの上に交互に上下する半截竹管文を5段巡らし、突帯上にも「ハ」の字状の刻みを入れる。内面は19と同じく頸部は指ナデ、突帯以下は横方向のヘラケズリである。



第28図 鳥取県立博物館蔵品(3)(東森製図)

21はやはり頸部の長い壺形上器であるが、19、20と異なり、肩部に突帯をもたない。茶褐色を呈し焼成良好である。外面は横方向の櫛描き平行線の間に右に開く半截竹管、右下り、竹管、左下り櫛描文、竹管文を巡らしている。内面のつくりは19、20と変わらない。

22～24は壺形上器の肩から胸部である。ただ 22は胸部に数段の突帯を有するもので、京大蔵品24に似る。赤褐色を呈し胎土は密で細砂粒を含む。外面は肩部に貼りつけ突帯をもち、その下は縱方向の細かいハケメの上に小形の竹管文を巡らしている。内面は頸部は横方向のケズリがみられ、以下肩から胴にかけてナデ仕上げである。23、24は肩から胴にかけての破片である。胴に突帯を有しないで丸味をおびる胴を形づくる。23は胴径約36cmで、褐色乃至赤褐色を呈し、焼成はやや脆い。外面は右下りのハケメ調整の後、3～5条の沈線を巡らし、肩から胴上部にかけて竹管文、右に開く半截竹管文、左に開く半截竹管文を巡らす。下方の2段の半截竹管文は、一見S字状をなす。内面は横方向のケズリである。24は肩部片で淡茶褐色を呈し、焼成はよい。外面は上下4条づつの平行沈線の上に竹管文、上方の半截竹管文、下方の半截竹管文を2段、上方の半截竹管文を5段に巡らしている。

③ その他の土器

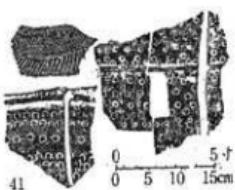
25は注口土器の注口部の欠失したもので、胴径は24cmあり、丸く膨む胴部を中心に4～5条の櫛描き沈線をほぼ2cm間隔で巡らし、それぞれの間に左下りの比較的細かい櫛描斜行文を配している。なお欠失した注口がついていた基部には、これを巡るように細かな調ったハケメがみられ、これよりするとまず細かなハケメ仕上げの上で施文が行われたことになる。黄褐色を呈し、焼成はやや脆い。内面は注口部に向けてシボリ気味のケズリがみられる。26は鉢形器台の台部である。脚台部の上径19cmで、やや下すぼまりのカーブを描く。京大蔵品にも類品をみる。京都大学蔵品43は明茶褐色を呈し、焼成は良好である。外面は横方向のハケメ仕上げの上に2段の竹管文を巡らす。内面はやや左下りのヘラケズリが認められる。通常この種の鉢形器台にはこのような装飾ではなく、竹管文を多用するこの古墳の遺物の特色を示すと同時に、この器台が単なる実用の具としてではなく、祭祀にかかわってつくられたという見方もできよう。

(東森市良)

7. 関西大学蔵品（本山考古室旧蔵品）

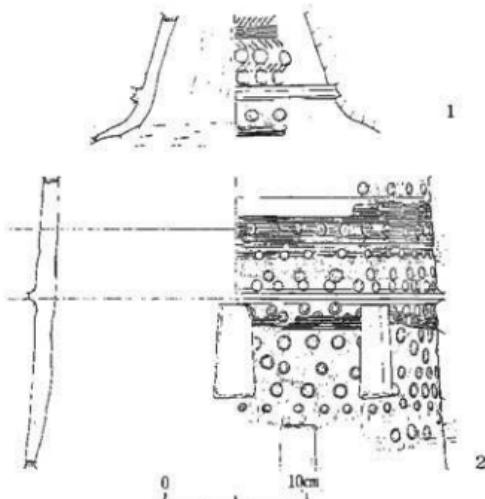
『本山考古室日録14』によるとNo.41に図示したものが掲載されている。これによると突帯と長方形透しのある円筒形上器1片、肩部に突帯のある壺形上器の頸部1片及び丸味を帯びた突帯のない胴部片である。

なお別図は関西大学院生米田文孝氏による作図で、現存する関西大学蔵品である。1は突帯のある円筒部で、縱方向のハケメ仕上げのち横方向の櫛目を入れ、竹管文を突帯上部で6段、下段で7段にかなり難つなけ力をし、5～6方に幅3cm、長さ6.4cmの長方形透かし



第29図 本山考古室藏品拓影

を入れている。内面はナデ仕上げである。2は突帯を有する壺形土器の頸部から肩部である。頸部の傾斜に疑問が残る（もう少し立上るのでないか）が、これも本古墳に特徴的な器形である。外面は櫛描きの羽状文の間に6条の櫛描き平行沈線を入れ、その上に上方向の半截竹管文、竹管文、左下り、



第30図 関西大学藏品(本山考古室旧蔵品)

右に開く半截竹管文を巡らす。突帯の下は肩部の3条の櫛描き平行沈線の上に竹管文、上に開く半截竹管文を巡らせている。内面は頸部は縦方向のナデ、肩部以下は横の方向へ、ヘラケズリである。

(東森市良)

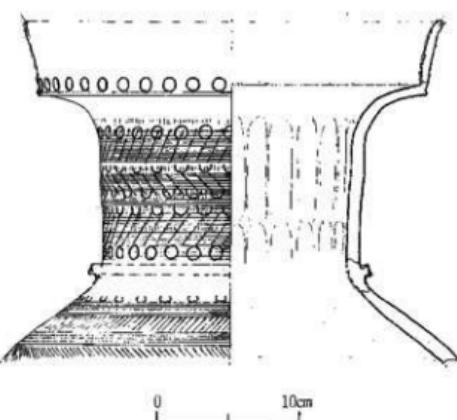
8. 大村雅氏藏品(鳥取大学旧蔵品)

これは、複合口縁の壺形土器の口縁下部から肩部近くまでの破片である。赤褐色を呈し、焼成良好である。口径推定30cm、頸部の長さ12cmある。口縁下端に竹管文を巡らせ頸部は全面をハケによって調整し、その上に10条以上の櫛描き沈線を1cm間隔ぐらいで入れ、上から

竹管文、左下り、上に開く半截
竹管文、右下り、上に開く半截
竹管文を2段、左下がり竹管文と巡らすもので、この直下に突
帶が存在したと思われる。内面
は口縁の立ち上がり部分に一線
を画し、頸部は指ナデで仕上げ
ている。

これと同一個体とは限らない
が、同質の肩部の破片で上に開
く半截竹管文、7条の櫛描き沈
線、左下り、6条の沈線文、右
下りの櫛描斜行文を巡らす。形
態よりして胸部に突帶を有しな
いものである。

(東森市良)



第31図 大村雅夫藏品(東森製図)
(鳥取大学田藏品)

9. 小括 一むすびにかえてー

これまでの各所に所蔵されている本古墳出土土器をみた。これらの中には明らかに同一個体と思われるものもあり、多量の土器がいくつかの個体にまとめられていることも考えられる。そして花谷の見解にもあるようにあまりにも胎土、技法、施文方法が類似しているためはっきりと見分けがつかないものが多いことも事実である。以下京都大学藏品と人江甲氏藏品の観察によって土器の傾向と特徴を捉えておきたい。記述は本文中のものにならって①円筒形上器、②壺形上器、③その他（通常）の土器の順で行う。

① 円筒形土器

これは②の壺形土器のうちB類とセットをなすもので、各部の破片から全形を推測すると、外反する頸部と立ち上がりの短い複合口縁からなる受部、突帶を巡らし、透かしを入れた筒状の胸部、受部を上逆にした形の脚部の3部分からなる器形となる。突帶の段数や透かしの入り方等がわからないので正確な器高は不明だが、かなり大形の円筒形土器と考えられる。これにも大小2種あることは、すでに触れた通りである。櫛及び竹管を用いてにぎにぎしく施文する。

② 壺形土器

(A類) 大形の壺形土器で直口縁1点と、複合口縁で口径30cm~45cmある大型品数点とからなる。両者は胎土、技法、施文方法（太日の櫛描斜行文及び竹管文）などにおいて、いずれ

も山陰地方各地で検出されている壺棺の主體となっている大型の変形土器と共に通している。

(B類) ①の円筒形土器とセットをなすもので複合口縁で直立気味に頸部とその下に突帯を巡らし(少數のものは突帯なし)、肩から胴に移行する。胴部は2種類あり、突帯及び段を有してたまねぎ状をなすものと、丸く膨んだ胴を有するものとである。底部がないので全形を何えないが、小形の平底を有するものと見られる。頸部のカーブ及び長さ、また突帯を有するものと、ないものとがあることなどから、いくつかの変化のある個体が考えられる。調整は共通しており、外面はハケによる調整の後、貝殻、櫛、竹管等にぎこちなく施文する。

⑤ その他の土器

複合口縁の変形土器、「く」の字状口縁の変形土器、低脚壺、高壺、把手付注口土器、大型の脚部(ワイングラス形土器か)、鼓形器台、コップ形土器、丸底の壺土器がある。これらの土器は山陰地方の集落跡、墳墓から一般に出土するもので通常の土器である。また器台形土器に①や②のB類のように、にぎやかに竹管文を巡らしたもののが存在することは、他の遺跡では例のないもので、これも祭祀の道具として製作されたことを伺わせる。

①の円筒形土器と②のB種変形土器は本古墳に特徴的なもので、竹管、櫛及び貝殻を多用し、かなり粗い施文の仕方である。この①②をセットとして考えると吉備の特殊器台形土器と特殊壺形土器の影響下に成立した、在地のしかもこの古墳に限っていえる器形の土器と考えざるを得ない。

このように吉備の土器(西谷3号、4号墓出土例のごとく)そのものではなく、在地的に展開したものをみると安来市造山1号墳出土円筒形土器^⑨、島根県大原郡加茂町神原神社古墳出土の特殊壺形土器と円筒形土器^⑩に類品を見るが、山陰類型というような一つのパターンで捉えられないほど文様や形態の上で個性を持っている。また②のB類土器が肩に突帯を有することについては、特殊壺形土器とはいえないが、山陰地方では古式土師器の中にそれに類するものがあり、鳥取県西伯郡淀江町福岡出土の合口土器棺^⑪の棺器の一方の蓋がこの種の土器である。なお①と②に共通する施文方法で特徴的なのは円筒形土器では口縁から胴部まで竹管文、櫛撚斜行文で隙間がなくかざることである。大形の円筒形土器や壺形土器に竹管文、半截竹管文を使用した例は京都府谷垣遺跡^⑫、兵庫県氷上塚古墳^⑬、鳥取県西桂見遺跡^⑭にみられるものの、本古墳ほど全面に多用した例は他にみられない。

③のその他の土器とした普遍的な土器のうち壺形土器が複合口縁をなすものを主體とするが、中に1点口縁端内面を肥厚させるものがあり、畿内の布留式土器併行と考えられる。また把手付注口土器は波来浜遺跡^⑮や的場式土器期^⑯に出現し、「鍵尾式」土器^⑰につづき、安来市安養寺1号墓にも例をみる。そして低脚壺形土器は的場式土器期以降「小谷式」土器期^⑲までは壺部が塊形に深いものと、大木根現山1号墓出土品のごとく浅く発達したものとがあるが、発展的に繼承されている。

そして④のA類の大形壺形土器は例品に壺棺の棺器をなしているものをみると、その年代

的な併行関係をみると「小谷式」土器期を下るものではない。

以上の点から本古墳出土の土器は從來說かれてきた「小谷式」土器、つまり古式古墳川現期を遡るものではないことは明らかである。なお土器の編年的位置づけについてはさらにいっそうの追求を必要とすると考える。

以上、土器の観察よりする年代的考察を試みたが、本古墳そのものよりすると、墳形は、はじめにみた通り万形墳であり、鳥取県下では類例の少ないもので倉吉市三度舞大将塚を近いものとして倉光清六は捉えているが、本報告のうち東伯耆地城を担当した名越勉は、これを弥生墳丘墓に入れる見解を示している。この墳墓の川十士器がわずかしか残っていないので、十分検討することができないが、新しい課題の提唱といえる。また西伯耆地城では本古墳と同時期の方墳をあげると小原貴樹の調査になる米子市日原6号墳^⑨がある。

総括で述べたように、前方後円墳や前方後方墳そして大形方墳を築造した各地域の大首長以下の中小首長の墳墓は、弥生墳丘墓の系譜を引きつつ、少なくとも古墳時代中期までは尾根を溝でカットしたり、台状に墳丘を削り出し、わずかばかりの盛り土を持ち、木棺を直葬する小規模古墳として継続する様相を示しているといえよう。

(花谷めぐむ、東森市良)

註

- ① 倉光清六「古墳発見の伯耆亦生式土器」（上）・（下）『考古学』 第3巻第4号・第7号、1932年。
- ② 東森市良「總楽方墳出土の土器—入江甲氏藏品をめぐって—」『松江考古』 第6号、1985年。
- ③ 入江 甲・清水真一『總楽方墳—郷土の文化財、大山町保護文化財一』 大山町教育委員会、1983年。
- ④ 小林行雄編『本山考古室日記』 1934年。
- ⑤ 註①と同じ。
- ⑥ 註①と同じ。
- ⑦ 註①と同じ。
- ⑧ おそらく脚部もこれらと同じと思われるが、破片すべてを検討しても形状、調整手法に明確な区別をなしえず、強引な口縁部、脚部の識別は行わなかった。
- ⑨ 勝部 昭『仲仙寺古墳群』 安来市教育委員会、1972年。
- ⑩ 註②と同じ。
- ⑪ 山本 清「山陰の土師器」『山陰文化研究紀要』 第6号、1965年。『山陰古墳文化の研究』 1971年所収。
- ⑫ 前島己基・松本岩雄他「平所遺跡1」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財報告書』 I、1976年。
- ⑬ 石井 悠他「大木樺現山古墳群」東山農町教育委員会、1979年。
- ⑭ 註④と同じ。
- ⑮ 東森市良「山陰地方発見の寮棺とその特色」『考古学研究』 第14巻第2号、1967年。

- ⑯ 註⑮と同じ。
- ⑰ 前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』第62巻第3号、1976年。
- ⑯ 註⑮と同じ。
- ⑯ 杉原和雄・浪江庸二「付載 谷巡遺跡」『中上司遺跡発掘調査報告書』加悦町教育委員会、1979年。
- ⑯ 千種 浩「姫女塚古墳」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』 1982年。
- ⑯ 木村有作他「西桂見遺跡」『鳥取県文化財調査報告』X、1981年・若林久雄「鳥取市桂見出土の埴輪について」『第9回山陰考古学研究集会資料集』1981年。
- ⑯ 門脇俊意『波来浜遺跡発掘調査報告書』 江津市教育委員会、1973年。
- ⑯ 近藤 正・前島己基「島根県松江市の楊土墳墓」『考古学雑誌』第57巻第4号、1970年。
- ⑯ 註⑯と同じ。
- ⑯ 内田 才・東森市良、近藤 正「島根県安来市平野における「楊墓」」『上代文化』第36巻、1965年。
- ⑯ 小原貴樹『鳥取県米子市口原6号墳発掘調査報告』 米子市教育委員会、1978年。

(追記)

本稿のうち5の島根県立博物館藏品①（倉光清六氏旧蔵品）円筒形土器で2、3としたものは註①をもとに検討した結果、倉光が1918（大正7）年入江勝美とともに長田の諸古墳を一巡した際ジャガ尾根なる丘陵丘の一小円墳の頂部近くで出土に混じって採集された土器で、同論文⑪の第2図に掲載されているものであることが明らかになった。徳楽方墳と同尾根上に位置する本古墳の出土品は施文の構成、方法、胎土、色調、焼成など酷似するものであって混乱したが、謹んで訂正し、徳楽方墳出土品から除くことにする。

第3章 島根県における弥生墳丘墓

第1節 出雲地域の弥生墳墓・墳丘墓

1. はじめに

出雲地域の地形を概観すると、海岸線は山陰地方でも唯一変化に富み、中海・宍道湖低地帯の北に島根半島、東に弓ヶ浜半島があり、低地帯に流入する斐伊川、意宇川、飯梨川、伯太川の下流には出雲（巣川）、意宇、能義の沖積平野が広がっている。西部の斐伊川、東部の飯梨川、伯太川は、下流地帯では近世の砂鉄採集とともに「かんな流し」で流出した大量の土砂のために大井川になり、縄文、弥生時代の遺跡の多くが地下数メートルに遺存する可能性も考えられている。

これらに比べて出雲中央部・松江市南郊の意宇川流域は、有史以来の河道変遷にもかかわらず、漸進的な沖積化が進み安定した平野が形成されている。この地区で縄文、弥生時代の遺跡検出例が多いのも、こうした沖積平野の成立の仕方と関係があると思われる。また中海・宍道湖低地帯では近年タテショウ、西川津、石台等の遺跡の長期居住集落とみられる大規模な低湿地遺跡が相次いで発見されて注目される。

これまで弥生時代の墓地遺跡は主として低地帯を望む丘陵上において発見されている。墓地の形式からすると墳丘墓、土墳墓群等が存在するが、まずはそれらの各々について以下東部から解説していくこととする。

2. 弥生墳墓遺跡の各説

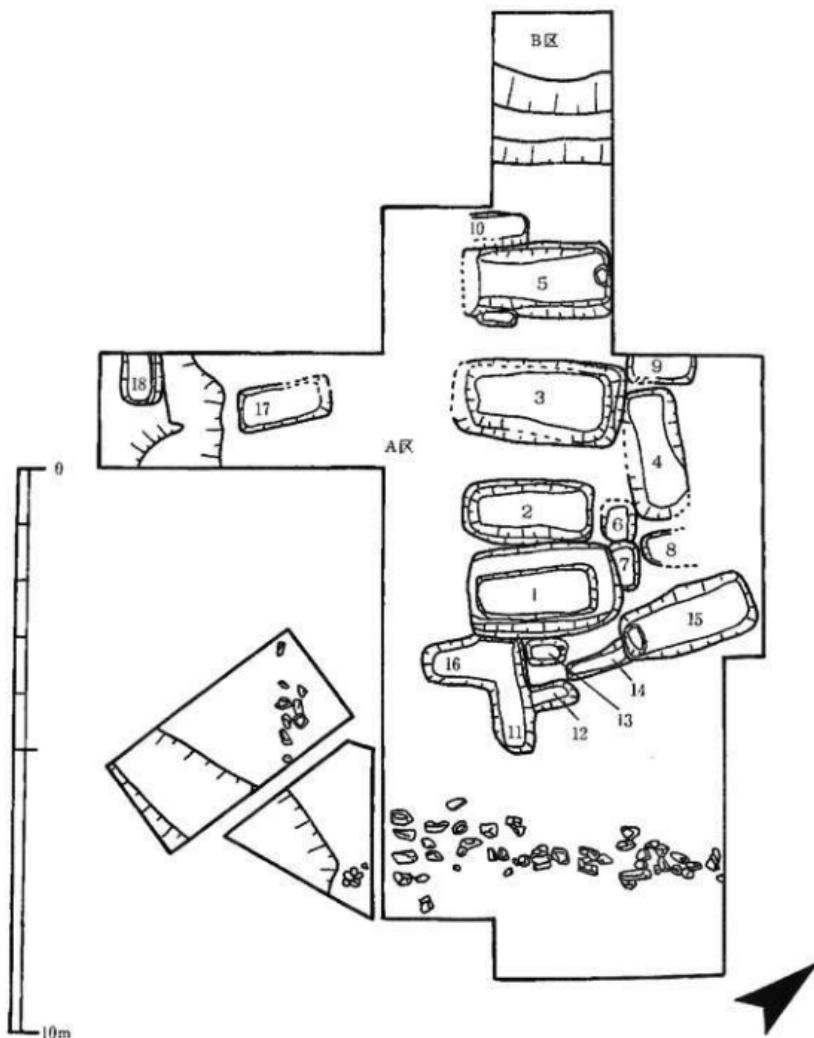
① 九重遺跡^①（安来市九重町地獄谷）

標高69.5mの丘陵高所からその緩斜面に7カ所の上器散布地点が確認され、いずれも土墳墓とみなされている。調査されたのは第3号土墳墓である。墓壙の形状は、長軸をほぼ東西に置いた長梯形様の壙で、大きさが底幅1.53m～1.05m、長さ2.28m、深さ0.8m～0.7mである。

墓壙上部からは壺形土器3個体以上、壺形土器3個体以上、壺形、壺形土器を載せた状態で器台形土器が検出されている。また器台形土器の東西には10数cmの割石が1個ずつ置かれていた。壙内には棺材、副葬品等は認められたかった。

この第3号土墳墓より出土した上器群は、九重式上器として山陰地方弥生後期中葉に位置づけられている。その他第5号、第7号土墳墓（墓壙未調査）上面から検出された土器群をみると、本遺跡の土墳墓群は弥生後期前葉から營まれたことが分かる。

土墳墓周辺の調査が行われていないので墳丘を有しているか否かは不明であるが、山陰地



第32図 鍵尾遺跡 A 区(墳丘墓) 平面図

(埋蔵文化財研究会『定型化する古墳以前の墓制』第1分冊、1988年より。一部改変、勝瀬製図)

方の他の例から推して、尾根をカットして区画する溝および側面の地山を加工整形した可能性は十分ある。

② 鍵尾遺跡^③（安来市沢町鍵尾谷）

標高60m～70m丘陵尾根に立地する遺跡で、1962年～63年と1970年に尾根上平坦面の一地点が山本清によって調査された。調査区はA、Bの2区に分けられている。A区とされた個所は、丘陵を約15m×12mの方形台状に削り出し、東側と南側に列石が巡る。西側は尾根を溝でカットしてB区として区画されている。

A区では18基の墓壙が検出された。これらは互いに近接、重複状態で掘られている。土壙の形状はいずれも長方形をなす。規模は第1～5号と9、10号が大型で、上縁幅1.5m、長さ2.5m～3mばかりあり、深さが1m～1.5mある。また第1、2、4、5号は、壙の下部があたかも底に厚い材で作った棺身を仕組んだ形でも表すかのように、段をなして下部を狭くしている。なお、第9、10号は完掘には至っていない。第6、7号は長さが0.7mばかりの小型で、構造も簡単である。

遺物としては表土中より多数の土器片が出土しているが、第5号墓壙では、壙の上縁のはば中央において、径約1mの範囲に6個の器台形土器が密接して掘えられ、その周りに器台の上に載せてあったと思われる壺形土器が潰れて遺存していた。すなわち埋葬時における土器供獻の姿が、この場はよく原状を保っていたのである。他の墓壙においても同様に供獻されたものが後に攪乱され、表土を被ったものと推定された。

B区もA区の状況とほぼ同様で、5基の墓壙が密集して検出された。そのうち3基は大型で、残りの2基が小型である。墓壙の形状や土器の出土状態もまたA区と変わらない。

本遺跡出土の土器は「鍵尾式」（後に「鍵尾I式」と「同II式」に細分）と総称され、九重遺跡第3号土壙墓出土の土器群に次ぐ様相を示す。とくに第5号墓壙上の1括土器群は「鍵尾II式」の基準となるもので、弥生時代のほぼ終末に位置づけられている。

③ 中尾遺跡^④（安来市月坂町中尾）

標高37m～39mの丘陵頂部平坦面に位置する。約11m×17mの不整な長方形に尾根を削り出した墳丘上に長方形をなす大小13基の墓壙が掘られている。各墓壙の大きさは、2.3m～2.2m×1.1m～0.6mで、深さが0.84m～0.1mである。大型の墓壙には棺材を固定したと考えられる掘り込みがあり、納められた木棺の構造を伺うことができる。

遺物としては、第3号墓壙上より壺形土器片4個が得られているに過ぎない。これらの土器は弥生後期前葉のものである。なおこの墳丘は中世にも墓地として使用されている。

④ 長曾土壙墓^⑤（安来市黒井田町）

中海に向かって突き出した標高19m～22mの低丘陵鞍部に位置する。墓壙总数は26基を数え、分布状態から3グループにわけられる。その1は、東側にあり、地山を台状（約8m×9m）に加工した平坦面上と周辺で検出された18基の墓壙群である。その2は、この墳丘の西側に

接する墳墓群で、5基が重複状態をなしている。その3は、2グループの西約5mのところにある3基の墓壙群である。

遺物としては、5基の墓壙上から供獻されたとみられる土器が出土しており、その型式からこれら墓壙は弥生後期中葉から後葉にかけて順次掘られたものようである。また3グループの墓壙群相互には時期差は認められない。なお第24号墓壙からは山陽地方の上東式の特徴をもつ月塗りの壺形土器が出土している。

⑤ その他の墓地遺跡^⑤

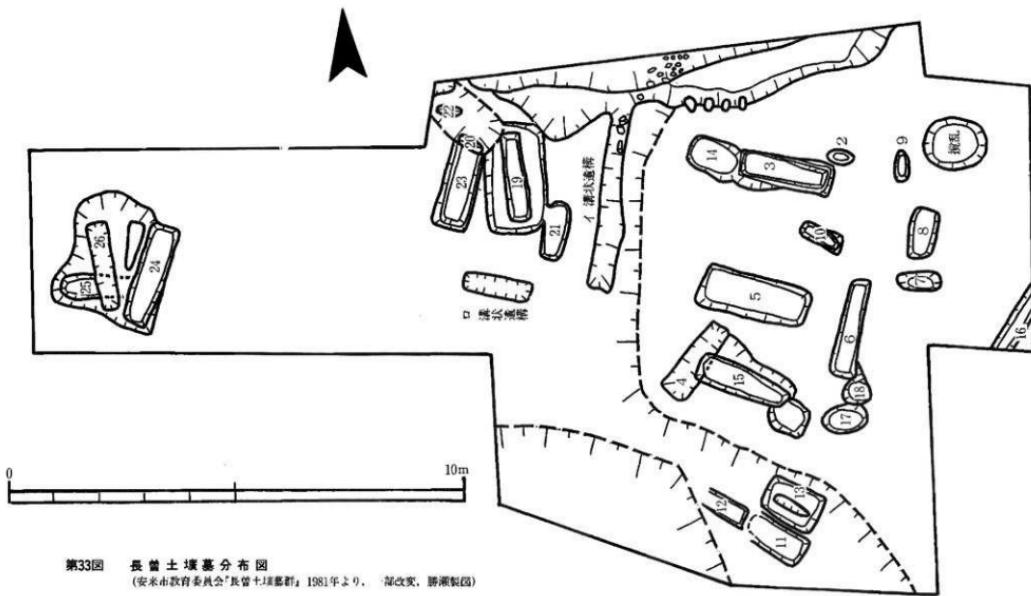
安来平野の周辺丘陵上には以上の遺跡の他にも多くの土壙墓群の存在が知られ、近藤正、内田才によって紹介されている。以下それらを列挙する。

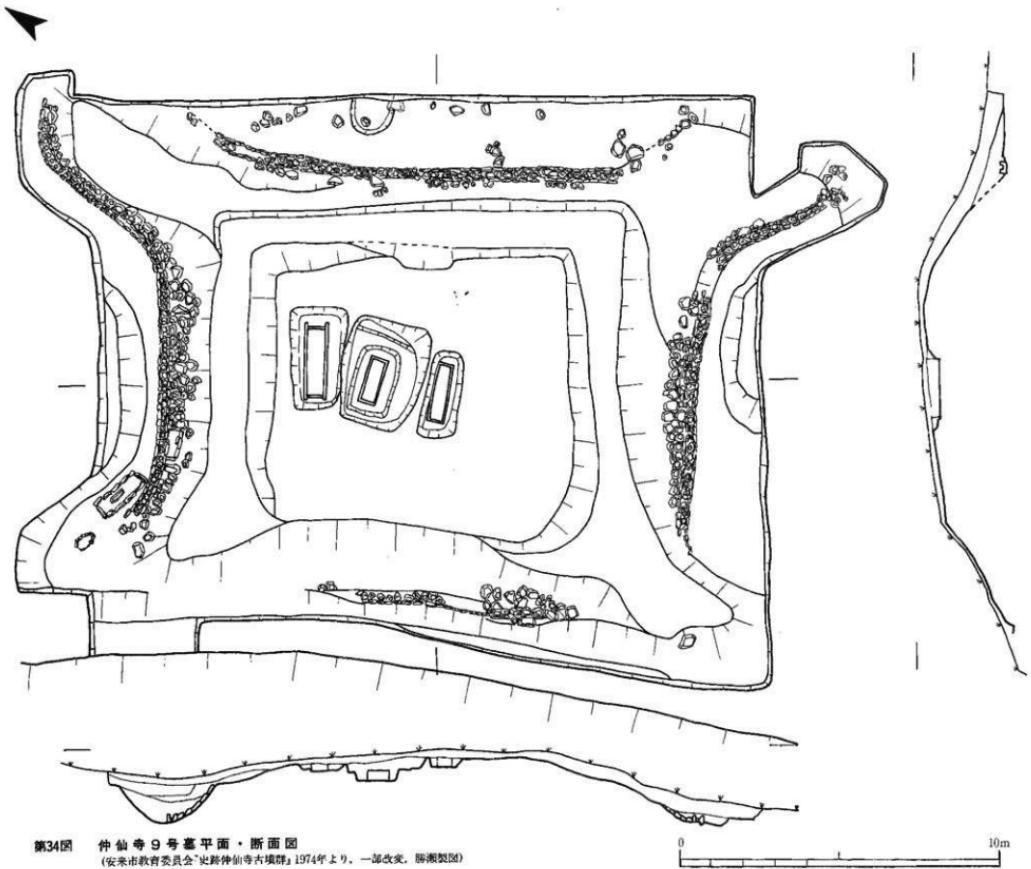
- i) 藤原谷土壙墓（安来市佐久保町藤原谷）標高40mの丘陵頂部に位置する。第1号、第2号の2基の土壙墓の存在が知られている。第1号墓は不整形の墓壙で、形状は九重第3号墓壙に似る。大きさは上部で0.85m×0.55m、深さ0.17m前後である。壙上面の中央部から壺形土器2個体、壺形土器1個体が検出されている。「小谷式」と思われる。
- ii) 清水山土壙墓（安来市折坂町清水山）標高100mの高所に位置する。構造が判明した第3号墓壙は、まず平面が1.6m×0.6m、深さ0.4m～0.25mの不整形円形の壙を掘り、さらに壙底で0.8m×0.23m～0.15m、深さ0.16mの隅丸長方形の箱形擴をつくる。形状は小谷十壙墓とほぼ同様である。壙上面から壺形土器片が出土している。「小谷式」か。なお第1号墓とされたものでは弥生中期末かとみられる土器片が採集され、同じく第2号墓では弥生後期前葉のものらしい土器片がえられている。
- iii) 赤崎土壙墓（安来市赤崎町赤崎）標高約20mばかりの丘陵上に分布する土壙墓群で、第5号墓とされた個所は径約10m前後の平坦面に多数の土器片の散布が認められている。形態が判明したものは九重式とみられる。

これらの他に近藤らが紹介しているものとして、堂面土壙墓（安来市早田町堂面、弥生後期か）、地福寺裏山土壙墓（安来市沢町、弥生後期末か）などがある。

⑥ 仲仙寺9号墓・四隅突出型墳丘墓^⑥（安来市西赤江町深道）

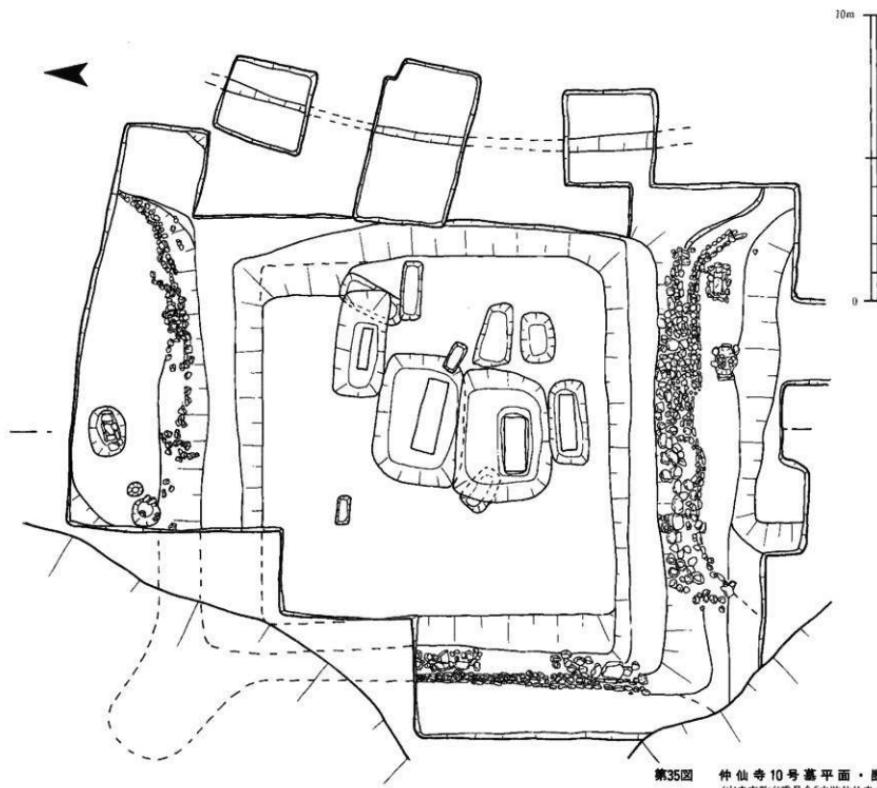
飯梨川西岸丘陵上に位置し、安来平野に東面する。一辺18m×15mで、突出部を含めた規模は27m×22.5m、高さは2mである。地山を削り出し、先端のやや膨む突出部をつくる。墳頂に板石を2列に立て、その間に石を敷く溝状の列石をもち、上方斜面に大型の石を貼りつける。埋葬主体は3基の土壙で、中央土壙がよく整っていて4m×3mあり、二段掘りである。この中に1.6m×0.6mの木棺を納め、その上を砂で被っている。他の二つは素掘りである。中央木棺には綱身の碧玉製管玉11個を副葬していた。墳頂部及び墳裾より土器が出土したが、墳頂中央土壙上の土器は壺、甕、高杯、器台形土器等の式土器併行期であり、多少時期に前後の幅がある。北と西の墳裾に小型箱形棺が3基つくられ、そのうち2基は棺の立石側石としている。



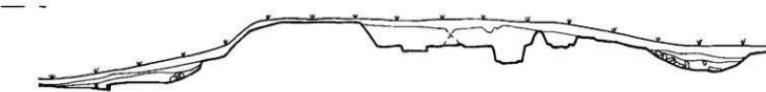


第34図 仲仙寺9号墓平面・断面図
(安来市教育委員会「史跡仲仙寺古墳群」1974年より、一部改変。勝瀬製図)

0 10m



第35図 仲仙寺10号墓平面・断面図
(安来市教育委員会「史跡仲仙寺古墳群」1974年より、一部改変、勝瀬製図)



⑦ 仲仙寺10号墓・四隅突出型墳丘墓^⑨

9号墓に隣接し、その北側20mに位置したが、宅地造成で消滅した。一边18m×18m、高さ2mあり、南西隅の突出部の幅約5mある。地山を削り出し、南は溝状に削り、北および西の斜面には緩やかな段をみる。墳頂部に11基の土壙が一部切り合って存在する。中央部に2基の大きな墓壙(4m×3m)があり、東側に中小の墓壙がある。11基は切り合い関係から3期に区分される。副葬品は大型墓壙に9個と19個の細身の碧玉製管状が認められた。大型墓壙上面と墳裾から壺、甌、器台、低脚环形土器などが出土した。かなりの時期幅があるが、的場式土器併行期に中心がある。また南辺外側に石蓋墓壙、箱形石棺各1基、北側に蓋のない箱形石棺(いずれも小型)を1基設けている。

⑧ 宮山4号墓・四隅突出型墳丘墓^⑩(安来市西赤江町宮山)

標高28mの独立丘陵上に位置する。突出部を含めた規模は南北28.8m×東西24.6mである。突岡部は先端に向かって広がり約7m×7mある。地山を削り出しして周囲に轍った列石を立石・貼石・立石・斜面の貼石という順で並べる。盛上後東西方向に長い軸をとる4m×3m、深さ1mの規模の二段掘りの土壙を掘り込み、底に砂を敷き、その上に箱形木棺を粘土上で固定して納める。木棺は3m×1m~0.7mの組合せ式で、その上に砂を30cmの厚さで入れ、それを盛土で被っている。棺内から大刀1口が検出され、赤色顔料が認められた。大刀は長さ68cm、幅2.6cmある。墳丘南西隅と西辺中央から壺、甌、低脚环形土器が出土した。時期は「小谷式」土器併行期である。

⑨ 安養寺1号墓・四隅突出型墳丘墓^⑪(安来市西赤江町安養寺)

標高約30mの独立丘陵上に位置したが宅地造成工事で消滅。規模は東西辺20m×南北辺16m、高さ2mある。地山を削り出し、西、北、東の三方斜面に貼石をする。部分的に墳裾に立石・半石・立石の構造を留める。北辺西より排水用とみられる礫が0.5m×1.5m堆積する。主体部は4基の墓壙で(1)墳丘のほぼ中央にあり、5m×3.3m、深さ1.2m×1.3mの墓壙を二段に掘り、側板が仕切板を両方から挟む構造の木棺(2.25m×0.4m~0.7mの規模)を、白色粘土で封張りし、砂で被っている。床面に朱が認められた。(2)は(1)よりも古く、3.7m×1.5mの素掘りで2m×0.3m~0.35mの木棺を入れ、砂で被っており、棺材周辺に灰白色粘土がみられた。(3)の墓壙は長さ2.5m×1.5m、深さ0.4mの素掘りである。(4)は1.2m×0.5m、深さ0.15mのもので長軸を東西方向にとる。墓壙(1)の上面に壺、甌、高环、器台、低脚环形土器と棒状石を1.5m×0.8mの範囲に供献している。墓壙(2)は上面の0.6m×0.8mの範囲に高环、甌、器台形土器と棒状石が認められた。中央墓壙(1)が中心である。造営時期は「鍵尾式」上器併行期からやや新しい時期にかけてのものである。

⑩ 安養寺3号墓・四隅突出型墳丘墓^⑫

1号墓の東約40mに位置したが、ブルドーザーによって中心部を破壊された。遺存した北辺墳裾の状況よりすると東西30m、南北20m、高さ3.4m~5mの規模と考えられる。遺存し

た北辺は裾が弧状に内側に反り、テラス面をみる。長さ23m、高さ1.2mの立石、平石、立石（およそ20cm）が見事に貼り付けられている。おそらく専門工人の手になるものと思われる。墳丘中央部に一ヶ所砂が多量に認められ、朱もあったというが、破壊のため主体部は不明である。墳丘斜面やテラス面で高杯や低脚杯形土器片が採集されており、造営時期は「鍵尾式」土器併行期からやや新しい時期にかけてのものである。

⑪ 下山四隅突出型墳丘墓^⑫（安来市西赤江町下山）

標高約28mの丘陵上に位置する。北東25m、南西17m、高さ2.5mの規模で、南西側の二隅はわずかながら突出し、斜面に人頭大の石が確認されている。未調査であるが、墳丘中央付近より壺、甕、器台、高杯形土器の破片が出土している。「鍵尾式」併行期からやや新しい時期にかけて造営されたものである。

⑫ 塩津1号墓・四隅突出型墳丘墓^⑬（安来市久白町塩津）

標高27mの丘陵先端に位置し、水田面からの比高は約20mある。規模は南北32m、東西26mで突出部を入れると40m×30mとなる。北西部の突出部は約6mある。墳丘は丘陵尾根を幅17m、深さ4m掘り込んで形成している。西側斜面に人頭大よりやや小ぶりの円礎が露出している。同一丘陵上に4基並ぶうちの最大のもので、四隅突出型墳丘墓としては能義平野地域では最大のものである。

⑬ 山ノ神石棺墓^⑭（安来市柿谷町山ノ神）

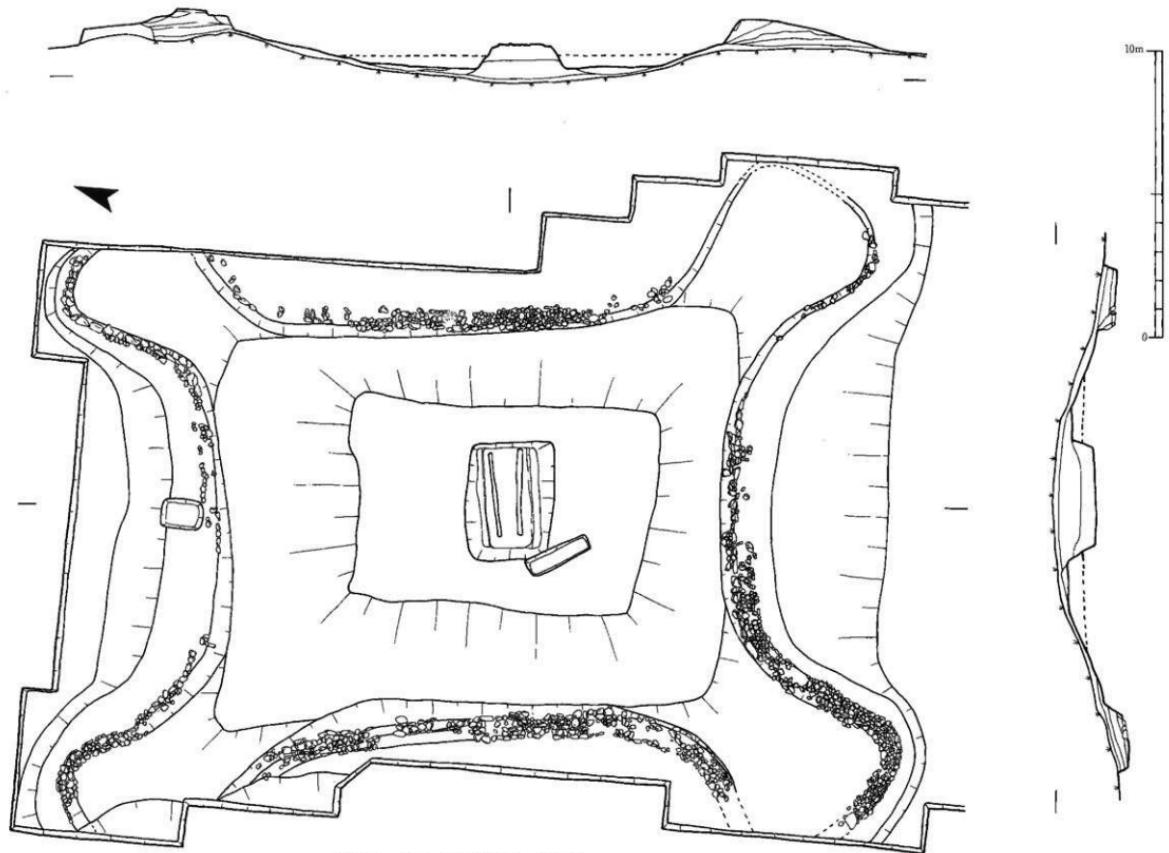
標高40mの丘陵上に位置する。構造形の長径1.24m、短径0.9m、深さ1.2m～0.6mの草廻中に横壁に、石棺をほとんど接して納める。石棺の規模は内法で長さ62cm、幅25cm～37cm、深さ27cmを測り、4枚の割石を立てて側壁をつくり、蓋石は大小20個の小型割石をあてる。棺内に遺物はなく、埋土上面より壺形土器3個体分が出土、南側斜面で器台形土器が採集されている。時期は「鍵尾式」土器併行期である。

⑮ 来美1号墓・四隅突出型墳丘墓^⑮（松江市矢田町来美）

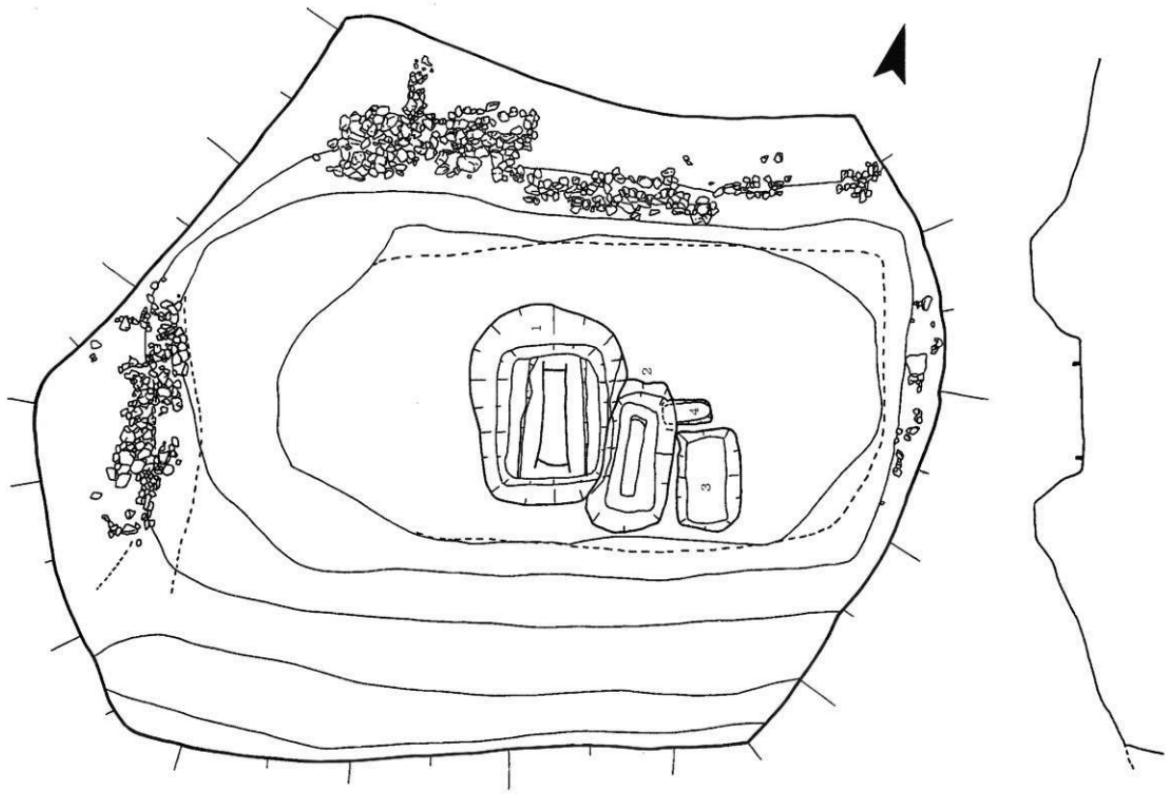
丘陵頂部に近い緩斜面に位置する。一边14m×10m、高さ2m以上で尾根の側を削って溝をつくり、地山を削り出して墳丘をつくる。南辺および東辺の一部に貼石列があり、南東方向に突出部が残る。主体部は7基の墓壙で、うち1基は大型で二段掘りである。墓壙上面に蓋、器台形土器を供献し、南側墳裾中央に大型壺形土器を据えている。的場式土器併行期である。

⑯ 的場遺跡^⑯（松江市八幡町的場）

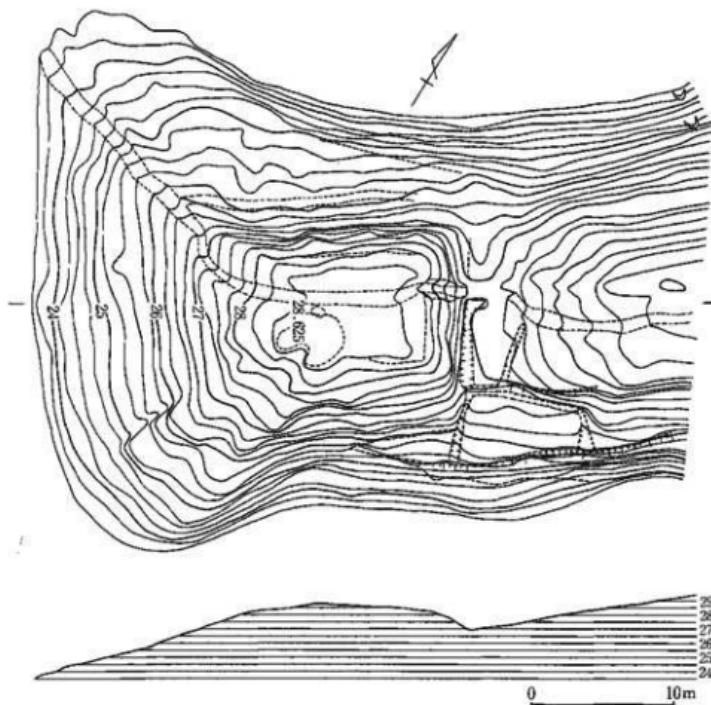
低丘陵の突端、標高約14m、比高約10mに位置する。遺存した石列よりすると長さ約8mの方形の区画が考えられる。一边12m、高さ1.75mの方墳の下に存在した。墓壙より内側1.5m離れて南北方向に石列がある。石列は自然丘をさほど加工することなく、地山に幅70cm、深さ30cm、底幅40cm～50cmの溝を掘り、内壁に一重、二重に石を積上げている。石列は長さ2mぐらいで、北側は上部の方墳をつくった際に破壊されているが、長さ約7mと推定さ



第36図 宮山4号墳平面・断面図
(安来市教育委員会「宮山古墳群」1974年より、一部改変、藤瀬製図)



第37図 安養寺1号墓平面・断面図
(出雲考古学研究会「古代の出来を考える4 荒鳥埴蔵群、1985年より、勝瀬製図)

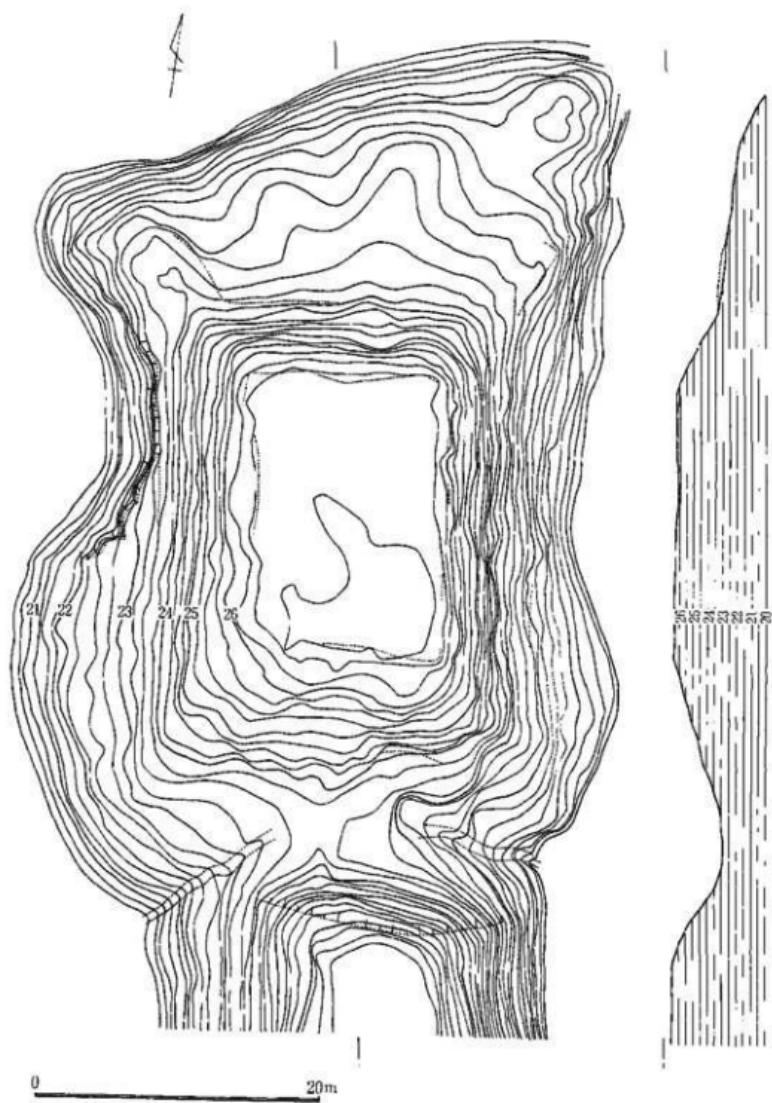


第38図 下山墳丘墓平面・断面図
(出雲考古学研究会「古代の出雲を考える4 荒島墳丘群」1985年より)

れる。中央の墓壙は長軸をほぼ東西方向にとり、上縁で長さ2.6m、幅2.0m～1.7m、床面の長さ2.35m、幅1.2m～0.9m、深さ1.2m～1.1mある。墓壙の埋土は黄褐色砂質層のみで構成され、その上部に供獻された土器群が検出されている。墓壙上縁より5cm～10cm低く中央に長さ20cm、径7cmの棒状跡を直立し、その周囲80cm～70cmの範囲に高坏や壺を載せた器台形土器が置かれていた。出土土器には器台7、壺6、把手付注口土器1、把手付壺1、壺1、高坏2、特殊器台1、特殊壺1、低脚坏3の各土器がある。これらの土器は「鍵尾式」土器と一部重複してその占い部分にあたるもので、的場式土器として標識化されている。なお特殊壺と特殊器台はセットをなすもので吉備地方からの持ち込みと考えられる。

⑯ 友田遺跡^⑩（松江市浜乃木町友田）

標高19m～22m、比高11.3m～14.3mの西方に突出した丘陵支丘の上部に位置する。AIX



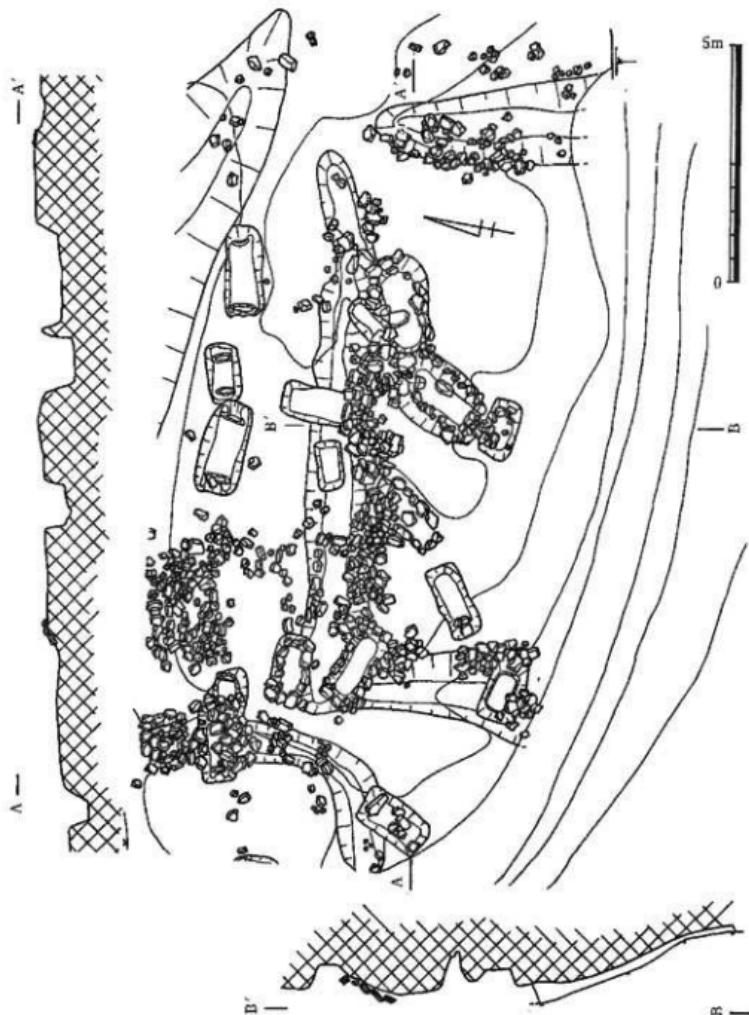
第39図 塩津1号墓平面・断面図
(出雲考古学研究会『古代の出雲を考える4 荒島埴塚群』1985年より)



第40図

来美 1号墓 平面・断面図

(引本著「松江市大田町来美の圓頂突出形方形埴頂」
『圓頂埴頂 1号墓・同内埴頂』、松江市教育委員会編 1989年より、一部改変、勝利製図)



第41図 友田遺跡A区「貼石方形墓」「四隅突出型方形墓」平面・断面図

(岡崎雄二郎他『友田遺跡』『松江市都市計画事業乃木土地区画整理事業
区域内埋蔵文化財発掘調査報告書』1983年、松江市教育委員会より)

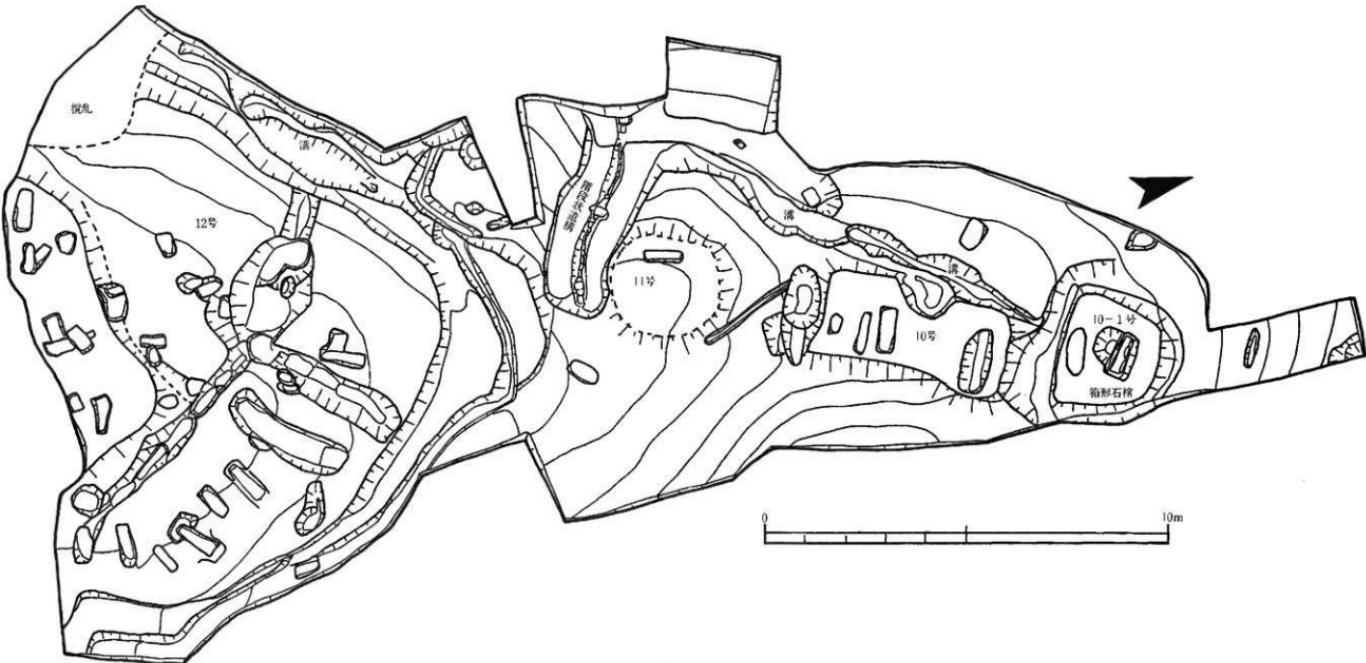
は西部に位置する26基の上塙墓群で構成され、次のように5類に分類されている。1類：出雲地域固有のもので6基。2類：貼石・配石墓で10基と数も多い。3類：側石を2～3段に積むもので4基。4類：直上に石を置くもので3基。5類：縦円形袋状土塙で貯蔵穴かと思われるもの1基。B区は1～6号の墳丘墓6基からなる。A区には12基の墓塙の直上に、後にこれを無視するかのように、「四隅突出型」墳丘墓が築造されている。南半部と主体部を欠失するが、周溝、墳裾に貼石をし、北西部の鶴がやや突出している。北辺で約11mをかかる。

これらの各墳墓の時期は、弥生中期中葉から後期前葉に及び、墳丘墓は周溝中の壺形土器よりすると後期前葉に当たり、この時期をもって友田墳墓群の築造は終わっている。墳丘墓群が支丘の基部、土塙墓群が先端部に位置することは弥生中期にこのグループが存在したことを示し、墳丘墓の主体と土塙墓（木棺直葬）の副葬品を比較すると、墳丘墓においては十器のほかに副葬品がみられないのに対して、土塙墓の中には第8号墓塙の如く、勾玉11個、管玉200個以上、石鎌7（黒曜石2、サスカイト5）をもつものなどあって注目されている。石鎌を副葬品として考え得るか否かは今後の課題であるが、第8号墓塙の他に第2号、10号、13号、17号、22号の各墓塙でも出土しており、必ずしも例外的かつ特別な例でないことは明らかである。なお第17号墓塙は構造の上からみても、弥生中期前葉の壺形土器が本遺跡でただ1個体出土しているという時期的な面からしても、他の墓塙と異なり貯蔵穴とした方が良さそうである。

⑰ 神原正面北墳墓群^⑫（大原郡加茂町神原）

遺跡は南西に開いた南北150m、東西20mのU字形につながる丘陵上に位置し、北遺跡はその最も北側に位置する。A、B、C、Eの4区において遺物、遺構が検出されている。A区は約50mの範囲に周囲を0.5m～1.5m削り出し、方形台状につくった4基の墳丘墓からなり、上部の平坦面に1～2基の墓塙（木棺直葬）が設けられ、遺物は墳丘の間の斜面で弥生後期の土器片がまとまって出土した。B区は弥生中期～後期の土器片が多量に出土したが、中世に山城となって削平されている。C区はB区の西側の北に延びる丘陵支丘上に位置し、丘陵基部の最上の位置には径約25mの円形台状墓が営まれ、半円形で約50mの段の周囲に1m～2mの平坦面、その外側に浅い溝を巡らしている。この中に多数の墓塙と溝がつくられ、そのうちの墓塙の一つは長さ3.1m、幅0.6mの箱形木棺で弥生後期の上器が出土している。その北方に3基の墳丘墓が営なされ、上面に2～4基の墓塙があり、最北方のものは長さ1.95m、幅0.4m～0.6mの箱形石棺を納める。E区は西に延びる丘陵上に古墳時代前期の小規模な古墳が営なされ、その下に弥生後期中葉の上塙墓がつくられていた。これは丘陵先端で2基確認されている。この墳墓群は各種の埋葬形態がみられるが、弥生中期中葉から後期末、そして古墳時代前期へと引き継ぎ埋葬の行われた貴重な遺跡である。

⑱ 天神遺跡^⑬（出雲市天神町）



第42図 神原正面(北)造跡C区墳墓分布図
(滋賀法華「加茂町の古代」、『加茂町誌』1984年より、一部改変、勝瀬製図)

神門川と斐伊川に挟まれた出雲平野の中央部、海拔8mの周辺より少し高い微高地に位置する。1977(昭和47)年調査の第1調査区において幅1m、深さ15cmの溝に続く長径1.5m、深さ50cmの楕円形土壙の中から埴輪が検出された。埴輪となった壺形土器は口径27cm、高さ58cm、胴最大径38cm、底径10cmの暗褐色を呈し、口縁に刻み目、頭部に指頭圧痕文帯、肩部に2列の櫛による刺突文を入れるもので、弥生中期後葉で、八束郡美保関町小浜洞穴出土品にきわめてよく似ている。

また、1975(昭和50)年調査の第1調査区では土壙墓14基、溝4が検出された。墓壙は大きく2群に分けられる。(1)は発掘区の中央北寄りに8基が複雑に交錯する。その(2)は東半部に6基が分散的に存在する。壙は未掘りのものが主体であるが、中には一段に掘り込まれたものもある。平面形は楕円形7基、隅丸長方形7基で規模は長径1m、短径0.6mのものから3m×1.8mのものまで、深さは0.34m～0.1mと浅い。出土した土器はいずれも破片で、壙底より浮いた状態で出土し、人為的に破碎して投げ込んだものようである。

溝状遺構はL状に屈折するSD03と、その左端に接して直角方向に掘り込まれたSD02で、SD03は上縁幅1.5m、基底幅0.9m、深さ0.4mの断面U字形、SD02は全長4.5m、上縁幅1m、底幅0.6m、深さ0.35mあり、両者を一連の遺構とすれば、一辺11mの「コ」の字状遺構となり、方形周溝墓の可能性もある。出土土器は壺、甕、高环形土器などで、上壙墓、溝とともに弥生中期中葉にあたる。

⑩ 西谷墳墓群^⑤(出雲市下米原町西谷)

出雲商業高校敷地東の標高約40mの丘陵上に位置する。(詳細は第II部参照)

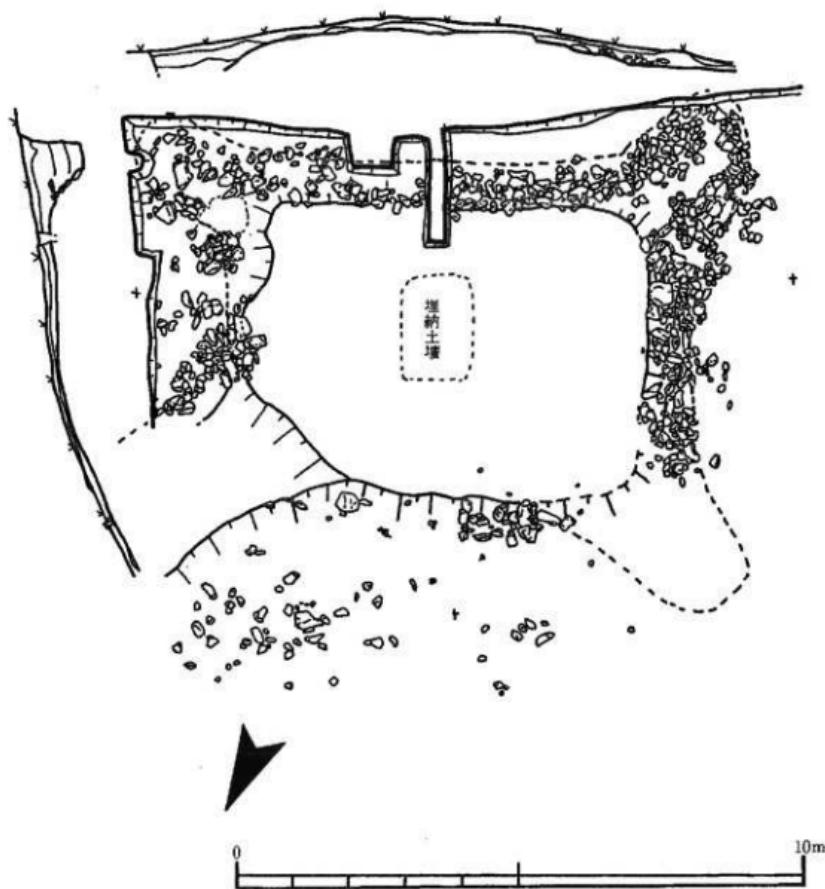
⑪ 間内越1号墓・四隅突出型墳丘墓^⑥(松江市矢田町間内越)

1987(昭和62)年に調査。低い丘陵の尾根に連続して1号墓から南東方向の高所へ向かって2号、3号、4号墓の順に連続して構築されている。

1号墓は、規模が墳丘上端で7m×4.9m、下端で8.8m×6.7m、高さ0.6mを測る。丘陵の突出部を水平に削って墳丘の基盤とし、その上に盛土した後に貼石を施す。

貼石は東、南、西の各辺がよく残る。東辺の貼石はV字をなし、中央部で四段程度、突出部で一～二段に積まれている。突出部は全面が石で被われる。規模は基部で2.4m、端部で2.15m、長さは2.7mある。高さは基部0.4m、先端部で0.3mである。

出土遺物は土器のみ。出土個所は墳丘中央部で、1.95m×0.5mの範囲から密集状態をなして検出されている。その他墳丘上から斜面全体にわたって出土している。復元された器種と個数は敦形器台16、高环5に甕形、壺形を含めて約40個体程度になる。故意に破碎したものもある。また南西の突出部基部及び南東突出部基部から完形の大型壺形土器が発見されている。「小谷式」期かややそれを遡る時期が考えられる。



第43図

間内越 1号墓平面・断面図

(松江市教育委員会他「間内越 1号墓・間内越遺跡」1989年より、一部改変、勝潮製図)

3. 小 括

以上、出雲地域で発見された弥生墳墓遺跡を概観した。地域的に東の能義平野、中部の意宇平野、西の出雲平野にそれぞれ調査例があるが、いずれも海潮沿岸平野部で、山間部についてはいまのところ調査例はない。

能義平野では、その西側と東及び南丘陵部で様相が異なる。前者には四隅突出型墳丘墓が卓越し、それらは弥生後期中葉以降密集して展開する。後者においては、早く内田才、近藤正らによって指摘されているように、上墳墓群が密度高く分布し、弥生後期前葉から終末さらに古墳時代に及ぶ。これら十墳墓群は、山本清の調査になる鍵尾遺跡やその後調査された長曾十墳墓群、中尾墳丘墓において石列や溝によって区画され、削り出しによる台状の構造をもつことが明らかになってきている。これら十墳墓についても周囲が調査されれば、台状ないし畿上をもつ墳墓の様相が明らかになると思われる。ただし四隅突出型という墳墓の形をとらないことからすると、西側の四隅突出型墳丘墓を築造した首長のブロックから荒島地区の造山1号、3号、人成古墳などの前期古墳を築造する首長たちが出現することと深く関わっているといえそうである。

意宇平野においては四隅突出型墳丘墓の他に的場遺跡、友田遺跡において墳丘墓及びとにかく区画されない上墳墓群が検出されており、この地域における階層性と時期的に墳丘墓において弥生中期中葉に通りうるという特性をよく示しているといえよう。しかしこの地域においては前期古墳に発展的につながる様相がいまのところ把握されていない。

出雲平野においては他の地域においてはみられないほど、西谷丘陵上に出雲地域で最大級の四隅突出型墳丘墓が密集している。時期的には能義平野の仲仙寺9、10号墓、意宇平野の来美1号墓、的場遺跡と併行する。3号墓の規模は最大である。この地の首長たちの弥生後期中葉における卓越性を認めざるをえない。しかし弥生中期については天神遺跡に例をみると、弥生終末から古墳時代前期にいたる過程が描まれていない。今後の課題といえよう。

また神原正面北遺跡は、同一丘陵上に古墳時代前期の小規模古墳群が築造され、丘陵下の赤川に面する低台地上に「景初3年紀年鏡」の出土した神原神社古墳が営なまれていることから、弥生中期中葉以降古墳時代前期にかけての墓制と社会構造を解明する有力な鍵を握っているといえよう。斐伊川支流域での首長権力の形成及び社会発展の好資料である。

なお的場=「鍵尾式」期において、出雲地域では吉備地方から持ち込まれた各種土器及び特殊並形土器、特殊器台形土器が、例えば鍵尾遺跡、長曾十墳墓群、的場遺跡、西谷3号、4号墓などにおいて認められることも両地域の弥生後期における交流を物語るものとして注目したい。

(東森市良)

引用文献

- ① 内田才・東森市良、近藤正「安来平野における十墳墓について」『土代文化』36輯、1966年

- ② 山本 清『島根県安来市鏡尾遺跡調査報告』、1965年。
- ③ 安来市教育委員会『中尾遺跡』、1985年。
- ④ 安来市教育委員会『安来市黒井田町 長曾土墳墓群』、1981年。
- ⑤ ①と同じ。
- ⑥ 島根県教育委員会『仲仙寺古墳群』、1972年。
- ⑦ ⑥と同じ。
- ⑧ 島根県教育委員会『宮山古墳群』、1974年。
- ⑨ 出雲考古学研究会『古代の出雲を考える4 荒島墳墓群』、1985年。
- ⑩ ⑨と同じ。
- ⑪ タ
- ⑫ タ
- ⑬ ①と同じ。
- ⑭ 山本 清『来美1号墳』『島根大百科事典』山陰中央新報社、1982年。
- ⑮ 近藤正・前島巳基「島根県松江市の塚土墳墓」『考古学雑誌』、第57巻第4分。
- ⑯ 阿崎雄一郎「友田遺跡」『松江園都市計画事業乃木土地区調整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会、1983年。
- ⑰ 加茂町『加茂町誌』、1984年。
- ⑲ 島根県教育委員会『天神遺跡調査の記録』、1972年。
- ⑳ 出雲考古学研究会『古代の出雲を考える2 西谷墳墓群』、1980年。

第2節 石見地域の弥生墳墓・墳丘墓

1. 弥生墳墓と四隅突出型墳丘墓

石見地域における四隅突出型墳丘墓は、現在のところ、邑智郡瑞穂町順庵原1号墓^①が発掘調査によって確認されている唯一のものである。順庵原1号墓は、江の川の支流、出羽川を中心とする細長な出羽盆地の東側河岸段丘先端部に位置している。墳丘は、10.8m×8.3m、高さ1m前後の規模をもち、墳丘斜面には貼石が施され、墳頂の外側に棒状列石が巡る。貼石はおよそ30cm大の川原石を用い、半積みの状態で貼り詰められている。また貼石から約35cm外側に存在する棒状列石は、墳頂とはほぼ平行して弧状に延び、突出部の中ほどの所にぶつかっているが、北西側の列石は直線的で、突出部との接点は基部あたりになる。四隅の突出部は、東側のものがほぼ原形を保ち、西側隅は石材が残存していたものの、北側に押し倒されていた。一方、南北隅は保存状態が悪く、石材がかなり引き抜かれ、南隅では石材の抜取り痕が残っていた。保存状態の良かった東側突出部は幅約1.25m、長さ2m余りで、

約50cm人の長さの川原石を「コ」の字形に立て並べ、上面に7枚の扁平な石を敷いている。

保存状態の悪い南北隅も同様な構造をもっていたものと考えられるが、西側突出部は、先端に70cm余りの細長い川原石を扇状に6個並べていることから、他の突出部とは異なった様相を呈していたものと思われる。

埋葬施設は墳頂部に箱形石棺2、木棺直葬1の計3基が平行して存在するが、それらはいずれも盛土の上から掘り込まれた墓壙の中に安置されていた。副葬品は、第1主体の副葬品収納施設と考えられる墓壙の造出し部から14個の玉類が検出され、第2主体の墓壙内から49個の玉類が発見されている。

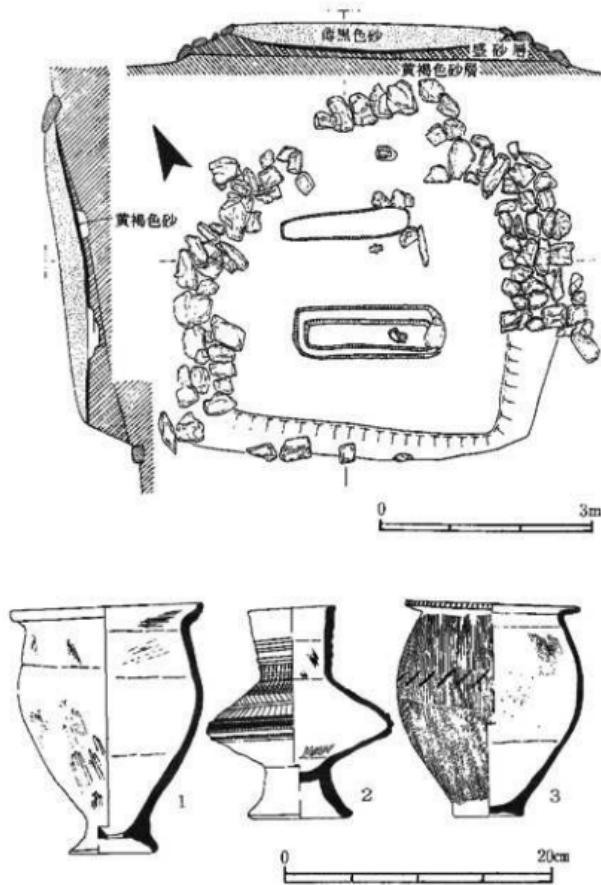
さらにこの墳墓で注目されるのは、周溝内に存在していた径1m～2mあまりの3個のストンサークルである。これらは、径3cm、長さ約20cmの細長い川原石を用い、一つは石をきれいに立て並べているのに対し、他の二つは、一部石を横に寝かせて構築している。これらのストンサークルは、埋葬施設の数と一致することや周辺から粉碎された土器が検出されていることから、葬送儀礼に関係する施設と考えられる。なお、この墳墓の築造時期は、周溝内出土の土器から弥生後期前葉と思われる。

その他、石見地域で四隅突出型方形墓の可能性がある墳墓として江津市南ヶ峰方形墓^③がある。この墳墓は、斜面に石を貼りめぐらした一辺10m前後の長方形を呈するもので、墳頂付近から褐色の土器と碧玉製と思われる管玉が出上したという言い伝えが残っている。

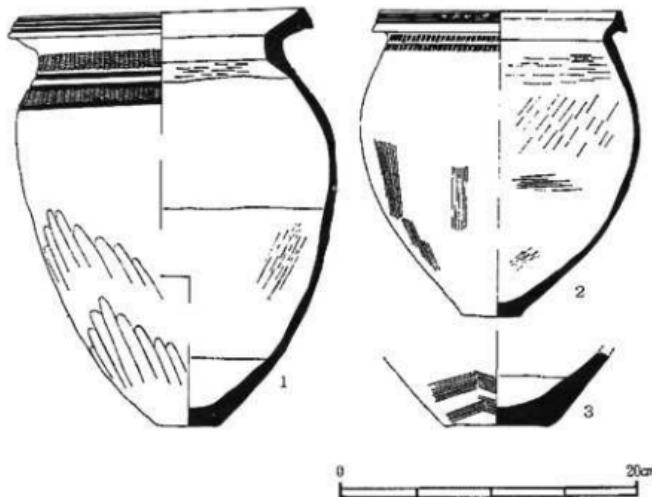
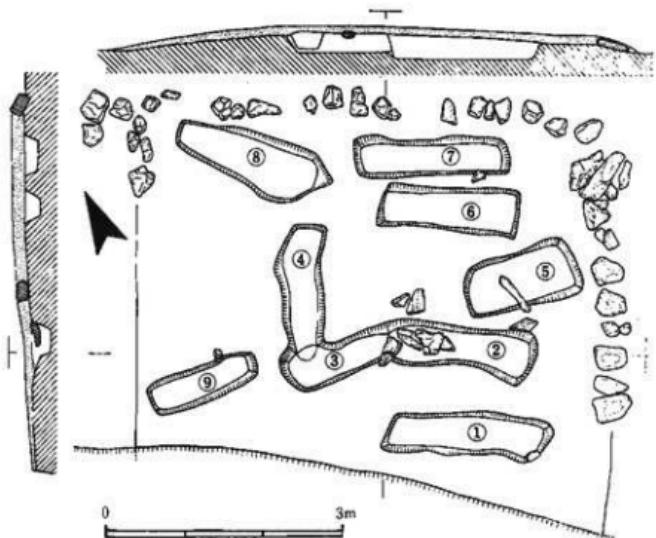
2. 江の川流域における弥生中期末～後期の墳墓

石見地域で現在のところ四隅突出型墳丘墓が確認されている江の川流域では、弥生遺跡の調査例が少ないため、弥生中期末～後期における墳墓は、四隅突出型墳丘墓の順庵原1号墓以外に江津市波来浜遺跡^④及び瑞穂町御幸山遺跡^⑤が知られている程度である。弥生中期末に位置づけられる波来浜遺跡A調査区の墳墓は、砂丘斜面の上方に砂止め、または墓域界を示す目的で築かれたと思われる石列があり、その下方に6基の墳墓が築造された共同墓的な性格を有する墳墓群である。ところがA-2号墓は高さ0.9mのマウンドを持つ4m×5mの方形貼石墓で、各主体部ごとに土器を副葬していることや、追葬のため墓域を拡張して主体部を設ける等、他のA調査区の墳墓が一人一墳墓であるのと比べて大きく異なり、当代社会の中にあって階層分化の芽ばえを感じさせる墳墓として注目される。

これに対して、弥生後期前半の時期と考えられる順庵原1号墓は、河岸段丘の先端に単独で築かれている他、波来浜遺跡A-2号墓より規模が大きく、マウンドの高さも2m前後であったものと考えられているなど、古墳的性格が強い墳墓といえよう。しかし、順庵原1号墓とほぼ同時期と考えられる波来浜遺跡B調査区の墳墓は、マウンドがない平面的な方形列石墓で、その中に無秩序に土壌、石蓋土壌が存在している共同墓的な性格をもつ墳墓である。B-1号墓は、特定の祭場に土器や銅鏡が供献され、遺物の所有状況が「共有」であったこ



第44図 波来浜遺跡A-2号墓平面・断面図と出土土器
(江津市教育委員会『波来浜遺跡発掘調査報告』1973年より、一部改変)



第45図 波来浜遺跡B-1号墓平面・断面図と出土土器
(江津市教育委員会「波来浜遺跡発掘調査報告」1973年より。一部改変)

とを思わせる。ところがB-2号墓では、各主体部ごとに上器と銅鏡ないし銅鏡を調査しており、「個別」に所有している点が注目される。

また、御幸山遺跡は、丘陵上に築かれた1mあまりの深さを持つ墳墓の底部に長さ1.8m幅0.3m~0.5mを測る箱式石棺を安置した弥生後期の墳墓であるが、部分的な調査しか行われていないため、墳墓全体の様相は不明である。

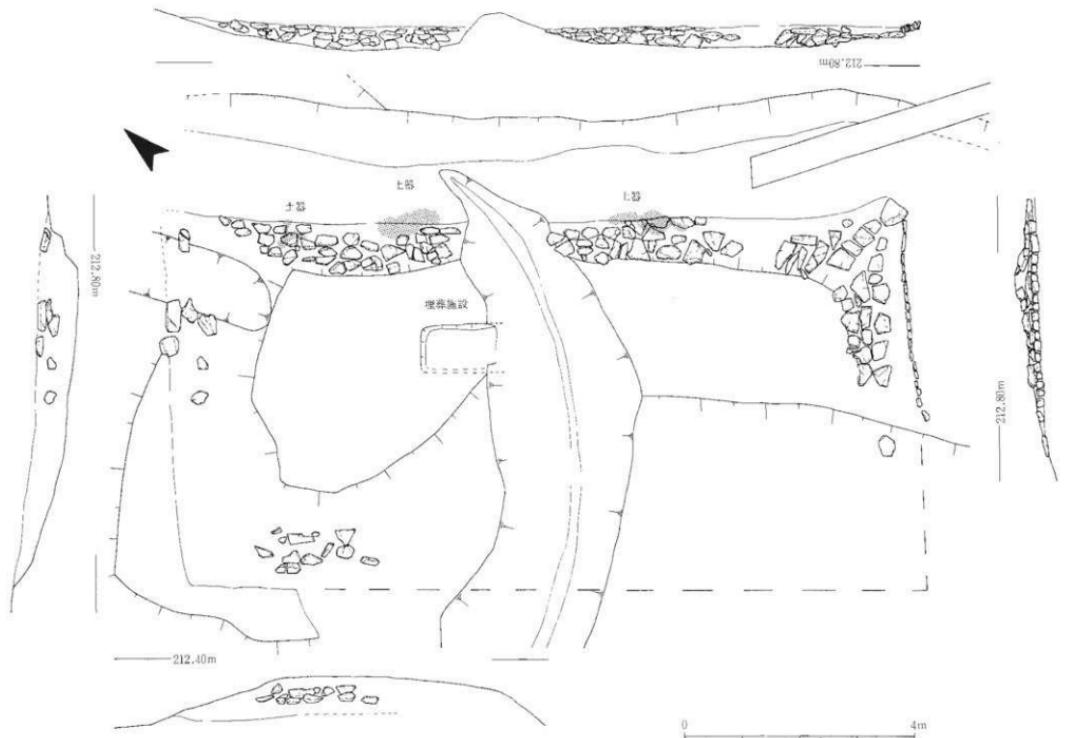
このように江の川流域における弥生中期末~後期にかけての墳墓は調査例が少ないが、墳墓間に格差がみられ、順庵原1号墓は他の墳墓より整ったものであるといえよう。また、四隅突出型墳丘墓は、弥生後期の普遍的な墳墓ではなく、いくつかの墳墓形態の中の一つであるとともに、現在のところ、規模、内容とも他の墳墓を圧倒しているものと思われる。これらの格差は当時の社会の未成熟な階級関係に起因するものか今後検討が必要と思われる。

なお、波来浜遺跡A-2号墓のようなマウンドを有する弥生中期の墳墓は、広島県の山間部や川雲地域の松江市友田遺跡^⑤で知られているが、波来浜遺跡A-2号墓から出土したソロバン玉状の胸器を持つ特殊な土器は広島県西本遺跡^⑥から出土していることから、波来浜遺跡は出雲地方より広島県方面への影響が強いと思われる。また御幸山遺跡でみられた深い墓壙をもつ箱形石棺墓は、広島県山間部の中山勝負峠墳墓群^⑦や、四隅突出型墳丘墓が検出されている蔵ノ神遺跡^⑧で出土例がある。このように、江の川流域は、弥生中期末~後期にかけて広島県山間部と関わりを示す資料が数多く見い出せることから、順庵原1号墓はそれらの地域との関係が推定されるので、次に広島県山間部の四隅突出型墳丘墓についてみていくことにする。

3. 広島県山間部における四隅突出型墳丘墓

広島県山間部では、最近相次いで、この種の墳墓が発掘調査で検出され、弥生中期末から後期の時期にかけてのものが6基あまり知られるに至った。また最近刊行された広島県千代田町蔵ノ神遺跡^⑨では2基検出され、報告書の中でこの種の墳墓について検討が行われている。著者は以前から当地方を含めた中国山地内部で、四隅突出型墳丘墓が発生したものと考えていた^⑩が、昭和61年度に調査された三次市殿山38号墓からは、弥生中期の塙町式上器をともなう列石・貼石を持った四隅突出型墳丘墓の祖形になるものと思われるものが発見され、ますます当地方がこの種の墳墓の発生を考える上に重要な地域となってきた。

広島県山間部における四隅突出型墳丘墓と、それに近い形態を持つ墳墓は大きく4つに分けられる。まず弥生中期後半の段階に、三次市殿山38号墓^⑪でみられるような墳墓の裾が孤状にのび、隅が尖ったような形態を持つもの（A類）と三次市宗裕池内1号墓^⑫のように四隅がすべて突出しているのではなく、一部が小さく不整形に突出しているもの（B類）がある。これらの墳墓はいずれも墳丘の縦と横の比率が1:2になるようなやや細長い長方形を呈している。殿山では、東隅部の稜線に沿って扁平な割石を5個一列に配置しており、一辺



第46図 殿山38号墓平面・側面図
(広島県埋蔵文化財調査センター・「大内・上庄・殿山」1987年より、一部改変)

だけではあるが、墳裾にやや小形の石を横方向に並べた列石が巡っている。このような列石や隅部の敷石は後の四隅突出型墳丘墓に引き継がれるもので、その初原的形態として注目される。

A類の殿山タイプは、弥生後期の庄原市田尻山1号墓^⑧に、そして宗裕池西1号墓のB類は庄原市佐田谷1号墓^⑨にそれぞれ引き継がれるが、墳丘は正方形に近い形態になる。また、佐田谷、田尻山とほぼ同時期に歲ノ神3・4号墓^⑩のように整った四隅突出型墳丘墓（C類）が出現し、さらに弥生後期後半には、三次市矢谷1号墓^⑪のような前方後方形を示した突出墓（D類）が現れてくる。

このように、広島県山間部における四隅突出型墳丘墓ないし、それに近い形態を持つ墳墓は現在のところ弥生中期末には初原的形態のものが現われ、後期前半になって整った形の突出部を持つ四隅突出型墳丘墓が出現してくる。A・B類は突出部が未発達であるためここでは一応四隅突出型墳丘墓と区別して四隅突出型祖形墓として分けておくことにする。

4. 順庵原1号墓をめぐる問題

前項で広島県山間部の四隅突出型墳丘墓及び四隅突出型祖形墓について述べてきたが、順庵原1号墓と最も類似しているのは歲ノ神3・4号墓である。両者の墳墓は石を「コ」の字形にして並べて周囲を被っている実川部を持ち、内部主体に箱形式石棺を採用しているが、これらの特徴は他の四隅突出型墳丘墓には見られないものである。また順庵原1号墓で見られた墳裾の一辺が直線的に伸びる点も歲ノ神に共通している。両墳墓の所在地は、広島県と島根県という行政区画は異なるものの中国山地を挟んで20kmあまりという乍近距離にあたり、歲ノ神遺跡は広島県でこの種の墳墓が集中する三次市、庄原市より順庵原1号墓が近いという地理的条件をもつてることから、出土している土器や形態が類似していることは当然の結果といえよう。

このように歲ノ神3・4号墓と順庵原1号墓はきわめて類似しているが、若干の相違点もある。すなわち墳裾の列石は順庵原1号墓が小さな棒状の石を用いて墳裾から少し外側に巡らされているのに対し、歲ノ神3・4号墓では、墳丘斜面に貼りつけた石とさほど変わらない大きさの石を用いて墳裾に横方向に立て並べている。さらに順庵原1号墓では突出部の内側に扁平な石を敷き、周溝内にストンサークルを持っている。しかしながら、順庵原の棒状列石は、細長い小石を使うのが縦方向か横方向の相違はあるが、殿山のものに類似し、突出部内部の扁平な敷石も、殿山や田尻山の隅部稜線上に貼り巡らされた石と同様な性格をもつものと考えられ、順庵原1号墓は広島県山間部の墳墓ときわめて近い共通点をもち、その地方の影響で出現したものと考えられる。このことは、順庵原1号墓が存在する出羽盆地で弥生後期になって遺跡が急増し、大規模な集落遺跡が出現することと無関係ではないものと思われる。

ところで、歳ノ神遺跡発掘調査報告書の中で、四隅突出型墳丘墓を突出部の石の使い方から列石で形成するもの（歳ノ神、矢谷）、貼石で形成するもの（順庵原、阿弥大寺、仲仙寺、西谷、宮山）の二つに分け、順庵原例と歳ノ神例を別系統のものとして検討が加えられている。しかし、歳ノ神例の突出部は、墳裾に巡る列石より大きな石を用いているとともに、列石から突出部にかけて「く」の字形に大きく屈折しているものがあるなど、列石と突出部は明らかに区別する意識があり、一連の列石とは考えにくい。また、仲仙寺・宮山墳墓群等の突出部は墳裾の列石が巡っているので、墳丘貼石が伸びているものとはいえない等、現状では無理があり、歳ノ神例と順庵原例は同一タイプの四隅突出型墳丘墓と考えるのが妥当と思われる。

最後に四隅突出部の性格について少しく述べてみたい。

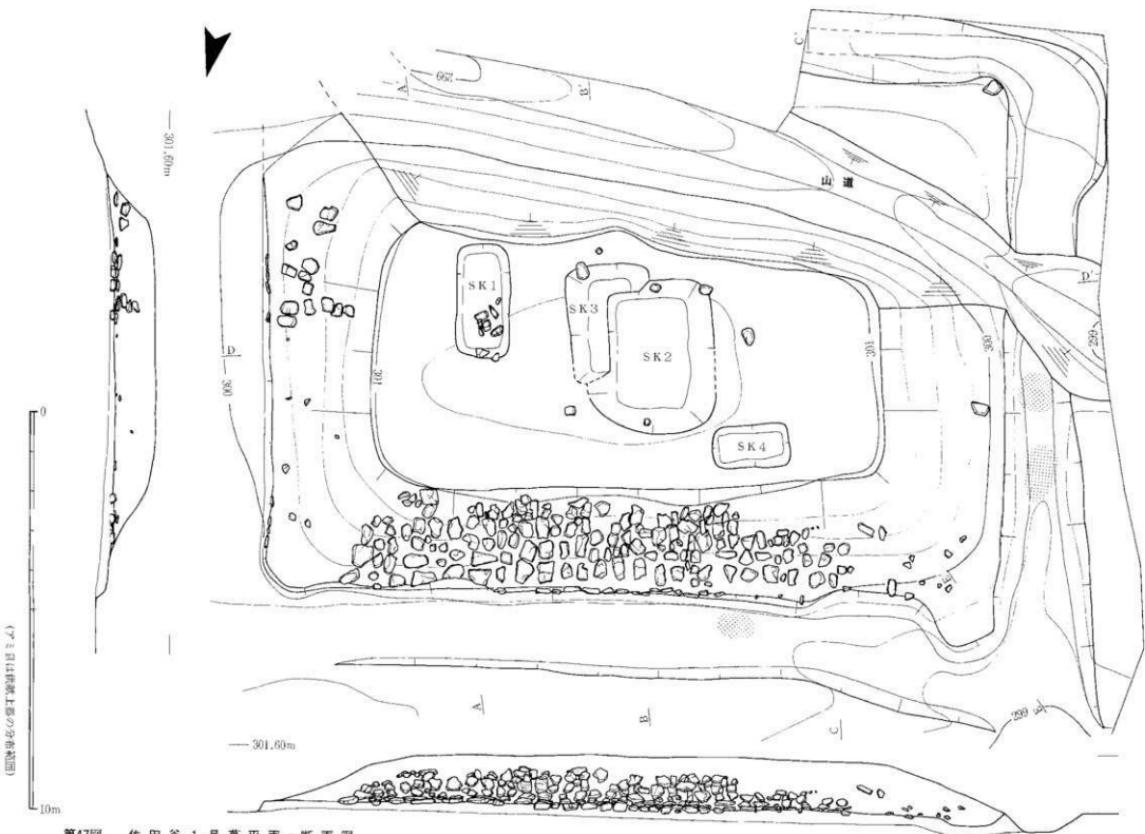
突出部の性格については、祭祀説や墓道説があるが、現在のところ、これらを実証する調査例はほとんど知られていないので、ここでは、突出部の牛成から性格を考えてみたい。

弥生中期の殿山38号墓は、隅後線部に扁平な石を一列敷き並べ、隅を前方にやや突出させているが、これは隅を前方に突き出させることによって稜線の斜面勾配が、他の墳丘斜面より、緩やかになるとともに、上面に石を敷くことによって、コーナーが崩れにくい構造となっている。また、不整形ながら突出部を設けなくてはならなかった宗裕池西例や佐田谷例の突出部も隅部の保護を考えられ、突出部は墳丘隅部の崩壊を防ぐため、隅が前方に伸びていたものと思われる。そして、弥生後期に入ると、歳ノ神例や順庵原例のように墳丘と突出部をはっきり区別させ、墳丘斜面にぎっしり貼石を施したものが現れてくる。歳ノ神例では、突出部の基部を列石の内側に食い込ませ、前方にしっかりと突出部を設けることによって、墳丘斜面の正面が長方形になり、殿山のものより貼石を施しやすい形態となっている。このように四隅突出部は、墳丘や隅部を保護するため、隅部が徐々に前方に伸びたものと考えられ、その後、出雲地域で一般的な墳墓形態として定着し、集中的に造られるようになると考えられる。

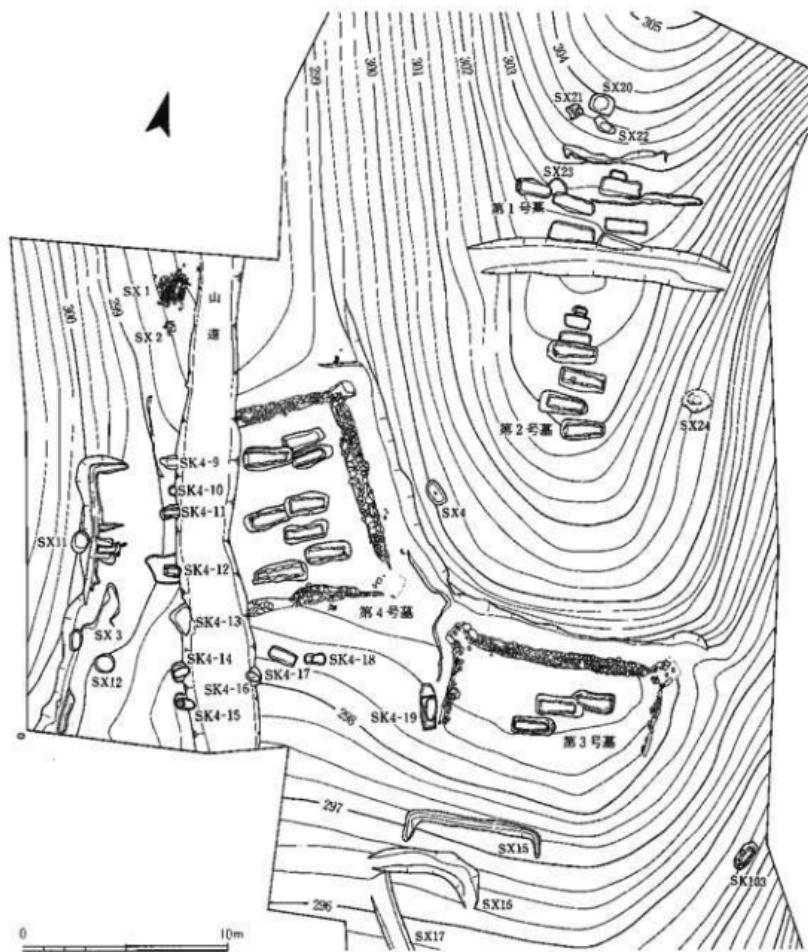
5.まとめ

以上、石見地域の四隅突出型墳丘墓について唯一調査が行われている順庵原1号墓を中心にして述べてきたが、今後は、さらに新たな出土例を待って当地域におけるこの種の墳墓の変遷や、出雲地域の墳墓との関係について検討を加える必要があると思われる。ともあれ、順庵原1号墓は、広島県山間部の四隅突出型墳丘墓の影響を受けて出現した墳墓で、定形化して発展する川東地域の四隅突出型墳丘墓との間をつなぐ重要な墳墓として注目される。

(川原和人)



第47図 佐田谷1号墳平面・断面図
 (広島県埋蔵文化財調査センター「佐田谷墳墓群」、1987年より、一部改変)



第48図 成ノ神1号～4号墓配図

(広島県埋蔵文化財センター「成ノ神遺跡群・中出跡負石墳群」

1986年より、一部改変)

引用文献

- ① 門脇俊彦「頸鹿原1号墳について」『島根県文化財調査結果報告』第7集、1971年。
- ② 門脇俊彦「古代社会の成立」『江津市誌』上巻、1982年。
- ③ 江津市教育委員会『波来浜遺跡発掘調査報告書』、1973年。
- ④ 瑞穂町教育委員会『御幸山弥生式墳墓調査概報』、1969年。
- ⑤ 松江市教育委員会『松江西都市計画事業乃木土地区南整理事業区域埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、1983年。
- ⑥ 広島県文化財協会『西本遺跡群』、1976年。
- ⑦ 特広島県埋蔵文化財調査センター『成ノ神遺跡、中出勝負崎墳墓群』、1986年。
- ⑧ ⑦と同じ
- ⑨ ⑦と同じ
- ⑩ 川原和人「島根県における発生期古墳ーとくに四隅突出型方墳についてー」『古文化談叢』第4集、1978年。
- ⑪ 特広島県埋蔵文化財調査センター『大判・上定・殿山』、1987年。
- ⑫ 三次市教育委員会『宗裕池西遺跡現地説明会資料』、1980年。
- ⑬ 広島県教育委員会『中国縱貫自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』、1978年。
- ⑭ 特広島県埋蔵文化財調査センター『佐田谷墳墓群』、1987年。
- ⑮ ⑦と同じ
- ⑯ 広島県教育委員会、特広島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』、1981年。
- ⑰ 門脇俊彦「瑞穂町古代史」『瑞穂町誌』第2集、1966年。
- ⑱ 前島己基「出雲地方における古墳出現期の動向」『東アジアの古代文化』46号、1986年。
- ⑲ 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26卷第3号、1979年。

第4章 山陰地域における弥生墳丘墓の展開と地域的特性

1. 立地と墳丘

既述の如く、各地域の墳墓（ここでは墳丘墓、四隅突出型墳丘墓、上壇墓群など、全ての弥生時代墳墓を含む）はいずれも丘陵尾根上に位置し、標高で70m以上のものもある。但し弥生後期までのものについては、同じ丘陵上でも友田遺跡のように標高19m～20mのものもあれば、大神、矢野遺跡のように海拔5mといった微高地に墓地が営なまれる場合もある。他方前立山遺跡は、丘陵頂部の比高50mを測る位置を占めるが、この場合は隣接する尾根に弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落が存在することから、この尾根上が生活適地として谷を見下す位置に生活圏があったといえる。また弥生後期末でも南講武小廻墳丘墓のように明らかに貼石をもっているものが丘陵末端部の低い位置に営なまれる場合もある。

しかし殆んどは弥生後期に入ると丘陵尾根を占め、いずれも集落を見下すか、生活基盤を臨み、逆にいうと生活の場から仰ぎ見る位置に築かれるようになる。その高さと景観からいえば、それぞれの地域の地形的な特質にもよるが、前期古墳の立地とほとんど異ならない。ただ能義平野についてみると、なるほど古墳の立地と変わらず、現に仲仙寺及び宮山墳墓群のある丘陵上においては古墳時代後期に至るまで同一地点、あるいは尾根続きに古墳が築造されている。しかし、前期の古墳—造山1号、3号、大成、寺床1号墳など—がいずれも岬の先端ともいべき丘陵上にあって中海を望むところに位置しているのに対して、弥生墳墓は何れも単に低地を望むところに分布するという点では、はっきり異なる。支配的テリトリーないしは観念の差異が存在したといつてもよい。

墳丘についていえば、原則として丘陵尾根を削り出して造り、僅かばかりの土を盛る。中には阿弥大寺1～3号墓の如く、黒ボクの削り出しの上にかなりの土を盛る場合もある。これはこの墳丘墓が丘陵尾根をやや降りる傾斜面に位置することによると考えられる。同じように順庵原1号墓にも盛土が80cm近くもあるが、これも尾根より降りる傾斜面に位置するためといえよう。いずれにせよ両墳丘墓とも突出部については削り出して造っており、上方に土を盛るもの、当初から四隅は意識して溝状の掘り込みの中に削り残されている。これは完成期の四隅突出型墳丘墓においても同様である。ただ突堤部が拡大していく中で阿弥大寺、順庵原においては箱形棺状を呈した突出部への貼石が、頂部を残して側面にのみ貼られ、その外縁に単なる小石の列ではなく、より整った溝状石列が巡るようになったといえる。したがって墳丘はあくまで削り出して造ることを原則としており、この工法は前期古墳にまで引継がれる。規模は別表の通りであって、小は友田墳丘墓や中尾墳丘墓の一辺10m～11mから大は塩津墳丘墓や西谷3号墓の約40×30mに及ぶ。中でも鳥取市西桂見墳丘墓は一辺を残すのみであるが、約50mという最大の規模を持っている。このクラスになると、前期古墳と

比しても決して見劣りのしない大きさである。いずれにせよ四隅突出型埴丘墓はそれぞれの地域において完成期には、その地の最大クラスの墳墓である。なお各地域間に、規模において格差はあるが、のちに触れる内部構造などと考え合せると、その被葬者である首長の勢力の大きさと関わっていると考えられる。

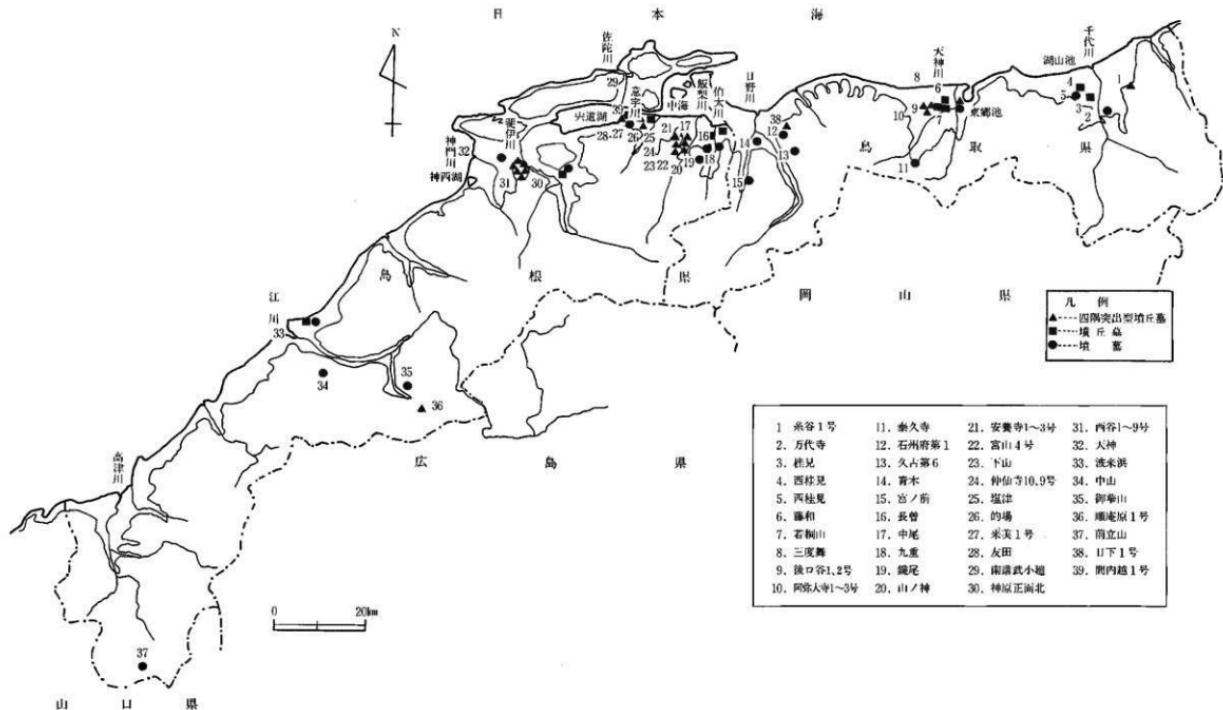
2. 内部主体の構造

弥生時代の埴丘墓は、他の地域に先駆けて検出された能義平野において発見当初「土壙墓」と呼ばれた如く、土壙を掘り込み、その中に木棺を直葬するものが主である。この種の埋葬方法は古墳時代以降も小規模古墳や追葬の埋葬主体として用いられている。

そこでまず墓壙の掘り方をみると、天神遺跡において弥生中期に一段掘りがみられるもの、後期前葉の中尾遺跡の場合は素掘りに小口板をはめ込む溝を掘り込み、友田遺跡の場合は、その発展形態として、一段目を小口板をはめ込むように掘り込んでおり、素掘りの一歩転化とみてよい。同様のことは後河谷1号、2号墓においてもみられ、素掘り土壙の中に箱形木棺を納め、それを粘土で固定して固める。従って掘り上げた後は二段掘りのように見えるがそれはあくまで素掘りで、弥生後期中葉までは能義平野の丸重3号土壙墓も同様である。しかし後期後葉の的場式土器の時期になると埴丘墓、四隅突出型埴丘墓とともに二段掘りが行われるようになる。墓壙と木棺の規模の明らかなもの及び二段掘りの明らかなものをみると、弥生中期以降素掘りがみられ、それが後期後葉に二段掘りが現われ併存していることが分かる。埴丘墓又は四隅突出型埴丘墓において、複数の主体を有する場合、例えば仲仙寺9号墓においては三つの上体のうち中央の七体、10号墓においては11上体のうち中央の二つの主体が二段掘りである。また鍾尾遺跡A区埴丘墓には10数基の土壙がみられるが、そのうち大型の4基は二段掘りで5号土壙もその一つである。なお、東伯耆においては二段掘りは猫山方形周溝墓の主体までみられず、因幡の糸谷1号墓9号木棺は二段掘りであるが、4世紀初頭まで降るとする意見もある。

また、内部主体である木棺と土壙とは多くの場合大きさが異なる。墓壙を大きく掘ってその中に木棺を納め、粘土又は礫でこれを固定してその上を砂でカバーした後、さらに礫混じりの土を入れて埋め戻す。そして木棺直上で土器供獻による墓上祭祀を行うのが出雲地域では一般的である。小谷土壙墓群の第1、第2土壙内の木棺のありかたはこの時期的一般的傾向を示しているといえよう。ただ、現在までに木棺の外側に木櫛を有することが明らかとなっているのは西谷3号墓第1主体のみである。また、弥生埴丘墓の主体となっている木棺は箱形で、前期古墳においてはじめて割竹形木棺を見る。なお小形埴丘墓においては小谷土壙墓等の如く箱形木棺を継承している。

内部上体は山陰全域でみると木棺のみでなく、箱形石棺や石蓋土壙がある。出雲地域では石棺は山ノ神石棺墓、神原正面北墳墓群10号墓-1号墓壙のほか、仲仙寺9号、10号墓壙部



第49図 山陰の弥生墳墓遺跡位置図
(東京市良作図、勝瀬製図)

の小形石棺をみるのみである。しかし、石見地域では箱形石棺、石蓋土壙とともに弥生中期以降あり、波来浜墳墓群、御華山石棺墓、順庵原1号墓第1主体、第2主体、中山墳墓群のうちB-12号、13号墓にそれをみる。石棺の石の用い方は、弥生時代中期のものは側石材を縦に並べるもので、古墳時代の箱形石棺の石の用い方と明らかに異なる。石材もかなり厚く、これは山口県土井ヶ浜遺跡など弥生前期の墳墓に用いられた石材の使い方と共通している。

次に墳丘墓における主体の数であるが、一基一主体は宮山14号墓のみで、他はいずれも複数の主体を持つが、中心主体は限られており、複数の場合でも中心主体は墳丘の中央部に墳丘の一辺と平行するように設けられ、墳丘が当初造られた時の状況を明らかに示す。それとともに他の主体に比べてサイズも大型で、とくに丁寧に造られているところが特徴である。他の小型の主体は、そう時間的経過を持たないで設けられた血縁的に深い関係のある同族者の埋葬と考えられる。これは単に出雲地域のみならず、山陰地方全般、さらには広島県久谷墳丘墓においても指摘されているところである。健尾遺跡A区の墳丘においては他の墳丘墓の如く限定された状況を見ず、複数の大型二段掘土壙が存在するが1、2、4、5号土壙は墳丘に平行して設けられており、数は多いものの、やはり規則性がある。

3. 副葬品と土器の供獻

副葬品は各墳丘墓とも僅かで、これを伴なうものにあってもほとんどが玉類に限られ、例外的に波来浜墳墓群において銅鏡と鉄鏡、友田墳墓群において石鏡、西桂見土壙墓群において刀子がみられる。弥生後期後葉の西谷3号墓第1主体においては、多数のガラス製管玉と小玉、ガラス製異形勾玉がみられたものの鉄製品などではなく、同時期の仲仙寺9号墓中心主体、同10号墓中央の2主体でも碧玉製管玉10数個をみるのみであり、遡って順庵原1号墓においてもガラス製小玉と管玉以外の副葬品は認められていない。

しかし、土器の供獻は各墳丘墓でみられ、これが年代決定の拠り所となっている。その供獻形態は、天神遺跡においては廻したものが置かれているといった状態が報告され、友田墳丘墓、神原正面北墳丘墓においても周溝部分から多数の土器片が採集されている。また弥生後期前葉の順庵原1号墓においては周溝内のストンサ・クル付近から多量の上器片が検出され、波来浜墳墓群では完形品が検出されているものの、土壙内の副葬といった形をとっている。ところが、能登平野においては、九重第5号土壙墓（弥生後期前葉）以降埋葬主体の直上に、器台に壺、甕などの土器をセットとして供獻して祭祀を行っている。この多くは棒状小砾の標石をともない、以後の場式期の的場遺跡、仲仙寺9、10号墓、来美1号墓、西谷3号墓と各墳丘墓に見られる。そしてこの的場式期には、少なくとも出雲地域に一般的な墓制として、定形化した四隅突出型という墳丘の形態とセットをなして広がる。これには二段掘土壙の一般化ということも関わっているし、副葬品が玉だけにせよ認められるということと

も一致している。このセットとしての土器供獻は、弥生後期前葉以降山陰地方においてみられる独自の器台形土器の発達と深く関わっているといえそうである。一つの埋葬形式が定形化したといえよう。そして石見地域においても中山墳墓群で川雲地域と共通した土器が九重式、的場式期以降土壇上に供獻されるという事實をみる。このようにして出来上がるセットとしての埋葬主体への土器の供獻は、古墳時代に引継がれ、小規模の小谷遺跡、日原6号墳、徳楽方墳のほか、堅穴式石室を内部土体とする大規模な神原神社古墳、造山1号墳、同3号墳においても同様である。ただ同じ前期古墳であっても、松本1号墳の場合はくびれ部付近と後方部頂部周辺に土器を並べた様子（小形丸底壺は後方部斜面中途、壺2個は後方部下の溝状遺構の中にほぼ完形で横転）がみられ、土器供獻は必ずしも埋葬主体直上とは言い難い。同様のこととは寺床1号墳にもみられ、調査者は類例を宮山4号墳の土器出土状況に求めている。これらの事実は、一部墳墓においては前代までに定形化していた土器供獻による祭祀の統一性が失われ始めたということを意味していると理解される。

次に吉備の特殊器台、特殊壺の入り方であるが、現在のところ西谷3号墓第1主体では的場式土器と共に存しておらず、技法、胎十などから立板型のものが持ち込まれた状況である。これは先述したように四隅突出型の定形化および括がりと時期を同じくしている。西谷3号墓におけるありかたは第1土体上には的場式土器が多量に供獻されており、この中央部分と周辺部において特殊壺、特殊器台等が検出されている。このような吉備の土器は特殊壺、特殊器台ではないが、墳丘墓では後口谷埴丘墓、長曾上塙墓群、鍵尾遺跡A区、的場遺跡において、上東式土器系統のものが持ち込みという形で1～2点ずつ認められる。つまり弥生後期中葉から後葉にかけて吉備との交渉のある、しかも直接的なものをみるのである。しかし、「小谷式」土器の時期に入るとこの傾向ははっきり途絶えてしまう。かろうじて特殊壺と特殊器台において、各前期古墳に供獻された土器の中に、その影響下に成立した在地の土器をみるのみである（第2章「徳楽方墳」参照）。そしてこの時期山陰地方ではいまだ古墳に円筒埴輪、朝顔型埴輪が出現していない。一方この時期には点々と畿内の布留式土器が入って来ており、他方山陰系と呼ばれる土器がセットとして山陰地方外の地域に広がり、また、プロトタイプを山陰地方に持つ各地の在地型の土器が作られる風潮とも軌を一にしている。ここに供獻土器の上でも、また副葬品の上でも一つの画期を見るのである。

4. 各地域の墳墓の時期と地域的広がり

今までに調査された四隅突出型埴丘墓の多くは中国山地の山陽側、主として備後地域に集中するか、もしくは日本海岸の低地に集中している。その間の小低地や丘陵上の状況が明らかでないが、川雲海岸部でも友田遺跡、神原正面北墳墓群など弥生中期中葉から埴丘墓があり、石見奥端ではやはり弥生中期に前立山遺跡の円形埴丘墓をみる。さらに低地内の畿高地區や丘陵上にも、散在的ではあるが東から上塙墓群の存在が知られる。その後弥生後期に入っ

て石見山間部で順庵原1号墓、出雲地域の意宇平野近辺で友田墳丘墓、倉吉平野で阿弥大寺1～3号墓などの四隅突出型墳丘墓が築造される。この四隅突出型墳丘墓の初現形態は突出部や石の貼り方、供獻土器などから、いまのところ中国山地々域で現われ、それが山陰地方海岸部で受け入れられて次第に発展的に突出部と貼石、石列を整えていく姿をみる。そして、すでに触れたようにその定型化が出雲海岸部で進められて的場式土器の時期に、巨大かつ完成されたものとなる。出雲東部の能義平野西辺と、出雲西部の巣川平野中央部において拠点的にそれが認められる。その中間地域の意宇平野においてもやや小規模ながらこのタイプはみられる。この四隅突出型墳丘墓がこの後も至近距離の中で系譜的に迫れるのが能義平野西辺の荒島区域である。この地の首長はその後もこのタイプの墳墓を、たとえば安養寺3号墓北側石にみるようにより整備された形で造り続けた。おそらくこの時点直後に四隅突出型とその貼石及び列石に表徴される首長の權威は失われ、大和政権の影響または支配力下に成立する古墳祭式に統一されていくと考えられる。それは表における出雲地域の各タイプ墳墓の消長をたどれば明らかである。

5.まとめ

弥生中期中葉には各地で各様の墳墓が見られるが、この時期から貼石をともなわない、いわゆる墳丘墓が出現する。そして少なくとも現在の調査の範囲で、中期末葉に貼石墓が出現し、四隅突起型墳丘墓もその最古式のものが見受けられる。これらは明らかに突出部を有しているが石の積み方、列石において後期後葉に各地に点在する完成された形を有していない。なおこの時期に無墳丘墓、墳丘墓、四隅突起型墳丘墓が存在し、これ以降弥生後期後葉まで共存する。しかし、方形台状墓と四隅突出型墳丘墓は明らかに規模の相違が目につく。四隅突出型墳丘墓は当地のそれぞれの地域において隔絶した規模で他の墳丘墓を圧するように築造されており、とくに西谷墳墓群において顕著である。ただ西谷墳墓群の場合、能義平野西辺のように今のところでは系譜的にたどれず、前後の状況からいまひとつ明らかでない。

また四隅突出型墳丘墓は、いずれの地域の首長でも取り入れることの出来る墓制であったとは言い難い。それは、弥生後期中葉では倉吉平野における阿弥大寺墳墓群と後口谷墳墓群のありかた、後期後葉における能義平野東辺及び中央部と西辺荒島地区との状況である。もっとも鍵尾遺跡A区や長曾土墳墓群の如く貼石や削り出しによって墓域を区画するものがあることをみると、能義平野の場合、上墳墓群として調査され公表されているものでも、今後の精査で尾根を溝でカットして区画したり、周辺を削り出す墳丘墓が存在する可能性がある。しかし、それでもなお荒島地区の優越は否定出来ず、四隅突出型墳丘墓の築造で弥生後期後葉から古墳時代初頭に及んでいる事実は、この地から直線距離で900mほどの地に大成、造山1号、同3号墳という前期古墳を築造した首長たちが存在したということと深く関わっているといえよう。なるほど弥生時代の墓制と古墳時代の墓制とは隔絶したものであるといえ

る。しかし、この広く呼んで荒島丘陵一帯は、能登半野を包括的に掌握した首長系列の占定した墓域と考えて差支えない。

弥生墳丘墓にみる弥生中期段階の様相と四隅突出型墳丘墓の築造が広がる後期前葉以降では墳墓そのものの状態が異なり、集団から折出された一部首長とそれの支配下にある集団構成員の墳墓という階層性を考えねばならないし、出雲海岸部で四隅突出型墳丘墓を発展させ定型化した構造が造り出された弥生後期後葉には、各半野単位でこのスタイルの墓制を取り入れることの出来る首長は限定されており、この首長たちの間にかなり濃密な連合体が形成されていたと考えられる。そして近藤義郎氏の指摘の通り、弥生後期前葉までは特殊壺と特殊器台を共有する祭祀圈を構成していなかった地域が共通の吉備的世界にまとまって来るが、この時期には吉備との交流（しかも直接的な）を物語るように山陰地方で定型化した四隅突出型墳丘墓にストレートに吉備の特殊壺と特殊器台がもたらされている。これが西谷3号、4号墓、久野遺跡など畿内平野にのみ見られるところに問題が残るのが注目されるところで、先述の如く弥生後期前葉には上東式の影響が強く、壺形土器や、のちに山陰地方で独自の展開をとげる器台が入って来ており、中葉以降の後口谷1号墓、長曾24号土壙、鍵尾遺跡A区5号土壙、的場遺跡では、壺、小型壺、器台といった土器が吉備そのままといった形で入って来ている。墳墓に供獻された土器の中に吉備のものが持ち込まれているということは、墳墓形態及び土器の形態が山陰の特性を發揮している時だけに、首長たちの吉備との深い関わり、政治的連繋を考えしめるものがある。

ところが、次の「小谷式」土器時期になるとこの傾向はきれいに払拭されて、地域によって量は少ないが、畿内の布留式土器が入って来る。これは古墳祭祀と共にもたらされるもので、四隅突出型墳丘墓が全盛を極めた荒島地区においても造山1号、同3号墳といった方形で「貼石」は持つが、より巨大な墳丘と竪穴式石室、割竹形木棺を内部上体とし、鏡、戈、鉄製品を副葬する古墳の築造へと墓制が転化していくのであって、新しい大和政権を中心とするヒエラルキーの中に組み込まれていったと考えられる。そして副葬品においても弥生墓制との間に隔絶を見る。弥生時代においては西谷3号墓第1主体の如く櫛の中に木棺を納めるという丁重な作りのものにおいても、多様な玉があるとはいえ鏡はおろか鉄製品すら副葬されていない。これは内幡、伯耆でもいえることで4世紀代とされる糸谷4号墓や伯耆では箱形石棺を主体とする小規模古墳まで例をみない。出雲地域では鏡、大刀他鉄製品を副葬するものは弥生墳丘墓の系列では小谷土壙墓、「宮山4号墓」を過ぐない。

また吉備から持ち込みがみられた特殊壺及び特殊器台は、その流れを引きつつ徳樂方墳、造山1号墳、神原神社古墳の供獻土器の中に強い個性的形態でそれぞれ受け継がれる。出雲地域において定形化した埋葬主体直上に上器をセットで供獻して祭祀を行うことも、一部の前期古墳では崩れはじめている。墓壇の二段掘りも小谷、寺床1号墳には引継がれるが、これも首長墓では跡を断っていく。

なお、弥生墳丘墓の系列において、四隅突出型墳丘墓は宮山4号墓を最後に姿を消すが、方形の墳丘墓の伝統は小規模古墳に継承されており、それが古墳時代中期（5世紀代）にまで受け継がれることは、山陰各地域の古墳群が如実に物語っている。四隅突出型墳丘墓を山陰地方で完成させたトップの首長たちは、次の時期には在地的とでもいうべき地山削り出しの墳丘築成、寺床1号墳にみるような主体部の設け方などの要素をともないつつ、古墳築造へと転化していくのである、ここに小国的分立から大和政権との政治的関係を否定出来ない統合体へと発展していく。しかし、弥生墓制にみられた多様な墳墓は小首長、あるいはそれ以下の階層である集団構成員の墳墓として、これを引継ぎつつ古墳時代へと展開する。古墳時代における社会的階層とその墓制の系譜の違い、一方は隔絶と優越、他方は連続の中での発展を見る。これは山陰地方には類例が少ないと、関東地方における卓越する方形周溝墓と前期古墳以降の首長墓のありかたともきわめて類似している。ここに画期＝時代の転換期における墓制の断絶と新しいものの受容、そして一方で前代の継承を見る。これがそれぞれの地域における社会的階層を背景とした政治社会的変革の実態を表しているといっても過言ではない。

（東森市良）

参考文献

- ① 出雲考古学研究会『古代の出雲を考える3 西谷墳墓群』、1989年『古代の出雲を考える6 荒島墳墓群』、1985年。
- ② 岐阜県埋文センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』、1981年。
- ③ 近藤義郎『四隅突出型弥生墳丘墓二題』『竹田墳墓群』、1984年。

第1表 山陰各地域における弥生時代墳墓の時期別分布表

地域 時代	内 輪	外 輪	古 代			中 世			近 代			石 器		
			東	西	南	東	西	南	東	西	南	東	西	南
中 生 代 後 期	万代寺土壤灰					宮ノ前土壤灰	吉木ノ塚墓群							
中 世 後 期						石井南塚1号墳								
前 世 期														
小 世 期														
中 世 後 期														
後 期														
末 期														
古 代 後 期														

(本文は更なる市長の原書を縮小・縮印して作成したものである。※印を付したものは西陽山出雲原丘墓である。また前葉・中葉・後葉・末葉とした4種の各段落の上の右側は時期とは無関係である。したがって前葉～末葉の各仲内では新古の關係は表現していない。付記されたい。)

山陰地方における弥生墳丘墓の研究

第2表 四隅突出型墳丘墓一覧（想定されているものを含む）

墓名	名 称・ 所 在 地	面積 (m ²)	作成法	外 墓 号 数	埋 障 施 設 (m)	遺 物	時 期
1. 球状高台 1号墓 三次市南須賀町		10×5 高0.5	貼 石 刃		上塙 3	屏風内より弥生土器 (同付壁、壺)	中期・後葉
2. 鹿山第38号墓 三次市人出字町		13×7 高0.7	貼 石 刃		土塙 3 (1.3) × 0.85, 深0.35	土壇(石壇) 埴輪(高环、長脚付环)	中期・後葉
3. 佐田谷第1号墓 庄原市高町		19×14 高1.6~2.1 地山削り出し後若干 の盛土	貼 石 刃		上塙 SK 1 2.72×1.35, 深0.95 +塙 SK 2 3.9×3.1, 深1.15 木棺 2.6×0.6, 高0.6 木棺 2.3×1.1, 高0.7 土塙 SK 3 2.6×2.1, 深1.0 +塙 SK 4 1.9×1.1, 深0.9	上塙 SK 1 直上 高环 土塙 SK 2 直上 埴輪(高环、長脚 など)、木棺 木棺 埴輪 漆台	後期・初葉
4. 西原山原1号墓 庄原市山内町		10.9×9.6 高0.8 地山削り出し後若干 の盛土	貼 石 刃		土塙 2.73×1.85~1.56, 深0.25 圆形石棺 0.6×0.19~0.17, 深0.2 埴輪 圆形石棺 0.83×0.2~0.34, 深0.2	埴輪(壺、壺)	後期・前葉~ 中葉
5. 猫ノ神室第3号墓 山県郡千代山村		方形部 10.3×3.7~3.5 突出部を含む 11.1× (?) 高0.7 地山削り出し	貼 石 刃		布形石棺 SK 1 1.7×0.5~0.35, 深0.23 ~0.35 布形石棺 SK 2 1.6×0.42~0.27, 深0.2 ~0.25 土塙 SK 3 (窓い二段塙) 2.07×0.8, 深0.4~0.45		後期・前葉~ 中葉
6. 猫ノ神室第4号墓		方形部 10.2×4.6~6.4 突出部を含む 11.1× (?) 高0.9 地山削り出し	貼 石 刃		布形石棺 SK 1 1.73×0.56~0.3, 深0.2~0.26 布形石棺 SK 2 1.65×0.5~0.39, 深0.22~0.3 布形石棺 SK 3 1.68×0.49~0.35, 深0.22~0.28 布形石棺 SK 4 1.66×0.41~0.36, 深0.22~0.28 布形石棺 SK 5 1.62×0.4~0.32, 深0.2~0.3 布形石棺 SK 6 2.18×0.4~0.21, 深0.22~0.25 土塙 SK 1 2.04×0.38~0.5, 深約0.4 土塙 SK 2 (一段塙) 1.98×0.85, 深0.44~0.5	埴輪(壺)	後期・前葉~ 中葉
7. 猫ヶ迫矢谷 MD 1号墓 (史跡矢谷古墳) 三次市東須賀町	四隅突出型 前方後方形 全長18.5 幅12.5 前方高さ6 高1.2~1.6 地山削り出し		貼 石 刃		No. 1 上塙石棺 1.7×0.25~0.45 No. 2 上塙 1.8×0.25 (一段塙) No. 3 上塙 2.1×0.5, 深0.6 組合式石棺 1.8×0.3~0.42 No. 4 上塙 1.7×0.3 組合式大棺 1.4×0.6 粘土 No. 5 上塙 (二段塙) 3.55~3.85×3.45~3.95, 深0.6 組合式大棺 1.9×0.6 No. 6 上塙 1.5×0.8~0.7 深0.37 組合式大棺 1×0.3~0.35 No. 7 上塙 1.65×0.13, 深0.55 組合式大棺 No. 8 下塙石棺 1.05×0.31, 深0.2 No. 9 + 壁 (一段塙) 2.8×1.2~1.3, 深0.6~0.65 組合式大棺 2×0.7 No. 10 上塙 (一段塙) 2.9×1.7, 深1.05 組合式大棺 No. 11 上塙 1.5×1.05, 深0.25	No. 1 力子 1 No. 2 力子 1 No. 3 猫ノ神室と 埴輪部と土 器群 No. 4 猫ノ神室と 埴輪部と土 器群 No. 5 猫ノ神室と 埴輪部と土 器群 No. 6 猫ノ神室と 埴輪部と土 器群 No. 7 猫ノ神室と 埴輪部と土 器群 No. 8 猫ノ神室と 埴輪部と土 器群 No. 9 猫ノ神室と 埴輪部と土 器群 No. 10 猫ノ神室と 埴輪部と土 器群 No. 11 猫ノ神室と 埴輪部と土 器群	後期・末葉

山中義昭他

墓名	名称・序号	規模(m)	南北度	外觀裏見	埋葬施設(m)	遺物	時期
8.	聖地原第1号墓 色智郡磐梯町	方形塔 10.75×8.25 突出部を含む 11.5×9.5 高2.8 地山削り出し後盛土	貼石列	箱形石棺 2.0×0.52~0.29、深0.3 箱形石棺 2.05×0.33、深0.25 土壤 2.49~2.58×1.31~1.54、 深0.48	墳頂のストンサークル 砂、砾		後期・前秦
9.	仲仙寺第9号墓 安来市西赤江町	方形塔 18×15 突出部を含む (奥・反元) 21×19 高2 地山削り出し	貼石列	墳頂部3基 1. 土壇(二段掘) 3.7×2.8、深0.7 木棺を砂でカバー。 2. 土壇(三段掘) 3.5×2.7、底面に砂 3. 上塙(素掘) 3×1.2、楕円形に砂 墳頂部3基 4. 箱形石棺 1.7×0.5 5. 箱形石棺 1×0.35 6. 箱形石棺 0.4×0.25	1. 硬土質皆土 墳丘中央及び墳側から 土器(甕、瓶、壺、高 环など)		後期・後秦
10.	仲仙寺第10号墓	方形塔 18×18 突出部を含む (奥・反元) 21×21 高2 地山削り出し	貼石列	墳頂部11基 1. 土壇(二段掘) 4.5×3.3、深1.2 2. 土壇(素掘) 4.5×3.0、深0.9 3. 土壇(素掘) 2.8×1.3 4. 土壇(素掘) 1.5×1.5 5~11. 墓室不明 追掘部3基 12. 石釜上塙 13. 箱形石棺 14. 箱形石棺	墳頂部11基 頂部中央部・南側傾 斜面から上塙		後期・後秦
11.	吉山第4号墓 安来市西赤江町	方形塔 18×15 突出部を含む 20×24 高2 地山削り出し後若干 の盛土	貼石列	墳頂部1基 1. 土壇(二段掘) 4×3、深0.7 木棺を砂で覆う。 木棺を十と砂で覆う。 多量の赤色漆料 墳頂部1基 2. 土壇(素掘) 1.3×1、深0.3	1. 漆製大刀1 墳丘斜面～底部) 上塙		後期・太秦
12.	安養寺第1号墓 安来市西赤江町	方形塔 20×16 高2	貼石列	墳頂部4基 1. 上塙3.3、深1.2、 木棺2.3、幅0.5 木棺を砂で覆う。 2. 土壇2.7×1.5、深0.75、 木棺2.7、幅0.3 木棺を十と砂で覆う。 3. 上塙3.5×1.5 4. 上塙 墓室不明	1. 土壇上側から磨石、 高环、器台、空 巣形土器などが出土 2. 上塙上側から高环、 器台、空巣形土器などが出土		後期・後秦～ 木秦
13.	安養寺第3号墓	大方が破壊されてい たため規格は不明、 残存する一辺の長23 m以上	貼石列	不明	高环片		後秦・後秦～ 木秦
14.	坂津塙丘墓 安来市久保町	方形塔 34×26 突出部を含む (横走復元) 40×30 高3~4	貼石列				後期・後秦?
15.	下山塙丘墓 安来市西赤江町	方形塔 25×17 高2.5	貼石列		弥生上塙(斐片)		後期・後秦～ 木秦
16.	西谷第1号墓 出雲市大津町	半圓しているが8×5 の半圓丘を留める 高1.7 地山削り出し後盛土	貼石列	墳頂部に上塙4基 (横走不明)	周溝(上塙片)		後期・後秦
17.	西谷第3号墓	約40×30 高4.5 地山削り出し後若干 の盛土 突出部を横走約7 m 長5 m以上	貼石列	第1主体(二段上塙・木棺・ 木棺) 一段目=6.1×4.5 二段目=4.1×3.0 深1 木棺=2.6×1.3 木棺=2.1×0.8、底に朱 第2(上作) 木棺、大形七輪、 直上に朱漆 第3(上作) 1.5×1.4 底に木 (0.9×0.45)	第1主体底上: 約100 個程度 箱形蓄台、蓋、低脚 器、把手付器、 器台、特殊壺等、円 錐1 第1主体内部 ガラス製勾玉2、ガ ラス小玉約100、新 綠色灰岩製玉数10 (南斜面) 特殊蓄台、蓋、		後期・後秦

山陰地方における弥生墳丘墓の研究

番号	名 称・所 在	規模 (m)・発成法	外部施設	堆 積 高 度 (m)	遺 物	時 期
島	18. 西谷第4号墓	方形部 34×27 高約3.5~4 突出部を含む (推定復元) 40×39		木調査	骨残渣、特殊器台、 鉄形器台、高环	後期・後葉
	19. 西谷第9号墓	方形部 43×33 突出部を含む (推定復元) 50×46 高4.5		木調査	弥生土器小片	後期・後葉
	20. 間内越第1号墓 松江市久田町	8.8×6.66 高0.6 堆山削り出し後盛土 の盛上 突出部 基盤幅2.4 堆塁幅2.15 長 2.7	貼 石		墳丘中央部 (0.5×1.95m) 遺物集中 (放形器台 16、高环 5、他4個 体)、 墳丘壁) 上部	後期・後葉
県	21. 来美1号墓 松江市久田町	約10×約8 突出部を含む 約10×約10.5 高1.2~1.5 突出部約2 長約3	貼 石 石 列 (来川部のみ)	1. 土壇2.75×1.62 木箱式火葬 2.2×0.85、深0.7 高	1. 土壇直上 壁、放形器台 南側埴輪) 等	後期・後葉
	22. 玄丹道路 (貼石方砂量) 松江市浜乃木町	方形部 (東西) 10.5 南北合計 (東西) 12.5 盛土	貼 石 石 列	2. 土壇2.20×1.25 3. 土壇2.15×0.5~0.3 4. 上壇2.15×0.8 5. 土壇1.95×0.8~0.65 6. 上壇1.80×0.85~0.65 7. 上壇1.05×0.35~0.30		
	23. 南浦武小畠道路 八束郡鹿島町	高0.8	貼 石 石 列			後期・末葉
鳥	24. 口下1号墓 来子市口下	方形部 1.8×10m	貼 石	土壇4	墳丘上や周から上層 (器台・壁・台付など)	後期・前葉
	25. 阿努大寺第1号墓 倉吉市下坂田	方形部 13.6×(?) 突出部を含む 17.8×(?) 高0.8 地、堆山削り出し後盛土	貼 石 石 列	十幅1 (3.7) ×1.7、深0.43 木箱 (2.2) ×0.7、深0.15 十幅2 2.5×0.9、深0.2 埴輪 十幅12	埴輪) 盒、壁、高环、 器台	後期・前葉～ 中葉
	26. 阿努大寺第2号墓	方形部 6.4×(?) 突出部を含む 7.8×(?) 高0.3 堆山削り出し後盛土	貼 石 石 列			
取	27. 阿努大寺第3号墓	方形部 6.2×(?) 突出部を含む 8.8×(?) 高0.4 堆山削り出し後盛土	貼 石 石 列			
	28. 東谷第1号墓 若狭郡福井町	方形部 1.8×14 突出部を含む 推定約17 堆山削り出し	貼 石	1号木棺 約2.20×約1.30×約0.5 破れき 2号木棺 2.67×1.42、深0.63 木箱、93×0.61 1号土壙 1.77×0.86、深0.76 2号土壙 1.41×0.91、深0.61 3号土壙 1.24×0.83、深0.55 4号土壙 1.50×1.31、深0.5 5号土壙 6号土壙 7号土壙 8号土壙 9号土壙 1.24×0.94、深0.36	埴輪侧面 壁・空・器台・高环・ 瓦環 2号木棺) 等・鉄剣・ 等	後期末葉～古 墳初期?

田中義昭他

県名	名 称・所 在	規模 (m)・構成法	外因施設	埋 葩 施 設 (m)	遺 物	時 期
鳥 取 県	29. 内柱見堀丘墓 鳥取市桂見	奥山部を含む 東西約64~65 高約5 盛土	貼 石 列	S K01 組合式木棺	台付大型長錐型、大型 器台、大型特殊長錐型、 基台付特殊大形亞など	後期・後葉
	30. 鹿和 倉吉市山根	9.5×8.5	貼 石	主体部 十頭(一級) 約5.9×4.6、深1.5 箆竹形木棺 約3.3×約0.9	上器片	後期・後葉～ 末葉?
	31. 竹田 8号弥生墳丘 墓 吉田郡緑野町	方形(平頂) 14×(5.2~5.5) 高1.5 盛土 地山整形	石 列	十頭板A(裏) 土器板B(裏) 上器板C(裏) 下器板D(裏) 11号土塼 1.30×0.65、0.65~0.30 12号土塼 1.80×0.68~0.55 底位束 8号土塼 1.30×0.45~0.35, 深0.21 9号土塼 1.45×0.65~0.45, 深0.20~0.30 10号土塼 1.20×0.48 1号土塼 (1.05)×0.75 2号土塼 (1.40)×0.55 3号土塼 (0.75)×0.36 4号土塼 (1.10)×0.55 5号土塼 (0.75)×0.55 箆竹形木棺? 6号土塼 (1.60)×0.50 7号土塼 1.70×0.50 13号土塼 (0.45)×(?) 14号土塼 (0.75)×(?)	内邊 土器片	後期・初葉
岡 山 県	32. 岡原寺山第1号墓 加西市	長方形 9.5×6	貼 石	雅形石棺(B) 1.7×0.34 疊敷、粘土被覆 2体座葬(共に40歳位の 男性) 先 點形石棺(A) 1.58×0.3、厚0.2 粘土被覆 (20歳位の女性)	(B) 刀 f. 1・管玉 1	不詳
兵 庫 県	33. 一原遺跡 S X21 委任市	奥山部を含む 一辺28 高1~1.5	周 围		周溝) 上器(壺、高杯 など)	後期・末葉
石 川 県	34. 綾谷第4号墓 富山市綾谷	方形 一边約25 高約3 奥山部を含む 22.47~48 盛土	周 围	土器(?) (基盤石)	環状部) 土器(高杯、 壺) 周溝等) 上器(高杯、 壺)	後期・末葉?
	35. 宮崎 経営郡綾町	方形 一边21 高2~2	周 围			後期・後葉

〔本表は、松本岩雄が作成した表に著者が各墳丘の所屬期の欄を加えて改変したものである。各墳丘の時期については、報告書と次の文献を参考にした。〕

参考文献

出雲考古学研究会『古代の出雲を考える4 荒鳥墳墓群』、1985年。

埋蔵文化財研究会『定型化する古墳以前の墓制』第I、第III分冊、1988年。

山内紀嗣『墓地・四隅突起墓』、『弥生文化の研究8 祭と墓と装い』、1987年、岸山閣。

第5章 80年代の動向と若干の研究総括

《研究の概説》 弥生時代後半期の墓制をめぐる諸問題の解明において中国地方、とりわけ中部瀬戸内地方と山陰地方中央部ならびに両地方の中間の中国山地域には多くの関心が寄せられてきたし、またそれに相応しい話題を提供してきたといえる。とりわけ山陰地方や中国山地に特徴的な分布を示す四隅突出型の墳墓が提起する問題、あるいは山陽地方の代表的な弥生墳丘墓である倉敷市櫛築遺跡、そして備中地域を中心に特異な広がりをもつ特殊被形土器・同器台形土器等の問題は、弥生時代から古墳時代への転換ないしは移行のありかたを解明するうえで、もしくは時代を分かつ基本的事項の抽出という普遍的な問題の考察にとってきわめて重要視されることとなってきた。80年代にはこのような研究動向はいっそう顕著になったと思われる。

われわれは、これらの諸問題が地域史上でも原始・古代の全体史上においても看過すべからざることとして、このことに、より積極的に照射を當てるべく1983年から共同研究を実施し、その解明にいささかの寄与と貢献を圖ろうとした。成果の模様はI部第4章の東森市良の独自なまとめとII部の渡辺貞辛の「成果と今後の課題」に詳しい。また東森、渡辺は別に四隅突出型の墳墓について著作や論文をおおやけにしており、そこにも本研究の成果の一部が活用されているものと信じる（東森市良、1989年、渡辺貞辛、1988年他）。本章では、差し当たり80年代前半の研究動向と本研究実施当初における課題状況をあらためて想起して研究の経過を振り返り、皮案の大要を研究史上に位置づけ、さらに今後の課題を展望して若干の総括としたい。記述は、先の章立てや研究の経緯に照らして便宜的ではあるが、四隅突出型の墳墓の問題と土器編年問題に分けて行うこととする。

《四隅突出型の墳墓と墳丘墓》 80年代に入って四隅突出型の墳墓に関する課題は、これを弥生時代の墳墓として、または弥生墳丘墓として確認し、その分布状況の把握と変遷のプロセスならびに墳形、外部施設、棺構造等について可能な限りの検討を行い、また山陽地方の弥生墳丘墓との対比的研究によって、四隅突出型墳墓の地域的特性を明らかにしていくことであった。これらのこととは同時にそうした検討を通じて弥生時代の側から古墳発生の相と意義について見解を出すことにもなる。ここで結論を先取りしていえば、四隅突出型の墳墓は弥生墳丘墓の一類型として理解することが、現状では、もっとも適切である。これがわれわれの課題に対する一つ的回答であり、研究の到達点である。このように結論づけるに至った経緯を述べると以下のようになる。

- ① 山陰地方で四隅突出型の墳墓を弥生墳丘墓として積極的に理解する姿勢を最初に示したのは川雲考古学研究会であろう。1980年に同会が刊行した『古代の出雲を考える2 西谷墳墓群』は、出雲市所在の西谷丘陵上に群在する16基の墳墓について人念な観察といくつかの墳墓の測量調査を行い、それらの所属期と特徴を明らかにし、墳墓群のもつ意義を解

明したものである（出雲考古学研究会、1980年）。

注目されるのは、3号墓、4号墓、9号墓等、四隅突出型としては最大級の「方形墓」を含めてそれらを「弥生時代後期を中心に一部古墳時代前期にかけた所産」と明快に断じ、さらに「四隅突出型方形墓をめぐって」とする一項目をとくに設けて果敢とも受け取れる論を展開していることである。論の基調は、日本考古学協会松江大会の成果を肯定的に受け止めて四隅突出型の墳墓を「発生期古墳」とする従来の墳墓論と土器編年観に対し、叙上の観点から鋭い批判を投げ掛けながら曰く、「こうしてみると『四隅』＝古墳はどうも現時点においても、そして今後も成立しがたいようである」と。あるいは「私達は『四隅』を古墳と呼ぶことに無理が多いことを前節で検証」といったように「四隅」を「発生期古墳」とする見解を否定し、弥生墳丘墓として捉えることで貢かれている。80年代に新たな研究段階を直接切り拓く主張として高い評価が与えられることになろう。

- ② 出雲考古学研究会は、さらに進んで安来平野西部の弥生墳丘墓と前期古墳の調査研究に乗り出している。この地は70年代初頭に仲仙寺、宮山、安養寺の諸墳墓（四隅突出型の墳墓を含む）が相次いで発見されて話題を呼んだところである。ここでは四隅突出型の弥生墳墓と前期古墳が地域的に共存して同一のブロックを形成している点を重視し、弥生墳墓群のありようと前期古墳群のそれを、様相の詳細な分析を通じて対比して前者から後者への移行の問題を検討している。

会員等は、最早、四隅突出型の墳墓を何の外連珠もなく「四隅突出形墳丘墓」と呼称し、それらの年代づけに藤田編年を積極的に活用する。そしてこの種の墳墓の上器で「藤田編年V期（＝布留式併行期）にまでくだる資料はない」と明言している。安来平野の縁辺に分布する多数の弥生時代の上墳墓群、四隅突出型墳丘墓群、そして古式古墳群の個々の実態把握とその成果に立っての政治的な地域結合体の指定や変遷の諸段階の考察は、おそらく「未開上段階」の地域政治集団の性格と構造の解明に貢献するところが少なくないであろう。仲仙寺墳墓群の調査の際に近藤正が展望した地域研究の大筋は、10数年を経て出雲考古学研究会によって具体化されたとしてよいように思われる（出雲考古学研究会、1985年）。

- ③ さて弥生墳丘墓の提唱には若い研究者の遼遠い対応が特徴的であった。80年代中頃に相次いで発表された赤沢秀則、房宗寿雄、花谷めぐむ等の論及は、1979年の藤田論文に触発され、斯論文を起点として「四隅突出型方墳」問題にアプローチしている。課題に対する切り口や検証の方法、論の力点の置き方は三者三様である。赤沢、花谷は主として弥生後期から古墳時代前期の土器編年を再検討を通じて問題に接しているので、後段で触れるとして、ここでは房宗論文の要旨を紹介しておこう。

1984年の論文「『山陰地域』における古墳形成期の様相」の論点は多岐にわたるが、集約点は四隅突出型の墳墓の年代上の位置づけ、分布と変遷の検討によって弥生墳丘墓段階

の諸相を明らかにし、前期古墳の川現を展望しようとするとこにあると理解する。解釈の前提となる土器編年については複合口縁の変化に着目し、これを藤田編年等に照らしながらⅠ期～VI期に区分するという方法をとっている。このことと論を結ぶに当って「古式畿内型古墳は、『四隅』の否定の上に成立するものではなく、発展的解消の所産である」としたところに問題への接近の特色と力点があるとみた（房宗寿雄、1984年）。

- ④ 四隅突出型の墳墓を弥生墳丘墓の一地域形態として前方後円墳を核とする古墳成立の前段階に位置づけ、その歴史的意義を明快に説いたのは近藤義郎である（近藤義郎、1983年）。近藤は1985年にも「四隅突出型墳丘墓の出現と変遷」と題する一文をおおやけにしている（近藤義郎、1985年）。斯文は同じ題名の講演を収録したものではあるが、四隅突出型の墳墓の輪郭を明確にし、その地域史的意義を具体的に述べた画期的なものであって、同年岡山県鏡野町竹田墳墓群の調査報告に収載された論文「四隅突出型弥生墳丘墓二題」（近藤義郎、1984年）とともに、いわば「四隅突出型墳丘墓特論」とでも称すべき内容のものである。

1985年の斯文ではとくに四隅突川型の墳墓の諸要素と最古式前方後円墳のそれらとの対比から前者が弥生墳丘墓として区別されることの事由を明確に示し、出雲地域に分布する四隅突川型墳丘墓はこの種の墳丘墓でも一定の儀式化ないし定形化を遂げたものであること、それらが当地域の東西にを中心をもちながら展開した弥生後期後半期こそは「それまでバラバラだった出雲の諸集団が初めて自らを自覚した時期」であり、「出雲がもっとも川雲らしかった時期」と強調している。四隅突出型の墳墓に関する結論がえられたともいえるが、近藤は「これはいうまでもなく一つの仮説であります」と結んではいる。

1989年に山本清が鼓形器台の徹底的な調査による新研究の成果を披露した。山本はそこで四隅突出型の墳墓を「四隅突川型方形墳丘墓」と呼称し、「その時期は弥生後期が多いが、古墳時代前期もあり、弥生中期でもその可能性のあるものがある」との見解を示している（山本清、1989年）。この短い文言には70年代初頭以来の四隅突出型の墳墓を巡る問題の当面の一つの帰結と今後の課題をみる思いがする。

- ⑤ さて、われわれの共同研究は80年代の中頃を中心に行われている。無論以上に紹介し、少々の意見を添えた各研究の成果に学び、導かれつつ進められたことはいうまでもない。そしてわれわれの研究もまた、四隅突川型墳丘墓を巡る研究の進展にいさか寄与していることを自負するものであるが、それらの具体的な成果と到達点については、先述のように、第Ⅰ部第4章のまとめと第Ⅱ部第6章に述べられているので詳細はそちらに譲ることとし、若干の事項について補足しておこう。

- i) 先ず四隅突出型墳丘墓の分布の問題であるが、その東限としては早くから富山市「杉谷第4号墳」が著名であった。その所属年代については弥生末期とする見解がある（山内紀嗣、1987年）。その後同じく富山県婦負郡婦中町富崎でも四隅突川型墳丘墓の発見があり、

北陸地方への広がりが偶発的なものでないことが知られた。富崎例は貼石・石列等をともなわないようで、時期は弥生後期末とされている（久々忠義、1990年）。

こうした日本海岸に沿った広がりに対し、中国山地域における四隅突出型墳丘墓の分布状況の判明したことが80年代の研究を特徴づける。しかも低い墳丘に短小の突出部を設けた形態の特色と時期的に弥生中期後半から後期にかけて營まれたとされるところが注目されるのである。川原がこれら的一群を指して「四隅突出型祖形墓」とする考え方を明らかにしているが、一つの見解であろう。差し当たりの検討課題としては、弥生中期後半から後期前半のこれら短小の突出部をもつ墳墓が、例えば矢谷MD1号墓等と系譜的にどうつながるのかを中国山地域でいま少し追及することがあると思う（桑原隆博、1986年）。そうした地域内での変遷過程を系統的にたどり、その意義を確認することが何よりも必要である。弥生後期後半に出雲地域に展開する「定形化を遂げた」四隅突出型墳丘墓との対比も、厳密にいえばそうした地域間の比較条件を揃えたうえで行なうことが望ましい。

- ii) 次に四隅突出型墳丘墓の大型化と終焉の問題に触れておきたい。西谷3号、4号、9号の各墳墓が最大級の規模を誇るだけでなく、貼石・列石等の墳丘施設においても傑出した構造をもっていることが判明している。渡辺貞幸は、このような様相を四隅突出型墳丘墓の「特殊化」現象として理解しようとしている（渡辺貞幸、1988年）。含蓄のある興味深い指摘であろう。そうした特性の内容には、いまでもなく、3号墓、4号墓に特殊器台形土器・特殊壺形土器がともなうことも含まれるのであるが、それらがほとんど時を隔てずに、相続いで兼造されるとう、いわば多段的に出現していることを重視しておきたい。そこでは地域の歴史的・主体的条件のありかたが問題になることもさることながら西日本規模での、いわば国際的契機をも視野に入れた検討が必要かと思われるからである。

四隅突出型墳丘墓の終焉に関しては、先に示した、出雲考古学研究会が「今まで知られている四隅突出型墳丘墓出土の土器で藤井V期（布留式併行期）にまでくだる資料はない」とした指摘に現在の基本的な到達点があるとみた（出雲考古学研究会、1985年）。いわゆる「小谷式」に所属するとされる四隅突出型墳丘墓も「存在する」が、ここには出土土器の型式学的な検討が、「小谷式」土器自体の再検討ないしは細分の問題とも併せて進められる必要があろう。

- iii) 最大級の四隅突出型墳丘墓である西谷3号墓の発掘調査は、この種の墳墓の研究に小さくない成果をもたらしたとしてよいであろう。具体的な内容については第II部の発掘報告に譲るが、特記すべきいくつかの点を以下にあげておきたい。

- (a) 巨大な墳丘と墳丘斜面や埴縁の貼石・列石の特異な構造については既に触れた。傑出した特徴の一つがこのような墳丘の規模と「外部施設」にあることは確かである。
- (b) 次いで示すべきは棺槨構造である。発掘された第1主体は「木槨木棺」と称される構造であることが明らかにされた。これは、その規模とともに山陰地方では類例をみ

ないものである。そして3号墓の築造は、墳丘の中央部に並列するほぼ同規模の第1、第4主体の被葬者を葬ることを契機としていると考えられる。

(c) 弥生墳丘墓の埋葬にともなう副葬品は、一般に「貧弱」とされる。そうした傾向の中でも第1主体に副葬された玉類の量とそれらの特異な形状も注目に値するといつてよいであろう。このことと墓壙上から検出された各種の供獻土器の莫大な量もまたこの墳墓の傑出した側面を伺わせるに十分である。目下調査中の第4主体には大量の特殊器台形土器・特殊壺形土器の供獻が伝えられている。第1主体にともなった上器群は、從来の編年でいえば、的場式土器に相当する。と同時にその型式内容と特徴をより豊かに、鮮明にしたといえる。そして他地域の土器羣式との対応についてもいっそり確かな情報がもたらされたことも特筆してよい。山陽側の特殊土器編年における立坂期が山陰側の的場式期と併行関係にあることは確証されたとみる。なおこれらとはほぼ同時期の特殊土器が川雲平野の拠点的な弥生集落址とみなされる出雲市矢野遺跡からも発見されていることを付記しておこう（田中義昭他、1989年）。

いずれにしてもこのような諸事実の解明が、四隅突出型墳丘墓の歴史的位置づけに大きな意味をもつことは疑いないところである（この項は田中義昭、1985年、渡辺貞幸、1989年による）。

iv) ここで西谷3号墓とほぼ同時併行的に実施された岡山市津守～新庄下にある雲山鳥打弥生墳丘墓について、その概要を記しておこう。この墳丘墓群は足守川右岸の丘陵上に位置し、3基で構成される。1号墓はほぼ長方形（約20m×15m、高さ2.7～3.7m）の墳丘で、地山を削り出した上に盛土している。平坦な墳頂部には円礫が敷かれており、そこからは三つの埋葬施設が検出された。第1主体は数個の縁を棺台にしてその上に木棺を置いたものとみられる。また木椁様の構造物の底ごめかと思われる石積みが検出された。遺物としては丁字頭の勾玉1個が出土している。第2主体も木棺で、棺底部には朱が敷かれていた。ここでは管玉が2個出土しているが、棺上に置かれたものと判断されている。第3主体は、いわゆる木椁木棺構造の埋葬であった。棺内からは少量の朱が検出されている。

2号墓は径約20mの円形墓で、やはり地山を削って整形し、その上に盛土していた。埋葬主体は3基発見されている。いずれも木棺とみられる。第2主体からは管玉と鉄鏹が出土している。3号墓は長方形ないしは椭円形の墳丘（約18m×13m）で、築成法は地山を整形した後に盛土するやり方である。墳頂部に掘り込まれた墓壙には木棺が収められていたようである。なお、1号墓、2号墓とともに特殊器台形土器・特殊壺形土器をともなっていた。これら3基の墳丘墓の築造期はいずれも弥生後期、鬼川市Ⅲ式期とされるが、2号・3号墓が1号墓に先行するという。

雲山鳥打弥生墳丘墓群は、その棺椁構造、朱の使用、特殊上器群の伴出で特徴づけられる首長墓であって、吉備最大の墳丘規模と傑出した埋葬設備、それに多量の特殊器台形土

器、特殊壺形土器等を出土して注目された橋築弥生墳丘墓と同一の地域集団を構成するものとみられている（近藤義郎、1986年）。山陰側でいえば西谷丘陵遺跡の四隅突出型墳丘墓群、安来平野西城の弥生墳丘墓群との対比が考えられよう。

《土器編年について》 これまで縦々述べてきたところで明らかに四隅突出型墳丘墓を巡る謎問題は、当該期の土器編年の問題と不可分であった。そして80年代の土器研究が藤田編年に依拠して、あるいは從米通りの的場・「鍵尾I」式以下の型式群を踏まえて展開されてきていることも分明である。良好な新資料の提供があまり抄々しくない状況のもとで、これらの研究が、既存の資料の再検討ないしは再編成という形をとらざるをえなかったのは、ある意味では止むを得ないことのように思われる。しかし80年代に上流となった土器研究の特徴は、それが準拠する資料の証拠能力の確認、時間的編成の仕方において70年代のそれを越えるための新軸を川そうとする意図がみられることがある。そうした傾向は、既に触れたように、赤沢秀則、花谷めぐむ、戸宗寿雄等若い研究者の論文に著しい。戸宗論文については先述したので以下に赤沢、花谷の論文の概要と特徴点について略記しておくこととする。

① 赤沢秀則は1985年に、藤田編年に準拠しながら弥生後期前葉から古墳時代前期（赤沢Ⅰ期～VI期区分とし、V期以降を古墳時代とする）にかけての土器型式の変遷について述べている（赤沢秀則、1985年）。赤沢の土器変遷を追及する日は、各個体のプロポーション、形式の組合せは無論のこと、とくに土器整形の細かい技法の変化に向けられている。そして山陽系土器の搬入が顕著な時期として赤沢Ⅲ期を設け、ここに的場・鍵尾遺跡出土土器を収めると同時に、本期が藤田Ⅲ期とはば重なることを示す。なおこの時期の細分については、既に藤田も指摘しているところであるが、赤沢も整形技法の流れから将米細分可能の時期と認識している。

藤田編年の特徴の一つが、そのⅢ期（「鍵尾式」と「小谷式」）と「龜川上層式=V期」間にIV期を置いて弥生土器から古式土師器への移行をスムーズに理解しようとする点にあつたことは前項でみた。赤沢もこの手法を有効なものとして受け止めながらも、やや視点を変えて、この段階が畿内系土器の流入期として捉えられることに着目し、ここに米子市尾高城址遺跡川土の庄内式變形土器を含む一群の十器を当てている。また神原神社古墳出土土器は、そのV期に含まれることも示して藤田編年との相違を明らかにした。こうして搬入土器のありかた、整形技法の変化に殊の外留意する赤沢の編年は、自らも認めているように、今後さらに資料の新出・増加をもって細部の埋め合わせによるより正確なものへと発展することが予測される。そのことへの確信が「さらに、『鍵尾II式』に含められ、しばしば最古の『畿内型古墳』とされてきた松本1号墳も出土十器をみると、くり返し述べてきたように畿内布留式に併行しており、『鍵尾式』の範疇に含めうるものではない」とか「山陰を中心として広く日本海側に分布する四隅突川土器は、その出土土器で管見に触れるかぎりにおいてはV期にまでくだる資料は絶無であり、その盛行期はII・III期に見ら

れるようである」とするような発言となって表われているように思われる。

- ② 花谷めぐむの論文は、1987年に公表されている。60年代、70年代の研究史はもちろんのこと、赤沢、房宗論文にも一定の批判を加えたうえで弥生後期から古墳時代前期にかけての十器編年の問題に取り組む。その方法の特徴は、各形式の組列を編成し、しかる後にそれらが一括土器群においていかなる構成を示すかについて検討をする。そのような縦年作業を経て型式設定を行っているが、結果としては、従来の九重式、的場、「鍵尾I式」、「鍵尾II式」として捉えられてきた各型式の内容のあいまいさを排し、新たに「九重3号墓式」、「的場式」、「鍵尾A区5号墓式」として再編成している。さらには「鍵尾A区5号墓式」と「小谷式」の間に「大木権現山古墳群」出土土器を介在させ、これに「大木式」の型式名を付与している（花谷めぐむ、1987年）。

- ③ ところで80年代の上器研究の動向を示すものとして1986年8月に島根大学を会場にして開かれた第18回埋蔵文化財研究会をあげておく必要があろう。「弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系上器について」のテーマにより西日本各地に分布する「山陰系上器」の様相について研究発表が行われた。山陰地方では島根県から赤沢秀則が、鳥取県からは上井珠美がそれぞれ報告に立ち、近年の発掘調査の成果による当該時期の十器編年について述べている（赤沢秀則・上井珠美、1986年）。赤沢報告の骨子は1985年の論文の趣旨にほぼ沿ったものである。上井報告は、鳥取県中部の天神川流域の諸遺跡の調査研究からえられた成果を基にした当該期の十器編年を内容としている。本研究との関わりでいえば、阿弥大寺墳群の四隅突出型墳丘墓群が弥生後期前葉から後葉にかけて営まれたものであることを明示した点を注目したい。このことは第2章の名越報告でも触れられたところである。

また上井報告では、集落遺跡や墳墓出土の土器を、それぞれの特性に配慮して編年のネット・ワークに組み入れているのが特徴であり、とくに相対的に豊富な土器資料を活用して「阿弥大寺III期」以降について細かな時期区分を試みていることに関心がもたれる。このような地域ごとの、目配りの利いた上器型式の時間軸上の編成が地域間対比の基礎でなくてはならないことはいうまでもない。

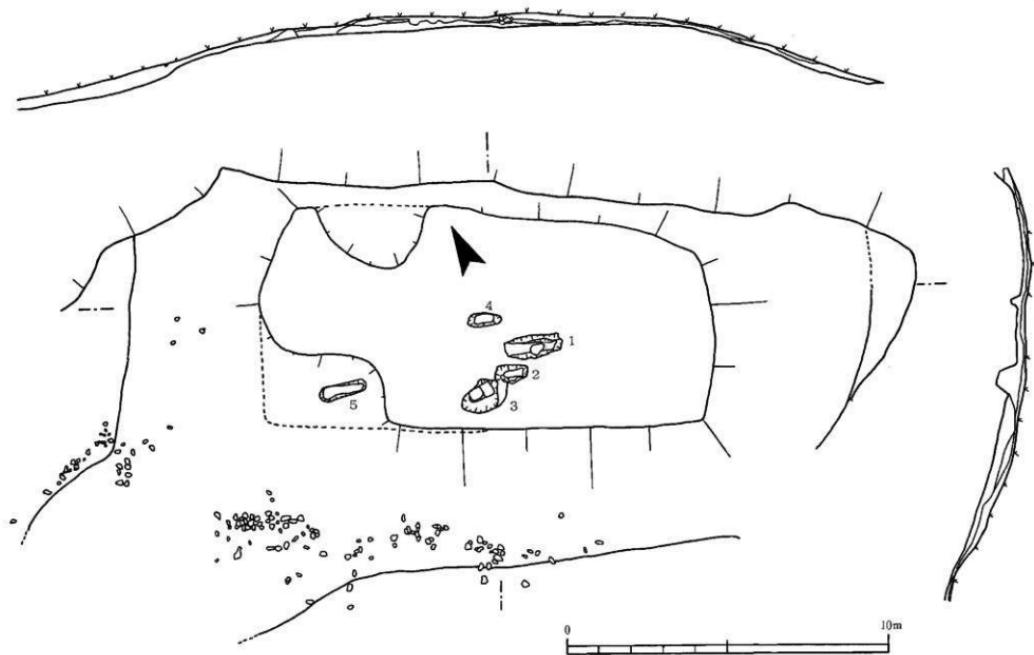
- ④ 第18回埋蔵文化財研究会後に清水貞一が、研究会参加の感想を含めて青木編年の序列と特徴点を示して、その正当な評価を求めている（清水貞一、1986年）。斯文は十器編年問題を正面に据えて論じるといった内容ではないので、詳細な論評の対象とすべきではなかろうが、兼ねてより集落遺跡出土の土器による編年研究を基底にすべきと主張してきた清水の真意がよく語られていて参考になる。また青木III期とする時期について「この時期、鳥取市西桂見遺跡では、一辺60mもの大規模な墳丘をもつ、四隅突出型墳丘が作られる。これは、各地での最大規模の『不定形』な墳丘が作られるのに呼応した形で成立するとみられ、岡山県橋築遺跡・島根県西谷丘陵遺跡・奈良県石塚古墳等と時期が重なると考えら

れる」と述べているのが注意される。ただ、筆者（田中）が本章等で積極的に評価してきた赤沢、花谷、房宗等の研究を「いずれも藤田編年の亞流でしかない」とするよりは其だ承服し難い。いずれ3者を含めて当地の研究者からの反論を期待したいところである。

1988年に房宗寿雄が80年代の土器研究に関する諸論を対象にして、それらに一定の批判を加えながら自らの上器編年を補足・強化する論陣を張っている（房宗寿雄、1988年）。内容の詳細に立ち入る余裕はないが、次の文節は、上記の清水の批判に対する一部の回答ともなりうるもので、ここに引用する。当の文節は、房宗が花谷への批判を展開する個所で、花谷が研究史上の問題点としてあげた「四隅突出型墳墓の出現を古墳の発生とみなすような歴史概念に、土器編年がひきずられて云々」としたのに対して、この点は「最近の研究において克服されている」と断じているものである。四隅突出型墳丘墓を巡る問題の現状を、はたしてこのように明快に評し切ることができるかどうかは、躊躇なしとしないが、大勢は房宗の指摘の線で進行しているといつよい。清水からみれば九重式以降「小谷式」に至る上器編年は、所證、「出處の編年」ということになろうか。ただ、それは亦生墳丘墓認定の研究史と不即不離の関係にあったことを、蛇足ながら念のために付記する次第である。

《「鍵尾式」について》 花谷めぐむは、先の論文で赤沢や房宗が試みた弥生後期から古墳時代前期までの土器編年においては「藤田氏の指摘された問題点は解決されていない」と指摘した。これは藤田が山陰地方の当該期編年の問題点としてあげた二つの点の第2点目のことを指すと思われる。つまり安来市鍵尾遺跡出土土器の整理が不十分なままで「鍵尾式」、「鍵尾I式」、「鍵尾II式」等の諸型式が設定され、それが四隅突出型墳丘墓を「発生期古墳」とみなす等、弥生後期墳墓や古墳発生の理解に大きな影響を与えとことを問題視したものであった。藤田がこのことについては当地の研究者の「姿勢」の問題として手厳しい批判したことには既に触れたところである。その後もこの問題点の克服、つまり鍵尾遺跡資料の整理は遅々として進行していない。標題のように研究課題を設定し、その解明を図る作業の責任者の立場にあった筆者には自己批判が要求されるところであろう。以下では「鍵尾式」に関わる問題の現状を整理することと、一昨年から進めている同遺跡出土土器研究の一端を紹介して貰めの一部を寄ぎたい（I部付章参照）。

- ① 1960年代中葉に鍵尾遺跡出土土器を「鍵尾式」もしくは「汎鍵尾式」と呼称し、その後これを2分して「鍵尾I式」、「鍵尾II式」とした経緯については詳述した。そして70年代に前島・松本が「鍵尾A区第5号墓の出土土器を純粋な指標」として設けた型式に「鍵尾式」の名称を付与したことも既述の通りである（前島巳基・松本岩雄、1976年）。また藤田も「鍵尾I-的構造を除くI-IIの区分は、今のところあまり必要ない」との判断から「鍵尾I・II式」を総称して「鍵尾式」とした（藤田憲司、1979年）。加えて1987年に東森が「鍵尾A5号土墳墓の土器をもって標式とする」「鍵尾式」を提唱し、平所1号仕



第50図 大木椎現山1号墳平面・断面図
(東出雲町教育委員会「大木椎現山古墳群」、1979年より、一部改変。勝瀬製図)

居址出土土器群を「同時期の所産」とする考え方を明らかにしている（東森市良、1987年）。

われわれの調査による西谷3号墓の第1主体部の墓壙上から大量に出土した土器群が、的場式に相当することを述べたが、土器整理に関わった松本は、この事実から「私は現在でも的場式土器・鍵尾II式上器と分けた方が良いものと考えている」との見解を表明している（松本岩雄、本報告II部第5章第6節参照）。

他方、こうした「鍵尾式」を巡る複雑な状況を擇上げて、もっぱら藤田嗣年に依拠した年代づけも行われており、そうした事情のもとでは深い問題の根を即時に取り去ることはなお困難とせざるをえない。これは反省の弁を含めてのことであるが、少なくとも鍵尾遺跡の上器の総体を明らかにしたうえで、弥生後期、とくにその後半期の土器型式ならびに「小谷式」の認定について当地の研究者間の共通認識を作り出す方向の努力が緊急に求められるといえる。

② かくして「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」も未解決の問題を多々確認して終わらざるをえないこととなつたのであるが、しかし考古学的地域研究の前進が停止させられたわけではない。80年代の諸研究、わけても川雲考古学研究会の地道な活動、渡辺貞幸を中心とする西谷斤陵遺跡の綿密な調査が70年代の研究水準を大きく押し上げていることは周知であろう。そしてわれわれの共同研究も、また、本報告に表されたような矛盾を、多々含むとはいえ、そうした研究段階をつくりだすのに多少とも寄与したであろうことを率直に自認する。

以上のような80年代の考古学的地域研究をさらに高い峰へと導く仕事が山本清によってなされている。山陰地方における考古学的研究課題は多々あるが、弥生墳丘墓から古墳への転換ないしは移行の問題は、中でも最重要課題としての位置から斥けられることはまず考えられない。その意味で山本の新研究は、その一部については、先にも少々触れたところではあるが、90年代に一つの展望を拓くものとして注目されるのである。よってここにその概要をあらためて紹介することをもって本研究報告を結び、闇筆としたい。

1989年に山本はその著『出雲の古代文化』において「山陰の鼓形器台と古代の墓制」なる一章を設けて、この地方に色濃く分布する特徴的な土器としての鼓形器台の徹底的な研究の成果を披露している。そこでは山陰各地出土の弥生後期中葉から古墳時代中期に及ぶ各期の鼓形器台を約40遺跡出土約70個体について詳細な測定を試み（実際にはこれ以上の個体が計測されたものと思われる）、その数値を器形・プロポーションと対比しながら「九重3号墓型」、「的場型（または鍵尾I型）」、「小谷型」、「開地谷型」の4タイプを設定、この型式を核として弥生墳墓と古墳の変遷に説き及んでいる。注目されることは「小谷型」という鼓形器台の一型式を立てることで、かの「小谷式」土器の認知に正式に踏み切っていることである。ともあれ、ここで山本が示した実証的な研究方法の緻密さと徹底ぶり、あるいは地方全体への目配りは、後続の研究者の追隨を許さないほどである。

が、われわれも山本の方法に謙虚に学びつつさらに前進しなければならないであろう。

長い総括となつたが、内容はきわめて難解なものである。本共同研究に参加された諸氏の想いをどれだけ集約できたか、甚だ心許ない。寛怒をお願いする。また文中では敬称・敬語の使用を控えた。非礼があればこれも御寛容を願う次第である。

最後になったが、四隅突出型墳丘墓の問題に關わって10年の歳月が流れようとしている。不徳と不勉強に加えて墳墓の問題の複雑さに戸惑うこと再々、ようやく報告の形を整えることができ安堵このうえない。このような筆者に絶えず課題への挑戦と學問の厳しさを教えられ、導いて頂いた山本清先生の学恩に対し、ここであらためて、衷心から御礼を述べる次第である。また弥生墳丘墓の問題を取り上げることの意義と必要性を説かれ、懇切な指導を頂いた近藤義郎先生にも謝意を表して、負うところを明記しておきたい。

なお本文をまとめるに当つては下記の方々から数多くの教示と資料の提供を受けている。記して深甚の感謝を申し述べたい。

赤沢秀則、足立克己、宇垣匡雅、大谷晃二、角田徳幸、勝部昭、高橋護、西尾克己、広江耕史、松本岩雄、松山智弘、三宅博士、宮本止保。

(田中義昭)

引用・参考文献

- 1976年 前島巳基・松本岩雄「島根県神原社古墳出土の土器」『考古学雑誌』第62巻第3号。
- 1979年 藤田憲司「山陰『鏡尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号。
- 1980年 出雲考古学研究会『古代の出雲を考える2 西谷墳墓群』。
- 1983年 近藤義郎『前方後円墳の時代』、岩波書店。
- 1984年 房宗寿雄「『山陰地域』における古墳形成期の様相」『島根考古学会誌』第1集。
- 〃 近藤義郎「四隅突出型弥生墳丘墓二題」『竹田墳墓誌』、競野町教育委員会。
- 1985年 近藤義郎「西隅突出型墳丘墓の出現と変遷」『季刊文化財』第53号。
- 〃 田中義昭「島根県西谷丘陵跡」『日本考古学年報』38、日本考古学協会。
- 〃 赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年式案」『松江考古』第6集。
- 〃 出雲考古学研究会『古代の出雲を考える4 荒島墳墓群』。
- 1986年 赤沢秀則「基調報告 島根県下の状況」『第18回埋蔵文化財研究会弥生時代後期から古墳時代初頭の山陰系土器について』、第18回埋蔵文化財研究会事務局。
- 〃 土井珠美「基調報告 島根県下の状況」 同上誌。
- 〃 桑原隆博「四隅突出型方形壇覚書(1)」『芸備』第17集。
- 〃 近藤義郎「雲山鳥打弥生墳丘墓群」『岡山県史』第18巻・『考古資料』。
- 〃 清水真一「『山陰の弥生時代終末期の土器の様相』『東アジアの古代文化』第46号。

山陰地方における弥生墳丘墓の研究

- 〃 花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究－島根県内の資料を中心として－」『島根考古学会誌』第4集。
- 〃 渡辺貞幸「出雲と吉備の交流」『日本考古学協会1987年度大会研究発表要旨』。
- 〃 山内紀綱「墓地・四隅突出墓」『弥生文化の研究8 祭と墓と葬い』、雄山閣。
- 〃 東森市良「中・四国地方の弥生土器 九重式・的場式・鍵尾式」『弥生文化の研究4 弥生土器II』、雄山閣。
- 1988年 房宗寿雄「山陰地方における古墳形成期の土器編年について－最近の研究状況をめぐって－」『島根考古学会誌』第5集。
- 〃 渡辺貞幸「定型化する古墳以前の墓制－山陰地方－」『第24回埋蔵文化財研究会（発表要旨）』。
- 1989年 田中義昭他「山陰市矢野遺跡の発掘調査」「古代山陰文化の展開に関する総合的研究－斐伊川下流域を中心として－」、島根大学。
- 〃 渡辺貞幸「山陰市西谷3号弥生墳丘墓の調査（概要）」「古代出雲文化の展開に関する総合的研究－斐伊川下流域を中心として－」、島根大学。
- 〃 東森市良「考古学ライブリリー-54 四隅突出型墳丘墓」、ニュー・サイエンス社。
- 〃 山本 滉「人類史叢書8 出雲の古代文化」、六興出版。
- 1990年 久々忠義「綾中町富崎四隅突出型墳丘墓」『埴文とやま』第32号。

本報告Ⅰ部の印刷着手は、1986年度末であったが、その後成果の大軒な手直しの必要に直面したこと、執筆者の交代、さらに編者の私的事情もあって、最終的な編成は1990年末となった。各報告者にはその間の研究環境の変化や新資料の増加等を加味して、執筆内容の追加、補充をお願いしている。したがってここに報告された内容は、1991年3月（各報告者から届けられた最後の改訂文の到着時期）までを含んでいる。御了解を乞いたい。（田中、追記）

付章 島根県鍵尾遺跡出土の土器について

1. はじめに

近年、島根県における弥生後期後半から古墳時代初頭にかけての土器研究は、編年研究を中心に多くの論考が発表^①され、活発な状況にある。しかし資料的な制約もあり、いずれの編年試案もそれなりに問題点を内包しており、統一的な編年案としては採用されにくい状況である。その問題点の一つとして、発掘後およそ30年間、常に論議の中心にありながらその全容が不明瞭であった、鍵尾遺跡出土の土器の扱いがあり、現況においても、これらの土器の早急な出土状況を踏まえた全資料の公表が待たれている。

筆者は、島根大学在学中に、山本清先生の御好意により鍵尾遺跡出土の土器を網羅的に岡化することができた。今回その成果の大要を、編者の要請に応えて、以下に紹介をさせていただくこととする。

なお、本稿では遺跡の概要は省略する（第3章参照）が、ここに紹介する土器は、発掘調査により△区より出土した土器であり、既公表資料とは山本論文「山陰の土師器」^②に掲載されたものを指す。

2. 出土土器について

1962年以来の山本清氏による発掘調査において出土した土器は、現在島根大学において保存・管理され、これまでにそのごく一部が発表されている。多くは破片資料であり、完全に復元しうるものは一部である。土器の総個体数は少なくとも80個体は下らないと思われ、そのおよそ半数が鼓形器台で占められている。以下、各器種ごとに特徴を述べる。なお、細かい観察データは、「鍵尾遺跡出土土器観察表」（145P～147P）にまとめた。

① 器台形土器（1～20）

明らかに器台形土器であるといえるものは、いわゆる「鼓形器台」のみであった。

大別すると〔A〕外面に平行沈線をもつもの（1～6）、〔B〕外面に平行沈線をもたず、ヨコナデを多用するもの（7～20）がある。

〔A〕は、施文原体の違い、ヘラミガキなどの手法の用い方で若干差異が見られるものの、形態的には、筒部は引き継まり、厚みがあり、内面で筒部から脚台部への変換点（稜）が明確でないという点、筒部の中程で上下を組み合わせて成形する技法などが共通している。1は、公表されている資料である。

〔B〕は、いくつかのバリエーションがある。引き継ぎた筒部をもち、特に脚台端部に特徴的なシャープな平面をもつもの（7・8）は、筒部内面の形態や成形技法で〔A〕に通

じる点が多い。16・17は、外面にヨコナデののちヘラ状工具によりタテ方向に暗文状の文様を施しており、これらは全体を復元し得る資料がなかったが、いずれも筒部にタテハケを行なう。また9と11を比較してみても分かるが、口径と高さの比率が〔A〕に近い11のようなものと、高さが低く筒部径の大きい、9のようなものがあり、個体間での差は大きい。

② 壺形土器 (21~25、29・30)

21~25は小・中型品である。口縁帯に文様をもつもののうち、21はつくりも厚く文様もしっかりしているのに対し、22は繊細である。24・25は口縁帯はヨコナデで仕上げられ、薄くやや外反する。肩部には櫛状工具による波状文や貝殻刺突文などの文様帯をもつ。公表資料においても同様な形態のものが紹介されている。29・30は人型品で外面にススが付着している。

③ 壺形土器 (26~28、31・32)

壺形土器は対応する時期の様相が他器種に比べよく知られていないため、以下が確実に在地の系譜のなかで辿れるか今後検討が必要である。胎土は32以外は他器種と同様である。26は、3~4条の擬凹線であるが、最終的なヨコナデで多く消されており明瞭ではない。27・28の口縁帯の技法も2~3条の凹線を施したのち強くヨコナデを行うもので共通する。公表資料のうち頸部以下凹線、刺突文をもつ「上束式に通じる」^⑩とされていたものはこれらと共に通する。31は以上と様相を異にし、在地系譜のものであると思われる。32は胎土・形態とも古備系の壺である。公表資料とは別個体である。

④ 低脚壺形土器 (35・36)

杯部は直線的で肉厚である。

⑤ その他 (33・34、37・41)

33は小型の高杯または器台の脚部であろう。34は、器種不明。37~41は壺または壺の底部であり、胎土や色調などから、37は壺24・25などのものであり、41は27などのものであると思われる。

高杯形土器は確認できなかった。

以上の他に既公表資料には古備系土器、直口の小型壺、脚付き装飾壺がある。

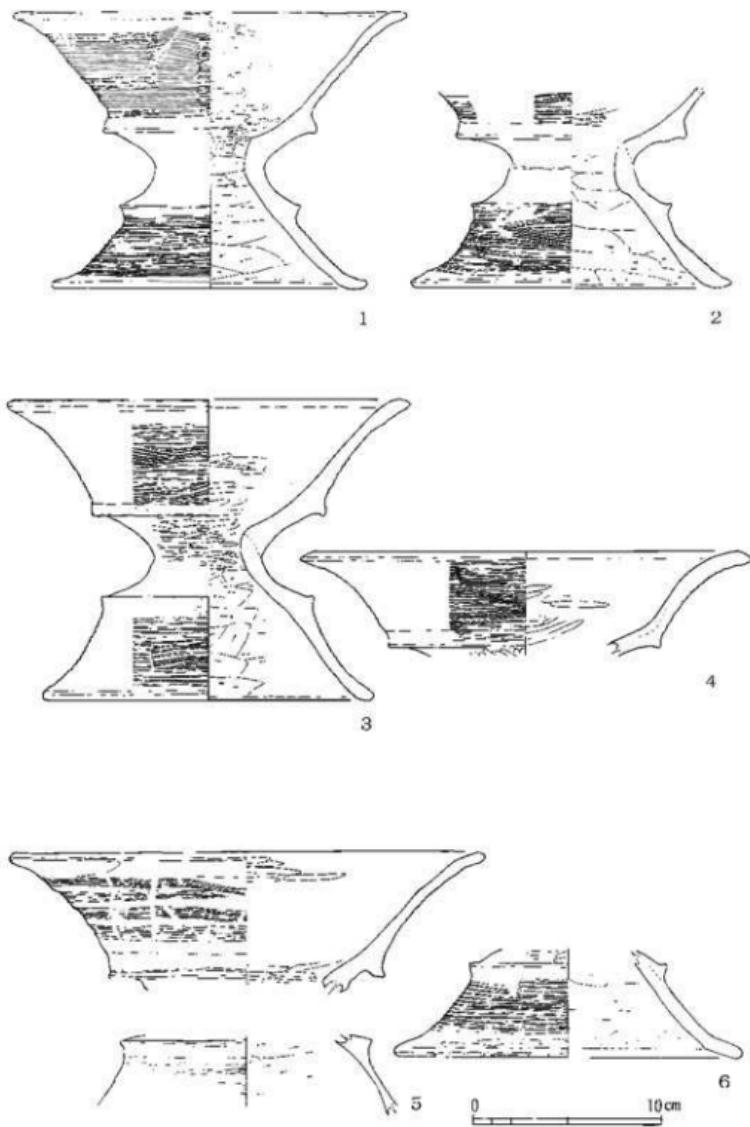
3. おわりに

以上、土器の特徴などを中心に紹介してきた。これらの上器の編年的位置づけについては、今回不十分である数量的な面からの検討と、出土状況から供獻時のセットの復元という作業を行い、今後さらに詳しく検討を加えていくべきであろう。ただ上器からみた鍵尾遺跡A区のもつ時期幅としては、これまでの編年研究の成果をも勘案していえば、今のところ内谷3号墓や的場遺跡の時期を起点とし、終末は神原神社古墳や大成古墳の出現以前までであると考えて差し支えないであろう。

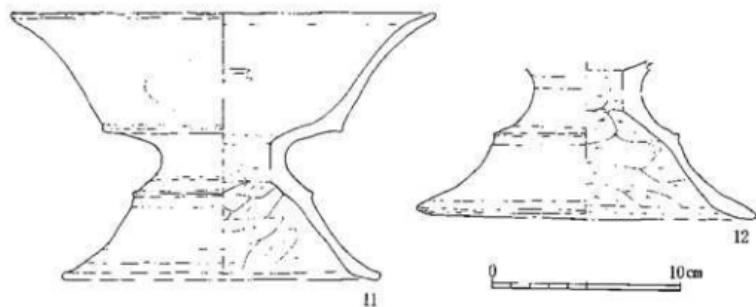
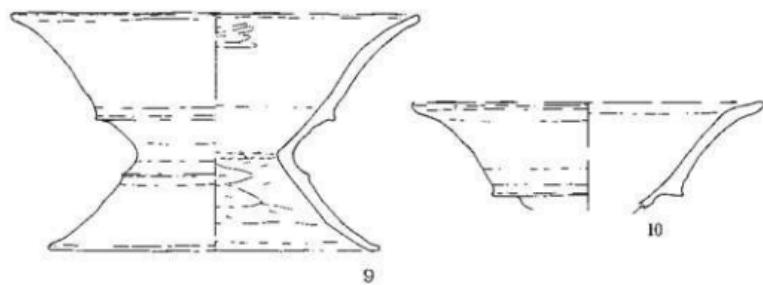
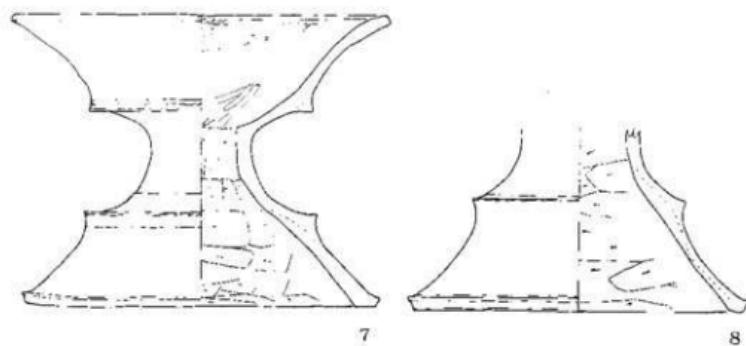
(勝瀬利栄)

註

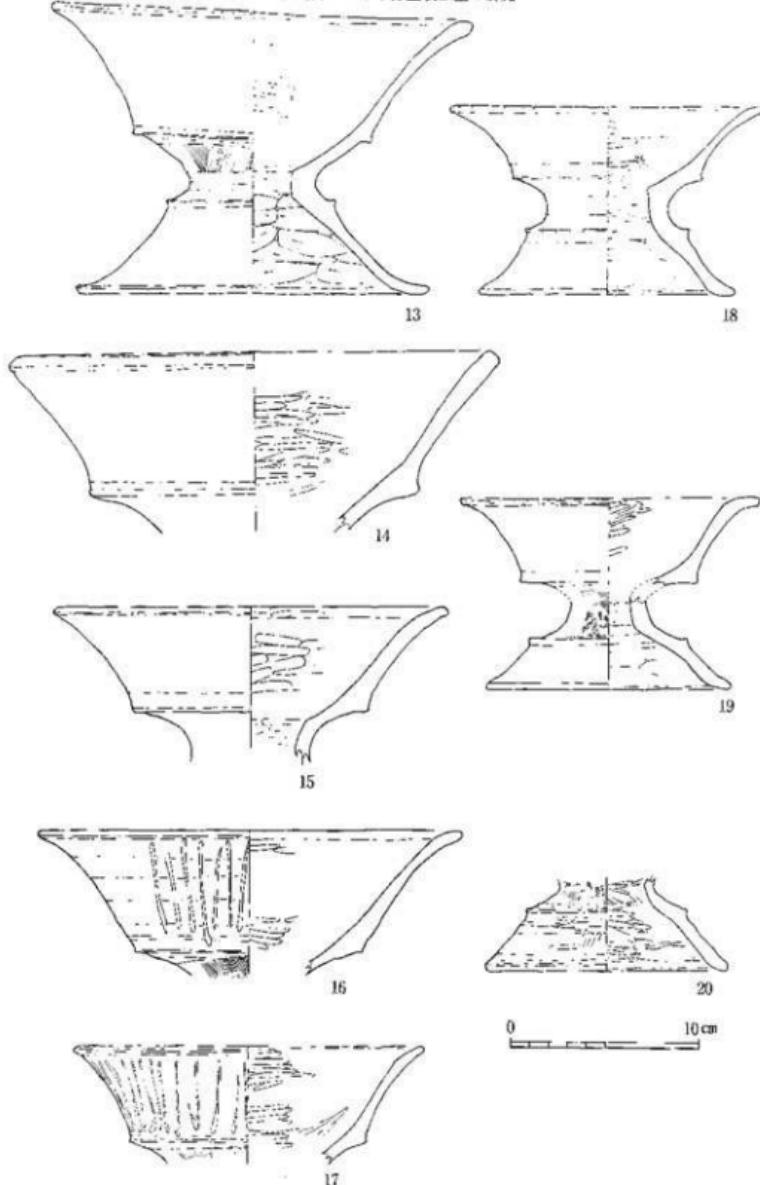
- ① 本報告第Ⅰ部第5章《土器編年》の項参照。
- ② 山本清「山陰の土器鉢器」『島根大学論集（人文科学）』第13号。（山本清『山陰古墳文化の研究』1971年に収める）
- ③ 註②に同じ。



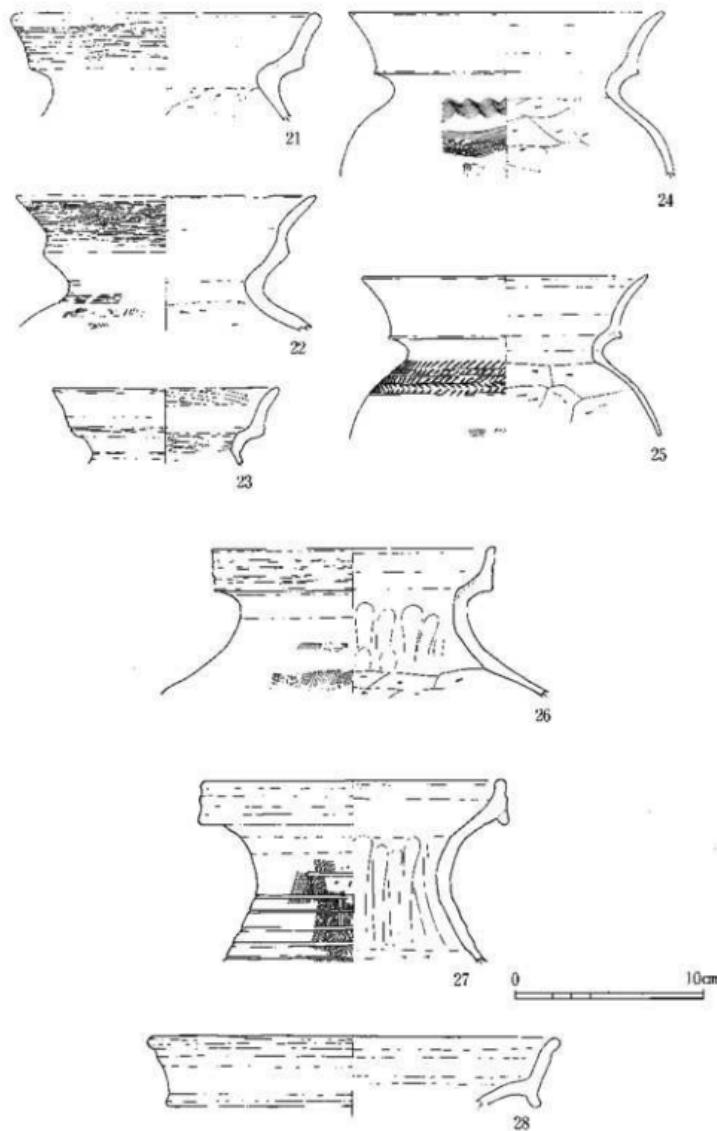
第1図 鍵尾遺跡出土土器実測図(1)



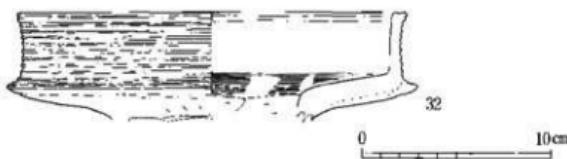
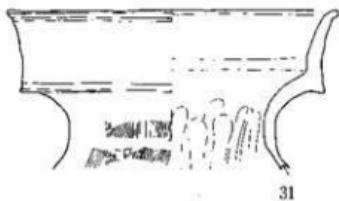
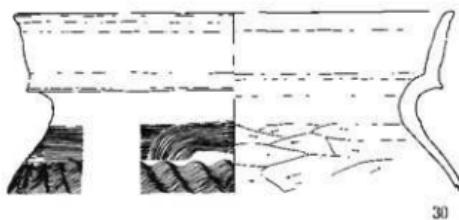
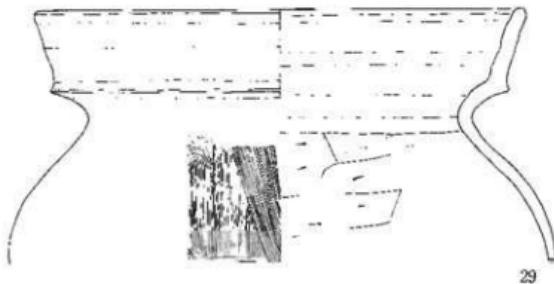
第2図 鍵尾遺跡出土土器実測図(2)



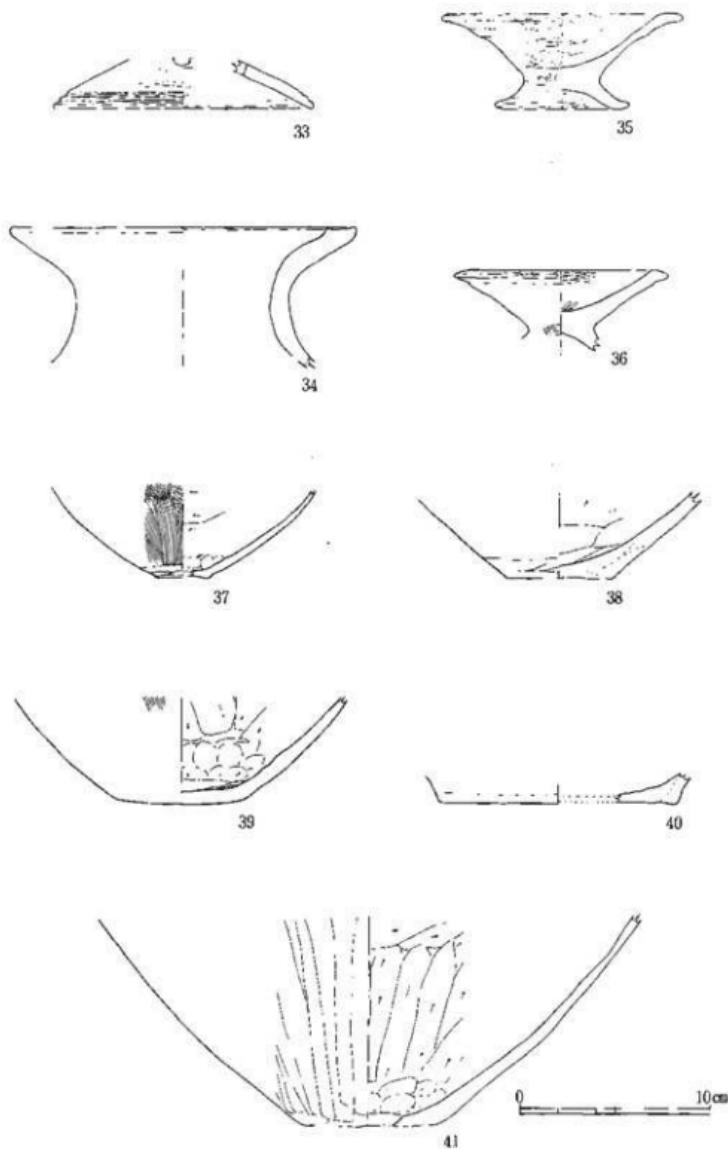
第3図 鍵尾遺跡出土土器実測図(3)



第4図 鍵尾遺跡出土土器実測図(4)



第5図 鍵尾遺跡出土土器実測図(5)



第6図 鍵尾遺跡出土土器実測図(6)

櫛尾遺跡出土土器調査表

序号	器名	大きさ (cm)	形態・文様の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調	その他の
1	板形器台	口径20.8 底径16.7 高さ14.6	盤面は上へと盛り立てて底面する高い、厚く、しらかべりしている。内面で、脚部～脚台への転換が不可解。外面には、しっかりとした平行光線があり、背面は無文様。	外側：円筒の輪郭まで一層及ぶ。脚台部はヨコナブ。	①1 mm以内の砂粒含む ②良好 ③黄褐色	—
2	波形器台	口径17.0	1と同様の輪郭・文様も1と同じ。	1と同様の手法。	④1 mm～3 mmの粒子含む ⑤やや多い。 ⑥淡褐色	—
3	波形器台	口径21.4 底径17.6 高さ16.1	1などと、両側の影響・文様を示す。	外側：輪郭はヘラミガキ 内側：1などと同様の手法。	⑦1 mm～3 mmの粒子含む ⑧以籽 ⑨淡褐色	—
4	波形器台	口径23.8	腹部は浅く、大きく外反する。外周には、腰で目立つ沈縫文がある（「U」の差によると思われる）。	外側：ヨコナブを輪郭にこす。輪郭はヘラミガキか。 内側：ヨリミガキ。	⑩1 mm以下の砂粒多く含む ⑪や多い。 ⑫淡褐色	—
5	波形器台	口径25.2	器盤は全体に滑り、底部へ腰部への段をなす部分は、強くえぐり込まれる。文様は外周に、1本1本が背筋で繋がる沈縫文であり。	外側：ヨコナブの後施文。輪郭ヨコナブ 内側：ヘラミガキナーハタケズリ	⑬2 mm程度の砂粒含む ⑭良好 ⑮淡褐色	—
6	波形器台	口径18.4	輪盤内側にシヤープな面をもつ。文様は外周に、しっかりとした平行光縫文をもつ。	外側：輪郭ヘラミガキ、輪部にも、一層ヘラミガキ見らる。 内側：ヘラケズリ	⑯1 mm以下の砂粒含む ⑰良好。風。 ⑱くすんだ黒褐色。	—
7	波形器台	口径20.2 底径18.7 高さ15.5	文様なし。 上・下台の腰部少なく、脚部がやや高い。輪部にシヤープな面をもつ。	外側：ヨコナブ 内側：ヘラミガキナーハタケズリ、輪部は細い工具でカットし、面を作り出している。	⑲1 mm以下の砂粒含む ⑳や多い。 ㉑淡褐色	—
8	波形器台	底径17.5	文様なく、7と同様の輪郭の形態を示す。	外側：ヨコナブ 内側：ヘラケズリ	㉓1 mm以下の砂粒含む ㉔や多い。 ㉕淡褐色	—
9	波形器台	口径21.7 底径17.6 高さ12.7	文様なし。 ヒ台～脚部への交換部分の脚は、平坦面を有す。	外側：ヨコナブ 内側：ヨリミガキナーハタケズリ、輪部ヨリウナデ	㉗1 mm以内の砂粒含む ㉘良好 ㉙淡褐色	A区5妙満として測定公差。
10	波形器台	口径18.6	文様なし。 ヒ台～脚部への交換部分の脚は、平坦面を有す。	外側：ヨコナブ 内側：風化の為不明瞭。	㉚1 mm以上の白・黒色の粒子 ㉛や多い。 ㉜淡褐色	—

標識番号	器種	大きさ (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	その他
11	鉢形器 台	口径22.6 底径16.8 高さ14.2	文様なし。 内面:受盤に「哥ヘラミガキ+質造はドヘラケズリ」。	外曲:リコナダ 内曲:受盤に「哥ヘラミガキ+質造はドヘラケズリ」。	④2 mm以上の粒子含む ⑤良好、堅い ⑥質造色	AIR 5号窯と して既公表。
12	鉢形器 台	底径18.0	文様なし。 11と形態同じ様。	外曲:ココナダ 内曲:ヘラケズリ	④1 mm～3 mmの白色粒(含む) ⑤良好 ⑥別途記入	
13	鉢形器 台	口径22.4 底径18.6	文様なし。 受部は非常に深く、全体に器壁は薄い。	外曲:受盤・脚台とともに、ヨコナデ。 内曲:ヘラミガキ+ヘラケズリ	④1 mm以下の砂粒含む ⑤良好、周囲、 ⑥質造色	
14	鉢形器 台	口径26.0	文様なし。 他に比べて大型品で器壁厚い。 底に赤色顔料 が厚く残存。	外曲:風化の為不規則。 内曲:ヘラミガキか	④1～3 mmの粒子含む ⑤良好 ⑥質造色	
15	鉢形器 台	口径21.0	文様なし。器壁厚い。	外曲:リコナダか。 内曲:幅の広いもの(5 mm以上) 工具によるヘラミガキ	④1～2 mmの白色粒子含む ⑤良好 ⑥質造色	
16	鉢形器 台	口径22.5	外面に、難方押出の輪郭状の文様がある。(ヘラ ミガキ押出のようない見による)。	外曲:リコナダのもち施文。内面には、ハケメをのこす。 内曲:丁寧なヘラミガキ。	④1 mm以下の砂粒含む ⑤良好 ⑥質造色	
17	鉢形器 台	口径18.6	16と同様の文様あり。器壁は薄い。	外曲:リコナダのもち施文。内面にはハケメ+ヨコナデ。 内曲:丁寧なヘラミガキ。	④1 mm以下の砂粒のみ含む ⑤良好 ⑥質造色	
18	鉢形器 台	口径16.8 底径13.6 高さ10.1	小型品。文様なし。	外曲:リコナダ 内曲:受盤ヘラミガキ以下へラケズリ。	④1 mm以下の砂粒など含む ⑤良好 ⑥質造色	
19	鉢形器 台	口径15.8 底径13.0 (高さ10.2)	小型品。文様なし。受盤端に平滑な面を持つ。	外曲:受盤・脚台は「やわらかなヨコナデ」。内面には細かな 内曲:ヘラケズリのちナナデか	④1 mm以下の砂粒など含む ⑤良好 ⑥質造色	
20	鉢形器 台	底径12.8	小器品。文様なし。	外曲:脚部からハケメのち一層をヨコナデ。 内曲:ケズリの後ヘラミガキ。	④1 mm以下の白色粒(含む) ⑤良好 ⑥質造色	
21	裏	口径16.5	厚ぼったく、外反しない複合り跡をもつ。 骨には、しつかりした平行沈線がある。口縁 の外側の突起は弱い。	外曲:脚部からハケメのヨコナデ 内曲:リコナダ+ヘラケズリ	④1～2 mmの粒多く含む ⑤ややもろい ⑥が溶け、	

擇団番号	器種	大きさ (mm)	形態・文様の特徴	手述の特徴	沾土・焼成・色調	その他
22	甕	口径16.0	薄くへりき出したように外反する複合口縁。 口縁部に、細かな平行文様をもつ。	外出：筋部以下、ハケと部分的にヨコナデ。 内面：ヨコナデ+ヘタケズリ。 全体に風化が著しい。	⑥2 mm以下の粒子多く含む ⑦不良 ⑧褐色	
23	甕	口径12.0	文様なし。 複合口縁。	外面：ヨコナデ。 内面：口縁部・腹部は一部ヘタミガキが見られる、以トコナデ	⑨1 mm以下の砂粒含む ⑩良好 ⑪褐色	
24	甕	口径16.2	薄く引き出したように外反する複合口縁。 文様は、周面部に鏡面的な波状文・平行筋文。	外面：ヨコナデ、文様無しドリケズリ。 内面：ヨコナデ+ヘタケズリ。	⑫2 mm以内の白色粒子含む ⑬良好 ⑭黑色	
25	甕	口径15.2	薄く引き出したように外反する複合口縁。 文様は肩部に、貝殻刺突文などがある。	外面：ヨコナデ、腹部に一部ヘタミガキが見られる。 内面：ヨコナデ+ヘタケズリ。	⑮良好 ⑯明黄色	
26	甕	口径15.0	直立する複合口縁。 口縁部は、ヘタツ状「具」により折れた縫 1本木ぬれ文。したがちヨコナデにより折れた縫 回縁文あり。	外面：筋部以トヨコナデ+タテ方向のハケメ。 内面：筋部はタテ方向のヨビナデ、以ドヘタケズリ。	⑰1～2 mmの粒子含む ⑱良好 ⑲褐色	
27	甕	口径16.2	やや内傾する複合口縁で、横回縁文あり。 内、腹部の示色顔料が見られる。	外面：筋部に、ハケメのち凹縁文。 内面：筋部は、タテ方向のヨビナデ、以ドヘタケズリ。	⑳1 mm以下の砂粒含む ㉑良好 ㉒淡紫色	
28	甕(?)	口径21.9	複合口縁。	外面：ヨコナデか 内面：ヨコナデ	㉓2 mm以下の砂粒含む ㉔良好 ㉕淡紫色	
29	甕	口径26.0	しっかりとした、幅広の、やや外側に聞く複合 口縁。厚さが「足」文様はない。	口縁部：ヨコナデ 全体外面：タテ方向のハケメ 全体内面：筋部+ヘタケズリ	㉖1 mm以下の砂粒、それに3 ～5 mmの白色粒子含む ㉗不良 ㉘褐色	
30	甕	口径23.4	しっかりとした、幅広の、やや外側に聞く複合 口縁を有す。元施は良い。肩部に、繊細な平行 筋・波状文をもつ。	口縁部：ヨコナデ。 全体外面：筋部+ヨコナデ。 全体内面：筋部+ヘタケズリ。	㉙1～3 mmの粒子含む ㉚良好 ㉛良佳 ㉜褐色	
31	甕	口径17.6	人きく立ち上がった複合口縁。文様はない。	口縁部：ヨコナデ。 内面：ヨコナデ+ヨビナデ。	㉝1 mm以下の砂粒、白色粒子含む ㉞良好 ㉟くすんだばかり色	
32	古輪系甕	口径20.5	厚く小孔顔料が施されている。肩にする複合口 縁、後底は大きなく頭方向へ突出する。前面がカ マゴコ状の平行筋文あり。	外面：口縁部以下ヨコナデ、腹部一部ヨコナデ。 内面：口縁の内、外縁部分はヨコナデ、平筋状の筋分はヘタ メ、以下ヘタケズリ。	㉠2 mm以内の粒子、密 度良好 ㉢小褐色	

括弧 番号	器種	大きさ (mm)	形態・又様の特徴	手法の特徴	筋	筋上・筋底・色調	その他
33	高脚脚?	底径16.3	小竹の為詳細不明。孔あり、全体に3条のヘラミガキか。 細孔鉛文あり。	外面: ハケメののちヨコナデ 内面: ハケメののちヨコナデ		④1mm以上の粒子含む ⑤良好、電子 ⑥灰褐色	
34	不 明 (?)	14周18.4	天地不明、風化の為詳細は不明瞭。	外面: ヨコナダか、以下不明瞭 内面: 縦溝ヨコナデ、以下不明瞭		④3mm以上の粒子含む ⑤不良、もうろい、 ⑥明黄褐色	
35	低 脚 环	「16.12.7 底径 7.0	牙部は直角的にひらく。しっかりとつくり。	外面: ヘラミガキ+ヨコナダ 内面: ヘリミガキ+ヨコナダ		④2mm以下の粒子含む ⑤良好 ⑥黄褐色	
36	低 脚 环	14周11.3	隔壁は厚く、本體は、浅めで斜線的。			④2mm以内の粒子含む ⑤良好 ⑥黄褐色	
37	等 丈 は 要の底	底径 2.9	500円玉型の、かろうじて底せざる底部。中央 部は内張へこむ。隔壁は非常に薄い。	外面: 幅1cm程の上段でのタテ力向のハケメ。底はナデ 内面: ハケメ。底には無いナデ		④微粉粒含む ⑤良好 ⑥乳白色	
38	等 又 は 要の底	底径 5.6	完全な平底。隔壁は厚く、しっかりとつくり。	外面: 風化の為や明瞭、ナデか。 内面: ヘラミグリのちら 底ナデ。		④3mm以上の粒子含む ⑤ややもろい ⑥くすんだ褐色	
39	等 又 は 要の底	底径 約 6.5	角がなく外味を帯びた底部で、若干ぐらつくが 正立する。	外面: 若干ハケメを残すが、ナデ性上げ 内面: ヘタクスリのち底面に指痕は無いこと。		④1~3mmの粒子含む ⑤良好 ⑥くすんだ褐色	
40	等 又 は 要の底	底径12.5	穿孔であるかは不明。径の大きい底。	風化の為詳細不明瞭。		④2mm以内の粒子含む ⑤不良 ⑥くすんだ褐色	
41	等 又 は 要の底	底径 8.8	焼成後穿孔。やや丸味を帯びるが、正立可能。 隔壁は厚く、しっかりとつくりしている。	外面: タテ方向の幅1.2mm程の工具によるミガキか。 内面: タテ方向のヘタクスリ		④3mm以下の粒子含む ⑤良好 ⑥くすんだ黄褐色	

ABSTRACTS OF RESEARCH PROJECT, GRANT IN AID FOR SCIENTIFIC RESEARCH

1. PROJECT NUMBER 58310059
2. CATEGORY Area Study (A)
3. TITLE OF PROJECT. A Comparative Study of the Yayoi Period Tumular Mounds in San-in, San-yo Districts.
4. HEAD INVESTIGATOR (1) REGISTERED NUMBER 353070144681
(2) NAME TANAKA, Yoshiaki
5. ABSTRACT OF PROJECT
 - 1) The archeological research of the Yayoi period tumuli has been proceeded long in San-yo and San-in districts, and each has made a certain result. We set about making comparative investigations of the mounds in those two districts, through which we intended to clarify the congruities and differences between them, and to explain the political exchanges among chieftains who built those mounds.
 - 2) In San-in district, our investigation was centered upon the vestiges of the mounds in Nishidani, Shimane Prefecture. There are four of large-sized quadrilateral mounds with four protuberant corners, all of which proved to be the largest in scale of the mounds in this area. The frameworks of the chest and coffin installed in those large-sized tumular mounds are recognized as being made of wood. The special types as earthenware pot and pedestal imported from Kibi district are excavated also from those mounds.
 - 3) In San-yo district, we made excavations at Kumoyama Toriuchi relics, Okayama Prefecture. Those relics have three of Yayoi period mounds. The wooden chest and coffin fixed with wood piles and stones were found in the mound No.1.
 - 4) The comparative investigation of the Yayoi period mounds in San-in and San-yo districts shows that the chieftains of both districts had close contacts with each other. While there is notable difference in the style of mound building, the two have the same earthenware pots and pedestals, and the same structure of a coffin.
6. KEY WORD
 - (1) YAYOI PERIOD TUMULUS
 - (2) QUADRILATERAL MOUNDS WITH FOUR PROTUBERANT CORNERS
(BURIAL MOUNDS WITH FOUR PROTUBERANT COUNTERS)
 - (3) SPECIAL TYPES OF EARTHENWARE POT & PEDESTAL
 - (4) DRUM PEDESTAL (5) WOODEN CHEST & COFFIN

II部 西谷墳墓群の調査(I)

II部 西谷墳墓群の調査（I）

目 次

例 言

第1章	西谷墳墓群の歴史的環境	1
第2章	西谷墳墓群研究略史	4
第3章	調査の経過	6
第4章	西谷3号墓・4号墓・9号墓の測量調査	10
第1節	西谷墳墓群と周辺の旧地形	10
第2節	西谷3号墓の現状と規模	11
第3節	西谷4号墓の現状と規模	11
第4節	西谷9号墓の現状と規模	12
第5章	西谷3号墓の調査	20
第1節	発掘区の設定	20
第2節	外部施設の調査	20
第3節	墳丘構造の調査	29
第4節	第1主体の調査	30
第5節	第3主体の調査	44
第6節	出土遺物(1) 第1主体上方の一括土器	45
第7節	出土遺物(2) 特殊器台・特殊壺	58
第8節	出土遺物(3) 第1主体棺内遺物	62
第6章	成果と今後の課題	67
英 文 梗 概		75

図版目次

1. 西方上空から見た斐伊川と西谷丘陵
2. 西谷3号墓
3. 墳裾の配石構造
4. 突出部の配石構造
5. 墳丘構造の調査
6. 第1主体上方の土器群
7. 円礎出土状況、第1主体擬形
8. 第1主体の発掘、第1主体全景
9. 第1主体棺内遺物出土状況、第3主体全景
10. 第1主体出土土器(1)
11. 第1主体出土土器(2)
12. 第1主体出土土器(3)
13. 第1主体出土土器(4)
14. 特殊土器
15. 第1主体棺内遺物
16. 西谷4号墓、西谷9号墓

挿 図 目 次

第 1 図 西谷墳墓群と周辺の主要遺跡	3
第 2 図 西谷墳墓群分布図	5
第 3 図 西谷丘陵周辺の旧地形	10
第 4 図 西谷 3 号墓測量図	13
第 5 図 西谷 4 号墓測量図	15
第 6 図 西谷 9 号墓測量図	17
第 7 図 西谷 3 号墓トレンチ配置図	21
第 8 図 西谷 3 号墓配石構造模式図	23
第 9 図 北西突出部実測図	25
第 10 図 南西突出部実測図	27
第 11 図 南西突出部模式図	26
第 12 図 墳丘断面図（東西方向）	31
第 13 図 墳丘断面図（南北方向）	33
第 14 図 第 1 主体土器群	35
第 15 図 円礫実測図	36
第 16 図 第 1 主体実測図	39
第 17 図 第 1 主体復元模式図	42
第 18 図 棺内遺物出土状況	43
第 19 図 第 3 主体実測図	44
第 20 図 第 1 主体出土土器(1)	47
第 21 図 第 1 主体出土土器(2)	49
第 22 図 第 1 主体出土土器(3)	51
第 23 図 第 1 主体出土土器(4)	53
第 24 図 特殊土器(1)	59
第 25 図 特殊土器(2)	60
第 26 図 第 1 主体棺内遺物	63

例　　言

1. 本編は、昭和 58 年度から 60 年度まで交付された文部省科学研究費補助金・総合研究(A)による「山陰・山陽地方における弥生時代墳丘墓の比較研究」(研究代表者・田中義昭)の一環として実施した出雲市西谷墳墓群に対する調査の概要報告である。なお、西谷墳墓群の調査は、今後も継続される。
2. 調査は、島根大学の田中義昭、渡辺貞幸が中心となり、島根大学と岡山大学の学生・大学院生を主体に、新潟大学、山口大学、別府大学、京都大学などの大学生・卒業生その他が参加して行なわれた。調査を快諾、御支援いただいた土地所有者の日野武男氏および籠推義憲氏、調査中便宜を図っていただいた県立出雲商業高等学校、そして宿舎を提供された龜淵山西光寺の吉田禪教氏に深甚の謝意を表するものである。
3. 本編の執筆は、各報文末尾に氏名を記した者が行なった。内容についてはとくに統一を図っていない部分がある。また、英文梗概は渡辺貞幸が執筆し、島根大学森田勝治教授の助言を受けた。
4. 掘出の方位は、調査時の磁北である。
5. 土層については、I 表土・耕作土・流土、II 盛土、III 墓壙内埋土、IV 地山とし、それぞれを a, b, c ……と大まかに分けて示した。
6. 遺物等の色名は、土器については『新版標準土色帖』、石製の玉類については『実用色見本帖』、『カラー・ブックレット』によって表記したが、マンセル記号は省略した。
7. 図版の 1 と 4・2 は、ワールド航測コンサルタント株式会社より提供を受けたものである。
8. 本編は、田中義昭の指示のもとに、渡辺貞幸が 1987 年 3 月に編集したものである。
9. 本編に報告した資料は、島根大学法文学部考古学研究室において保管している。

第1章 西谷墳墓群の歴史的環境

縄文時代 出雲平野の形成期にあたり、平野の大部分は生活の舞台とはなり得なかった。

現在知られている遺跡としては、北山山麓の戸川郡大社町にある菱根遺跡や大社境内遺跡および平野の南部出雲市上塙治町の三反谷遺跡など数ヶ所が挙げられる。

弥生時代 斐伊川、神戸川流域の微高地をはじめ、砂丘上や丘陵縁辺部に多くの集落が発生し、付近の湿地帯を水山として開拓していったと考えられている。前期の遺跡としては大社町の原山遺跡や出雲市矢野町の矢野遺跡等が確認されている。これらの遺跡は縄文時代後期、晩期の土器が表採されており、集落の成立がその時期まで遡る可能性がある。なお、原山遺跡においては坪葬遺構として配石墓が知られており、その遺物中には北部九州から直接的な伝播を窺わせる土器群も認められ、遺跡の立地などを含めて、当地方における弥生文化成立を考える上で注目すべきものである。^①

その後暫くは前述のもの以外に集落の増加は認められない。それが弥生時代中期から後期にかけては、矢野遺跡などを拠点として神門水海（出雲平野西部に古代から中世にかけて存在した潟湖）周辺に出雲市天神町の天神遺跡、同市知井町の多聞院遺跡等が新たに出現する。この時期における集落の増加には、農業技術の進歩と沖積作用による可耕地の拡大が考えられる。しかし、集落内に貝塚をもつものもあり、稻作に生活基盤を置きながらも日本海や神門水海での漁撈に少なからず依存していた当時の生活を如実に示している。

さて、出雲平野の青銅器をみると、原山遺跡の北側に所在する大社町の命主神社境内から中広形銅戈と硬玉製勾玉が、また、斐川町の荒神谷遺跡からは大量の中細形銅劍と銅戈、銅鐸が出土している。^② これはいうまでもなく祭祀に関わる集落間の結合を物語り、また、北九州や畿内など他地域との文化交流をあらわす資料でもある。^③

一方、埋葬遺構としては天神遺跡の中期の壺棺と矢野遺跡の後期の土壙墓が知られている。^④ この土壙墓からは後期前半の土器と共に、細身のメノウ製の管玉が数個出土している。このことは、壺棺で葬られたり貴重な玉類を副葬できる者が、この頃に各集落に出現しており、階層の分化を想定させる。

後期も後半に至ると本書で報告する西谷墳墓群が平野の中央部、斐伊川が山あいから平野部に注ぎ込む大津町の低丘陵上に築造される。現在、6基の四隅突出型埴丘墓を含む17基の墳墓からなり、中には長辺40mを越える大型のものも含まれる。さらに3号墓、4号墓および矢野遺跡第3地点からは岡山県地方を中心に発見されている特殊壺形土器、特殊器台形土器が出土している。^⑤ これらのこととは、出雲平野の中で吉備地方の首長層と密接な関係をもつつ、各集落を統率する有力首長が出現したことの意味する。

古墳時代 弥生時代後期から継続する集落が多いが、低湿地に存在するものの中には消滅するものも認められる。これは一時的な海水準の変化や斐伊川、神戸川の洪水などが原因と

思われる。

古墳時代前期に属する古墳はあまり知られていない。今のところ北山山麓の出雲市東林木町にある大寺古墳(全長52mの前方後円墳、竪穴式石室)と神西湖の東にある出雲市西神西町の山地古墳(径20mの円墳、砾床をもつ箱式石棺1と木棺2)とが確認されている。特に、後者からは筒形銅器と仿製鏡が各々2個出土している。^⑦これに続くものとしては、平野縁辺部の斐川町の軍原占墳(長持形石棺)^⑧や神庭岩船山古墳(全長約57mの前方後円墳、舟形石棺)^⑨などが挙げられるが、平野の中央部ではまったく知られていない。

その後、中期から後期に至って再び集落が増加、拡大し、平野の微高地や山麓に多くの遺跡が知られている。これを可能にしたものは、鉄製農具の普及と土木技術の進歩とともにうなう灌溉施設の整備が考えられる。

これに呼応するが如く、後期に属する古墳や横穴墓が平野縁辺部に多数分布している。著名な古墳には、神戸川下流の大念寺古墳(全長90m以上の前方後円墳、横穴式石室、家形石棺2)や上塩冶築山古墳(径約40mの円墳、横穴式石室、家形石棺2)があり、松江市南郊の意宇川下流の古墳群とともに出雲地方を代表するものである。^⑩

(西尾克己)

註

- ① 村上勇・川原和人「出雲・原山遺跡の再検討—前期弥生土器を中心にして—」『島根県立博物館調査報告』第2冊、1979。
- ② 近藤正「島根県下の青銅器について」『島根県文化財調査報告書』第2集、1966。
- ③ 島根県教育委員会「荒神谷遺跡—銅剣発掘調査概報—」1985。島根県教育委員会「荒神谷遺跡II」、1986。
- ④ 出雲市教育委員会「天神遺跡」1977。
- ⑤ 出雲考古学研究会「出雲平野の集落遺跡II—矢野遺跡とその周辺—」『古代の出雲を考える』5、1986。
- ⑥ 出雲考古学研究会「出雲市矢野遺跡出土の特殊器台形・壺形土器」「八雲立つ風土記の丘」No74、1985。
- ⑦ 出雲市教育委員会「山地古墳発掘調査報告書」1986。
- ⑧ 池田満雄「近代以前の斐川」「斐川町史」斐川町教育委員会、1972。
- ⑨ 島根県教育委員会・建設省出雲工事事務所「出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」1980。

西谷墳墓群の調査



図1. 西谷真喜郎と周辺の主要遺跡

第2章 西谷墳墓群研究略史

西谷墳墓群は、^① 墳丘を有するもの 17 基と有さないもの 3 基（番外 1～3 号墓）の計 20 基からなる大規模な墳墓群である。判明している限りでは、弥生時代後期後半に属する四隅突出型墳丘墓を 6 基含むが、調査が行われたものは少なく、その全容は明らかでない。

各墳墓の分布については、1～5 号墓および番外 1～3 号墓が島根県立出雲商業高等学校に接する丘陵に、その他は斐伊川に面する丘陵上に存在する。なお、この 2 つの丘陵の間に、西谷と呼ばれる小さな谷が南北に入り込んでおり、遺跡の範囲はかなり広く、以下に述べるように、遺跡の全容を把握するにはかなりの長い年月を費やしたのである。

遺跡の発見は 1953 年まで遡る。その原因是、現在 4 号墓と呼んでいる墳墓の頂部を畠地に開墾する際に多量の土器が出土したことによる。採集されたものの中には、今日特殊壺・特殊器台と呼ばれる岡山県下を中心に出土する土器も含まれ、発見者の池田清雄により「下來原西谷丘陵遺跡」、「下來原西谷丘陵出土土器」として紹介されたが、この中で、前述の土器について「弥生式系のもので（中略）この地方の他の遺跡出土の土器と趣を異にしている」と指摘しているのが注目される。しかし、この時点では墳墓としては把握されていなかったために、遺跡名は西谷丘陵遺跡となつたのである。その後十余年間は、この遺跡への関心はみられなかつたが、1970 年に西谷丘陵先端の地崩れ面において土塙墓が発見され、また翌年には、前述の 4 号墓出土の土器が特殊壺形土器・特殊器台形土器であるとの報告もあつて、再び西谷丘陵への関心が高まつた。

時を同じくして、出雲市街地の拡大に伴う開発の波が遺跡周辺にもおよび、西谷丘陵の西側隣接地に島根県立出雲商業高等学校が移転することとなつた。このため、1971 年には島根県教育委員会により事前の分布調査が行なわれ、この調査で、1 号墓と 5 号墓が発見されるとともに、4 号墓が墳丘をもつことも確認された。翌 1972 年には、自然崩壊のおそれの強かつた 1 号墓と番外 1・2 号墓が、出雲市教育委員会によって発掘され、これにより 1 号墓は四隅突出型墳丘墓、番外 1 号墓は土塙墓、同 2 号墓は箱式石棺墓であることが判明した。^②

その後、1975 年には島根県教育委員会により斐伊川放水路建設予定地内およびその周辺の分布調査が実施され、7・12・13・14 号墓が発見された。

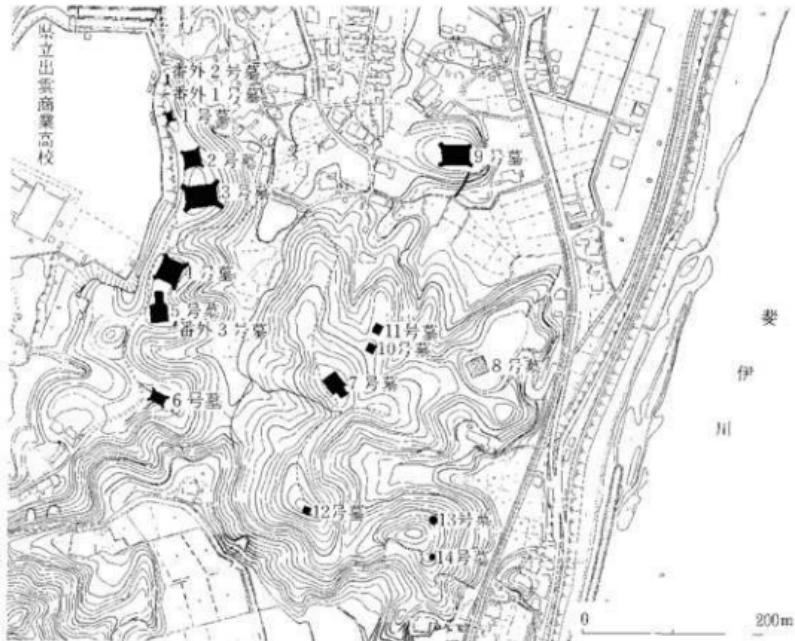
いっぽう、出雲考古学研究会はこれらの調査と相前後して西谷丘陵周辺部の踏査を精力的に行ない、2・6・8・10・11 号墓を発見するとともに、主な墳墓の墳丘測量も併せて実施した。その成果は 1980 年に「西谷墳墓群」として公刊され、それまで出雲東部に偏っていた弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓にかかる資料を、出雲西部斐伊川流域で提供することとなつた。

（西尾克己）

西谷墳墓群の調査

註

- ① 「島根県遺跡目録」には「西谷丘陵遺跡」として登載されているものである。
- ② 池田満雄「下米原西谷丘陵遺跡」・「下米原西谷丘陵出土土器」『出雲市文化財』第1集、出雲市教育委員会、1956。
- ③ 近藤正・前島己基「島根県松江市的場上塚墓」『考古学雑誌』第57巻第4号、1972。
- ④ 1972年に6号墓の墳丘西側が採土により失われ、8号墓は宅地造成のため破壊された。
- ⑤ 門脇俊彦「また出た発生期の古墳」『季刊文化財』第18号、島根県文化財愛護協会、1972。
- ⑥ 門脇俊彦「西谷墳墓群」「出雲・上埴治地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」、建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会、1980。
- ⑦ 出雲考古学研究会「古代の出雲を考える2—西谷墳墓群—」、1980。



第2図 西谷墳墓群分布図

第3章 調査の経過

第1次調査 1983年7月21日～31日

第1次調査では、西谷丘陵遺跡の墳墓群のうち、3号墓と4号墓の測量と写真撮影を中心として行なった。測量は、トラバース杭の位置を国土地標系の中にドットした図を作り、それを用いて100分の1で実施した。トラバース杭のうち向墳丘墓の中間に位置する2点については永久杭とし、コンクリート杭を埋置した。センターは海拔、間隔は25cmとし、墳丘部分だけでなくなるべく広範囲を測量するように心がけた。なお、測量中に向墳丘墓で特殊壺形土器の破片を、4号墓ではそのほかに弥生土器片と須恵器片を表探した。

第2次調査 1984年3月16日～4月5日

第1次の測量調査の成果をもとに検討した結果、全体として3号墓の方が遺存が良好と考えられたので、これを発掘調査の対象として選んだ。そして、墳丘外一部の補足測量を行なうとともに、墳丘の向きに合わせた4m方眼のグリッドを全面にわたって組むこととし、この杭打ちをまず実施した。各区の番号はその北西の杭の番号と一致させることにした（第7図参照）。

ところで、現状の3号墓の斜面には石垣が造られており、それは北斜面に2段、東斜面に1段、そしてこれらに挟まれた北東突出部とに認められる。これがいつの時代のものかは不明であるが、墳丘の発掘のために一部は除去しなければならない遺構であることは確かなので、取り敢えずこの石垣を清掃して実測することとした。この実測中に、北側下段の石垣付近で須恵器の小片を探集している。

石垣の実測が順調に進んだころ、いよいよ墳丘の発掘を開始した。最初に発掘の鍼を入れたのは北西突出部の東側、F5区とE4区である。これは、突出部の遺存度をさぐると同時に、北界で実測中の石垣の延長部が存在するかどうかを確かめ、この石垣の性格をつかむ目的で設定された。発掘の結果、安来市安養寺墳墓群で検出されているのと同様な、四隅突出型弥生墳丘墓特有の配石構造が確認され、しかも、その東への延長（つまり本来の墳丘北辺部分）はすでに削平されていることも明らかになった。従って、実測中の石垣は、本来の墳丘北辺が削られたのちに積まれたものであることがはっきりしたのである。これにより、墳丘の確認調査に重点をおく方針を決め、石垣の実測はこのシーズンでは北斜面の部分のみにとどめることにした。

そこで墳丘西斜面と南斜面でそれぞれ数カ所のトレンチを設定して発掘し、各トレンチで墳丘斜面の貼石と墳端の石列などを確認した。北西突出部と南東突出部の付近にもトレンチを設定したが、これらでは配石構造の遺存は芳しくなかった。また、墳丘のほぼ中軸である東西方向のKライン（K区の北縁）と南北方向の10ライン（10区の西縁）を、墳丘構造を観察するための断ち割りラインと決め、これにそって墳丘の北と西と南の斜面にトレンチを入

れた。墳丘の構造については、どの層位からを盛土とみるかなどについていくつかの仮説が立てられたが、なお結論を出すには至らなかった。

一方、墳頂部にもグリッド・ラインにそった幅1mのトレントを設けて発掘を開始した。そして、何カ所か土壤状落ち込みの存在を予想させる箇所を認めたが、そのうちJ 10区南のトレントでは、表土直下から比較的まとまった量の土器片が顔を出したので、その南にも発掘区を設定して広がりをつかもうとした。その結果、J 10区南からK 10区北半にかけて多量の土器片が集中しているらしいことがわかった。しかし、このシーズンではそれ以上Jの発掘はせず、土器片群もそのまま砂をかけて埋め戻して本格的発掘を待つことにした。

第3次調査 1984年7月18日～8月12日

引き続いて3号墓の発掘を実施し、墳丘の断ち割り調査、墳頂部での埋葬施設の調査、および南西突出部の調査と、やり残していた東斜面と北東突出部の後世の石垣の実測を行なった。

中軸線にそった断ち割り調査では、新たに東斜面にもトレントを入れ、必要に応じて既掘トレントも再発掘し、また、墳丘斜面の貼石などもはずしてその下方の状況についての調査を実施した。南西突出部については、セクション土手を残してかなりの面積の発掘を行ない、突出部の基部の状態などを明らかにしたが、先端はすでに失われていた。

墳頂部では、第2次調査の知見を承けて、J 10区とK 10区をほぼ全面にわたって発掘し、夥しい土器片が集積していることを確認した。これらの土器は土壤上面に置かれた供獻土器と推定されたので、土壤の掘形の追求と土器群の清掃・図化に取り組んだ。掘形は発掘区内いっぱいでおおよそ確認され、また北西部では、これを切って別の埋葬施設が造られていることも明らかになった。多量の土器を伴う前者を第1主体、それをカットする後者を第2主体と呼ぶことにした。第1主体の土器群は、撮影後、ほぼ中央を通る十字形のセクション・ラインを設定し、図をとりながら取り上げを開始したが、その作業は難渋をきわめ、結局、一旦発掘を終了したのち、9月末から10月初旬にかけて補足調査を実施してやっと完了した。

第4次調査 1985年3月15日～4月10日

第4次調査では、3号墓第1主体の完掘を目指すとともに、一隊を割いて9号墓（三谷神社社地）の測量を実施した。9号墓の測量は、前年に付近の伐採が行なわれて測量しやすい状況になっていたため、2次調査の直後から懸案となっていた課題であった。測量の方法や視点は3・4号墓の場合と同様であり、墳頂部に永久杭を埋設した。

3号墓第1主体では、第3次調査終了時の状態つまり土器群を取り上げた状態を露出し、周囲の発掘区を拡張して掘形を再度精査した。その結果、掘形は従来考えていたよりもやや大きいことがわかり、また、西側にこれを切って別の土壤——第3主体——が掘られていることも判明した。調査は第1主体と第3主体を対象とし、第2主体との切り合い部分は未掘

のまま残すことにした。第1主体は、グリッドにそったラインと、土器群取り上げの際に設定した十字形のセクション・ラインとを基準にして掘り進めた。その結果、後述のように棺・櫛二重構造の存在をつきとめることができた。

発掘が棺底に達した段階で、ワールド航測コンサルタント株式会社の好意で、気球による空中写真撮影を実施することになった。この時、南西突出部についても撮影を依頼することにし、急遽この部分を全面露出する作業を行なった。撮影は、4月2日にマスコミ関係者の見守るなかで実施された。

第1主体棺底の朱の面には多くの遺物が検出されたが、このうち大形の管玉と小玉類はきわめて多く、取り上げが不可能であった。そのため、この部分は朱の面ごと切り取って持ち帰る方針を決め、県文化課の三宅博士氏・松本岩雄氏の来援を得て、硬質充泡ウレタンを使用して二つの土塊に分けて切り取る作業を行なった。

補足調査 1985年7月22日～30日

南西突出部は、4次調査の際空中写真撮影のために全面発掘したが、もとセクション土手のあった部分の実測が時間切れでできていなかった。そこで、補足調査として、この未実測部分の再露出と実測を行なった。

以上で、未解明部分を残しながらも、西谷3号墓に対する第1期の発掘調査を一応終了した。

(渡辺貞幸)

調査参加者

(第1次調査) 赤沢秀則、吉郷和宏、池橋幹、宇垣匡雅、宇塚裕子、大谷晃二、大智浩、鶴一宏、落合めぐむ、甲斐昭光、角田徳幸、柏木教之、小林正人、近藤哲雄、清水義正、田中義昭、手銭弘明、永見英、西尾克己、西尾良一、蓮岡法輝、曳野律夫、広江耕史、房宗寿雄、松井潔、松本岩雄、三宅博士、森格也、矢北祐史、渡辺貞幸

(第2次調査) 吉郷和宏、安達和美、磯田由紀子、内田惟雄、大谷晃二、大智浩、大橋雅也、鶴一宏、小熊博史、甲斐昭光、角田徳幸、柏木教之、川井健子、豊井加恵、後藤能子、小林正人、近藤哲雄、佐野順一、杉山浩司、高井健司、高橋淳子、武上弥寿、伊見淳一郎、田中義昭、手銭弘明、畠健、原俊一、原裕司、橋口かおり、房宗寿雄、藤原みや子、前中直紀、三宅博士、三輪奈津子、矢北祐史、山田涼子、渡辺貞幸

(第3次調査) 赤坂二史、赤沢秀則、吉郷和宏、磯田由紀子、伊田喜浩、岩崎均、宇垣匡雅、大谷晃二、大谷祐二、大智浩、大橋雅也、角田徳幸、古川早苗、豊井加恵、後藤能子、小林正人、近藤哲雄、佐野順一、新造博之、杉山浩司、高井健司、高橋淳子、高橋克寿、高橋進一、田中義昭、千葉豊、手銭弘明、梅住枝、野々村佐知子、畠健、花谷めぐむ、原田吉樹、房宗寿雄、前中直紀、松井潔、渡健一、三輪奈津子、山田涼子、山根絹、山本智、渡辺貞幸

西谷填墓群の調査

(第4次調査) 赤坂二史, 赤沢秀刑, 吾郷和宏, 磯田由紀子, 伊田喜浩, 大谷晃二, 大智浩, 角田徳幸, 我沢哲也, 嘉木修, 雲井加恵, 高下洋一, 近藤哲雄, 佐藤雄史, 三代美保, 新造博之, 宮広泰孝, 曽田穂, 高橋進一, 田中義昭, 手銭弘明, 梅佳枝, 野々村佐知子, 畑健, 房宗寿雄, 北條芳隆, 前中直紀, 松井潔, 松本岩雄, 渡健一, 三宅博士, 三輪奈津子, 山田涼子, 山根縁, 渡辺貞幸

(補足調査) 磯田由紀子, 大谷晃二, 我沢哲也, 雲井加恵, 佐藤雄史, 高橋進一, 田中義昭, 野々村佐知子, 宮本正保, 三輪奈津子

(遺物・図面整理) 吾郷和宏, 磯田由紀子, 大谷晃二, 大智浩, 角田徳幸, 我沢哲也, 桥木教之, 雲井加恵, 小林正人, 近藤哲雄, 佐藤雄史, 高井健司, 高橋進一, 武上你尋, 手銭弘明, 野々村佐知子, 蓬岡法眞, 房宗寿雄, 前中直紀, 松本岩雄, 渡健一, 宮本正保, 三輪奈津子, 渡辺貞幸

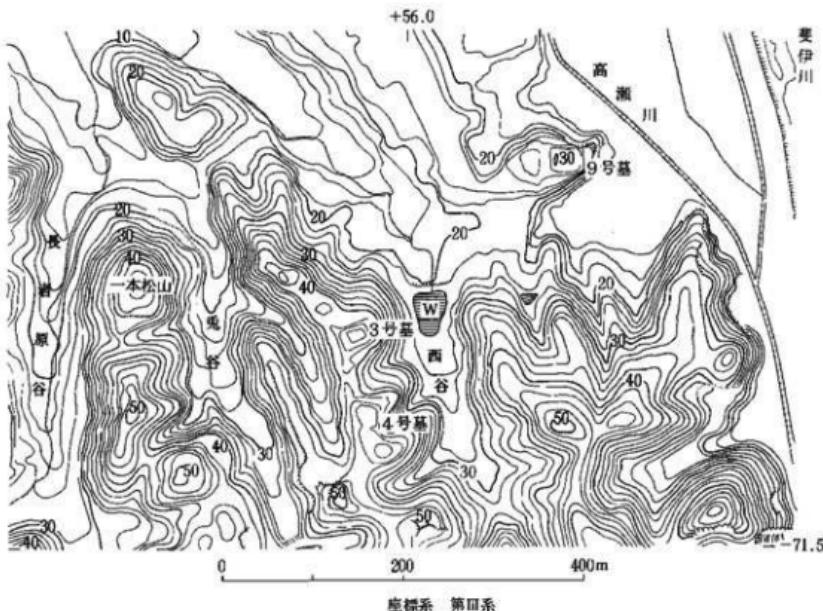


第4章 西谷3号墓・4号墓・9号墓の測量調査

第1節 西谷墳墓群と周辺の旧地形

西谷墳墓群は出雲市大津町下來原字西谷にある。「出雲大川」と呼ばれた斐伊川左岸の、扇状地に臨む丘陵上に立地している。墳墓群の立地や歴史的環境については第1章と第2章に述べられているので、ここでは、遺跡のすぐ西にある県立出雲商業高等学校建設以前の旧地形を示して、若干の補足をする。

第3図は、昭和48年測図の2500分の1出雲都市計画図と、県立出雲商業高校敷地造成工事に関する一括書類(県教育府財務課)に添付された3000分の1地形図とを合成し、さらにわれわれの測量した3号・4号・9号の各墳丘墓の図を国土座標に合わせて挿入したものである。「西谷」はこの図の中央近くにある大きな谷につけられた名であるが、字としての「西谷」は、東の高瀬川から西の長者原谷の手前までの広い範囲を含んでいる。このうち、兎谷の部分だけは「字兎谷」となっている。商業高校は、兎谷の東西の丘陵を削平し、この谷の大部分を埋めて造成されている(第2図参照)。これらの丘陵上に遺跡がなかったとは考えに



第3図 西谷丘陵周辺の旧地形

くいが、今となっては知る手掛かりもない。

西谷墳墓群が西谷を南からU字形に囲む丘陵上に点々と分布していることは、第2章にふれられている通りである。西谷は斐伊川扇状地左岸の沖積地に開口しており、西谷墳墓群の位置からは扇状地がよく見渡せる。この墳墓群を営んだ人々の抛って立つ基盤を暗示している。一方、長者原谷や兎谷は、古くから塩冶方面へ通じる道として利用されており、神戸川扇状地と連絡していることも見落とせない。後述のように、西谷3号墓外表の配石構造に使用されたのは神戸川水系の河原石である可能性が強いという。これらの谷筋を、円礫を担いだ人々が列をなして通ったのであろうか。

(古い地名や字名については、市税務課所蔵の切図によったほか、日野武男氏、新宮定大氏の教示を得た。)

第2節 西谷3号墓の現状と規模（第4図）

西谷3号墓は字西谷3596-9番地他にあり、すぐ北西に2号墓がある。西谷と兎谷の支谷に挟まれる丘陵の幅が広くなった部分をいっぱいに利用し、長軸を丘陵ラインに直交させて造られているが、南東側には谷が迫る立地である。墳頂部以外は山林だが、墳麓の北と東のなだらかな斜地はかつて畠として利用され、墳頂部も戦後の一時期まで畠であったという。

『大津村誌』（森脇定助 1972）によれば、墳頂には享保年間まで子安觀音の堂が置かれていた。

墳丘は、磁北から74°ぐらい東の方向に長軸を向ける長方形台状のマウンドで、それぞれのコーナー部がやや突出する。突出部をいれないおよその墳丘規模は、現状で東西36m、南北28m、比高は4.5m前後である。墳頂は平坦で、広さは東西20m、南北15mほどを測る。

北斜面と東斜面の一部には石垣が築かれており、それに挟まれた北東コーナーは、両脇に石垣をもつ坂道となって墳頂と墳裾を結んでいる。北辺の石垣は墳裾とやや上段とに2列造られており、東辺のそれは墳裾の石垣が失われ、上段のもののみ遺存する。おそらく、北東コーナーの坂道は墳頂にあった觀音堂へ登る参道であり、参道の両側とそれを挟む墳丘の東辺に石垣を築いて整備したものと推定される。これらの石垣はすべて実測したが、弥生墳丘墓に伴うものではないので、本報告では省略する。

測量調査中に、墳丘南麓で特殊壺形土器の破片を表探している。今期のわれわれの調査では、この墳丘墓を発掘の対象として選んだ。

なお、南西突出部の南に、比高1m余の小マウンドがあって、これもまた別の墳丘墓の一部である可能性をもつが、陶土採取のために南側を大きく削られている。

第3節 西谷4号墓の現状と規模（第5図）

4号墓は3号墓と同じ丘陵上の南方にあって、字西谷3598番地他に所在する。3号墓との

間には東から谷がはいり込んでおり、この部分に「観音坂」と呼ばれた小径があるが、今は廃道となっている。4号墓はこの「観音坂」によって北西突出部の一部をカットされている。墳頂部を除いて現状は山林であり、墳頂にはかつて観音堂があったと伝えるが定かでない。墳頂部では戦後しばらくまで烟がつくられており、この耕作中にかなり土器片が出上し（土地所有者の説では手箕3杯ぐらい）、その一部は、池田満雄氏はじめ何人かの先学により紹介されている（第2章参照）。

墳丘は丘陵のやや広い部分を利用して造られているが、自然地形に規制されたためと後世の加工とで、現状はかなり不整形である。やはり長軸を丘陵に直交させて、磁北から東へ100°余りの方向に長軸をもち、おおよそ東西34m、南北27mぐらいの規模をもつ。墳頂平坦面の広さは、東西17m、南北20m前後である。比高は、西・北・東の見かけの墳端を基準にすると4m弱を測るが、南側では南の丘陵との間の切削部分がきわめて浅く、1mほどの比高しかない。突出は北西と北東のコーナーで明瞭に観察され、南西・南東コーナーでは現状では認められない。北西突出部の、「観音坂」によるカット面に配石構造が露出していることについては、すでに出雲考古学研究会が紹介している。北東突出部は丘陵の出っ張りを利用して造られているが、道となっていたためにかなり変形している。

墳丘東斜面や南裾部には人頭大前後の河原石が散見され、ボーリングによれば少なくとも北麓と東麓付近には石列構造が遺存しているもようである。

測量調査中に若干の遺物が表採された。鼓形器台片と特殊壺形土器片がそれぞれ数片のほか、須恵器片が1点あった。

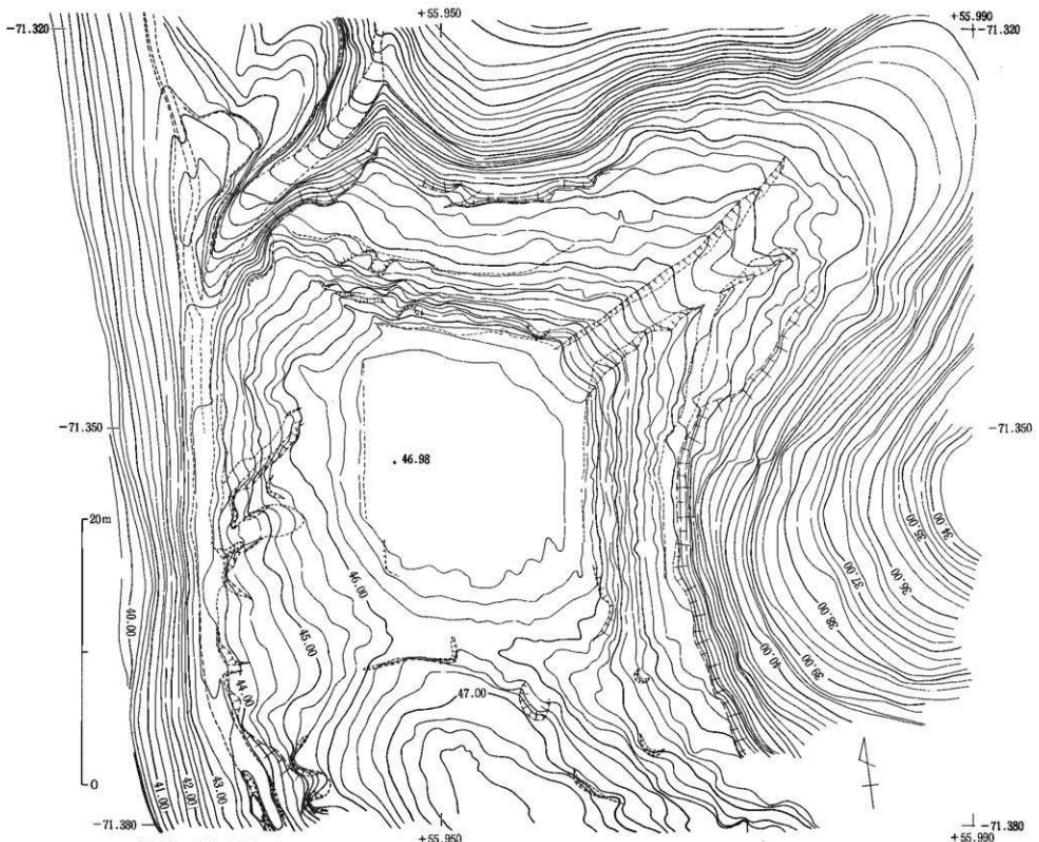
第4節 西谷9号墓の現状と規模（第6図）

3号墓や4号墓のある丘陵から西谷を挟んで約300m北東方にあり、字西谷3557番地に所在する。西谷を南から開む丘陵の東翼から北東に突き出した丘尾の頂上にあって、斐伊川扇状地を見下す眺望絶佳な立地である。丘陵の東と南東側は麓にある人家のため削られ、北側は土採り（斐伊川堤防工事のためという）で大きく削られており、墳丘の北東部の一角はこのために失われている。本体全体が山林で、墳頂はもとから平坦だったというが、1962年以降、ここに三谷神社が鎮座し、かなり改変を受けている。墳頂の整地工事の際に土器が出土したと伝えるが、詳細は不明である。

墳丘は、ここでは丘陵の向きに合わせてほぼ真東西方向に長軸をもっており、東西42m、南北35m、比高4.5mの長方形台状のマウンドである。上採りで崩された北東コーナー以外の各コーナーで、突出部の存在が確認できる。ボーリング所見では各辺の裾に石列があるようで、それによれば、東西45m、南北38mを下らない規模の墳丘と推定される。なお、北東コーナー部の崖面には配石構造が露出している。現状の墳頂平坦は、東西28m、南北22mのいびつな長方形を呈する。



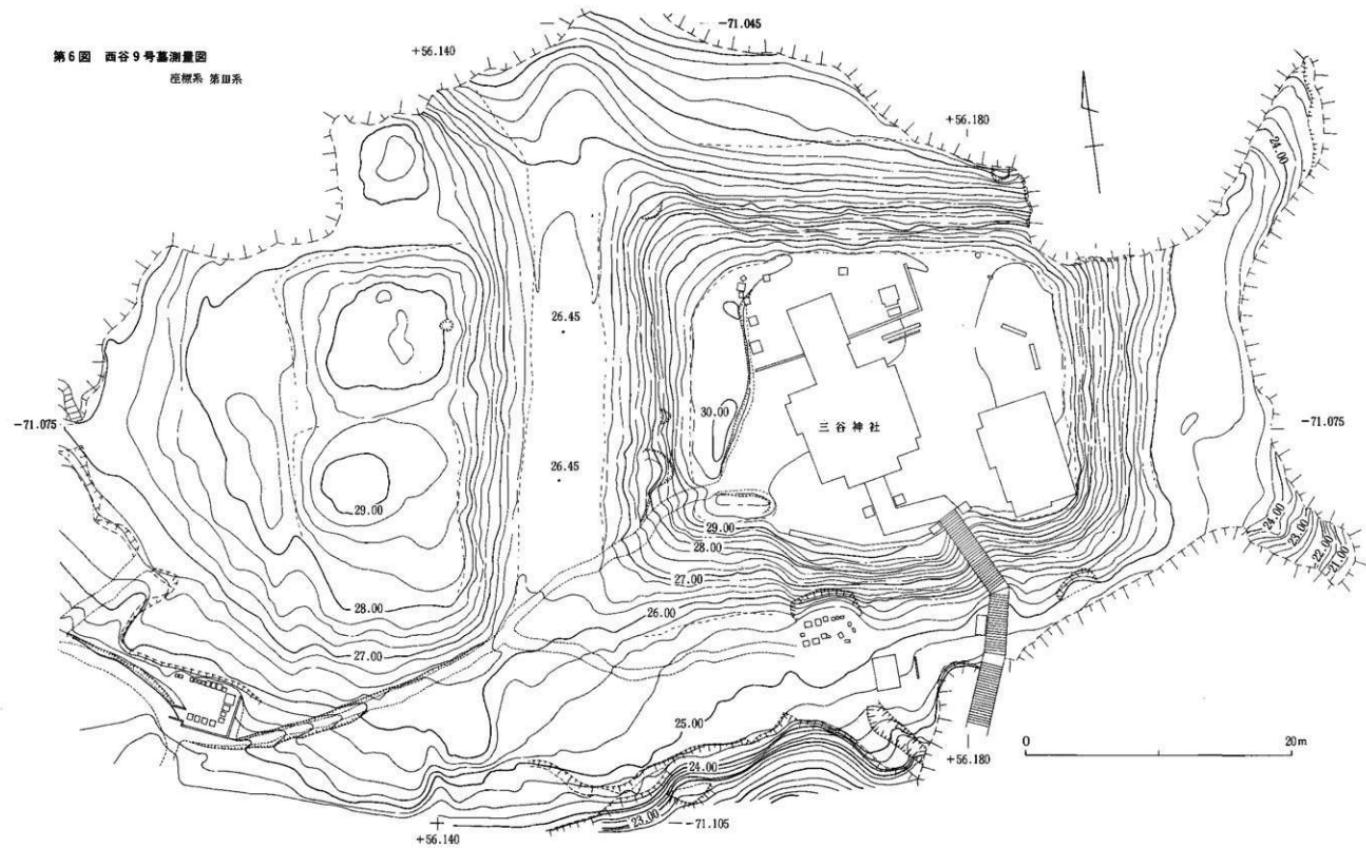
第4図
 西谷3号墓測量図
 座標系 第三系



第5図 西谷4号基測量図
座標系 第三系

第6図 西谷9号墓測量図

座標系 第四系



西谷墳墓群の調査

墳丘裾の東側と西側には、幅6mほどの明瞭な平坦面がつくられており、とくに西側のそれは、丘陵を切断して溝状に整形した見事なものである。この平坦面を隔てた西側には、三つの方形台状の小マウンドが南北に並んでいる。この部分は地形がかなり乱されているようだが、概略の規模を記すと、北のものから順に、7m四方、東西14m×南北12m、東西13m×南北10mほどである。

(渡辺貞幸)



第5章 西谷3号墓の調査

第1節 発掘区の設定

西谷3号墓の現状や規模については前章で詳述した。調査に当たっては、墳丘およびその周囲に4m方眼のグリッドを設定することにし、墳頂部のトラバース杭の一つを基点にして、墳丘の向きに合わせた基準線を決め、これをもとにしてグリッドの杭打ちを行なった。このグリッドの南北ラインは、磁北に対し16°ほど西偏している。

各区には第7図に示したようにアルファベットと数字とを組み合わせた番号を付し、これとその区の北西コーナーの杭の番号とを一致させた。つまり、たとえばJ9坑の南東側の区がJ9区、ということになる。

第7図は、今期のわれわれの調査で発掘した発掘区の配置図である。墳裾近くの発掘区内の破線は墳端を、墳頂部の細線は掲形の位置を示している。発掘した部分では、グリッド・ラインはすべて土層区をとった。

(渡辺貞幸)

第2節 外部施設の調査

外部施設の調査は、西と南の斜面、北西・南西・南東の各突出部で実施した。北斜面と東斜面では、後世の改変のため外部施設は完全に破壊されている。

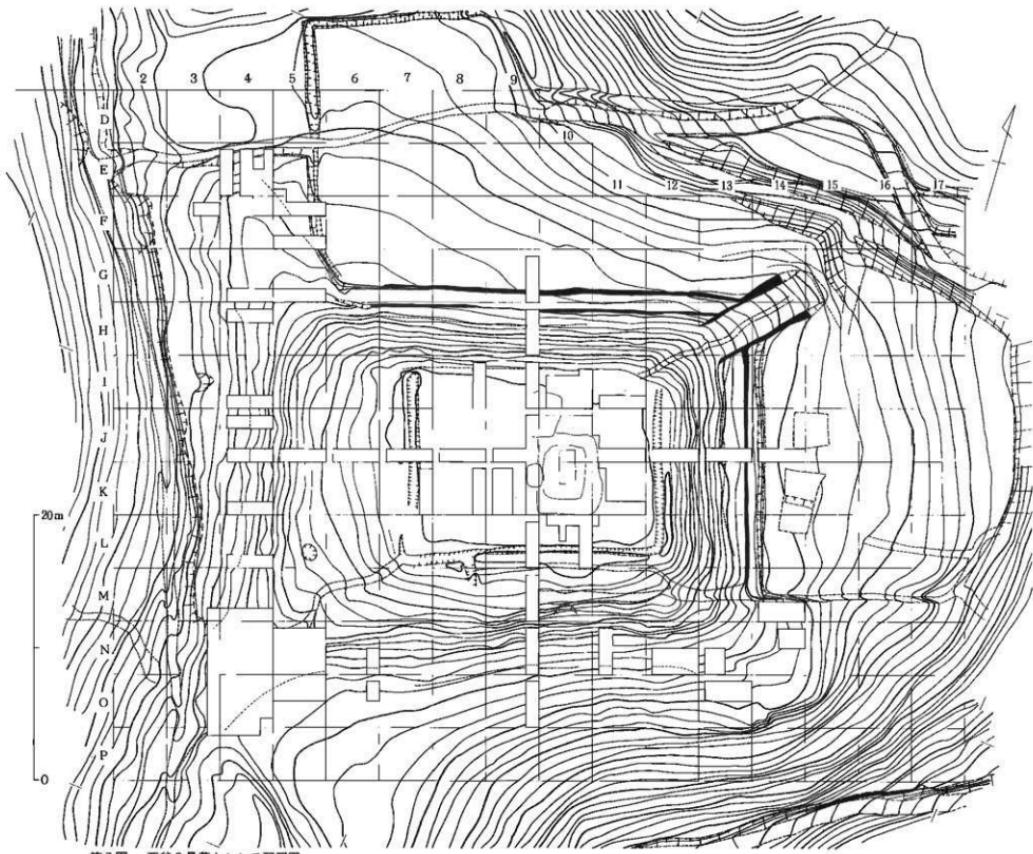
墳丘斜面から墳端にかけては、大きめの河原石を用いた入念な配石構造がみられるが、これを、斜面と墳端部の構造、突出部の構造、の二つに分けて記述する。

1. 墳丘斜面と墳端部の配石構造

墳丘斜面は概ね30°前後の傾斜をもち、斜面には扁平な河原石を貼りめぐらしている。この貼石は、基本的に墳丘盛土の上に行なっており、下方にずれ込んでいる石もあるが、石を組み合わせたり重ねたりすることなく、墳丘斜面に載せるような形で密に石を並べている。下端の貼石を除いて掲形の存在は明確でなく、石と石の間に粘質の土を詰めるなどして固定したようである。

使用された河原石はさしわたり20~40cmぐらいのものが多く、とくに斜面の下端近くでは比較的大形の扁平な石をそろえて並べる傾向が認められる。南斜面のN9区の断ち割り調査の所見では、斜面下端の根石は地山の土にしっかりと掘り据えられていた。また、断ち割り調査をした区でみると、貼石の作業は下から上へ向かってなされたことが推定できる。

貼石は、現状では斜面の下にしかみられない。南斜面のN9区では標高43.3m前後から、西斜面のJ5区では44.0m前後から下で貼石が確認されている。しかし、流土中にはかなり



第7図 西谷3号墓トレンチ配置図

多量の落下した石が堆積しているので、本来の貼石はずっと上方から施されていたと考えなければならない。現状の墳丘の西斜面・南斜面では標高45m前後で傾斜の変化があって、ここから上はややなだらかになる。この変化は後世の耕作・削平によるものかもしれないが、少なくともこのあたりより下には、本来貼石があったと考えられ、さらに、墳丘の肩から下、つまり墳丘斜面のすべてに施されていた可能性もあるだろう。

斜面の貼石の下端の標高は、42.0～42.4mぐらいにそろえられていて、造墓工事の企画性をうかがうことができる。

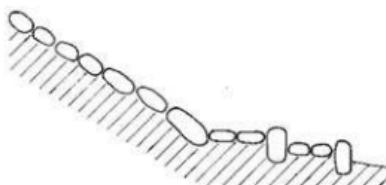
そのすぐ外方には、幅40～60cmほどのほぼ平坦な敷石の面がめぐる。扁平な石を2列あるいは3列に敷き並べているが、西側墳裾では不規則な並べ方をしている部分が多い。

このテラス状敷石の外方に、1列の石列がめぐらされる。これは、長さ30～40cmの比較的大人形で横長の石を連続的に立て並べたもので、断ち割り調査をした部分でみると、いずれも掘形内に据えられている。列石の上面のレベルは前記の敷石面のレベルとほぼ同様ないしやや高くなるようにしている。

この列石の外方に、もう1段の敷石平坦面がある。これも扁平な石を2～3列にあるいは人形の石を1列に置いてつくっており、その幅は40cm前後である。その上面のレベルは、内側の平坦面より10～20cmぐらい低くつくられている部分が多いが、大差ない箇所もある。

そして、その外側に墳端を画する下段の列石をめぐらせる。遺存状況の良い発掘区でみると、上段の列石と同様な横長の石をきちんと立て並べておらず、断ち割り調査によると、やはり掘形内に据えられている。列石の上面のレベルはすぐ内側の敷石と同じぐらいかやや高く、おおよそ標高42m前後である。

こうして、墳丘裾部には、幅数十cmのテラス状の敷石面を2段にめぐらせ、それぞれの段の外縁に1条の列石をもっていることになる。斜面の貼石下端から墳端までの距離は、大体120～140cmを測る(第8図参照)。なお、墳丘西斜面の北寄り、即ちJ4区北、I4区、H4



第8図 西谷3号墓配石構造模式図

区では、斜面の貼石の下端、つまり上段の平坦面の内側に、横長の石を並べて列石のようにした状況が認められている。しかし、これは前述の2条の列石にくらべて石も小形であって顯著なものでなく、局部的、例外的な設備と考えてよい。

また、N9区とJ4・5区では、これらの配石をはずして断ち割り調査を実施した。狭い範囲だけの所見なので不確実な点もあるが、作業工程については列石→敷石→斜面貼石という順序が推定しうるようである。墳端の外方には何らの施設もなく、ゆるやかな傾斜で下っている。

配石構造に使用されている石はすべて人頭大前後の河原石であり、島根大学理学部の渡辺暉夫助教授らの分析によつて、^①神戸川水系から運ばれたものである可能性が指摘されている。

2. 突出部の構造

a. 北西突出部（第9図）

第7図に示したトレンチによって調査を行なったが、全体として遺存はあまり良好ではなかった。突出部の先端と、突出部西側はすでに削られていて原形をとどめていない。

F5区南とF5杭を中心とする発掘区においては、墳端の列石とその内側のテラス状敷石、およびその上の列石の存在を確認することができた。F5区南のトレンチでは、墳端の列石は高さ30cmぐらいの大形の扁平な石を立て並べており、F5杭周辺では、一部の石が失われたり動いたりしていたが、やはり大形の石を横に置いて墳端を画している。その内側には幅40cmぐらいのテラス状敷石があるが、北へ行くほど遺存は悪くなる。上段の列石も、この二つの発掘区では明瞭に確認できる。しかし、さらにその内側の上段の敷石は、表土直下あるいは表土から一部露出しているほどの浅い位置にあったために、遺存は甚だ良くなかった。

一方、突出部西側のG4区南のトレンチでは、墳端の列石は失われているが、上段の列石と、その内側に大きめの石を並べた上段テラスが確認されている。その北方への続きは未発掘であるが、良好な遺存は期待できない。

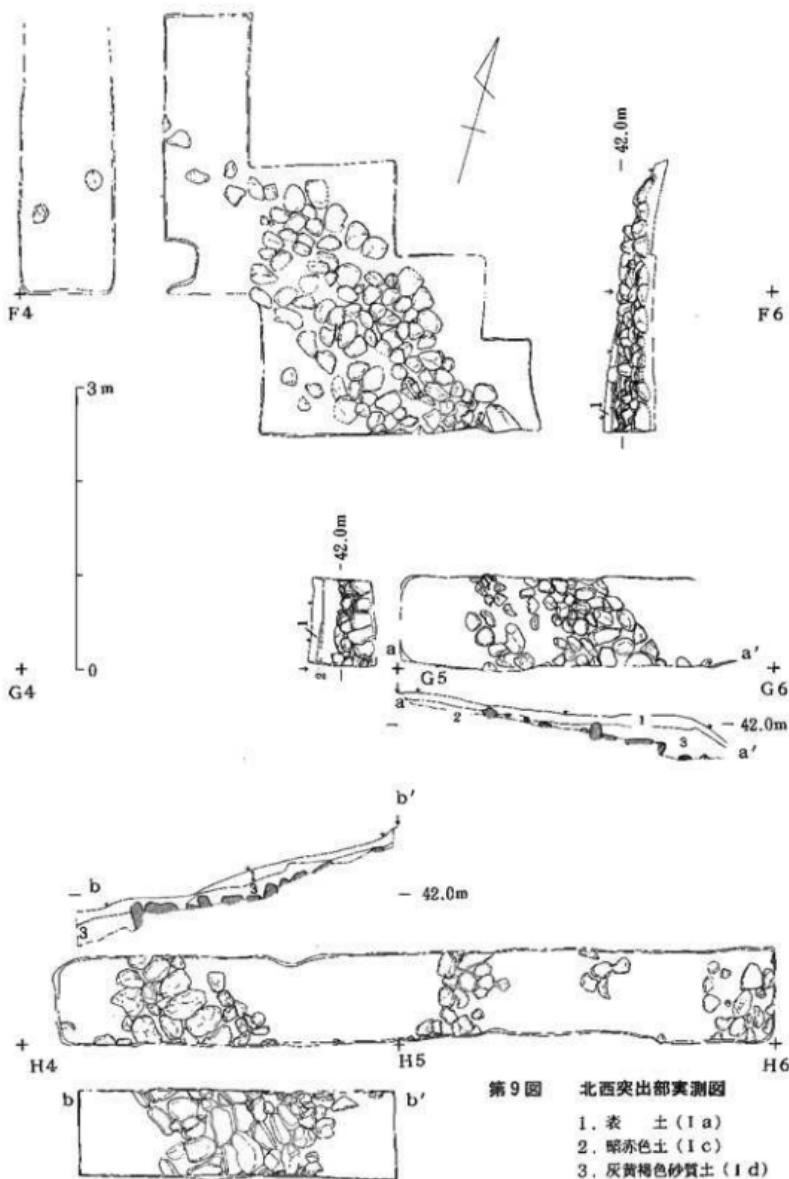
北西突出部の規模は、岡上復元すると、基部で幅約8m、長さは墳丘の北辺と西辺の延長線の交点から測って7mぐらいはあったものと思われる。また、墳端列石の上面レベルは41.9mぐらいにつくられている。

b. 南西突出部（第10図）

ここでは、トレンチ調査のち面的な発掘を実施して、配石構造を観察した。ただし、基部においては遺存は良好であったが、突出部の西側は完全に削り取られており、南側も先に行くに従い擾乱が著しくなって石の喪失や移動が目立った。基部では南側でも西側でも、墳丘斜面の貼石、2段の敷石とそれぞれの外縁の列石という基本構造が明瞭に残っていた。

とくに、墳端直線部分から突出部へかかるあたりの貼石の状況がつかめたことは成果であった。つまり、ゆるい斜面をなす突出部上面の貼石と、墳端直線部分から続く墳丘斜面の

西谷填基群の調査



第9図 北西突出部実測図

貼石とは区別されており、突出部にかかるところで斜面の貼石は急激に幅を減じて、突出部では突出部上面の貼石が上段のテラス状敷石と接するようになる。斜面の貼石が突出部上面の貼石と接する部分には、比較的大きめの石を直線的に並べており、この境目が意義を持っていたことがわかる。この状況を模式的に示したのが第11図である。

南西突出部は、基部の幅約7m、

西と南の墳壙直線部の延長線の交点から測って長さは6m以上あったと思われる。また、墳端の列石の上面レベルは、N 5区で42.4m前後を測り周囲よりやや高くつくられている。

c. 南東突出部

この部分の遺存は甚だ不良であった。南辺では、N 12区すでに墳端の列石がほとんど失われているが、N 13区にはいったあたりで配石構造そのものがほぼ完全に失われてしまう。東側ではM 14区とN 14区で発掘をしたが、石は痕跡的にしか残存しておらず、配石構造や墳端の位置をはっきりとつかむことはできなかった。

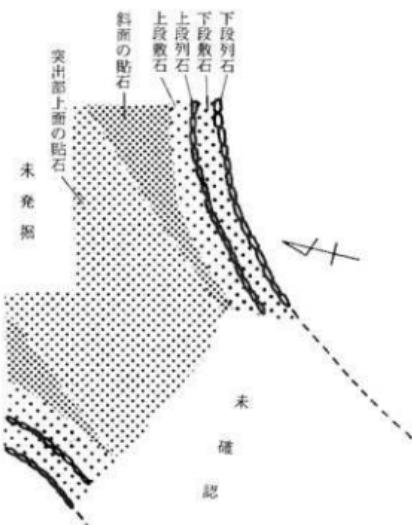
この南東部では、地形測量図からみると、谷が迫っているためかなり土盛りをするなどの土木工事をしないと突出部を造ることができなかつたはずである。こうした地形的制約から来る無理が、この部分の崩壊を招いたと考えられる。

3. 墳丘規模の復元

墳丘の北辺と東辺では、本来の墳端が失われているが、北西突出部の東側基部の墳端のカーブの状況から、北辺についてはおおよそその位置を推定することができる。東辺については、南東突出部の遺存が悪くさか不確実だが、遺存した石の最下端付近で大体のところを考えてみると、本墳丘墓の突出部を含まない規模は、概略、次のように復元できる。

東西 約40m、南北 約30m。

墳丘の比高については、後述のように、第1主体のあたりでは本来の墳丘上面と現在の墳丘面とが大差ないレベルであったと推定されるので、約4.5mと復元できる。（渡辺貞幸）



第11図 南西突出部模式図



第10図 南西突出部実測図

- 1 表土 (I a)
- 2 紫赤色土 (I c)
- 3 灰黃褐色砂質土 (I d)

註

- ① 渡辺暉大・飯泉滋・小林英夫・横山泰：出雲市西谷丘陵遺跡3号墓石垣列を構成する岩石の記載（1）
『山陰地域研究（自然環境）』第1号、1985。

第3節 墳丘構造の調査

墳丘構造の調査は、墳丘のほぼ中軸を通る2本のライン、10ラインとKラインで実施した。この軸に沿ったトレーニングで、墳頂部を除いて地山まで掘り下げる、盛土等の観察を行なった。墳頂部では、完掘した第1主体と第3主体の部分以外では、数cmの深さまでの試掘にとどめた。上層については、現場ではかなり細かい分類を行なったが、ここでは層の基本的性格を重視し、あまり煩瑣な分類は差し控えることにする。上層図の記号は、I表土・流土、II盛土、III埋土、IV地山とし、さらにa、b、c…でそれぞれを大まかに分類して示した。

東斜面（第12図の上）では、すべて地山の山廻層（くさり疊層およびその下位の粘土層）まで削られていて、原墳丘面は全く残っていない。墳裾も40.4mぐらいまで削平されていて、墳端の痕跡もない。現在、中腹に1段の石垣が造られているが、この石は、本来墳丘面に配されていた石を割るなどして再利用したものであろう。この石垣の裏込め土は、地山の上に直接載っていないので、東斜面の破壊と石垣設置との間には一定の時間差があったと考えられる。

西斜面（第12図の下）はやや複雑である。墳裾部の地山に正体不明の古い落ち込みがあり、これを埋めている上に掘形をつくって墳端の列石を立てている。下段の敷石もこの埋土の上に載っているが、上段列石より上の配石は、その上に堆積する暗黄褐色土の上に行なっている。この土は、墳丘斜面では地山の風化した面の上に載っており、盛土と判断される（図のII c）。墳端のさらに内では、IV b層が墳丘南麓のO 9区で黒色帶（旧表土）の下にみられる層と同一であるので、その上の小ブロックを含む暗赤褐色土は、墳丘外になされた盛土と判断される（II b）。

墳頂寄りのJ 6区（K 7杭とK 6杭の間）には何らかの遺溝があるらしく、地山に落ち込みがあつて付近に複雑な層序がみられたが、掘り下げるとはせず、現状で図をとったのちそのまま埋め戻した。なお、西斜面では墳丘斜面全体にわたって暗赤色土（I c）の厚い堆積がみられる。後世に墳頂部を削った時の上であろうか。

次に北斜面を見る（第13図の上）。北斜面も後世に削られていて、原墳丘面および配石構造は一切残っていない。墳裾も41.2mぐらいまで削平されている。現状の2段の石垣は、東斜面と同じく、墳丘に使われていた石を割るなどして再利用したものであろう。基盤の山廻層の上に載る黄褐色土（A）と暗赤褐色土（B）については、均質でよく締まっているが、盛土である可能性が強い。もし盛土だとすると、この墳丘基は北側においては大変な量の盛

土をしていることになる。

南斜面（第13図の下）では、墳丘外で旧表土と考えられる黒色帯（IVa）が確認され、墳丘外にも厚く盛土していることが判明した。墳丘南側は東からの谷が造り落ち込む地形であり、そのため墳丘外まで盛土して墳裾を整える必要があったのであろう。N 9区（N 10杭とO 10杭の間）では墳端の列石は失われていたが、上段の列石は地山を掘り込んで据えられており、下段の敷石は若干の盛土の上に置かれている。斜面の貼石は、基盤層の上に施された盛土の上に行なわれているが、最下の根石は地山に掘り据えられている。墳丘斜面の上の方では層序が複雑で、地山と盛土の識別について確信をもった結論を出すことができなかった。図では調査時における一応の見解に基づいて表示したが、今後の調査によって再検討する必要がある。

（渡辺貞幸）

第4節 第1主体の調査

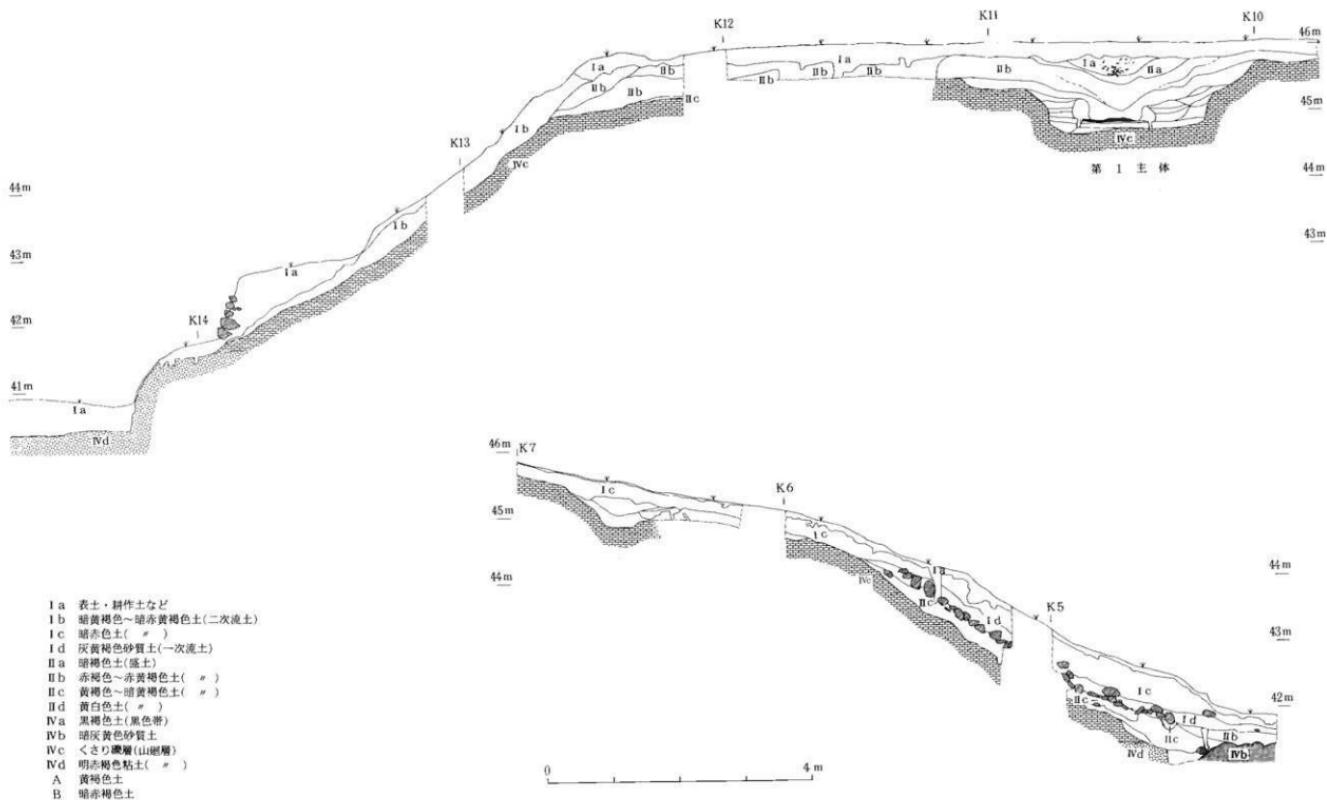
墳頂部ではいくつか埋葬施設ないし土壙状落ち込みの存在をうかがわせる地点があったが、大量の土器片が検出されたK 10区からJ 10区南半にかけての地区を選んで、ほぼ全面的な発掘を行なった。これを第1主体と名付け、この地形の北西隅をカットしている土壙を第2主体と呼び、同じく西辺の一部をカットしている小土壙を第3主体とした。第2主体は輪郭の一部を明らかにしたのみであり、本節で第1主体について、次節で第3主体について報告する。

1. 供献土器群（第14図）

第1主体は、現状の墳頂平坦面のやや東寄りに造られている。ここではまず、表上直下に夥しい土器片が集中して現れた。

土器片群は、南北約2.0m、東西約1.5mの範囲にわたり、深さ40cmぐらいのゆるい鍋底状の落ち込みの中にぎっしりとつまっていた。最深部は、土器群の分布範囲のやや南寄りである。土器群が集中していた凹みは、のちほど述べるように、地下の棺槨が腐朽することによってその上の埋土や盛土が崩れ込んでできたものであり、本来、土器群は平坦な面の上に置かれていたと考えてよい。

表土（耕作土）直下では土器はほとんど細片であるが、掘り下げるにつれ、かなり原形をとどめる土器が多くなる。そうした土器でみると、たとえば鼓形器台の上に壺形土器が載っていたり、低脚杯に小形壺形土器が載っている状況をばす例がいくつかあったが、また一方では、完全に倒立した土器も多く、これらの出土状況が本来の供献状態をそのまま示すとは言えない。なお、ここに集積されていた土器は、接合作業の結果、約100個体にのぼること



第12図 塗丘断面図 (東西方向)



西谷墳墓群の調査



第14図 第1主体土器群

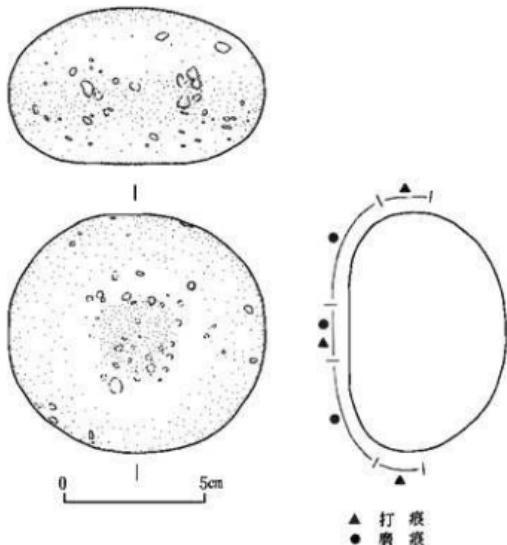
(b-b'ラインは10ラインの2m東方)

アミは礫を示す

が明らかになった。従って、これらの土器は、一定の祭儀のち狭い範囲内に集められた状況を示す、と考えた方がよいだろう。

土器群は鮮やかな朱彩を残すものが多く、島根大学理学部の橋谷博教授の分析によって、これが水銀朱であることが確認されている。朱は、出土した状態で下面や内面になっていた部分によく残っており、上面となっていた部分にはほとんどみられない。本来内外面に朱彩されていた土器が、集積され一定期間放置されているうちに、表に出ていた部分の朱が洗い落されたものと考えられよう。しかし、表面がほとんど風化していないのに朱彩がみられない土器もあるので、朱彩がすべての土器に施されていたと断言することはできない。また、土器片に混じて大小の礫がいくつかあったが、これらには、次に述べる最深部の円礫を除いて、朱彩は認められなかった。

土器群の最下部、鍋底状落ち込みの最深部には、拳大の円礫が一つ置かれていた。この円礫は、その下方にある大形土壙のほぼ中央にあたる位置にあって、この石を中心にして多量の土器の集積がなされたと推定される。この石はきれいな鏡頭形の河原石であるが、底面の中央と縁辺とに叩き石にみられるような打痕があり、底面には磨痕があって、打痕の部分を中心に所々に朱がこびり付いている。辰砂の粉碎・すりつぶしに使用した石杵の可能性がある。大きさは、径 8.5~9.2 cm、厚さ 5.6 cm あり、重さ約 640 g、石材は浮石質凝灰角礫岩である^①(第15図)。



第15図 円礫実測図

落ち込みの最下部では、第16図のb-bセクションにみると、朱が5cmほどの厚さにて土にうすく滲み込んでいた。土器に施されていた朱が流れ出して滲み込んだものであろう。

2. 土壙と棺槨の構造（第16図）

第1主体の土壙は、地山の川廻縁層から直接掘り込まれている。従って、少なくともこの部分では、土壙掘鑿時までに旧表土を除去し、地山を露出して平坦に整える作業が行なわれたはずである。土壙の堀撃面は東に低い傾斜をもっている。

掘形はほぼグリッド・ラインにそって長軸を南北に向けた隅丸長方形で、南北約6.1m、東西4.4ないし4.8mある。壁際はゆるい傾斜をなし、北西コーナーは第2主体に、西縁の一部は第3主体によって切られている。なお、この第2主体によってカットされている部分は、第2主体掘形に多少余裕をもたせて掘り残し、将来のこの部分の調査に備えることにした。また、東壁の一部にはこの土壙に先立つ掘り込みの存在が、土壙外の発掘区南東隅には盛土から掘り込まれた新しい時期の土壙の存在がそれぞれ確認されたが、未調査である。

土壙は一段掘りになっていて、外壙は深さ20cmないし30cmほどで、その中央やや寄りにさらに深さ約70cmの内壙が掘られている。内壙の壁の上半はゆるい傾斜をもつが、下半は垂直に近く掘り込まれている。内壙は上縁で南北4.1m、東西3.0m、底では3.35m×2.3mほどになる。

内壙内の北壁側を除く三方では、壁寄りにほぼ水平の層序をみせる堆積があって、その内側が垂直に切れており、その部分に軟らかいキメの細かい黒褐色土（セクション図のY）がみられる。そしてさらにその内側、つまり上壙中心部は、上部の上器群の落ち込みに対応して鍋底状の堆積となっている。こうしたことから、壁ぞいの水平堆積は、土壙内に置かれた棺あるいは櫛の側板の背後を裏込めした上と判断された。

土壙内の埋土は、大変細かく分層できるが、第16図ではそれらを大まかに分類し直して示している。裏込め土の大部分は白色の粒子や大小のくさり礫片が混じた土で、この多寡によって細かく分層できるが、裏込め土はこのような土を互層状に積んでいることが看取される。その内側の軟らかい土（Y）は、棺ないし櫛陥没の初期において周囲から中にはいり込んだ細かい土が、倒れ込んだ蓋材等によって一定期間保護されていた部分であろうと推定された。

土壙北辺では、内壙の壁に大体接してこの軟らかい土があるので、北壁には棺ないし櫛が接していて、裏込め土はほとんどなかったことがわかる。

土壙の中央近くでは、大きく落ち込む層序を示す。多量の土器群が集積されていたのは土壙埋土のさらに上に置かれた盛土の上面であったことが、土層断面図から明らかである。この盛土は2層ないし3層に分けられるが、上層の盛土（IIa）の下部から数片の土器細片が検出されている。下位の盛土（IIb）は、最も陥没した中央部では、その下の埋土（棺ないし

し櫛の被覆土)との境が判然としなくなる。また、この部分には炭化物の混入したやや暗い土がみられる(セクション図のX)が、その性格については明確にしえなかつた。土壤埋土の中央に有機質のものを置いていたか、下層の盛土をした段階で中央に有機質のものを埋置したか、などの可能性が考えられるが、よくわからない。

棺が朱を伴うものであることは、中央部の埋土下部にうすく朱が混じていることから予想されたが、掘り下げるにつれ、明瞭な朱の面が検出された。色調は紫みをおびた鮮やかな赤(ローズレッド)色で、独特の異臭を放ち、平安博物館の上田健夫氏の分析によても水銀朱であることが実証されている^⑨。

一方、裏込め土に支えられていたと推定される棺または櫛の側板の痕跡が、前述の軟らかい土の下で幅5cm前後の黒っぽい帯として平面的に確認された。ところが、朱の広がりはきちんととした長方形になるにもかかわらず、それはこの側板痕跡の輪郭とは一致せず、朱の広がりの北と西には空間の存在することがわかつた。つまり、朱の広がりが箱形の木棺の範囲を示し、裏込め土に支えられていたのは棺そのものではなく、それを納める木櫛であった、と考えられるに至った。棺そのものの側板の痕跡も朱の広がりの縁辺の一部で平面的に確認され、この推測は裏付けられた。

こうして明らかになった棺櫛の規模は次のようであり、いずれも南側がやや幅広く造られている。

櫛の外法 南北 2.6-2.55 m, 東西 1.25-1.2 m。

棺の内法 南北 2.1 m, 東西 0.85-0.8 m。

櫛材は完全に腐朽し去っているが、その痕跡のプランは幅5cm程度の帯をなしている。しかし、どのように加工された木材が使用されたのかはつかめなかつた。

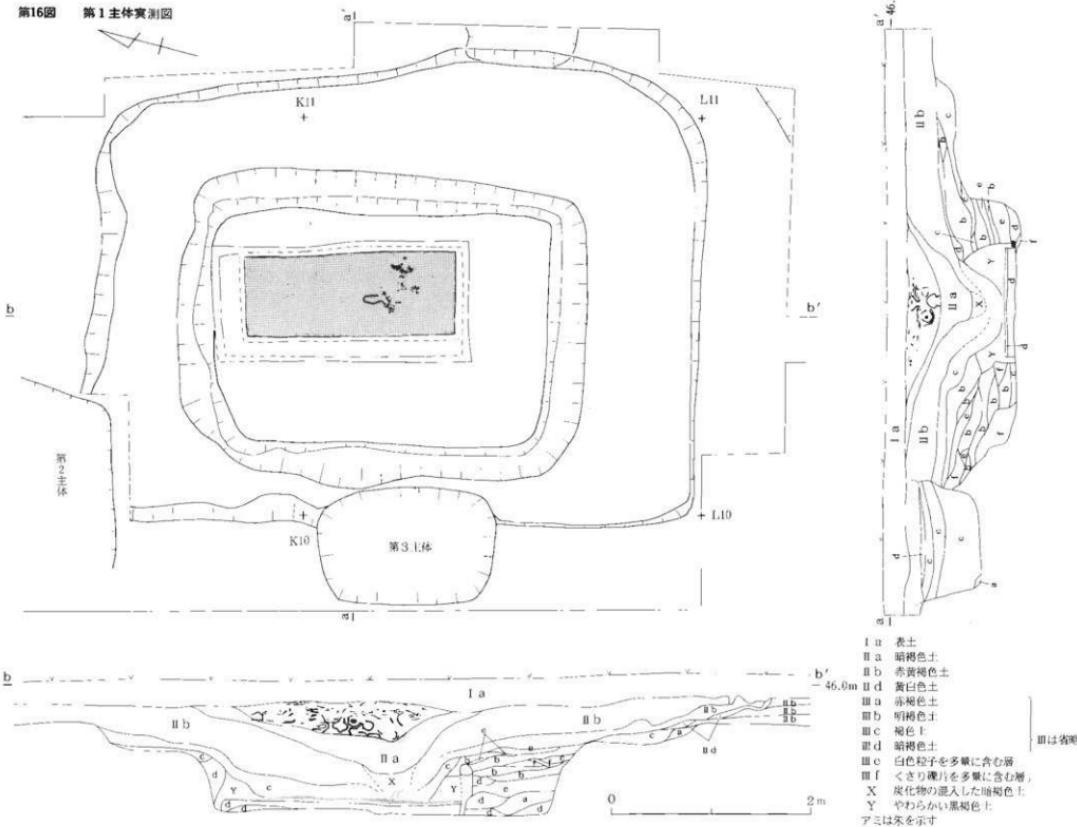
棺の朱の上面からは多くの遺物が出土し、この朱が棺底に敷かれたものであることが明瞭となつた。出土品については別に記す。

棺内遺物の精査、実測、撮影その他の調査のうち、棺下と土壤底の調査を実施した。

棺底の朱は棺の内法いっぱいに広がっていると考えられ、厚い所では4cmの厚さがあり、3cmぐらいの厚きの部分が多いが、周辺部はやや薄い。朱の下面には、炭化した薄い木質片が一部に認められ、棺底材の残存と考えられた^⑩。また、セクション観察から、棺側板の厚さは4cm前後あったこと、棺は底板が側板に挟まれる形式だったことも推測できた。

朱の下面から土壤の底面までには約10cmの堆積がある。この堆積は櫛の痕跡の内部にあり、櫛の設置後、棺の安置に先立って、櫛内に入れられた置土と判断される。一方、櫛底部の構造についても精査したが、側板は掘形をもたず、底面の上に直接、あるいは多少の置土をした上に立てられていたことが判明した。この置土は東側の部分に認められるが、土壤の深く掘り過ぎた部分を埋めて整地したものであろう。東側には、側板の下に故意に円礫を置いて安定を図ったと考えられる部分もあった。なお、櫛に底板があった形跡は認められなかつた。

第16図 第1主体実測図



これら桟や棺の下の置土には、白色を呈する円礫がいくつか含まれていたので、これも島根大学渡辺順夫助教授に鑑定していただいた。それによると、墳丘の配石構造に使用された石と基本的に同質のもので、河原から白いきれいな石を選んで持て来たのではないか、とのことであった。

3. 第1主体の復元

第1主体の構築は、次のような順序でなされたと推定される。

墳頂部の整地した地山面に、深さ1m前後の人形の二段掘り土壤を掘鑿する。内壇底面の掘り過ぎた部分に円礫混りの土を入れて整え、その上に木桟の側板を立てて四角く組み立てる。木桟は内壇の北辺に接して置かれる。不安定な所には下に礫をかませる。木桟がどのような材をどのように組んで造られたのかなどについては確認できていない。土層の堆積状況からみると、側板の高さはおそらく70cmないし80cmであったと考えられる。桟の底に10cmほど土を入れ、また、外側の内壇壁との間には裏込め土を入れる。裏込めは、くさり礫片や白色粒子の多寡で区別される何種類かの土を互層状に入れる。ただし、木桟が内壇下端と接している北辺では、簡単に土を入れただけのようである。裏込めは内壇の壁高に対応するぐらいまで行われたようであり、この土壤が二段掘りになっている意味もここにあるかもしれない。しかし、その上面を幣てて何らかの儀礼を行なったような痕跡はみられない。

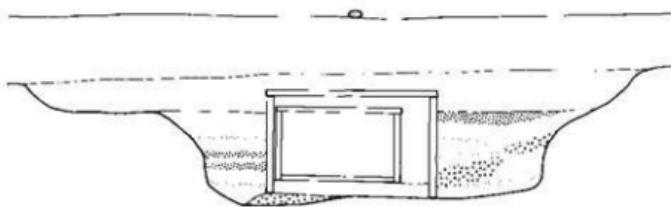
次に、箱形の木棺を上から桟内に入れる。木棺は桟の東壁と南壁とにほぼ接して置かれている。続いて、木桟に蓋をする。木桟に蓋があったことは、桟内の各側板ぞいにあたる部分に堆積した軟らかい土の存在から疑えない。蓋がなければこうした堆積は起りえないからである。

裏込め土の上と木桟の蓋をおおう埋土を行ない、ほぼ外壇ぎわの高さまで埋め戻す。次に、さらに上に盛土を行なう。盛土は2層ないし3層に分けてなされている。この上に置かれた土器群の落ち込み状況からすると、盛土は50cm前後の厚さがあり、本来の墳丘面は、現在の墳丘面とほぼ同じぐらいのレベルにあったと推定される。

これらの盛土と墳丘の他の部分の盛土との関係が問題となるが、主体部南側のセクション(第16図のb-1右方)では、第1主体上部の盛土が、墳丘盛土とは別にあとからなされているように観察される。つまり、第1主体の予定地は、盛土をしないで残してあった可能性が考えられる。他のセクションではこうした知見は得られていないが、今後の検討課題となろう。

最後に、盛土上面の、ほぼ土壤の中心にあたる所に、辰砂の粉碎に使用された円礫が置かれ、ある時点で、これを中心に多量の上器が集積される。

第17図は、Kラインのセクションをもとに復元作成した、第1主体を北から見た模式図であるが、棺高などは根拠をもっていない。



第17図 第1主体復元模式図

4. 棺内遺物の出土状態（第18図）

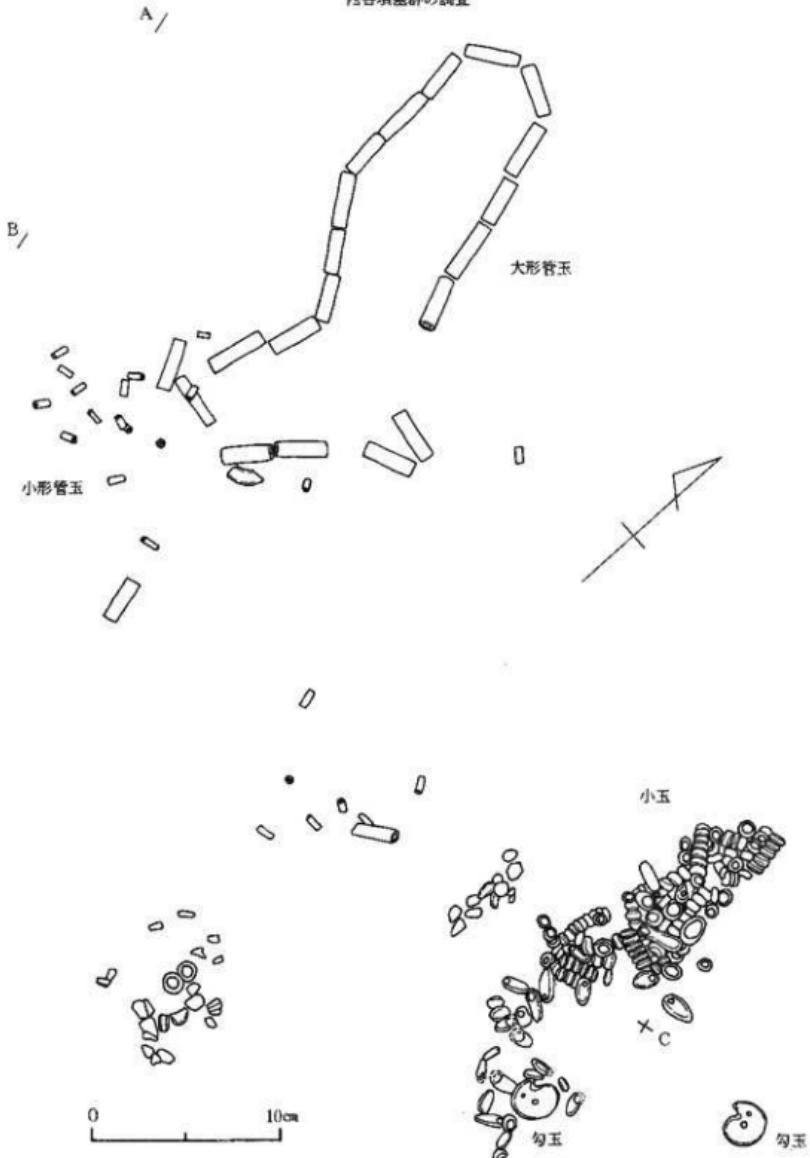
棺底の朱の上面で検出された遺物は、すべて棺の南半にあった。

朱の広がりの南縁から北へ 80 cm の中央やや西寄りあたりを中心に、大形の管玉が輸をなした状態で検出された。浅い青緑色を呈し大変脆い質であるが、島根大学一浦清教授の鑑定によって、ガラス製であることが確認された。南側の一部が少し乱れているが、基本的に 20 個が長円形に連なっている。南の方にある 2 個は検出レベルがやや高く、次的に散乱したものと考えられるので、本来は、これら 22 個で一連の環を構成していたものかもしれない。

大形管玉のすぐ南からその東方にかけては、小形の管玉が散乱している。こちらは明るい緑味灰系統の色で、堅緻である。いわゆる緑色凝灰岩を加工したものと思われる。平面的にも検出レベルの上でもかなりの散乱状況を示すが、大形管玉のすぐ南とその東方の二つのグループに大きく分けられる。検出レベルの幅は、両グループとも 3 cm 近くあり、後者のグループの方に多少高いレベルのものが多いが、大差はない。出土状況からすれば、大形管玉の連条の一部に附属していた玉類である可能性もある。

やや南寄りの棺東半に、ガラス製小玉類が多量に検出された。東寄りのぎっしりまとまつた部分、その西のグループ、さらに南西の棺中軸に近い部分の、三つのグループに分けられ、この順に検出レベルの平均は低くなり、その差は 3 cm ぐらいある。いずれも表面が完全に白く風化していて、大変脆くなっていた。径 8 mm 前後の環状をなすものと、頭に一孔をもつ牙形あるいは誤形をした垂飾状のものがみられる。東寄りのグループは数珠にしたものをまとめて置いた状況を示していくよう。また、このグループには、うすい青みの緑色をしたきわめて脆い小形の玉類が若干あったが、これもガラス製と思われる。なお、ガラス製の玉類は理化学分析を依頼中であるが、表面の風化層を除去してみると、半透明で、うすい黄色、鮮やかな緑色、いわゆる鈍色などの色調を呈するものがあることが判明している。

内谷墳墓群の調査



第18図 棺内遺物出土状況

(A・Bは南北セクション・ライン、Cはセクション・ラインの交点より東へ50cm、南へ50cmの点)

東寄りのガラス小玉が密集する部分に接して、ガラス製の鞘形をした異形勾玉が2個あった。半透明で濃いコバルトブルーの大変きれいなものである。

以上の遺物のうち、大形管玉と小玉類は著しく風化していたため、これらの大部分は現場で取り上げることができず、結局、土ごと切り取って持ち帰る方法をとった。

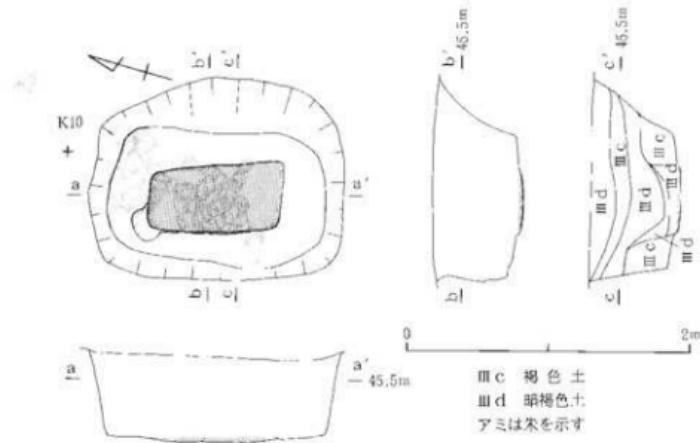
(渡辺貞幸)

註

- ① 島根大学渡辺眞助教授の御教示による。
- ② 『山健大・墳墓の中の赤色鉢物(下報)』『京都大学教養部地学報告』第20号、1985。
- ③ このサンプルは、後日、島根大学農学部の古野毅助教授に樹種鑑定を依頼したが、完全に炭化しているため鑑定不能ということであった。
- ④ 渡辺眞助「出雲市西谷道跡二号墳第一主体の墓坑下底埋土中の蘿」『島根大学地質学研究報告』第5号、1986。

第5節 第3主体の調査

第3主体は、第1主体の掘形を追求中に発見された。プランの切り合い関係から第1主体より新しいことが明らかだったので、直ちに四分法で掘り進めることにした。第3主体は第1主体の外縁の西壁を切って、その階梯的位置に造られている。第1主体の埋土およびその上の盛土を切って掘り込まれているが、掘り込み面を明確につかむことはできなかった。



墳形は長輪を南北にとり、小判形に近い不整圓丸長方形をなし、南北1.8m、東西1.4mほどである。深さは検出面から約65cmある。墳壁は急傾斜で、西壁は垂直に近い。

墳底の広さは南北1.5m、東西0.9m前後の不整圓丸長方形で、概ね平坦だが、その中央に周囲より3cmぐらい深く掘られた長方形の部分がある。これは、南北93cm、東西40~48cm（南が広い）の大きさで、この範囲に朱が分布していることから、ここに棺の置かれていたことが推定できる。しかし、棺材の痕跡などは一切認められなかった。

土層断面によれば、棺側外には褐色土をもって裏込めしており、裏込めの高さから棺高が40cm以上あったことが推定される。棺は箱形木棺であったと考えられるが、材の組み合わせ方などについての知見は得られなかった。棺のあった部分には暗褐色土が落ち込んでおり、遺物は何も検出されなかった。

棺底に散かれていたと考えられる朱は、第1主体のそれのような純粋なものではなく、にぶい赤褐色で、厚い所で3cmを測る。上田健夫氏による分析では、辰砂にかなりの量の粘土物質が混じているということである。^①

(渡辺貞平)

註

① 上田健大「墳墓の中の赤色鉱物（予報）」『京都大学教養部地学報告』第20号、1985。

第6節 出土遺物（1）第1主体上方の一括土器

3号墓第1主体から出土した土器のうち次節で述べる特殊土器以外のものは、確認できる個体数が100個体ある。このほかにもさきにいくつか小片があるので、もともと100個体以上は存在していたものと推測される。

器種は多様であり、これまで当方ではあまり類例の知られていないものも含まれている。器種の名称については不的確な点もあるが、ここで便宜的に分けるとすれば、壺、把手付短頸壺、裝飾壺、鼓形器台、器台、高坏、低脚坏などがあり、数量は次のとおりである。

壺	24	把手付短頸壺	13
裝飾壺	3	鼓形器台	24
器台	8	高坏	9
低脚坏	19		

以下、それぞれの器種ごとにいくつかのグループに分けて、それらの特徴をとりまとめて記述することにする。

壺形土器

当方では弥生時代後期から古墳時代前期にかけて壺と壺とが截然と区別し難い傾向になる。ここで取り上げたものは弥生中期の壺の系譜を引くものも含まれていると思うが、便宜上、一括壺として記述を進めることにする。壺としたものは大きさに大小があり、それぞれA(大)・B(小)と称することにする。壺A・Bとしたものは、さらに器形、文様、調整の特徴などからI・II・III類に分類し、Iについてはさらに器形の細かな違いにより、a・bに細分することとした。

壺A I a (第20図-1) 口径12cm、器高14cm、胴部最大径14cmあまりの壺で、確認された個体数は6個体である。口縁部は、やや内傾した頸部から大きく弯曲してほぼ直立して長く立ち上がったあと端部付近で外反する複合口縁をなす。胴部最大径は体部のやや上位にあり、底部に向かって直線的にすぼまり、径2.8cmあまりのやや丸味をもつ半底におわる。肩部から底部にかけては器肉が厚き2mmあまりできわめて薄いが、頸部から口縁部にかけては器肉が厚く、口縁部の幅が広いのが特徴である。

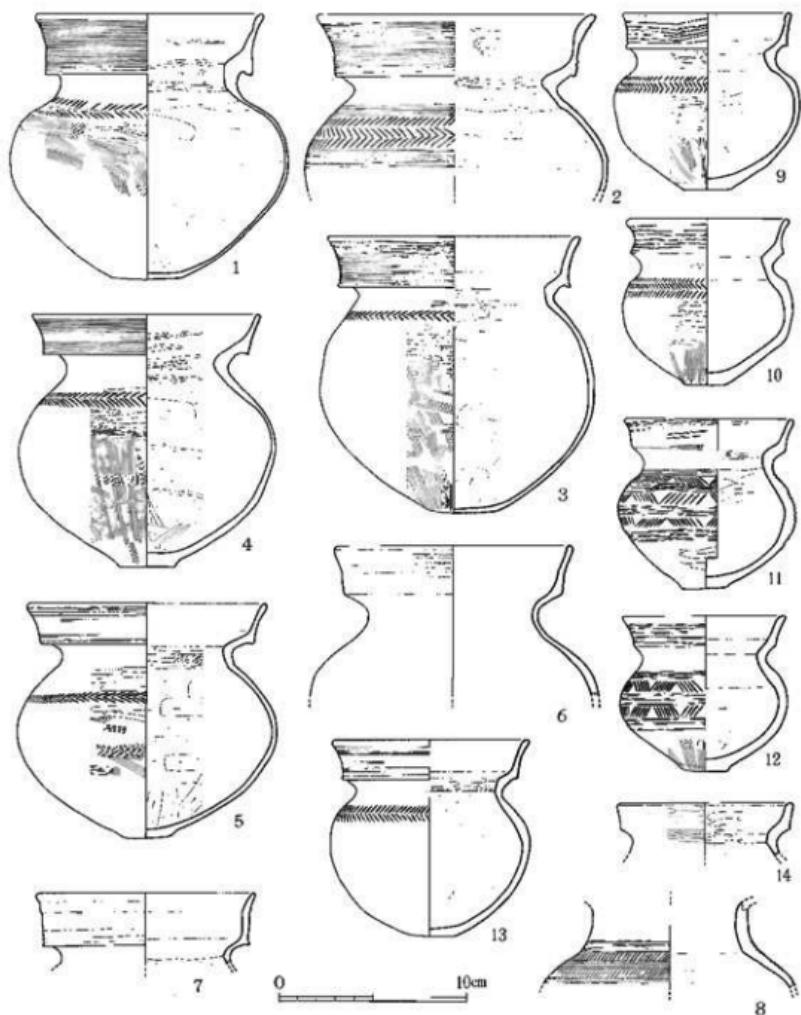
口縁部外面には20条あまりの櫛状平行沈線文が施され、内面はナデのあと一部にヘラミガキ痕がみられる。肩部は刷毛目調整のあとヘラミガキが施され、貝殻腹縁による刺突文が羽状にめぐらされている。胴部外面は横・斜め・縦方向の刷毛目調整がなされ、内面は丁寧なヘラケズリがなされている。

胎土中には1~2mmの石英粒や、小さな長石をはじめとする砂粒を多く含む。器壁はにぶい黄橙色を呈するが、頸部・口縁部等に赤色顔料がわずかにみられるものもある(第20図-1)。黒斑があり、焼成は良好である。

壺A I b (第20図-2~6) 壺A I aとしたものとほぼ同形・同大的もので、10個体ある。壺I aと若干異なるところは、口縁部の器肉が体部に比して極端に厚くならず、口縁部がやや外傾して立ち上がり、A I aほど幅広くならない点である。また、胴部最大径は体部のほぼ中位にあり、球形に近い形状を呈する。底部は壺A I aと同様な不安定な半底をなすものの(第20図-3)と、自立はしないが明らかに突出させて明確な平底を意識したもの(同一4~5)がある。

口縁部外面にはいずれも15条あまりの櫛状平行沈線文が施され、一部ナデによって消されているものもある。口縁部内面は部分的にヘラミガキ調整のみられるもの(同-4)とヨコナデ仕上げのものがある。肩部は横方向のヘラミガキのあと貝殻腹縁による刺突文が羽状に施されるものが多い(同-3~4~5)が、さらにこの上下に櫛状平行沈線文を加えたもの(同-2)もある。胴部外面は横・縦・斜め方向の刷毛目調整がなされ、内面頸部以下は丁寧なヘラケズリが行われている。

胎土中には壺A I aと同様に石英・長石等の小砂粒を多く含み、器壁はにぶい黄橙色を呈



第20図 第1主体出土土器(1)

する。黒斑のみられるものが多くいずれも焼成は良好である。なお、第20図-6は器面の風化が著しく文様・調整等不明な点が多い。

壺A II (第20図-7) 口縁部に平行沈線文が施されないもので、1個体ある。小片であるが復元口径14cmあまりのもので、口縁部は内外面ともヨコナデが施されている。内面頸部以下はヘラケズリがなされている。胎土中に石英・長石等の小砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈し、黒斑がみられる。焼成は良好である。

壺A III (第20図-8) 頸部から肩部にかけての小片であるが頸部がほぼ垂直にやや長く立ち上りるものである。確認している個体数は1個体である。頸部復元径は約8.5cmある。頸部から肩部にかけて4条のヘラ描平行沈線、斜行刺突文(施文原体はタマキ貝ではない)が交互に施されている。内面頸部以下はヘラケズリがなされている。胎土中には石英・長石等の小砂粒を多く含む。色調はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

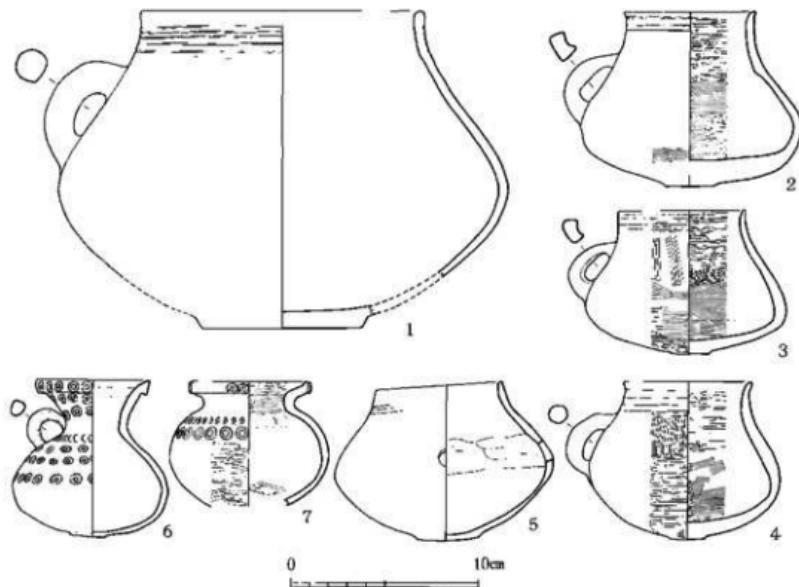
壺B I (第20図-13) 1個体ある。全体の形状等は壺A I bに酷似するが、口径10cm、器高10.5cm、胴部最大径10.7cmの小形品である。底部はかすかにアクセントを残すが、ほとんど丸底といってよい。口縁部外面は櫛描平行沈線文を施した後一部ナデによって消され、内面はヘラミガキがなされている。肩部には貝殻腹縫による刺突文が羽状にめぐらされている。体部の調整は、胴部最大径付近までは横方向のヘラミガキがなされ、その下は底部までナデが行われている。内面頸部以下は丁寧なヘラケズリが行われている。

胎土中には石英・長石等の小砂粒を多く含む。器壁はにぶい黄橙色を呈するが、内外面とともに赤色顔料が塗布してある。黒斑があり、焼成は良好である。

壺B II (第20図-9~12) 口径8.5cm、器高9cm、胴部最大径9cm前後の小形の壺で、4個体ある。複合口縁をなし、底部は平定である。小形品ではあるが、器肉は壺Aに比して全体に厚い。口縁部外面には6条あまりのヘラ描平行沈線文が施され、一部ナデによって消されているものもある。口縁部内面はヘラミガキあるいはナデ調整がなされている。肩部の文様は、貝殻腹縫による刺突文が3段にめぐらされているもの(第20図-9・10)と、3条の平行沈線と貝殻腹縫による刺突文を交互に施したもの(同-11・12)がある。頸部から胴部上半にかけては横方向の丁寧なヘラミガキがなされ、下半は縦方向の細かな刷毛目調整が施されている。内面頸部以下はヘラケズリがなされている。

胎土中には1~2mmの石英粒や小さな長石をはじめとする砂粒を多く含む。器壁はにぶい黄橙色を呈するが、いずれも内外面とともに赤色顔料が塗布されている。

壺B III (第20図-14) 口縁部の小片が1個体分ある。復元口径9cmあまりの複合口縁で、口縁部立ち上がり幅は短い。口縁部外面は無文で、内外面ともに横方向のヘラミガキが施されている。内面頸部以下はヘラケズリが施されている。胎土中には石英・長石等の小砂粒を多く含む。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。



第21図 第1主体出土土器(2)

把手付短頸壺

この種の形態の上器は当地方でこれまで知られていなかったもので、便宜的にこのように呼称することとした。確認個体数は13個あり、大きさによって大(A)・小(B)に分けることができる。

把手付短頸壺A (第21図-1) 復元口径14.7cm、高さ17cm、胴部最大径24cmの大形品で、1個体のみある。直立する口縁部からゆるやかにひろがり、胴部最大径が下に向く下ぶくれの形状を呈し、平底でおわるものである。胴部上半に断面凸形の半環状の把手が1個つけられている。

文様は口縁部付近に6条の沈線をめぐらすのみである。外面は横あるいは斜め方向のヘラミガキが施されている。内面はヘラケズリのあとヘラミガキがなされている。胎土中に石英・長石等の小砂粒を多く含む。にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。

把手付短頸壺B I (第21図-2~4) 口径6.8~7cm、器高7.7~9.3cm、胴部最大径10~11.7cmの小形品で、11個体ある。器形はA類とほぼ同形態である。把手の断面形は一辺が中窪みする方形のもの (第21図-2・3) と、円形のもの (同-4) がある。

口縁部付近に3~4条の沈線をめぐらす。外面は胴部最大径付近までは縱方向、その下は横方向のヘラミガキが施されている。内面は口縁部付近は横方向のヘラミガキがなされ、その下は横方向の刷毛目、底部は放射状に刷毛目調整がなされている。

胎土はきめ細かく、大きめの砂粒を含まない。砂粒の中には石英粒はほとんどみられず、長石等の微砂粒を含む。橙色を呈し、焼成は良好である。底部付近に黒斑がみられる。内外面ともに赤色顔料が塗られている。

把手付短頸壺B II (第21図-5) 口径6.8cm、器高8.3cm、胴部最大径11.6cmの小形のもので1個体ある。把手がないのでこの器種に含めることは不的確とも考えられるが、B Iとほぼ同形態のものであることからとりあえずB IIとして記述しておくことにする。胴部に径0.9cmの孔(焼成前穿孔)が1個あけられているほか、内面がヘラケズリ調整されているのが特徴である。口縁部に3条の沈線がかすかにみえる。B Iとは異なり、胎土中に石英・長石等の小砂粒を多く含む。色調はにおい橙色を呈し、焼成は良好である。外面の一部にわずかに赤色顔料が残っている。

装飾壺

ここで装飾壺と仮称したものは3個体ある。

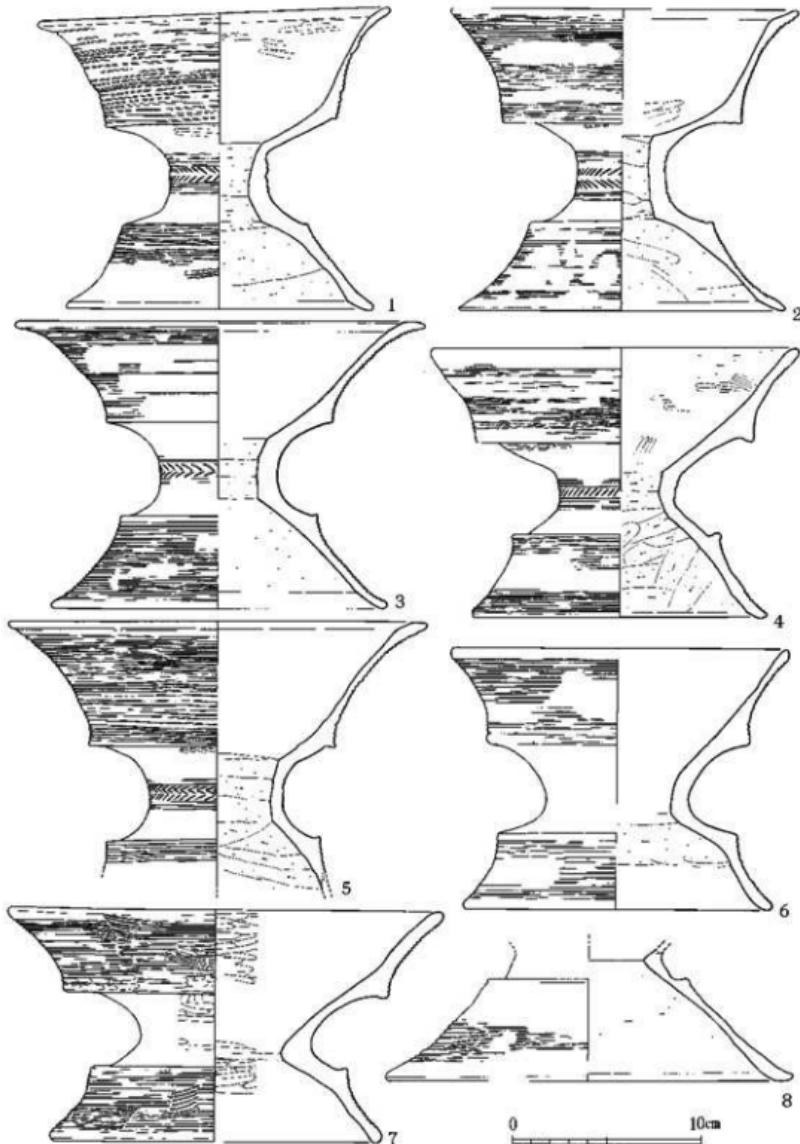
1つ(第21図-6)は口径6cm、器高8.3cm、胴部最大径8.3cmあまりの小形品で、肩部に半環状の把手(断面は円形)が付けられているものである。口頭部は漏斗状に広がり、胴部は扁円形で、底部は平底である。文様は口頭部から胴部最大径付近にかけて合計7段にも及ぶ竹管文が施されており、繁縝に筋りたてられている。器面は入念なヘラミガキ調整がなされている。口縁部内面はヘラミガキがなされ、頸部は指頭圧痕状の窪みがあり、その下はヘラケズリが行われている。胎土はきめ細かく、長石等の微砂粒を含む。橙色を呈し、焼成は良好である。

他の1つ(同一7)は口径6cm、器高7.2cm、胴部最大径8.4cmあまりの小形の壺である。口縁部に2個づつ並置した円形浮文を四方に配し、肩部に竹管文を2段にめぐらしている。この竹管文のうち肩部上段のものは施文具を斜めに押しあて、「ノ」字状の圧痕をつけている。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向のヘラミガキが施されている。体部外面はJ字ナデヘラミガキ、内面は頸部に指頭圧痕がみられ、その下はヘラケズリのあとナデが施されている。胎土、焼成をはじめ、全体のつくりは先に紹介した装飾壺に酷似している。

このほかに図示していないが、第21図-7の壺とほぼ同形・同人の壺が1個体ある。肩部に竹管文が1段しかめぐらされていない点が異なるのみで、胎土・調整等は酷似している。

鼓形器台

24個体確認しており、大きさによって大(A)・小(B)に大別できる。鼓形器台Aとした



第22図 第1主体出土土器(3)

のは筒部の長さ等により I・II・III類に分類可能で、A I 類はさらに筒部の太さ等によって細分できる。

鼓形器台 A I a (第 22 図 - 1・2) 器高 16 cm, 器受部径 18 cm, 脚台部径 17 cm, 筒部長 5 cm, 筒部最小径 4.5 cm, 前後のもので、筒部が最も細いものである。4 個体ある。器受部、脚台部ともに外面に 20 条以上の緻密な櫛描平行沈線文を入れ、そのあと一部ナデによって消している。筒部はヘラミガキのあと、ヘラ描平行沈線を上下にめぐらし、その中间に貝殻腹縁による刺突羽状文を加えている。器受部内面の調整はヘラミガキ、筒部および脚台部内面は入念なヘラケズリが施されている。

胎土中には石英・長石等の小砂粒を多く含む。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。いずれも内外面ともに赤色顔料の付着がみとめられる。

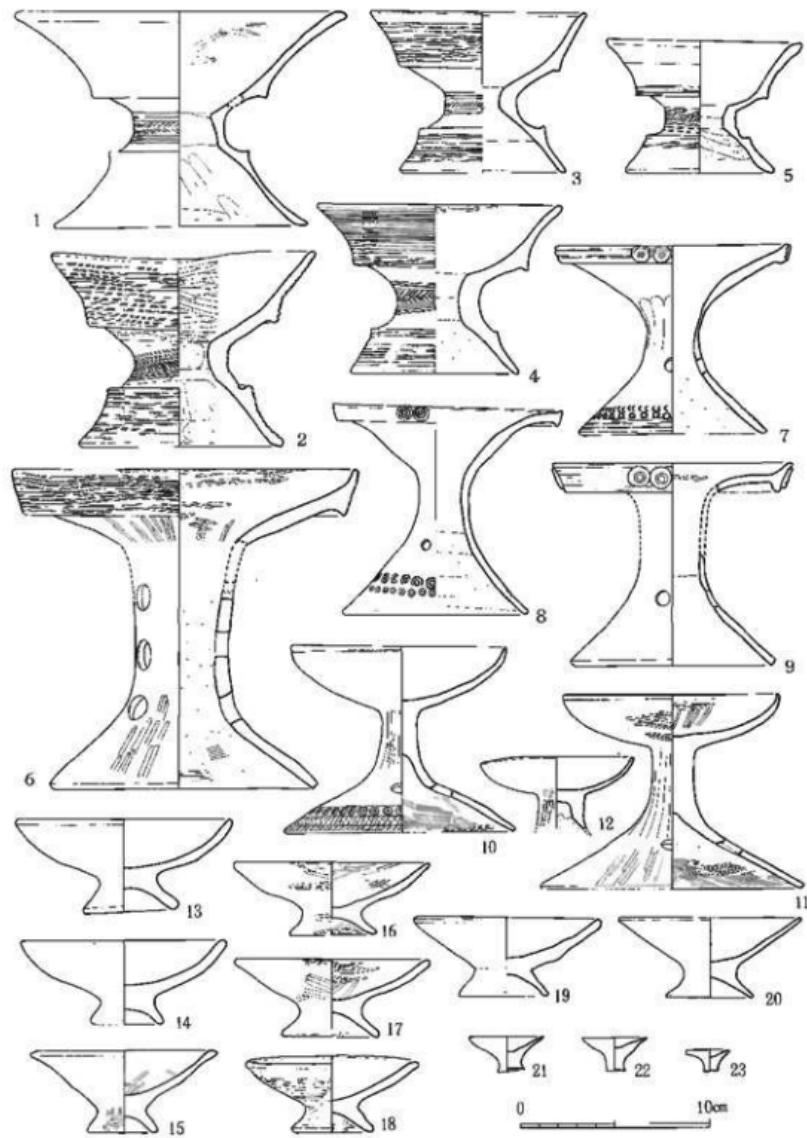
鼓形器台 A I b (第 22 図 - 3~5) 器高 15 cm, 器受部径 20 cm, 脚台部径 16 cm, 筒部長 5 cm, 筒部最小径 7 cm 前後のもので、大きさや形態は A I a 類に類似しているが、筒部径がやや太いのが特徴である。10 個体確認されており、鼓形器台の中では最も多い。文様も A I a 類とほとんど同じであるが、筒部の平行沈線の中間に施された文様が、羽状に刺突されたものと斜行状に刺突されるものがある。器面の調整、胎土、色調等、A I a 類とほとんど変わることろがない。焼成は良好なものが多いが、特に第 22 図 - 3~5 はきわめて良好で堅敏なものである。

鼓形器台 A II (第 22-6・7) A I 類に比して器高が低く、筒部、器受部、脚台部の長さが短く、筒部径が大きいのが特徴で、2 個体ある。器高は 12.3~13.8 cm, 器受部径 22.5~17.5 cm, 脚台部径 17.2~16 cm, 筒部長 3.9~4.7 cm, 筒部最小径 9.1~7.6 cm ある。器受部、脚台部ともに外面には 20~15 条の櫛描平行沈線文が施されるが、筒部は無文で、ヘラミガキがなされている。また、筒部南面は垂直に立ち上がる面がなく、「く」の字に近い形状をなす。器受部内面はヘラミガキ、脚台部内面はヘラケズリが施されている。

胎土中に石英・長石等の小砂粒を多く含む。にぶい黄橙色乃至橙色を呈す。焼成は良好なもの (第 22 図 - 6) とやや不良なもの (同 - 7) がある。いずれも内外面ともに赤色顔料が塗布されており、特に脚台部内面には厚く残っている。

鼓形器台 A III (第 22 図 - 8) 大きさは A I・A II 類とほぼ同様であるが、筒部が最も短いものである。脚台部の破片が 1 個体分みられる。復元した場合の脚台部径は 20.5 cm あまりのもので、筒部内面は「く」の字状に屈曲している。全体に風化が著しく不明瞭な点が多いが、脚台部外面は多条の櫛描平行沈線文が施され、内面はヘラケズリがなされている。胎土中に石英・長石等の小砂粒を多く含む。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

鼓形器台 B (第 23 図 - 1~5) 器高 11.7~7 cm, 器受部径 16.5~10 cm, 脚台部径 13~7.4 cm, 筒部長 3.4~2 cm, 筒部最小径 5~3.8 cm の小径のもので、7 個体ある。全体のプロポーションは A I 類に類似しており、ほとんど相似形といってよい。文様構成も同じである



第23図 第1主体出土土器(4)

が、器受部・尙部・脚台部の平行沈線文が全てヘラ描で施されるものが多い。ただし、第23図-4のように器受部・筒部がヘラ描、脚台部が櫛描のものもまれにみられる。なお、第23図-1のみは器受部、脚台部とともにナデが施され、この部分が無文になっている。このほか、調整、技法、胎土、色調、焼成等もA I類によく似ている。またいずれも一部に赤色顔料の付着がみとめられる。

器 台

この種の器台はこれまで当地方ではほとんど類例のしられていないものである。8個体確認しており、大(A)・小(B)に大別できる。

器台A (第23図-6) 器受部と脚台部の破片のため確実に接合できるかどうか不明であるが、胎土・色調等はきわめて類似しているので同一個体とみなし、図上に復元したものである。復元によれば、器高約17cm、器受部径18cm、脚台部径13.8cmあまりのものになる。器受部はやや幅広く、複合口縁状につくられ、筒部はほぼ垂直に長くのびたあと脚部は裾ひろがりになる。

器受部外面には10条あまりの櫛描平行沈線文が施され、筒脚部には3段の円形透かしが3方向に穿たれている。筒脚部は縦方向のヘラミガキ、器受部内面は横方向のヘラミガキがなされ、筒脚部内面はヘラケズリが施されている。胎土中に石英・長石等の小砂粒を多く含む。橙色を呈し、焼成は良好である。

器台B I (第23図-7・8) 器高10cm、器受部径12cm、脚台部径9.6cm、筒部最小径2.7cm前後の中形の器台で、5個体ある。器受部は左右に大きく外反し、端部はわずかに拡張する。筒部は細く縮約して、脚台部は裾ひろがりになる。器受部外面には3~4条の沈線をめぐらし、竹管文を押出した円形浮文を2個づつ3方向あるいは4方向に配している。筒部には円形透かしが3方向に穿たれている。脚台部は竹管文や沈線文を数段めぐらしたものがある。

器面調整は、外面はヘラミガキ、器受部から筒部にかけての内面はヘラミガキあるいはナデ、脚台部内面はヘラケズリが施されている。胎土は全体にきめ細かく、大きめの砂粒を含まない。橙色を呈し、焼成は良好である。赤色顔料が付着したもの(第23図-7)と、そうでないもの(同-8)がある。

器台B II (第23図-9) 大きさ・文様・調整等はB I類とほとんど同じであるが、器受部端が上下に幅広くつくられたもので、全体の形状はむしろ器台Aに類似している。1個体のみある。胎土もB I類と異なり、石英・長石等の小砂粒を多く含むものである。にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。内外面に赤色顔料がみられる。

高 坏

9個体あり、脚部のつくりの違いから2種類に分けることができる。この種の高坏はこれまで当地方では知られていなかったものである。

高坏A (第23図-10・11) 器高10cm, 坏部径11cm, 脚端部径13cm前後の高坏で、8個体ある。坏部は浅い小皿状を呈し、脚部は細い柱状のものから大きく裾ひろがりになるものである。坏部外面には1条の沈線がめぐらされ、脚部には円形透しが3方向に穿たれている。脚部は無文のもの(同-11)と沈線文・竹管文・列点文等をめぐらすもの(同-10)がある。

調整は、外面が刷毛目のあとへラミガキがなされている。坏部内面は入念なヘラミガキ調整である。脚部内面は細かな刷毛目調整を行ったのち、一部にナデが施されている。胎土は全体にきめ細かく、大きめの砂粒をほとんど含まない。器面は橙色であるが、断面は灰白色を呈する。焼成は良好である。赤色顔料の付着したものが多い。

高坏B (第23図-12) 小片1個体分しかないので、全体の形状は不明であるが、高坏Aに近い形態のものと思われる。坏部径は8cmで、A類よりもやや小形である。坏部は浅い皿状をなすが、脚部はA類とは異なり、坏部底まで中空につくられている。外面は刷毛目のあとへラミガキ調整がなされている。坏部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラケズリが行われている。胎土中に石英・長石等の小砂粒を多く含む。橙色を呈し、焼成は良好である。内外面ともに赤色顔料がみとめられる。

低脚坏

19個体あり、大きさにより大(A)・中(B)・小(C)に大別できる。B類はさらに口縁端部の形状からI・II類に分類することができる。

低脚坏A (第23図-13・14) 器高5cm, 坏部径11.5cm, 脚端部径4cm前後のもので5個体ある。坏部が楕形に湾曲するもので、いずれも無文である。調整は器面の風化が著しく判断し難いが、全面にわたってナデが行われているようである。

胎土中に石英・長石等の小砂粒を多く含む。色調はにぶい橙色を呈する。焼成は全体に良好であるが、やや不良のもの(第23図-14)もある。赤色顔料が一部にみられるものがある(同-13)。

低脚坏B I (第23図-15) 器高4.2cm, 坏部径9.5cm, 脚端部径4cm前後のもので、4個体ある。器形は坏部が直線的にひろがるもので、口縁端部が肥厚し、稜線を有するのが特徴である。無文で、調整は内外面ともにヘラミガキがなされている。

胎土中に石英・長石等の小砂粒を多く含む。にぶい橙色を呈する。焼成は全体に良好であ

るが、そのなかでも第23図-15はきわめて良好で堅緻である。赤色顔料の付着しているものがある。

低脚環B II (第23図-16~20) 大きさ、形態、調整、胎土等はB I類に酷似しているが、口縁端部に稜線をもたず、丸くなっているものである。7個体確認することができ。低脚環のなかでは最も量が多い。赤色顔料の付着したものがみられる。

低脚環C (第23図-21~23) ここでは一応低脚環のミニチュア品と考えたが、他の器種である可能性もある。器高1.2~1.8cm、環部径2.1~4cmあまりの手づくね土器で、3個体ある。胎土中に石英・長石等の砂粒を含む。橙色を呈し、焼成はいずれも良好である。

以上、3号墓第1主体から出土した土器の概要を記してきた。100個体以上にも及ぶ大量の土器は、墓壙を埋めた土の上に括して供献されたものと考えられる状態で出土した。これらの土器の器種は多種多様であり、これまで当地方に於いて比較的よくみかける器種のものと、類例の知られていないものが含まれていた。

当地方でこれまで数多く出土している器種としては、壺、鼓形器台、低脚環として説明してきたものである。これらの土器の器形、製作技法、調整手法等を既出の資料に照らし合わせてみると、最も類似していると考えられるものに的場遺跡（松江市八幡町）の墓壙上面から出土した土器群をあげることができよう。この土器群は、従来からの的場式土器（鍵尾I式土器^⑤）と称していたもので、西谷3号墓第1主体出土土器群はその範疇に含めて良いものと考えられる。なお、西谷3号墓第1主体出土土器群の壺と鼓形器台の中には型式的に後出の要素である口縁部に平行沈線文を施さないもの（第20図-7、第23図-1）や、筒部が短いもの（第22図-8）も數点含まれている。的場式土器の細やかな編年的位置付けについては、今後、さらに検討されるであろうが、現段階ではおおまかにみて当地方の弥生後期中葉～後葉の1時期に比定すべきものと考えておきたい。

これまで当地方に於いて類例の知られていないものとしては、装飾壺、把手付短頸壺、器台、高環として記述してきたものである。装飾壺を除く3器種は、その胎土の特徴により、全体にきめ細かく大きめの砂粒を含まないものと、石英・長石等の小砂粒を多く含むものとの二つに分けることができる。前者の特徴を有するものはこれらの器種以外の土器には全くみられないものである。また、この胎土の特徴の違いに対応して器形・成形・調整手法も細部において異なっている点が注意される。すなわち、器台B Iと器台A・B II、把手付短頸壺壺B Iと把手付短頸壺A・B II、高環Aと高環Bなどの相違がそれにあたる。これらの器種に類似するものを他地域に求めると、器台Aとしたものは、鳥取県余免郡・西の前遺跡、兵庫県妙楽寺墳墓群、同県田多地・小谷遺跡、同県福布ケ森東遺跡、京都府橋爪遺跡、同府丹波富谷丘遺跡、福井県中遺跡、富山県江上A遺跡等でみられる。器台B Iとしたものは類例が少ないが、兵庫県福布ケ森東遺跡、福井県中遺跡、富山県江上A遺跡などで類似した器形のものがみうけられる。その他の器種については特に類似したもののがみられないが強いてあげ

れば高坏Aに類するものとして兵庫県本位田遺跡、福井県上山3号墓出土品などを指摘することができよう。また、把手付短頸壺と称したものに関しては、把手がなかつたり、脚部が付けられているなどの相違点はあるものの、鳥取県奈免尾・西の前遺跡、兵庫県妙楽寺墳墓群、福井県王山3号墓、富山県江上A遺跡出土品の壺部の形態はプランデーグラス形を呈しており、比較的類似しているものといえよう。このほか、富山県江上A遺跡、島根県鍵尾遺跡では器台A・B IIの上に把手付短頸壺B I・B IIを載せた形態の上器が出土しており、器台A・B IIと把手付短頸壺B I・B IIがセットで使用されていた可能性を示唆するものとして注意される。

全国的な視野のもとに十分資料を検索していないうえ、細かな手法等についても実物で比較したわけではないが、報告書等をもとに管見に触れた限りでは、少なくとも器台A・B、高坏A、把手付短頸壺に類似した形態の土器は、北陸から山陰東部にかけていくつかみうけられるもののようにある。西谷3号墓からはこのほかに吉備地方と密接な関連をうかがわせる特殊器台や特殊壺も出土しており、出土土器のみをみてもかなり広範な地域との交渉をうかがうことができる。また、そうした土器の存在は、他地域との土器編年の併行関係を把握するうえでも重要な手掛かりとなり得るもので、貴重な資料が得られたものといえる。

(松木岩雄・大谷晃二)

註

- ① 平行沈線文には柳状工具あるいは貝殻腹縫によるものとヘラによるものがある。ここでは便宜上柳状工具あるいは貝殻腹縫によるものを「柳描平行沈線文」、ヘラによるものを「ヘラ描平行沈線文」として記述していくことにする。
- ② 「貝殻腹縫」としたものは、弧状直痕の内面のみにギザギザがみられるもので、タマキ貝を使用したものではないかと考えられているものである。
- ③ 色名は『新版標準土色帖』(1976)によって記載したが、マンセル記号は省略する。
- ④ 近藤正・前島己基「島根県松江市のか塚墓」『考古学雑誌』第57巻第4号 日本考古学会 1972。
- ⑤ 前島己基・松本岩雄「島根県宍道神社古墳川土の土器——上器型式にみるその縦年位置について——」『考古学雑誌』第62巻第3号 日本考古学会 1976。前島己基・松本岩雄ほか「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II」島根県教育委員会 1977。上記の2つの文献においては、的場式(鍵尾I式)上器を土師器最古式の1型式として把えていたが、少なくともこの型式の段階では当地方において典型的な古墳と考えられるものが存在していないことなどから現在では弥生時代後期に位置付けた方が良いものと考えている。このことはすでに藤田憲司氏、房宗寿雄氏、赤沢秀則氏などの論文(藤田憲司「山陰“鍵尾式”的再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻4号 1979、房宗寿雄「“山陰地域”における古墳形成期の様相」『島根考古学会誌』第1集 1984、赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」『松江考古』第6号 1985)においても指摘されている。

なお、藤田憲司（1979）・赤沢秀則（1985）論文では、従来の場式（鍵尾I式）→鍵尾II式と考えていた型式は同一型式の範疇に含めて考えられている。ところが、的場遺跡の土塁上面から出土した一括遺物や西谷3号墓第1土体から出土した一括遺物の中には、これまで鍵尾II式土器の様式と考えていた鍵尾A5号墓出土土器群の特徴を有するものはほとんど含まれていない。したがって、私は現在でも的場式土器→鍵尾II式土器と分けた方が良いものと考えている。

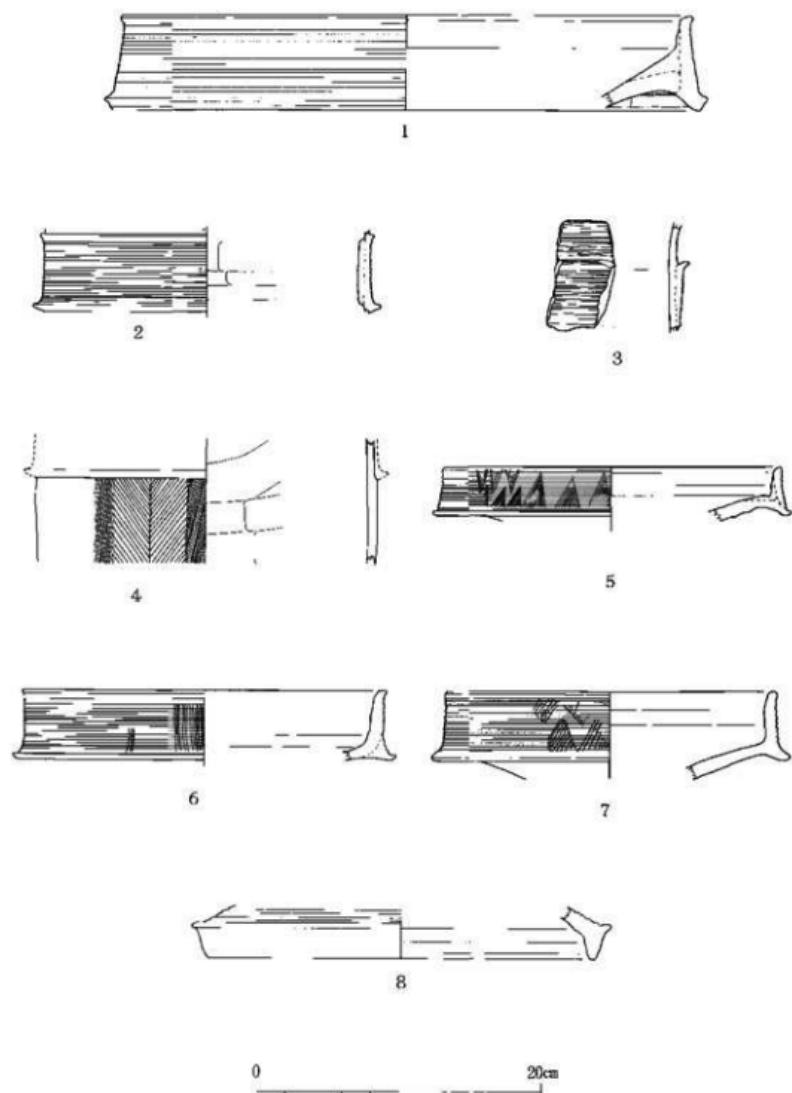
- ⑥ 山根雅美『奈良羅・西の前遺跡』鳥取県船岡町教育委員会 1986。
- ⑦ 横本誠一ほか『但馬・妙楽寺道路群』兵庫県豊岡市教育委員会 1975。
- ⑧ 森内秀造『田多地小谷遺跡』兵庫県教育委員会 1983。
- ⑨ 註⑦と同じ。
- ⑩ 黒田恭正・杉本宏『京都府久美浜町横爪遺跡出土の土器について』『古代文化』33巻3号 1981。
- ⑪ 松井忠春ほか『豐富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要』『京都府遺跡調査概報』第1冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982。
- ⑫ 山口充『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』第14集 福井県教育委員会 1980。
- ⑬ 久々忠義『江上A遺跡』『北陸自動車道跡調査報告』富山県上市町教育委員会 1982。
- ⑭ 井守徳男『本位A遺跡』『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県教育委員会 1976。
- ⑮ 齋藤優『上山・長泉寺山古墳群』福井県鯖江市教育委員会 1967。
- ⑯ 山本清『山陰の土師器』『山陰古墳文化の研究』 1971 所収。

第7節 出土遺物（2）特殊器台・特殊壺

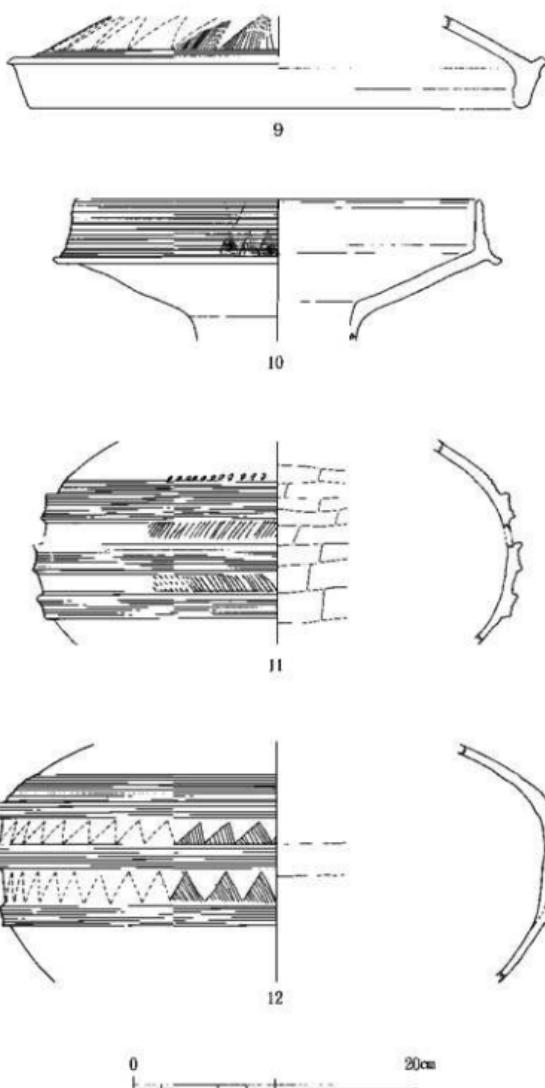
西谷3号弥生墳丘墓からは、この地域に通有な土器に混じって特殊器台・特殊壺と呼ばれる祭祀用土器が出土している。墳丘に後世の削平・加工が及んでいるため、ほとんどが墳頂・墳丘斜面の表土中ないし耕作土中の出土で、原位置を保っていると思われるものは少ない。

第1土体上方の土器群では、その最上層部でではあるが第25図の11と12の特殊壺片がまとまって検出されている。従って、これらはこの土器群を構成していた土器であった可能性をもつ。なお、11と同一個体と考えられる破片は墳丘斜面などからも検出されている。

特殊器台（第24図の1・2・3・4）は1個体が確認されている。口縁部（1）は径40cm、発達した重口縁をもち、口縁部には櫛状工具による沈線文、受部外側にはヘラミガキ、内面にはヨコ方向のナデが施されている。上方に拡張された口縁部の下端は、ヨコ方向のナデとヘラケズリにより断面四角形の突帯状に整えられている。器面の保存状態はあまりよくないうが、内外面とも丹の痕跡が認められる。筒部は頸部（3）・間帶（2）・文様帶（4）からなり、径は20~25cmである。頸部部分にはヘラ状工具による沈線文を施しており、一部切り合いも見られる。間帶は斜方向につまみあげた形の突帯をもつもので、同じく沈線文を有する。4は間帶部分が剥落した状況を示しており、間帶を貼り付ける以前にタテ方向のハケ日



第24図 特殊土器(1)



第25図 特殊土器(2)

で器壁を整えている状況が観察される。文様帶については斜線文の描かれた破片が発見されているのみで、文様構成の詳細は不明である。脚部は小片のため図示しえなかつたが、ゆるやかに広がった裾部と直立部をもち、両者の変換点には斜め上方につまみ出した形の突帯があげぐる。以上すべて胎土には長石・石英・金ウンモ・角セン石を含み、にぶい赤褐色を呈する。岡山県の雲山鳥打遺跡出土特殊器台のⅠ類に該当するものといえる。

小形特殊器台は6個体が確認されている。口縁部（第24図の5・6・7）は二重口縁で沈線文のち鋸歯文などの文様を施しており、内面・受部外面はともにヨコ方向のナデで仕上げている。丹は内外面とも塗布されていた形跡がうかがえる。筒部は図示しなかつたが、2段の長方形透し孔とそれらをはさむ形で3段の沈線文・列点文があげぐっている。脚部（第24図の8・第25図の9）は短い直立部をもち、裾部との変換点には小さくつまみ出した形の突帯があげぐる。直立部内外面をヨコ方向のナデ、裾部内面をヘラケズリで整えている。裾部には沈線文があげぐり、鋸歯文等の文様が施される。丹は裾部から突帯の部分にかけて塗布されているのが観察される。以上すべて胎土は特殊器台と同様の特徴を示している。

特殊壺は5個体が確認された。口縁部（第25図の10）は二重口縁で、沈線文のち文様が施されている。形態は小形特殊器台の口縁部とよく似ており、5・6・7についても特殊壺の口縁である可能性がある。図示しなかつたが、頸部は細長く、沈線文があげぐる。胴部（11・12）は幅広の突帯を3本有し、突帯の間には斜線文（11）・鋸歯文（12）のほか横走する綾杉文などが施される。外面には丹が塗られ内面にはヘラケズリが行われている。以上すべて胎土は特殊器台と同様である。

以上出土土器のうち主要なものについて概略を述べた。保存状態が悪く、調整等見にくくのが多かったが、文様・細部形態・調整・胎土はすべて吉備に通有の特徴を示している。いずれの器種も胎土はⅠ類の特殊器台と共通で、時期も立板型期＝鬼川市III～才の町Ⅰ期に限定される。同時期における一括撤入品と考えるのが妥当ではないかと思われる。

また、特殊器台が少なく小形特殊器台の比率が高いことや、特殊壺の形態・文様構成が雲山鳥打遺跡出土品と酷似している点など、興味深い事実もいくつかあげられる。吉備の弥生墳丘墓と西谷との関連性は、立板型の細分、遺跡ごとの特徴の把握、胎土の理化学的分析といったより詳細な検討と分析の中で明らかになるものと思われる。

（武上弥尋）

第8節 出土遺物（3） 第1主体館内遺物

第1主体からは、玉類が館内中央やや南よりの部分でまとまって出土した（第18図）。種類は、ガラス製の大形管玉、いわゆる緑色凝灰岩製の小形の管玉、ガラス製の勾玉と同じくガラス製の各種の形態の小玉類があった。

大形の管玉は、大部分が紐に通されて輪状に連なっていた形を示している。また小玉類も、大部分が紐に通され一連になったものが、まとめて置かれた状態であった。保存状態は、小形の管玉、勾玉は良好であったが、大形の管玉、小玉類は悪く、特に小玉類は風化が進んでいて個数の確認もむずかしい状態であった。それ故、人形の管玉、小玉類については十分な観察ができなかった。（大形管玉と小玉類は発泡ウレタンで固定して取り上げた。）以下それについて概説する。

1. 管 玉

(1) 人形管玉

22個あり、いずれもガラス製である。大部分が環状にまとまっており、前言したとおり一連の頸飾りであったものと考えられる。またこの南側と東側に小形管玉の集合があり、近くに大形管玉があるが、それぞれ小さな玉飾りが存在したこととも考えられる。長さは27mmから29mmで、平均27.5mm、径は6mmないし7.5mmを測る。色調は、うすい青色のものや青味がかった緑色のものなどがある。

第26図の（以下同じ）1についてみると、長さ29mm、上・下面とも径7.5mm、孔径は2.5mmと1.5mmである。風化が甚だしく、研磨、面取りの状態などについては確認できない。色調はうすい青緑色で、黄褐色のブロックが入る。

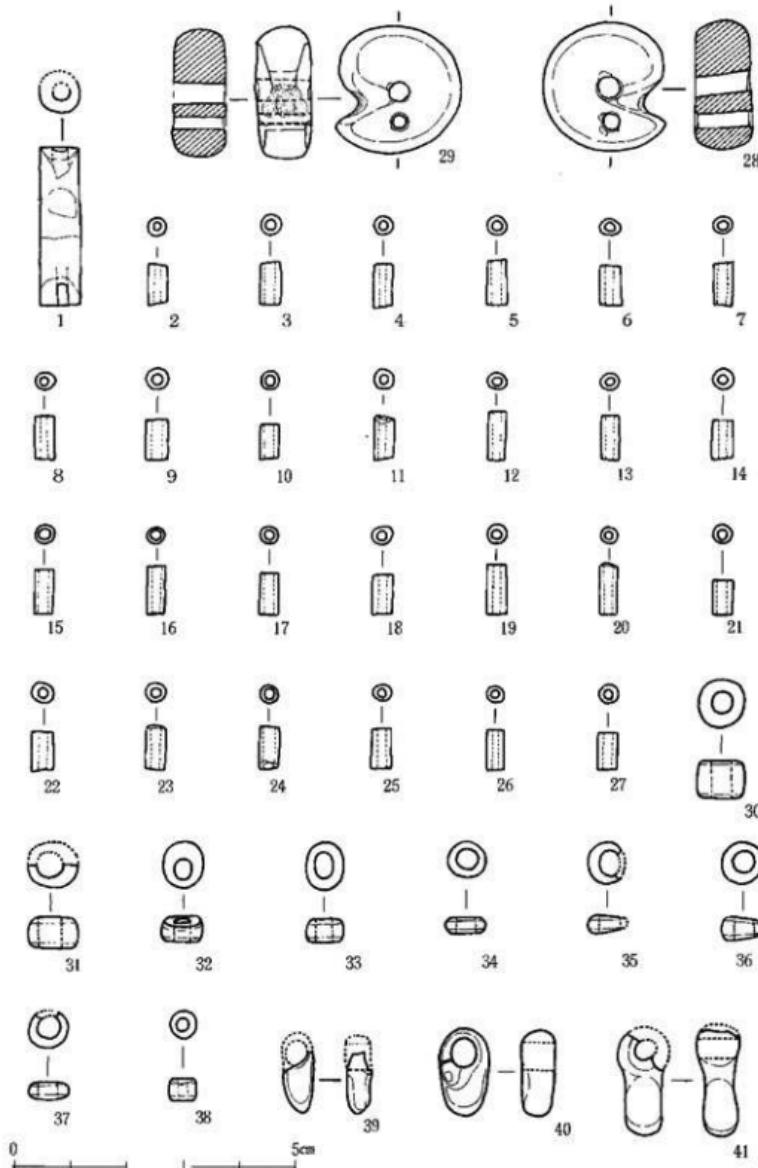
(2) 小形管玉

30個あり、すべて緑色系統のものである。このうち26個はいわゆる緑色凝灰岩製で、ほとんどは人形管玉の南側と小玉類の集合との間にまとめて散布していた。前言したように大形管玉1個を含む玉飾りが2連存在したことが考えられる。そのほか後述の小玉類の中にも4個の小形管玉が混在していたが、こちらはガラス製で非常にもらく、取り上げの際破損した。

計測値等は表の通りである。長さは6.0mmから9.0mmで平均7.6mm、径は3.0mmから4.0mmで平均3.3mmである。全体につくりはていねいであり、研磨良好で光沢がある。

番号	長さ (mm)	径 (mm)	色 調	備 考
2	7.0	3.5	緑味灰	
3	8.0	3.5	明るい青味灰	

西谷墳墓群の調査



第26図 第1主体棺内遺物 (縮尺1:1)

渡辺貞幸他

4	7.5	3.0	明るい緑味灰 一面の孔に面取りあり。2方向穿孔。
5	8.0	3.5	明るい緑味灰
6	7.0	4.0	明るい緑味灰
7	8.0	3.0	明るい緑味灰 一面の孔にかすかに面取りあり。2方向穿孔。
8	8.0	4.0	明るい緑味灰
9	7.0	3.8	明るい青味灰
10	6.0	3.2	明るい緑味灰 両面とも孔に面取りあり。
11	8.0	3.5	うす緑 一面の外周に面取りあり。
12	8.5	3.0	明るい緑味灰 一面の外周に面取りあり。
13	9.0	3.0	明るい緑味灰 一面の孔に面取りあり。2方向穿孔。
14	7.0	3.5	明るい青味灰
15	8.5	3.4	明るい緑味灰
16	8.9	3.2	灰味黄緑 1方向穿孔か。
17	7.5	3.3	明るい緑味灰 一面の孔に面取りあり。2方向穿孔。
18	7.0	3.5	明るい青味灰 両面とも孔に面取りあり。
19	9.0	3.5	明るい緑味灰
20	9.0	3.0	明るい緑味灰 一面の孔、外周に面取りあり。一端破損。
21	6.5	3.4	明るい青味灰 両面共外周にかすかに面取りあり。
22	7.0	4.0	明るい緑味灰
23	7.0	3.5	明るい青味灰 一面に孔にかすかに面取りあり。
24	7.8	3.4	明るい緑味灰 一端破損。再研磨している。一面の外周に面取りあり。
25	7.0	3.2	明るい青味灰
26	7.0	3.0	うす緑 一面の孔に面取りあり。
27	6.6	3.3	明るい緑味灰

小形管玉一覧表

2. 勾玉

ほぼ同大同形のものが2個あり、ガラス製で半透明のコバルトブルーの色合いが美しい。28は大きい頭に小さい尾を付した異形のもので、長さ23.5mm、幅21.0mm、厚さ9.5mm、頭の基部と尾に大小2孔をもつ、研磨は極めて良好で、外縁部分もなめらかに仕上げられている。成形工程については確定的なことは不明であるが、双孔をもつ円板状の素材に割り込みを入れて、研磨、仕上げたことが推定される。

29は、長さ23.3mm、幅21.0mm、厚さ9.3mmで、28とほとんど同大で、形状もまたほとんど同じである。頭部に大きな亀裂が入っている。

3. 小玉類

一般的な形態のものほか異形のものを含めて約170個あり、すべてガラス製である。散布の状況を見ると前述したとおり、東側にまとまっている、勾玉2個を加えて長い一連の頸飾りにまとめられていたことが考えられる。西側の方に少數のまとまりが2カ所あるが、それぞれ小さな玉飾りがあったと思われる。風化がはなはだしく、検出時にはほとんどが白色を呈していた。計測など困難なものが多く、以降一部を概説する。ここで取り上げたものは、やや大形のものであるが、計測値などは表の通りである。

番号	径(長さ) mm	高さ(厚さ) mm	色調など
30	8.0	7.0	半透明、鉛色
31	9.0	6.0	半透明、黄色
32	7.0×8.0	4.5	半透明、緑色
33	7.0×8.0	4.0	半透明、緑色
34	7.0	3.0	半透明、緑色
35	7.0	3.0	半透明、黄色
36	7.0	4.5	半透明、緑色
37	7.0	3.0	半透明、黄色
38	5.0	4.0	うす青緑色
39	9.0×5.0	4.0	半透明、うすい鉛色
40	11.0×9.0	6.0	半透明、鉛色
41	19.0×9.0	7.0	半透明、うすい鉛色

小玉類計測表

30～38は、一般的な中間がふくらむ円筒状のものであるが、39、40は孔のある部分がやや大きい楕円形の円板状、41も孔のある部分がやや大きい楕円形を示す。39～41のような、小玉の類に含めるべきか問題のある異形のものは約30個ある。なお、40の孔の縁やド方には金色に変化した部分が認められる。

なお、ここに紹介した玉類については、現在理化学分析を依頼中であることを付記する。以下若干のまとめをしてみる。

管玉は、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡で、出雲市の矢野遺跡の土塙墓及びその周辺、西谷3号墓と同じ四隅突出型墳丘墓である安来市の仲仙寺墳墓群の9号墓墓域、及び同

じ安来市の造山3号墳の堅穴式石室などから出土しているので、比較資料として取り上げてみたい。

矢野遺跡で玉を出土した土壙は弥生時代後期前半のものと考えられる。5個出土しており、いずれも碧玉製で、長さは6.7mm～12.0mmで平均8.5mm、径は2.0mm～5.1mm(最大径)で、^①平均3.1mm、小形細身のものである。

仲仙寺墳墓群の9号墓からは39個出土している。材質は凝灰質頁岩、細粒凝灰岩が多く、碧玉も一部使用されている。色調は淡緑色がほとんどで、濃緑色、淡黄灰色のものが一部ある。穿孔については2方向穿孔のものが多い。寸法は長さ6.0mm～13.9mmで、7mm～9mm及び11mm前後のものが多く、平均10.2mm、径(上・下面での最大径)^②は2.6mm～4.8mmで、4mm前後のものが多く、平均3.9mmであった。このうち径が3mm以下で極端に細身であるものが5個あった。

また、造山3号墳からは30個出土している。大小があるが材質は全て碧玉で、淡青色を示す。穿孔はすべて2方向である。長さ13mm以上、径6mm以上を太形とし、それ以下を細形とすると、太形は22個あり、長さは13.7mm～35.2mmで平均24.1mm、径は6.0mm～11.2mmで平均8.0mmであった。細形は8個あり、長さは5.9mm～12.0mmで平均9.2mm、径は3.0mm～4.8mmで平均3.8mmであった。

弥生時代後期ごろの管玉は、取り上げた矢野遺跡、仲仙寺墳墓群9号墓でみたとおり、比較的小形細身のものが多いようであるが、西谷3号墓出土のもので大形の方はこれらに比してかなり大きく、造山3号墳のもの(太形)に近く、小形の方が仲仙寺墳墓群9号墓のものに近い数値を示す。玉材については、出雲地方で碧玉を産するのは八束郡玉湯町の花仙山周辺に限られるが、ここで産出したと考えられる碧玉は弥生時代から使用されている。古墳時代には大半が碧玉であるが、弥生時代には凝灰岩系統のものもかなり用いられていたことがわかる。

勾玉は他に類例が求められない異形のものであり、古墳時代のものとはかなり異なる形態的に未だ定型化されていない感じがする。また、コバルトブルーのものは珍しい。

ガラス製の小玉類は一般のものに比してかなり大形のものが多く、また異形のものもかなりあることも注意される。

(蓮岡法暉)

註

① 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』 1980。
長さ等は、出雲考古学研究会の計測値による。

② 寺村光晴、松本岩雄氏の計測値による。

③ 島根県教育委員会『造山第3号墳調査報告』 1967。

第6章 成果と今後の課題

(1)

西谷墳墓群に対する今期のわれわれの調査では、3・4・9号墓の測量図の作成と3号墓の発掘調査を実施した。これら3基の墳丘墓は、西谷墳墓群^①でもとくに大形の四隅突出型弥生墳丘墓であるばかりでなく、山陰を中心に分布するこの種の弥生墳丘墓の中でも、最大級の規模をもつものである。

発掘調査の対象とした西谷3号墓については、今後継続される調査によって解明されなければならない課題をいくつも残しているが、今期の調査によって多くの重要な事実を明らかにした。以下、簡単ながら中間的なまとめをしつつ、問題点と課題を記しておきたい。

まず、墳丘については、30m×40mの長方形截頭方錐形マウンドに突出部を付設する外形である。四隅突出型弥生墳丘墓のほとんどでは、マウンド主部は長方形プランをもっており、これもその典型例といえる。墳丘斜面と外縁に入念な配石構造をめぐらすが、周溝のようなものは備えていない。とくに、墳裾だけではなく墳丘斜面のすべてないし大部分に貼石が施されていたと推定されたことは、この種の墳墓の構造についての新知見であった。

四隅突出型弥生墳丘墓特有の墳裾の配石構造については、すでに山本清氏や房宗寿雄氏によって検討されており、最近では、加藤謙氏によって整理がなされている。西谷3号墓の墳裾の配石は、四隅突出型の墳丘墓にみられる配石構造の中でも最も特殊化を遂げたもので、安来市の安養寺3号墓^②のそれと同一型式であり、2列の立石列を有する点では、同市仲仙寺9号墓^③・10号墓^④、安養寺1号墓^⑤、宮山4号墓^⑥と共通する。このような特殊化した配石構造は、今^⑦のところ出雲にしかみられず、それも、西谷墳墓群以外では安来に集中している点は注目してよい。こうしたことから、この時期こそ「出雲」^⑧という地域性が成立した時期であろうとする仮説も出されている。

その後、広島県北地域で、やや古い時期の四隅突出型弥生墳丘墓の調査が相次ぎ、また山陰側では、やや新しい時期の匹隅突出型と推定されるものが、鳥取県八束郡鹿島町の南講武小廻遺跡と、鳥取県倉吉市の山根遺跡とで調査されている。南講武小廻遺跡では墳丘斜面の一部を発掘しただけの知見だが、配石によって墳裾に1段の狭いテラスを造り出している。出土した土器は、藤田憲司氏による編作の川陰IV期（弥生終末）のものとされている。小廻遺跡の配石構造は類似のものが四隅突出型弥生墳丘墓にみられるので、調査者も指摘するように、これがこの種の墳丘墓の一部である可能性は強いと考えられる。また、山根遺跡については詳細は未報告であるが、貼石の構造はきわめて単純なもので、調査者は時期をかなり下げて考えておられると言っている。これら最近の調査例の示すところは、前記した從来の諸論の再吟味を促していると言えよう。地域ごとの内在的発展の問題や地域集団内の格差などを考慮した新しい視点の模索が要請されている。

四隅の突出部については、その造成方法の究明が今後の調査課題として残されている。突出部の平面形に関しては、残存部分からの復元では舌状に伸びるタイプらしく、宮山4号墓のような袋状に広がったものではなく、川原和人氏の分類に従えば「B類」に属するとみてよい。

墳丘構造では、未解決の部分も残されているが、墳丘外を含めてかなりの盛土を行なっていることが判明している。墳頂部では、少なくとも第1主体に関しては、埋葬部を埋めたのちにさらに盛上をし、墓上祭祀はその上でなされたことも推定できた。

(2)

埋葬施設として発掘調査の対象としたのは、墳頂平坦面の中央より少し東に寄った所にある第1主体と、そのすぐ西で第1主体の陪葬的位置にある第3主体である。従って、これらとは別に未掘の大形主体がある可能性は十分あり、既掘の主体のみからこの墳丘墓の性格を云々することはできないが、第1主体の特色について若干ふれておきたい。

第1主体は、前章で詳述したように、墳丘頂上の地山と考えられる面に掘り込んだ一段土壙内に、棺・櫛二重構造の埋葬施設を造っている。棺の外に木櫛を備えた主体をもつ弥生墳丘墓は、これまで岡山県の橋築墳丘墓など少數の例が知られていたが、四隅突出型の墳丘墓では初めての発見である。第1主体の櫛構造は、山陽側の弥生墳丘墓のものにくらべるとやや簡略なものである。しかし、山陰においても大形の弥生墳丘墓ではこうした入念な埋葬主体が造られていることを明らかにした意義は大きい。

出雲地方では、安来市域で中規模の四隅突出型弥生墳丘墓の調査例がいくつかあるが、これらはいずれも土壙の中に直接組合式木棺を納めた施設をもっている。また、ここでは木棺上に砂を被覆するものがあり、こうした特色は出雲東部の前期古墳にも引き継がれている。弥生墳丘墓における東部出雲と西部出雲の共通性と差違、それぞれの地域における弥生墳丘墓と古墳との間の断絶性と継続性の問題は、引き続き興味ある研究課題である。^⑨また、第1主体では、櫛を組み立ててから棺を納入したと考えられるが、このように棺を収納する施設を造ってのち上から棺を入れるという葬法は、棺収納施設の下部を造った段階で棺を安置し、収納施設の壁体はそのあとで完成される前期古墳の葬法と著しく異なった原則に基づいていることにも注目しておきたい。

埋葬施設についての次期の調査課題は、予想される人形主体の構造を解明し、他の主体との関係や埋葬部上の盛土と墳丘盛土との関係などをつかむことであろう。このうち、埋葬部上の盛土と墳丘盛土の関係に関して、第1主体では既述のように、この部分の盛土があとからなされたことが推定されている。つまり、第1主体と未掘の人形主体との前後関係は不明だが、第1主体はやや片寄った位置にあるにもかかわらず、その掘鑿があらかじめ予定されており、その予定部分には盛土をせず墳頂面を整形したままの状態にしていた、という可能

性である。

これまでの調査例をみると、四隅突出型弥生墳丘墓では、主体部は地山から掘り込まれているものと、その上に盛土から掘り込まれているものと、双方が知られている。西谷3号墓の第1主体は地山面から掘られている可能性が強く、埋め戻したあとでさらに盛土を行なっているが、未掘の主体の調査を待って、総合的にこれらの問題を検討する必要があるだろう。

なお、第1主体では副葬品として多量の玉類が検出された。これらについては理化学的分析を依頼しており、この結果をうけてまたいくつかの問題を提起することになる。棺底の朱についても同様である。^⑨

(3)

第1主体上の盛土の上には、狭い範囲に多量の土器が集積されていた。そしてその最下部には、朱のこびり付いた叩石状の円礫が置かれていた。

出雲地方の弥生墓には、主体部上方の墳丘面に礫を置いている例がよくあり、「基標」・「標石」・「置石」などと呼ばれている。しかし、第1主体の例は、明瞭な打痕と磨痕をもっており、辰砂の粉砕に使用された石器であると推定される。こうした視点で既往の資料を見直すと、単なる「標石」とは考えられない例がいくつもあることに気付く。例えば、安来市安養寺1号墓の第1墓壇上の「棒状石」は、一端が強く磨耗して明らかに石杵であり、同第2墓壇上のそれも、同様に石杵と呼ぶべきものである。松江市の的場墳丘墓の「棒状石」も、一端に明らかな敲打痕をもち、石杵ないし叩石であったと考えてよい。また、東出雲町大木櫻現山1号墓出土の「卵形河原石」にも、顕著な擦痕を認めることができるし、安来市長曾土壤墓群の例でも同様のことが指摘されている。^⑩

要するに、従来埋葬部の「基標」などとして扱われていた資料のいくつかは、本来は何かに使用された石器であったと考えられるのである。これらの石器の用途については一律には扱えないかもしれないが、少なくとも安養寺1号墓では、第1墓壇木棺底に朱がつめられ、第2墓壇内にも朱塊があったことは、こここの石器が西谷3号墓の場合と同様に、辰砂の粉砕に使用された石杵だった可能性を示している。古墳時代前期の例であるが、鳥取市柱見2号墳でも、施朱された中心主体上の墳丘頂部で、円礫を半蔵した石製品が出土しており、やはり朱の付着がみられている。^⑪報告者は「木棺埋納時に水銀朱をすりつぶすのに用いられた」石杵と推定しておられるが、西谷3号墓第1主体の円礫も、同様な性格のものと考えてよいであろう。

西谷3号墓の円礫についてこのような推定が認められるとすれば、これは、埋葬施設に使用する辰砂の最終的な調整は葬送の際に行なわれたこと、そしてその作業に使用した石杵の類を埋葬後に埋葬施設上に供えるないし安置するという行為のあったことを物語る。施朱が納棺時の儀礼の重要な一部だったとすれば、石杵の供獻もまた、埋葬後の儀礼の中に一定の位置を占める行為であったと考えられる。集積された多量の土器の最下からこの石が出土し

たのも決して偶然ではなく、埋葬後の一連の祭儀の結果と考えるべきであろう。なお、前期古墳ではむしろ副葬品として石杵や石臼が棺内に納められる例が多いが、ここにも、弥生墳丘墓と古墳との間における埋葬儀礼の差違の一端が表現されているのかもしれない。

(4)

第1主体上方に集積されていた約100個体の上器は、良好な・括資料として今後の土器研究の基準となるものである。器種構成やそれぞれの特徴は多様であり、その提起する問題は多い。壺や鼓形器台の特徴は、前章第6節で検討されているように、松江市場墳丘墓出土のそれに近似しており、これを標準とする「的場式」の範疇でおさえられる。当該時期前後の山陰の土器編年については、旧来の編年観の欠点を克服するという問題意識に基づいて近年いくつかの議論があるが、藤田壽司氏、房宗寿雄氏、赤沢秀則氏らが、それぞれの編年案で弥生後期の「III期」と呼ばれた時期に含まれる。

内谷墳墓群では、かつて4号墓で吉備地方から搬入されたと考えられる特殊器台形上器・特殊壺形土器が採集され、注目されてきた。本期のわれわれの調査では、3号墓からもかなりの数の破片を採集することができた。それらは、すでに紹介したように、いずれも「立坂型」の特徴をもち、山陽の弥生土器編年の「鬼川市III式」から「才の町I式」の時期のものである。しかし、それらの大部分は、墳丘南斜面の表層ないし表土中と墳頂部の耕作土中から出土したものであった。第1主体上方の上器群では、その最上部において完形にはならないが2個体分の特殊壺(第25図の11・12)の破片が混じていたので、この上器群の中にも少量の特殊壺が含まれていた可能性がある。しかし、他の大部分の特殊上器については、本来は未掘の主体部に伴うものだったのか、あるいはまた別のあり方をしていたものなのか、不明である。従って、これら搬入された特殊上器が四隅突出型弥生墳丘墓上でどのように扱われていたのかなどの問題は、今後の調査に俟つ点が多いとしなければならない。

ところで、川隅突出型弥生墳丘墓は、山陰両県と広島・岡山両県の北部とを中心に三十数例が知られている。これらは規模の上からみると、突出部をいれない墳丘主部の長辺が10~15mほどの小型、20m前後の中型、そして30~40mぐらいの大型、の三つのランクに大きく分けることができる。今日知られているところでは、後期前半(前記三氏のI期・II期を仮りにこのように表現しておく)までの四隅突出型弥生墳丘墓はほとんどが小型であって、稀れに中型がみられる程度にすぎない。大型の墳丘墓が造られるようになるのは後期後半、つまり、いわゆる「的場式」ないし前記三氏の「III期」になってからである。

大型の四隅突出型墳丘墓としては、西谷3号墓・4号墓・9号墓と安米市の塩津1号墓、鳥取市の西桂見墳丘墓が挙げられる。これらのうち、西谷9号墓と塩津1号墓については時期を知ることができないが、西谷3号墓と4号墓では「的場式」ないし「III期」の弥生土器と「立坂型」の特殊土器が採集されており、西桂見墳丘墓出土の上器は「青木III期新」に属

するものとされている。鳥取県と島根県における土器編年との併行関係はまだきちんと整理されているとは言えないが、「青木III期新」は島根で「的場式」ないし「鍵尾I式」と呼ばれていたものに併行し、山陽の「鬼川市III式」にはほぼ併行するものとされている。^①従って、これら三つの大型弥生墳丘墓は、比較的近接した時期内に築造されたと考えられるのである。

同じ時期には、一方で小型や中型の四隅突出型の墳丘墓も引き続き造られているのであり、その中にこれら大型のものが突然かつ相前後して出現する事実は、四隅突出型墳丘墓を首長層の墓として造ることで結ばれていた山陰地方の地域社会に、各地域ごとに階層的秩序が確立するというような大きな政治的変化のあったことを予測させるものである。しかもほぼ同じ頃には、山陽でも巨大な弥生墳丘墓・楯築墳丘墓が造られており、そしてこの時期に、特殊土器が成立しそれが吉備から山陰へ搬入されている。この時期が、中国地方の弥生時代社会の動向にとっても重大な画期であったことは疑えない。西谷3号墓の評価は、こうした観点からもなされなければならない。

なお、特殊土器の移動がもつ意味や、この時期の山陰地方の政治状況、また、前期古墳との関係などについては、すでにいくつかの論考があるので、ここでは省略する。

山陰地方の弥生時代後半期の墓制の研究は、四隅突出型の墳丘墓を中心にして近年はなされていいる観がある。しかし、溝で区画される土壙墓群の存在も忘れてはならないし、四隅突出型以外の墳丘墓もいくつか知られている。従前「上塙墓」として紹介された資料の中にも、例えば松江市の場遺跡や安来市の鍵尾遺跡△区のように、貼石をもつ方形の弥生墳丘墓として把握し直す必要があるものもある。貼石をもつ方形墳丘墓は、松江市友田遺跡や津市波米浜遺跡^②、また、八束郡鹿島町の占浦遺跡^③でも調査されている。一方、大原郡加茂町の神原正面北遺跡△区では、丘陵を削り出して造った方形の墳丘墓が4基確認されているし、最近倉吉市で調査された大谷後口谷墳丘墓は、コーナーを掘り残した方形周溝をもっている。米子市青木遺跡では、方形周溝墓や周溝をもつ円形墳丘墓が弥生終末期に造られていることが報告されている。

つまり、山陰の弥生後期には、群をなす土壙墓のほかに、墳丘墓と呼べるものだけとっても、貼石をもたない各種の墳丘墓、貼石をもつ方形墳丘墓、そして一定の企画のもとに配石をめぐらす四隅突出型墳丘墓など、さまざまなものが知られている。このような複雑な墳墓のあり方が、在地のいかなる動向を反映しているのか。われわれは、こうした重い研究課題を明らかにする第一歩をやっと踏み出したところである。

(1986年11月稿)

(渡辺貞幸)

註

① 山本清「出雲の四隅突出型方墳」『日本のなかの朝鮮文化』28号、1975。

房宗寿雄「山陰地域における古墳形成期の様相」『島根考古学会誌』第1集、1984。

② 加藤謙「歲ノ神第3・4号墓について」『歲ノ神遺跡群・中出勝負峰墳墓群』広島県埋蔵文化財調査セン

- ター、1986。
- ③ 勝部昭『安養寺墳墓群』『荒島墳墓群』(古代の山塚を考える4、山雲考古学研究会)所収、1985。
- ④ 近藤正『仲仙寺古墳群』安来市教育委員会、1972。
- ⑤ 註③と同じ。
- ⑥ 前島己基『宮山古墳群』島根県文化財保護協会、1974。
- ⑦ 近藤義郎『四隅突出型墳丘墓の出現と変遷』『季刊文化財』第53号、島根県文化財愛護協会、1985。
- ⑧ 庄原市佐田谷1号墓、三次市殿山38号墓(とともに広島県埋蔵文化財調査センター調査)など。
- ⑨ 赤沢秀則『南講武小廻遺跡』『鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書』1、鹿島町教育委員会、1986。
- ⑩ 岩山直氏調査。
- ⑪ 藤田憲司『山陰「健尾式」の再検討とその平行関係』『考古学雑誌』第64巻第4号、1979。
- ⑫ かつて土塙墓として紹介された松江市の場墳丘墓の北側にみられた石列(土塙墓には伴わない)とされるが何様な構造をしていることは注目される。
- ⑬ 川原和人『島根県における発生期古墳——とくに四隅突出型方墳について』『古文化談叢』第4集、1978。
- ⑭ 近藤義郎『櫛柴遺跡』山陽新聞社、1980。
- ⑮ その後、広島県庄原市の佐田谷1号墓でも調査・確認された。
- ⑯ 出雲東部におけるこの問題については、かつて「寺床1号墳の諸問題」(『松江考古』第5号、1983)で論じたがあるので、参照されたい。
- ⑰ これまでの成果として、上田健大『墳墓の中の赤色鉱物(予報)』(『京都大学教養部地学報告』第20号、1985)がある。
- ⑱ 近藤正・前島己基『島根県松江市の場土塙墓』『考古学雑誌』第57巻第4号、1972。
- ⑲ 註③と同じ。
- ⑳ 水見英『長曾土塙墓群』安来市教育委員会、1981。
- ㉑ 前註㉐で集成がなされている。
- ㉒ 註③と同じ。
- ㉓ 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館にて実見。
- ㉔ 石井慈『大木権現山古墳群』東出雲町教育委員会、1979。資料は島根県教育庁文化課分室において実見した。
- ㉕ 註㉔と同じ。
- ㉖ 杉谷美恵子・平川誠・船井武彦『柱見墳墓群』鳥取市教育委員会、1984。
- ㉗ 市毛熱『木の考古学』雄山閣、1975。
- ㉘ 註㉖・㉗・㉙のほか、青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書(III)』(1978)、土井珠美『鳥取県の状況』(『第18回埋蔵文化財研究会 幼生時代後期から古墳時代初期のいわゆる山陰系土器について(発表記録)』1986)などがある。

西谷墳墓群の調査

- ⑧ ⑨に同じ。
- ⑩ 朴①房宗論文。
- ⑪ 赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」『松江考古』第6号、1985。
- ⑫ これについては第2章で述べられているような研究史があるが、総合的な紹介を行なったのは、出雲考古学研究会による『西谷墳墓群』(古代の出雲を考える2、1980)である。なお、ここでは「吉備型器台・壇」と呼ぶことが主張されている。
- ⑬ 出雲考古学研究会『葦島墳墓群』、古代の出雲を考える4、1985。
- ⑭ 加藤謙・木村有作・平川誠・藤田三郎「西柱見遺跡」鳥取市教育委員会、1981。
- ⑮ 平川誠「西柱見遺跡」「えとのす」18、1982。
- ⑯ 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書(III)』(前出)。
- ⑰ 近藤義郎「吉備とは何か」「えとのす」24、1984。
- 山本 清「山雲荒神谷の青銅鏡大量出土はどう考えるか——『山陰地方連合体』をめぐって——」『銅鏡・銅鐸・劍矛と出雲王国の時代』日本放送出版協会、1986。
- 渡辺貞幸「古代出雲の宋光と拂折」「日本古代史4・土權の争奪」集英社、1986。
- 註⑬に同じ。
- ⑯ 山本清「島根県安来市鍛尾の上器群とその土師器」『日本考古学協会第29回総会研究発表要旨』1963。同「鍛尾遺跡」『島根県大百科事典』山陰中央新報社、1982。
- ⑰ 吉崎進二郎「友印遺跡」『松江國都市計画事業乃木土地區面整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会、1983。
- ⑱ 關俊彦「波来派遺跡発掘調査報告書」江津市、1973。
- ⑲ 島根大学考古学研究会「古浦砂丘遺跡の問題」『菅田考古』第16号、1983。
- ⑳ 薩摩法螺、古代1」「加茂町誌」1984。
- ㉑ 森下哲哉「大谷・後谷墳丘墓発掘調査報告書」倉吉市教育委員会、1986。
- ㉒ 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書(I)』1976。同「同(III)」(前出)。なお、本稿では「青木V・VI期」までを弥生時代として扱っておく。

補 註 本稿提出後山校までに、いくつか関連する論文や報告書の公表があったが、あえて改稿していない。なお、筆者も次のような発表をしているので、参照されたい。
「出雲と吉備の交流」「日本考古学協会1987年度大会研究発表要旨」1987。
「定型化する古墳以前の墓制—山陰地方—」『第24回埋蔵文化財研究会(発表要旨)』

1988。

また、出土した玉類については、三浦清・渡辺貞幸「山陰地方における弥生墳丘墓出土の玉材について—西谷3号墓出土品を中心に—」『島根考古学会誌』5(1988)で分析結果を報告した。

A Report on the Research of Yayoi Burial Mounds
on Nishidani Hills, Izumo City, Japan (I)

1987

The Research Group on Yayoi Burial Mounds
on Nishidani Hills

CONTENTS

- Chapter 1 Archaeological surroundings of Nishidani Hills
- 2 Previous studies on Nishidani Yayoi Burial Mounds
- 3 Progress of our research work
- 4 Surveying of Nishidani Yayoi Burial Mounds
- 5 Excavation of Nishidani Yayoi Burial Mound No. 3
- 6 Conclusion

List of Plates

1. Aerial view of the Hii River and Nishidani Hills
2. Nishidani Yayoi Burial Mound No. 3
3. Stone structure at the foot of the mound
4. Stone structure of the protuberances
5. Stratigraphical section of the mound
6. Potsherds *in situ* above Burial No. 1
7. Central stone *in situ* and plan of Burial No. 1
8. General view of Burial No. 1
9. Funeral artifacts *in situ* of Burial No. 1 and general view of Burial No. 3
10. Pottery above Burial No. 1 (1)
11. Pottery above Burial No. 1 (2)
12. Pottery above Burial No. 1 (3)
13. Pottery above Burial No. 1 (4)
14. Special jar stands and special jars
15. Funeral artifacts from Burial No. 1
16. Nishidani Yayoi Burial Mound Nos. 4 and 9

List of Figures

1. Archaeological map around the Hikawa Plains	3
2. Distribution of the ancient burials on Nishidani Hills	5
3. Restored topography in the vicinity of Nishidani Hills	10
4. Topographical shape of Nishidani Yayoi Burial Mound No. 3	13
5. Topographical shape of Nishidani Yayoi Burial Mound No. 4	15
6. Topographical shape of Nishidani Yayoi Burial Mound No. 9	17
7. Location of unearthened areas of Nishidani Yayoi Burial Mound No. 3.....	21
8. Model section of the stone structure around the mound	23
9. Plan of the northwestern protuberance	25
10. Plan of the southwestern protuberance	27
11. Model plan of the southwestern protuberance	26
12. Stratigraphical section of the mound (E-W)	31
13. Stratigraphical section of the mound (N-S)	33

14. Potsherds <i>in situ</i> above Burial No. 1	35
15. Central stone	36
16. Plan and section of Burial No. 1	39
17. Model section of reconstructed Burial No. 1	42
18. Funeral artifacts <i>in situ</i> of Burial No. 1	43
19. Plan and section of Burial No. 3	44
20. Pottery above Burial No. 1 (1)	47
21. Pottery above Burial No. 1 (2)	49
22. Pottery above Burial No. 1 (3)	51
23. Pottery above Burial No. 1 (4)	53
24. Special jar stands and special jars (1)	59
25. Special jar stands and special jars (2)	60
26. Funeral artifacts from Burial No. 1	63

SUMMARY

Excavation of Nishidani Yayoi Burial Mound No. 3 (I)

I . The mound and its outer features

Nishidani Burial Mounds are located on Nishidani Hills in Izumo City, commanding a view of the Hii River once called the "Great River of Izumo", and it has been known that there are some burial mounds of Yayoi Period. We made precise contour maps of the Mound Nos. 3, 4 and 9 respectively, and we chose the Mound No. 3 for the excavation because of its good state of preservation. Our research extended over five sessions from 1983 to 1985.

The Mound No. 3 is rectangular of 36 by 28 m in plan under the present circumstances, and our excavation made it clear that it was one of the biggest Yayoi burial mounds with four protuberant corners. We found a particular structure making use of a lot of boulders on the south and west side of the mound, though on the north and east it was lost. It is constructed by double narrow paved terraces, of which each outer border has a row of stones, surrounding the foot of the mound whose slopes are covered also with stones.

Four protuberances of the mound were not in very good preservation but it seems that they were skirted by the same stone structure as mentioned above.

Original size, excluding the protuberances, of the mound can be estimated at 40 by 30

m in plan and 4.5 m in height.

As regards the structure of the mound, admitting partial uncertainty, we found some layers of soil heaped on the bed rock, and on the south and west side the laid soil was recognized even outside of the mound.

II. Excavation of Burial No. 1

The top of mound is flat and wide, and we infer that some burials are in it. Our excavation was carried out at one location where a great many potsherds came out from under the surface soil. Potsherds, out of which we restored jars, jar stands, cups, etc. totaling about one hundred, were packed in a hollow of 2.0 by 1.5 m in plan and 0.4 m in depth. The hollow must have been caused by the collapse of a wood coffin underneath.

Under the layer containing those potsherds we also found a big pit dug into the bed rock. The pit is rectangular with round corners of about 6.1 by 4.5 m in plan and nearly 1 m in depth below the surface of the bed rock, and has a terrace along the brim.

All wooden frameworks have rotted away, but the strata in this pit taught us clearly that there had been a coffin and an outer-coffin both made of wood in it. The outer-coffin proved to be 2.6 by 1.2 m in plan, and the coffin placed inside of it was identified by the extent of thick vermilion, measured 2.1 by 0.8 m in plan.

We realized that the above-mentioned pottery had been put together on the laid soil over the burial after a certain ceremony had been held at the summit of the mound.

Funeral artifacts from this burial are as follows; two *magalama* beads of glass, more than one hundred glass beads and scores of *kudatama* beads of glass and of jasper.

The northwest part of this burial (which is named Burial No. 1) is broken by the other (Burial No. 2), which is not excavated. In the west of Burial No. 1 a small pit grave (Burial No. 3), which was built later than that, was found but contained no artifacts.

III. Conclusion

Our excavation is the first attempt to investigate a large-sized Yayoi burial mound with four protuberant corners, which is the characteristic type of tomb for the chieftain class in San'in Region of late Yayoi Period.

The most important result of our excavation is the recognition of the use of frameworks of wood coffin and outer-coffin for the burial. Such double frameworks have been known only at a few of Yayoi burial mounds in San'yo Region, but this is the first instance in San'in Region. The pottery found above Burial No. 1 shows us a significant assemblage

of those produced for about the third quarter of late Yayoi Period, and they will contribute much to chronological studies of Yayoi pottery.

And it is also notable that the relations between chieftains of Izumo and Kibi province are indicated by the detection of some of the peculiar earthenware imported from Kibi, i.e. special jar stands and special jars.

Our research is to be continued further for several seasons, because we suspect that there is another big burial ground which can be supposed to be the main one of this mound, and also because we still have some unsolved questions about this burial mound.



西方上空から見た斐伊川と西谷丘陵 1. 西谷 3号墓 2. 西谷 4号墓 3. 西谷 9号墓



1. 西谷 3号墓（北から）



2. 西谷 3号墓（東から）



1. 填被の配石構造 (N 5・O 5 区)



2. 填被の配石構造 (N 11 区)



1. 突出部の配石構造（北西突出部・東から）



2. 突出部の配石構造（南西突出部）



1. 墓丘構造の調査 (M 9 区)



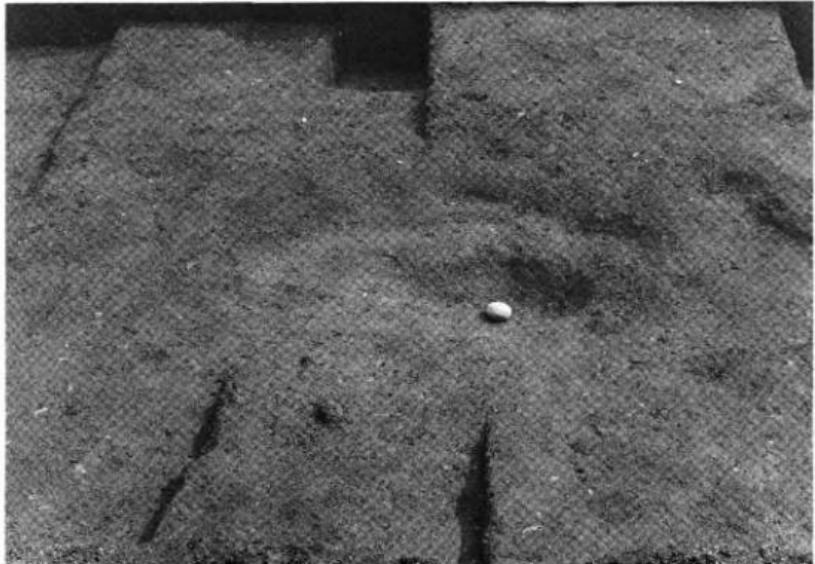
2. 墓丘構造の調査 (N 9 区)



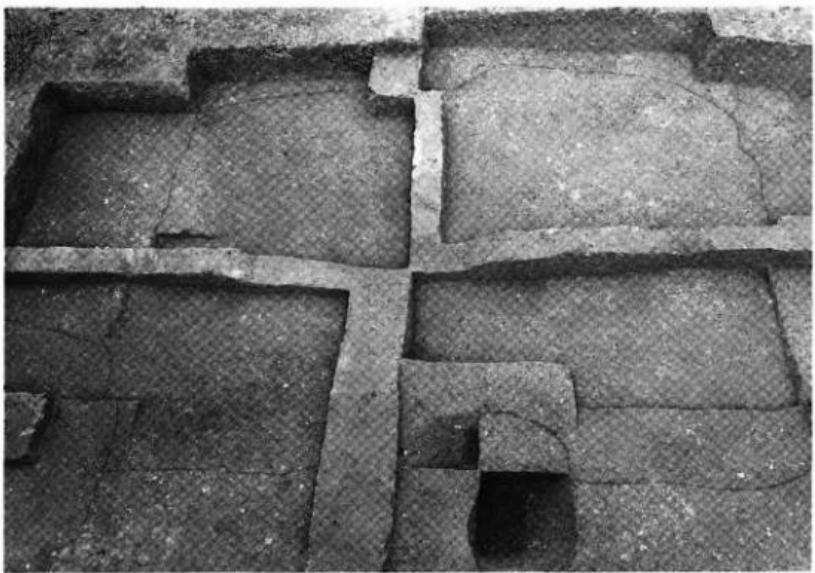
1. 第1主体上方の土器群（検出状況）



2. 第1主体上方の土器群（出土状態）



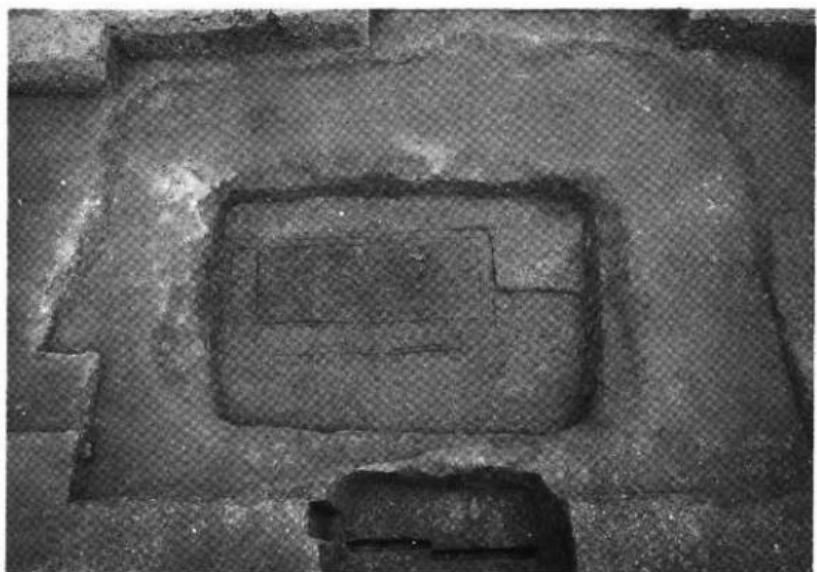
1. 円礫出土状況



2. 第1主体 挖形（手前は第3主体）



1. 第1主体の発掘



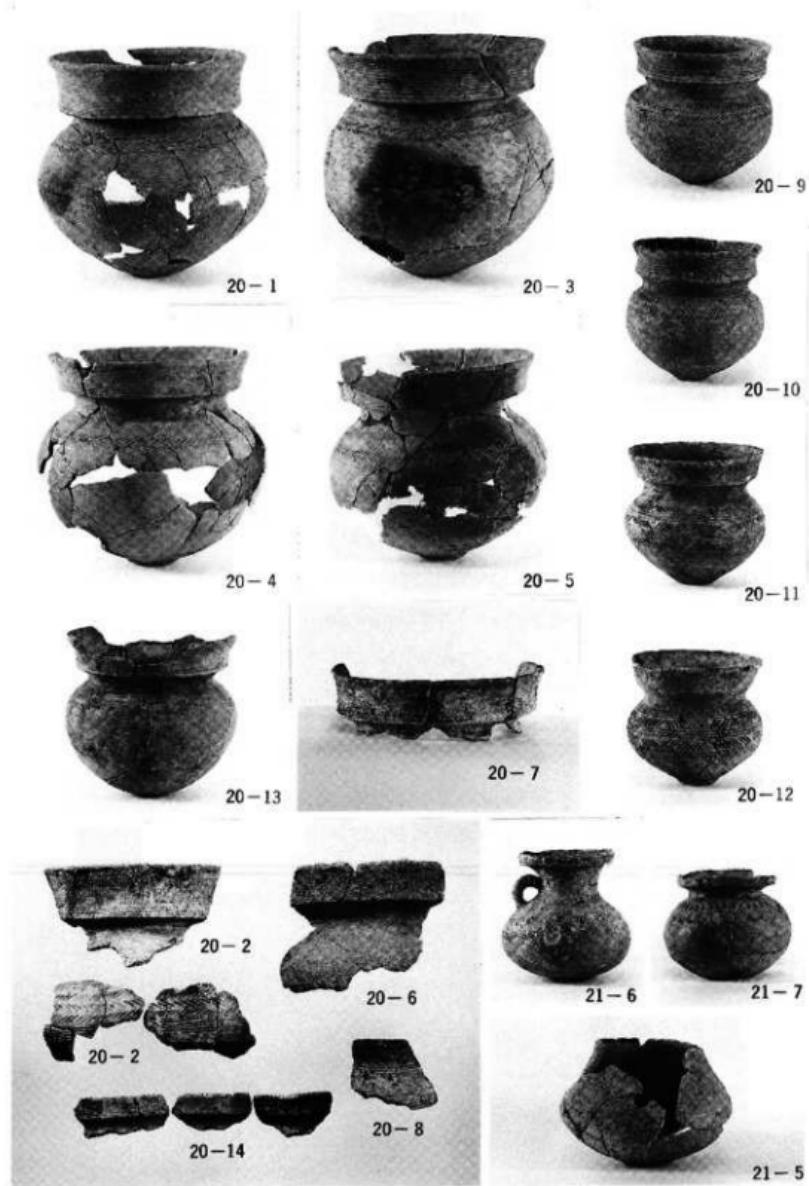
2. 第1主体全景



1. 第1主体棺内遺物出土状況



2. 第3主体全景



第1主体出土土器(1) (番号は挿図に対応)

図版 11



21-1



21-2



21-3



22-1



22-2



22-3



22-4

第1主体出土土器(2) (番号は挿図に対応)

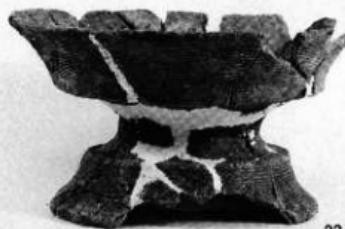
図版 12



22-5



22-6



22-7



22-8



23-1



23-2



23-3



23-4

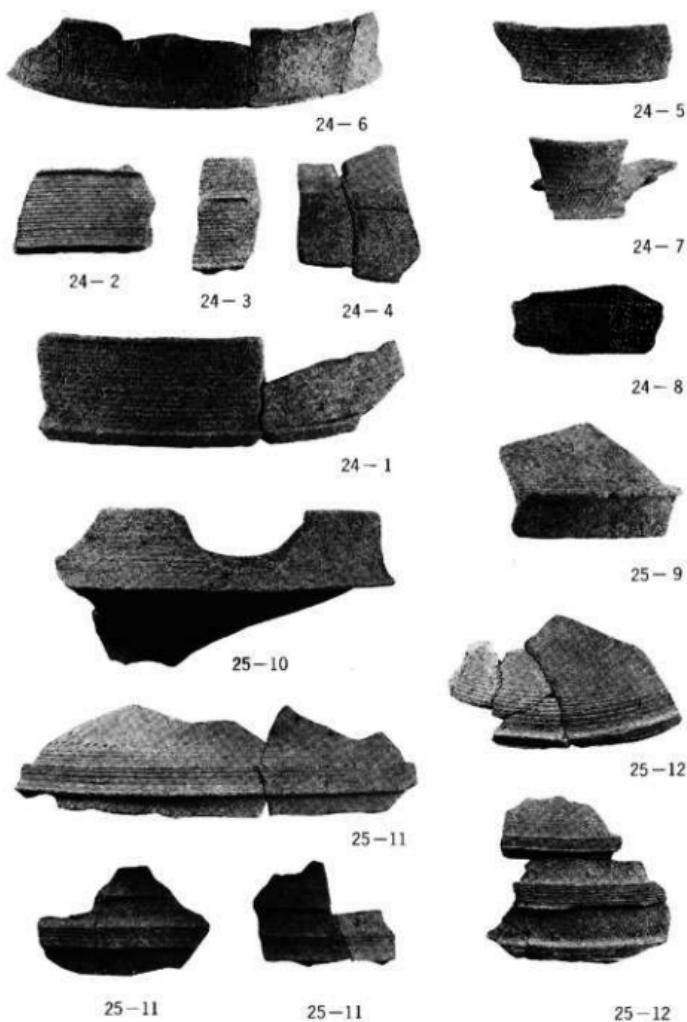


23-5

第1主体出土土器(3) (番号は挿図に対応)

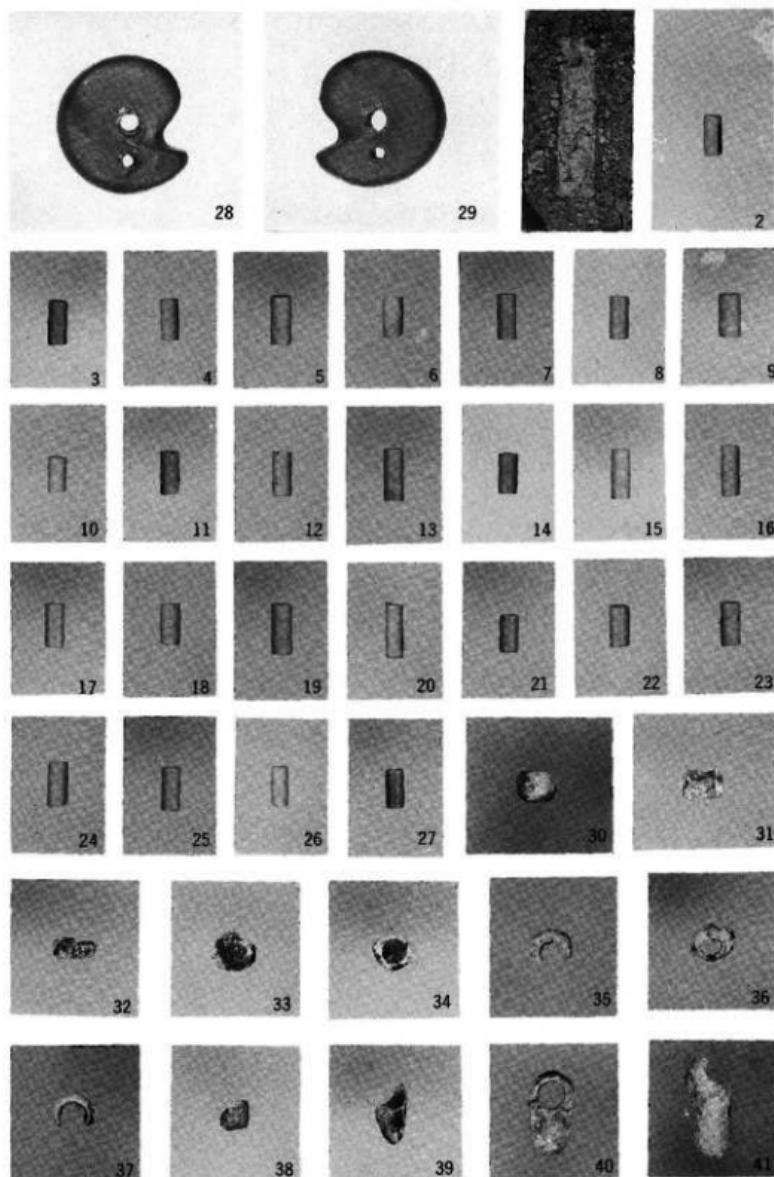


第1主体出土土器(4) (番号は挿図に対応)



特 殊 土 器 (番号は挿図に対応)

圖 版 15



第1主体棺内遺物（番号は第26図に対応）



1. 西谷 4号墓（南から）



2. 西谷 9号墓（北西から）

山陰地方における弥生墳丘墓の研究

1992年9月発行

編集 島根大学法文学部考古学研究室
発行

代表 田中義昭
島根県松江市西川津町1060番地

印刷 株式会社 島根県農協印刷
島根県松江市浜乃木二丁目10番52号
